
テレポーター

SoLa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレポーター

【Nコード】

N5945W

【作者名】

SOLA

【あらすじ】

俺こと中条聖夜は、ある日親に捨てられた。理由は、魔法が使えないから。代々魔法とは無縁だった家庭に、膨大な魔力を宿して生まれた俺。未知なる魔法に、どう対処したらいいのか分からなかったってわけだ。けれども捨てられたその日、両親と共にやってきた初見の女性。その女性は俺にこう言った。私の弟子になりなさい、と。……今思えば、それが俺の人生の転機。呪文詠唱ができないというハンデを抱えながらも、魔法使いとして生きる道を選んだ俺は……？

第0話 中条聖夜とは（前書き）

初めまして、SOLAと申します。

オリジナル小説を初投稿させて頂きます。

右も左も分からぬ若輩者ですが、これからよろしくお願いします。

第0話 中条聖夜とは

「ごめんなさい」

深く、深く。頭を下げられる。

正直な話。俺は悲しいとか寂しいとか。ふざけんなどという憤怒とか。そういった感情よりもまず先に「ああ、やっとこの時が来たのか」と、そう思った。

髪の色は、最初から白かったわけじゃない。この“力”も、最初から使えたわけじゃない。ある日、突然だった。

俺の家系は、代々魔法なんて言葉には無縁も無縁。魔法使いと呼ばれる人間がこの世界に相当数存在し、普通にそういった類の学校や会社なんかもあって世間一般に溶け込まれていることくらいは知ってます、程度の無関心っぷり。

そもそも魔法なんてのは先天的なものであり、ある日突然開花しましたなんてものではない。もちろん、魔法を使えない人間にも魔力つてのは存在しているが、それはあくまで生命活動を維持するための最低ラインでの存在であり、間違ってもその魔力を使って突然炎やら水やら雷を出せるはずもなく、無理なものは無理であり、タネなしマジックなんてできるものではない。

だから、魔法を使えない家系なんてのは隣人が魔法使いの一族でもない限り、大げさではなくほぼ一生を魔法とは無縁で送れるもので、俺の家族もそう思っていた。魔法なんてあると便利だね。そんな感じでき。

けど、そうはならなかった。突然変異。医者からそう言われたのを、俺は今でも覚えている。魔法使いの血を取り込まぬ限り、本来ならば一般家庭に魔法使いの子どもが生まれるはずはない。しかし、例外中の例外が、まさかの俺の身に起こっていたというわけだ。

当然、両親からすれば寝耳に水なわけで。ある日突然調子を崩した俺のことを、心底心配した。病院に連れて行っても、健康体その

ものと診断され未知なる病気かと肝を冷やしていた。それが一週間くらい続いた頃、真つ黒だった髪の色が漂白剤でも使ったかのように綺麗に抜け落ちた。さらに一週間が立つと、俺の周囲の物が何の前触れも無しに砕け始めた。ポルターガイストかと思ったね、あの時は。……まさか自分のせいだとは思わないだろ？

何かがおかしいと思いはじめたのが、その時。両親は、恐る恐る俺を、今度は魔法病院に連れて行った。で、ビンゴってわけだ。尋常じゃない量の魔力が渦巻いてますってさ。その時から、両親の俺を見る目が変わった。

魔法は使えると便利だが、使いこなせなければ恐怖でしかない。

その通りだと思う。俺も怖かった。どうしていいのかも分からな。医者も、ここまでの魔力は見たことがないと頻りにぼやいていた。どう対処すればいいか拱いていたってわけだ。もはや触れると起爆する爆弾のような扱いぶりだった。他の患者とは完全に隔離された部屋で。ちまちまと魔力を吸い出す機械に繋がれ過ごす日々。両親もだんだん見舞いに来なくなった。隠しているつもりだろうが、隠せてない。俺を怖がっているのは明白だった。この時にはもう、薄々感じていたんだらうと思う。多分、この人たちとは、別の道を生きることになるんだらうってさ。……まだ俺がこれから生きていけるかも分からなかったわけだけれども。

で、冒頭へと戻る。で、謝られても困る。それじゃどうすりゃいいのかと聞く前に、なかしよつせいや両親の後ろから綺麗な女の人が現れた。

「初めまして、中条聖夜」

眩いまでの美肌に金髪。スカイブルーの双眼を携えた女性は、その外見に反して流暢な日本語で告げる。

「貴方のその症状を直してあげるわ。今日中に退院できる。そして、私の弟子になりなさい。魔法を、教えてあげるわ」

その言葉に、偽りはなかった。何をされたのかもさっぱり分から

ぬうちに、体調は回復。両親の狼狽、医者^の制止をも払いのけた女は、そのまま俺を自身の屋敷へと招き入れた。そう。屋敷。それも豪邸だった。高級住宅街^街つてやつ？ 驚きを隠せぬ俺に「隣の青藍^{せいらん}市^{いち}に比べればまだまだよ」と言^つた女の言葉には、更に驚いたが。……そういえば、そこで出会^ったんだよな。アイツに。

どさりと鈍い音を立てて。目の前にいた男が倒れた。殺しぢやいない。気絶させただけだ。

「……これで全部かな」

あの女に言われた人数は、これで無力化できたはずだ。

「終わったのね、お疲れ様」

それを見計ら^つたかのようなタイミングで、入室^{しつじやう}してくる。

「それで？ あつたんですか？ お目当ての物は」

「ううん……。残念ね、ここならもしかして、とは思^ってただけど」

頬に手をあて、悩ましげなため息をつく。……あれから結構な年月が経^つたにも関わらず、この女の外見は当時のまま一向に衰えていない。魔法か何かだろうか？ ……本当は梅干^{うめひし}しみたいなしわくちゃのおばあちゃんだったり。

「何か失礼な事考^えたりしてないでしょうね？」

「まさか。敬愛する師匠^{しせう}に対して、そんな事^{こと}しないでですよ」

ホントに？ という顔で睨^{にら}んでくる。くそ、表情に出^ていたか。以後気を付けねば。

「ところで師匠。その手に持^っている物は何です？」

「ああ、これ？」

ひょいっ^と持ち上げる。見た目は、古ぼけた手鏡^{てがたがらみ}のようだが……。

「これ起動すると、異次元の世界に跳べるらしいわよ。やってみる？」

「結構です」

即答した。どうやら面倒臭いマジックアイテムだったようだ。

「いいじゃない。やばかったら、貴方の能力使って直ぐこっちに跳んで来れば？」

「俺の転移魔法は、異次元の境目を跳躍できると証明されてません」

「じゃあ、ここで検証してみよ」

ガシャンッ！！

「ああっ！？ この鏡って結構高いのよ！？」

妙な素振りを見せる前に、突き壊した。

「俺はこの世界である程度満足してますんで」

「はあく。しょうがないなあ」

もう未練を無くしたのか、ぼいっと後ろ手に放り捨ててしまった。

「それにしても。突入して、わずか15分。それで129人在中のアジトを殲滅。なかなか良いタイムになってきたわね」

「そりやどうも」

「“呪文詠唱のできない” 貴方がここまで育ててくれて、私は嬉しいよ」

「なに急に老成したこと言ってんですか」

そう。俺は呪文詠唱ができない。魔法使いとして見れば、所謂欠陥品だ。最初にこの事実気づいたとき、俺は呆れて笑ってしまった。魔法が使えるからという理由で両親から捨てられた俺が、まさか満足に魔法を使うことができないとは。ジョークにしてもブラックすぎるわい。

そんな俺にも、通常の魔法使いでは到底使いこなせない特異な能力が、1つだけある。それが、転移魔法。ワープってやつだな。いくつか制限はあるものの、これは呪文詠唱のできない俺にとっては必須のスキルとなった。この転移魔法に加えて、呪文詠唱せずとも発現できるレベルの魔法を使い、俺はようやく魔法使いとしての価値を見い出せたのだ。

「じゃ、はい。これ」

「？ なんですか、これは」

何が「じゃ」なのか分からぬまま、俺は手渡された紙切れを見つめる。これは……。

「パスポート？」

「ええ。アメリカに来て、もう2年かしら。そろそろ日本が恋しくなってきたんじゃない？」

「……」

……は？

「一個だけ、仕事をこなしてちょうだい。向こうの空港では人を待たせてあるから。詳しいことはその人に聞いて。それが終わればちよつと休暇をあげるわ。最近働かせ過ぎちゃったから」

……なんだつて？

「どうしたの？ そんな怪訝な顔しちゃって」

「……何か悪いものでも食べたんですか？ こんな優しい師匠、ちよつと気味が悪くへぶっ!？」

「口には気を付けなさい、聖夜？」

「……ふあ、ふあい」

が、顔面を……ゲーで……。

「純粹なる厚意よ。日本に戻ったら、軽めの仕事は早々に終わらせて、少しは羽を伸ばすといいわ」

……冗談だろ？ ほんとかよ。

「けど、まだお目当ての物は見つかってないじゃないですか」

「言ったでしょ、あくまで休暇よ。それが終わったら、またみっちり働いてもらうわ」

……左様ですか。

「いいの？ のんびりしてて。フライトはもう直ぐよ？」

「は？」

急いでフライトの時刻を見る。……あと30分を切っていた。

「早く跳んで跳んで」

「いつも言っていることですが!! もっと早く言ってください!!」

！」

はしゃぐ女の手を掴み、転移魔法を発動させる。薄汚れたマフィアのアジトから一転し、今使っているホテルの客室へと跳ぶ。ちなみに、国から国へは転移できない。そんな長距離のジャンプは制御できないからな。この辺の制約については追々説明していこうと思う。生憎今はそれどころじゃない。ともかく、国から国へは跳べないということだけ分かって欲しい。だからこそ、乗り遅れるわけにはいかないんだ。

まずは荷物をまとめないと。何も持たずには帰れまい。急いで荷造りして、空港に行つて……。普通なら不可能だが、転移魔法さえあれば可能。だからこそ、この女もぎりぎりまで言わなかったんだろうけど。

それにしても、日本か。久しぶりに、アイツの所にも顔出しとかなきやな。「お土産よろしくね」とか寝ぼけた事を抜かす女を全力で無視しながら、俺はそんなことを考えていた。

第1話 花園舞

「久しぶりに日本語を聞く気がするな……」

空港に降り立ち、まず最初に思ったのはそれだった。行き交う人々は皆、日本語を話している。スーツケースを受け取り窓に寄る。

外の景色では無く、窓に写る自分の姿を見てぼそつと呟いた。

「……なんというか。思ったより何も感じないな」

「次の方、どうぞー」

「おっと」

係りの人間に呼ばれ列に戻る。

「パスポートをこちらの部分にかざして下さい」

「はいよ」

『承認致しました。Masick Conductorをお受け取り下さい』
マシック コンダクター

電子音が鳴り響き、受付の中から長方形の機械が姿を現す。それを手に取った。

「ご利用ありがとうございました」

促されるままゲートを抜ける。空港のエントランス付近まで歩いたところで、MCを左腕に装着した。

空港から出て、指定された場所へと向かう。既に車は到着していた。中から黒服の男が出てくる。

「名前は？」

「中条聖夜です」

「パスポートを確認させて頂いても？」

「はい」

黒服に手渡す。

「……結構です。では、こちらへ。鞆はこちらでお預かり致します」
黒服が扉を開ける。

「よろしく願います」

促されるままに乗り込んだ。車は直ぐに発車した。

「おお。読める読める」

車窓から見える看板を目で追ってみる。少し不安だったが、日本語は違和感なくすんなりと頭に入ってきた。

渡米したのは2年前の夏、か。

「ライセンスが取得できたのは良かったけど……。まさかこんなに戻ってくるのが遅れるとは思っていなかったな」

窓枠に肘を掛けながら外の景色を眺める。そこには見覚えがあるような無いような。そんな何とも言えぬ風景が広がっていた。

繁華街を抜け、小奇麗な街並みが通り過ぎる。徐々に一軒一軒の土地の広さが大きくなり出した。

「……青藍市せいらんし。高級住宅地、ね」

ぼーっとその風景を見つめる。今日は雇い主の屋敷を訪ねる予定となっていた。

クライアントの名は姫百合ひめゆり泰造たいぞう。高級住宅地を持つ青藍市の中でも、トップクラスの金持ちという話だった。その姫百合家には2人の姉妹がいるという。

「ははっ」

「如何されました？」

「あ、いえ。何でも」

「左様ですか」

思わず声に出して笑ってしまった。訝しげに訪ねてきた黒服を軽くない。詳しい話は聞けなかったが、どうやら雇い主は俺の事を名指し指名してきたらしい。わざわざアメリカにいる自分にアポな

んて取つて来るからどんな依頼かと思えば……ね。再度込み上げてきた笑いは、押し殺さねばならなかった。あまり不審がられてもあれだからな。

「……おいおい。まさかこの屋敷じゃないだろうな」

車窓から見える建物に啞然としている間に、車はその屋敷の門を何の躊躇いもなく通過した。

「どれだけ金持ってたんだよ……」

俺の心情を余所に、車は屋敷の庭を通り扉の前で停車した。黒服が運転席から回り込み、ドアを開く。

「どうぞ」

「……はい」

1つ頷いて降りる。向こうでもあまりお目に掛かれない程の豪邸だった。

「こちらへ」

黒服に促されるままに、その屋敷の扉を潜る。

「初めまして。ここのメイド長を務める大橋理緒おほはしりおと申します。中条聖夜様でいらつしやいますね？ お待ちしておりました」

扉を潜った先。大広間にて女性から挨拶される。緑色の髪をストリートに下した清楚な女性。身に纏うメイド服はそのボデイラインをくつきりと浮かび上がらせており、思春期の男からしてみれば目に毒だった。

「では、こちらへどうぞ」

促され、後ろをついて行く。広いエントランスを抜け、長い廊下に出た。廊下を歩き交う執事やメイドが、こちらを見る度に一礼して行く。知らない客相手にも礼儀を忘れぬその様は、この屋敷の主の性格をも表しているかのようだった。

「こちらが旦那様の書斎でございます」

程なくして、お目当ての場所に到着する。大橋メイドが、一礼してから扉をノックした。

「理緒でございます。中条様をお連れ致しました」

「入ってください」

扉の中から男の声が聞こえる。大橋理緒がそれを確認して扉を開けた。

「……へえ」

洋館を思わせる屋敷内を歩き、主の部屋もそれなりに期待していたが裏切られる事はなかった。高級そうなアンティークにソファ。扉の真正面、部屋の奥には木造のデスク。見るからに高級そうなスーツを着た、30代後半くらいの男性。この屋敷の主・姫百合泰造がそこに腰かけており、こちらを見ていた。

「遠路遙々済まないね。ようこそわが屋敷へ。私はこの主・姫百合泰造だ」

「中条聖夜です、どうぞよろしく」

相手の自己紹介に、無難に応えておく。泰造氏は満足げに頷くと、使用人に目を向けた。

「済まないが席を外してくれ」

「畏まりました」

一礼して大橋メイドを含む複数の使用人一同が下がる。ほどなくして後方の扉が閉められた。

「不用心なのは？ 私のような者を護衛無しで傍においてよろしいので？」

「ははは。おかしな事を言うね。これから私の愛娘たちの護衛役を頼もうとする人間に対して言うセリフではないな」

「その話自体も、かなり酔狂な話でしょう」

声のトーンを少し下げる。

「この国にも有能な魔法使いはいる。貴方と私は初対面。繋がりなどありません。外国から私を呼び寄せた意図をお聞きしても？」

「……初対面ではないだろうか？」

「はい？」

首を傾げる。

「一度は会った事があると思うけどね」

「記憶にありませんが」

本気で、無い。そもそも関わる機会などあるはずが。

「昔、花園家のパーティーにいたことが無かったかい？」

あった。

「まさか私の様な者の事を覚えていて下さるとは。光荣です」

「まあ、君はあの中では異質だったからねえ」

そりゃそうだ。俺はセレブでもなんでもない。

「それも含めて、ね。花園家があの場合に呼べるような人物なら、こちらとしては問題ない。それに、君が向こうで一緒に働いていた師匠……に当たるのかな。あれは私の友人だね。今回の事を相談したら、君の名を挙げてくれたんだよ。日本人の優秀な魔法使いがいるとね」

「……あの女」

何が日本に戻ったら、軽めの仕事は早々に終わらせて、少しは羽を伸ばすと良い、だ。この仕事も随分とお得意様のようにじゃねえか。……向こうに戻ったら真つ先に殺す事に決めた。

「……ふ、ふむ。まあいい。では契約の話しよう」

「ええ、そうして下さい」

俺の内にある怒気を察したのか、泰造氏がはぐらかす様に本題に入る。とりあえず、先を促すように頷いておく。

「今回君に依頼したいのは、私の娘の護衛だ」

写真が差し出される。2枚の写真には、それぞれ綺麗な女の子が写っていた。

「姫百合可憐と咲夜。可憐は君と同じ年。咲夜は1つ下だ」

泰造氏が続ける。

「この2人の護衛を頼みたい」

「綺麗な方々ですね。それで？ 急に護衛が必要となった理由は？」

「うむ……」

目を逸らした。が、それも一瞬のこと、直ぐにこちらに向き直る。

「最近、この国で頻繁に起こっている事件があつてね。知っているかな？」

「いえ。先ほどこちらに戻ってきたばかりなので」

「それもそうか。昨今、この国では誘拐騒ぎが多くてね」

「……まさかそれで自分の娘も危ないか？」

「はは。それだけでは只の親ばかりだろう。誘拐対象は、決まって学生。それも魔力容量の高い子なんだ」

なるほど。そこまで聞けば、ある程度は納得した。

姫百合家と言えば、この国でも五指に入るほどの有力な名家であり、魔法使いだ。確かに条件には一致するが……。

「それでも……姫百合家ですよ？　ここまでビッグネームになると、逆に手を出しづらいのでは？」

「だからこそ、学生である者たちを誘拐するのだろうか？　どれだけ強大な力を持っていようが、それが使えこなせれば意味が無い。それは、“君が一番良く分かっているとは思うが”」

「……なるほど。全て認識済みつてわけですか」

「気を悪くしないでくれよ？　こちらとしても、ある程度の情報は知っておかなければ命は預けられないのだから」

「平気です。それに、調べる意図の有無に関わらず、どうせあの女から進んで喋つたはずですよ」

「ま、まあ……。その通りなわけだが」

口をひくつかせながら、泰造氏が頷く。どうやら、内面に押し殺していたはずの殺気が多少漏れてしまっていたようだ。口調も少し雑になってしまっていたようで、申し訳ない。あの女をどう殺すかで頭がフル回転していたが故に、失礼な態度になってしまっていたらしい。無理矢理自制する事でやり過ぎす。

「それに、うちの娘が狙われやすいという理由には、もう一つあつ

てね」

「？」

その言葉で、片隅で未だに惨殺劇を繰り広げていた思考が止まった。

「護衛を付けたがらないんだよ」

「……はあ」

なんともまあ……。とはいえ、俺も嫌だけどな。後ろから無言でついてこられたりすると。

「何度お願いしても聞いてくれなくてね。幸いにして、学園は全寮制だからそこまで危険はないとは思うんだが……」

……ん？ 寮？

「ちょ、ちよつと待って下さい」

「なんだね？」

「寮って、あの寮ですよ？ 学生が寝泊まりする」

「……他にどんな寮があるかは知らんが……。まあその通りだよ。学生の宿泊施設だな」

「それで、今回の依頼は？」

「？ 私の娘たちの護衛だが」

「でも寮生活なんですよね？」

「そうだが？」

「でも護衛嫌いなんですよね？」

「そうだが？」

「じゃあ、俺はどう護衛すればいいんですか？」

「？ どうもなにも。君も学園に転入して、影から護衛してくれるんだろう？ 彼女から、そうした内容で任務に就くと言われているのだが」

「……ちよつと失礼」

俺は徐に携帯を取り出すと、メモリーからあの女の番号を探し出して発信ボタンを押した。間髪入れずに、女性の声が届く。

『現在、お客さまがお掛けになった電話番号は使用されておりま

ばきんっ
』

その声は、最後まで届かなかった。俺の耳元で携帯が割れた音が鳴る。

「な、何かあったのかね？」

「いえ、お気になさらず」

もはやガラクタとなったそれをポケットに捻じ込みながら、こやかに俺はそう告げた。任務内容どころか、宿泊施設とかの話も出なかった理由はこれか。寮に泊まれ、と。あのアマ……。

「一応、確認なんだが……。受けてくれるのかね？」

俺の否定的なオーラを感じ取ったのだろう。泰造氏は、訝しげに眉を吊り上げていた。

「ええ。もちろんです。全力を尽くします」

無一文だからな。俺は。受けなきゃ路頭に放り出されちまう。

「そうか、良かった。可憐や咲夜にバレずに護衛するには、学園潜入が必須。特にクラスメイトになることが望ましい。その年代でこういった仕事ができる人間など、そうはいないからね」

「買い被り過ぎですよ。私の欠点は存じているのでしょくに」

「それを上回る魔法があるのだろう？ 彼女は、こういうことで嘘はつかない」

あの詐欺師への、絶対的な信頼は何処からくるんだ？

「それで、お嬢様方の通う学園はどちらでしょう」

「私立・青藍魔法学園だ」
せいらんまほうがくえん

……超エリート校じゃねえか。

「私はどうやって転入すればいいのですか？ まさか転入試験に受かれと？」

無理ですよ、と言外のアピールをしておく。そもそも、転入試験に受かれる程の実力を有していれば、わざわざ向こうでライセンスを取ったりなどしない。

「まさか。私はその理事長を務めているんだ。そういった情報操

作については問題ない」

思いつきり職権乱用だな。やはり持つべきは金と力か。

「制服や教科書の類は、既に君の寮部屋となるところに準備済みだ。転校初日は明日。理由は両親の仕事の都合で、だ。まあ所謂帰国子女のような立場になるな」

「……そうですか」

その後、いくつか依頼に関するやり取りを終えた後、俺は姫百合邸を後にした。重厚な門が閉まるのを後ろ手で感じながら、慣れない高級住宅地を歩く。寮まで送ろうという申し出は、辞退させてもらった。俺の魔法を使えば、送迎なんて必要ないし。それに、寄り道しなきゃならんところもあつたしな。

「姫百合家の当主は、確か女だつたはずだが」

泰造氏は、魔法とは無縁の一般人。現当主に婿入りした立場だつたはずだ。てつきり当主の方がでてるのかと思っていたが……。

「ま、どっちでもいいか。やることは変わらないんだし」

その独り言で、思考を断ち切る。

「さて。気乗りはしないがアイツのところ顔だしとくか」

俺が日本に戻ってきたことは、遅かれ早かれアイツの耳にも入るだろう。あの女とアイツは、ちよくちよく連絡を取り合ってるみたいだからな。

……それに、確かめておきたいこともある。そう考え、俺は転移魔法を発動した。

閑静な高級住宅地から一転。ファンシーな部屋へと転移した。ピンク色の壁紙は見えているだけで胸焼けを起こしそうだったが、寸前

のところでは堪える。

部屋の至るところには様々な動物のぬいぐるみが置いてあり、そのつぶらな瞳全てが自分を射抜いているかのようで、正直気味が悪い。箆笥の上に座っているエメラルドグリーンのクマは初見だ。どうやら新しい“しもべ”がまた増えたらしい。というか、なぜエメラルドグリーン？

机へと目を向ける。どうやら部屋の主は何かに没頭しているようで、こちらに気付いてはいないようだ。

「ううん。どうしようかなあ」

唸り声を出す主の元へと忍び寄り、そっと肩越しに覗いてみた。

「どうしても発動スピードがなあ……」

「このせいじゃないか？」

後ろから紙に書かれた魔法式の一部を指差す。

「これじゃ前の式の効果を相殺しちまうだろ。この式が無くても、その前後だけで十分作用すると思うんだが……」

「ううん。でもそれだと持続時間が少なくなっちゃわない？」

「それだったら前半の式から変えた方がいいな。ちよっとペン貸してみる」

「はい」

「ん。この式はだなあ……」

がりがり魔法式を書いていく。

「え？ それって後ろの式との相性悪くなかったけ？」

「そつだ。けどな。“繋ぎ”の部分をこつすると……」

「ほ、ほんとだー!!」
「な？」

「凄い凄い!! 流石は」

目の前の少女が固まる。俺の顔を捉えてはいるようだが、焦点がいまいち合っていないようだ。とりあえず挨拶する事にした。

「よっ」

「……」

「」？」

「この裏切り者おっ！！！！」

「ぐはっ！？」

顔面に思いつき裏拳を叩き込まれた。想像を絶する痛みに蹲る。

……鼻。陥没骨折してないだろうな？

「アンタ、今まで何処ほっつき歩いてたのよ！！」

「ほっつき歩くとか……。お嬢様のセリフじゃねえよ」

「アンタにお嬢様の基準が分かるか！！」

「少なくともお前は違っつて事だけは分かるわ！！」

「うるさいっ」

「ぐほっ」

みぞおちに拳がめり込んだ。

「……こんなに手が早い女がお嬢様なはずねえだろ」

呻くように呟く。

「あら。ごめんあそばせ？ これでもこの国有数の名家の生まれですわ」

目の前の女が文字通り見下しながらそう告げる。

はなそのまい
花園舞。

残念ながら、本当にお嬢様。それもこの国トップクラスの財力を保有している。さつき泰造氏が言っただ花園ってこれね。

こちらも五指に入る魔法使いの一族がーだ。

そしてこの一族の権力も凄い。どのくらい凄いかと言うと、この女の親が命じれば多分明日には総理大臣変更できるくらい。

で、見た目もかわいい。目を見張るような赤い髪に、程よく膨らんだ胸。きゅっと締まった腰。そしてヒップへと流れるような女性らしい魅惑的なライン。黙ってさえいれば凄い美人。お持ち帰りしたいくらいなの。けどしない。黙ってないから。性格に多量の難あり。“多量”のね。“多少”じゃない。とにかくぶっ飛んでる。いろいろの意味で。

「……あ、血が」

押さえてみて気づく。どうやら先ほどの裏拳で、内部を負傷して

いたようだ。

「言つとくけど、血でカーペット汚したら許さないから」

「ふざけんなっ!!! 誰のせいだよ!!!」

そう言つて、四つん這いの状態からティッシュに手を伸ばしたところで、その手を踏みつけられた。

「いてえっ!!!」

「誰が家の物を使っていいって言ったのかしら?」

「鬼か!? 性悪女め!!!」

「誰が性悪女よ!!!」

「現在進行形でお前だろっがぼっ!?!」

舞の爪先が、鼻にめり込んだ。

「ひえひえめえっ!!! くっ!!! この俺のイケメンが潰れたらどうしてくれんだ!!!」

「自分で自分の事をイケメン言うな!!!」

がぼつと胸倉を掴まれる。もう2〜3発は覚悟すべきかと身構えたが、どうやら杞憂に終わったようだ。舞はそのまま俯いてしまった。

「? おい」

無言のまま、肩がぶるぶる震えているのが分かる。……やめろよ。めちやくちやくこえーんだけど。

「ア、アンタ……」

顔を上げた舞を見て、絶句してしまった。

「……ほんと、何勝手にいなくなつてんのよ」

双眼から、ぼろぼろと涙が零れ落ちている。

「お前……」

「ばかっ!!!」

「へぶしっ!?!」

平手。……不意打ちだ。そのまま2人で後ろにあったベッドへと倒れこむ。……良かった。床だったら後頭部強打で死んでいたに違いない。

「……ずっと、待ってたんだから」

胸に顔を埋めたまま、上げようとしない。凄い罪悪感だ。確かに、あの時は何の挨拶もできずに連れてかれたからな。

そつと、舞の頭に手を置いて撫でてやった。

「すまん」

「ばか」

久しぶりの罵声は、思いの外心地いいものだった。

「で？ 何しに帰ってきたってわけ？」

先ほどまでの弱気な姿は無かったことにしたいらしい。若干赤目ながらも、絶対零度の視線を取り戻した舞が、そう問うてくる。

「仕事だよ、仕事」

「はあ。でしようね。アンタ向こうで魔法使いの資格は取っちゃったって聞いてたし」

舞は詰まらなそうにベッドに腰掛ける。やっぱりあの女、色々と喋ってたわけだ。俺の状況は逐一報告されていたらしい。

「仕事内容はなに？ この国なんて、そうヤバイ仕事転がってないはずだけど」

「護衛、だな。ボディガードってやつだ」

「また面倒臭い仕事貰ってきたわねえ。第一、貴方の能力なんて逃げる方が得意でしょうに」

「ほつとけ。それにお嬢様が面倒臭い言うな」

「それこそほつときなさいよ。それで？ 一体誰のボディガード役を頼まれたってわけ？」

「いや、一応俺にも守秘義務ってやつがあつてだな」

俺のその言葉を聞いて、舞の視線に凶悪な色が混ざった。瞬時に危険を察知する。再び飛び掛かってきた舞を、“跳ぶ”ことで躲した。対象を失った舞は、そのままの勢いでベッドへと突っ込んだ。

「お、ピンクか」

「どこ見てんのよ!!」

「うおっ!?!」

スカートが捲れることも厭わず、舞が右足を振り上げた。鼻先を掠める。あと少し反応が遅れていたら、そのまま意識を持っていかれていたに違いない。こえーこえー。

あまり、ここには居ない方がいいな。知りたいことは、もう分かっただし。それに、これ以上居ると、本当に根掘り葉掘り聞かれかねん。

「んじゃ、そういうことだから」

部屋の窓を開けながら、極力さわやかにそう告げる。

「どついうわけよ!! 護衛対象は誰!? 場所は!? 連絡先は!?!」

「また遊びにくるからさ。じゃ!!」

「待ちなさい!!」

転移されると悟ったのだろう。慌てた様子で机に置いてあった自身のMCを掴んだ舞を尻目に、俺は転移魔法を発動した。

……私立・青藍魔法学園は、全寮制。舞が自分の屋敷にいるってことは、学園は違っただけか。ま、そっちの方が何かと動きやすいかな。あいつと絡むと、碌な事ないし。少し寂しい気持ちもするが、ぶっちゃけ安心したな。

心地よい安堵感に包まれる。

結論から言えば。それは大間違いだった。

第2話 私立・青藍魔法学園

「ああ。見ない顔だと思ったら、君が噂の転校生か。いいよー通って」

予想外な気さくさで、私立・青藍魔法学園の守衛がそのたまう。泰造氏による周到な根回しと、予め渡されていた学生証を見せることで、関門は難なく突破された。……噂？ それだけが気がかりだったが。

それにしても。渡されていた校内マップと外見から、入る前から分かっていったことだが……。

「でけえ……」

校門から校舎まで、こんなに距離を空ける必要があるのか……。中央には噴水もあるみたいだし。

両脇に桜の木が植えてある並木道を通り（時期的にピンクではなく緑だが）、無駄にでかい噴水を迂回し、ようやく校舎まで辿り着く。

「ふうん。泰造氏がある程度は安心して言ったのはこういうことか」

魔力を灯し、目を凝らしてみると分かる。幾重にも折り重なった魔法回路。校舎の壁に隙間なく這い回っている。窓も対魔法用の魔法強化ガラスのようだ。

「戦争でもする気がつくくらいのセキュリティだな」

そこらの避難施設なんかより、よっぽど役に立つだろう。

「……ん？」

誰かに見られている気がして、そちらへと目を向ける。

「気のせい、か？」

見上げた窓の奥に、人影は見えない。

「ま、いいか。とりあえず、寮に行こう」

別に見られて困る者でもない。もう俺は明日にはここの校舎で授

業を受ける、立派な転校生なのだ。足を寮の方角へと向ける。

私立・青藍魔法学園は、校舎を中心として、十字に道が分かれている。下に正門、上に教会、右に学生寮、左に部室棟（表現上、上とか下とか使ってはいるが、実際は手前か奥かってだけで、教会が浮いてるとか正門は地下とかいった勘違いはしないように）。グラウンドや体育館等のスポーツ施設も左だ。至ってシンプル。分かりやすい。問題を挙げるとすれば、離れていること。事実、今向かっている学生寮も、曲がりくねった並木道を歩いた先にあるらしい。「学園内にある寮って言うから、多少寝坊しても平気かと思っただが……。無理だな。まあ、跳べば直ぐなわけだが」

「ここか」

立派なもんだ。一番最初にここを見ていたら、学生寮にこんな立派な建物なんてどんな学校だ、と思っていたのだろう。最初に校舎と敷地を見ていたおかげで、そんな考えには至らずに済んだ。…既にこの学園の基準に毒されてきているのか？

「おっと、ここも学生証か」

寮の門前。扉のすぐ横の壁には、縦に溝が入った機械が埋め込まれている。どうやらこの扉は、押すでもなく引くでもなく。カードを通さねば開かない仕組みになっているらしい。

「ほんと。こんな学園に護衛なんているのかね？」

もつともな疑問を漏らしつつ、扉を潜って中へと入っていく。

「学生寮にエントランスがあるってのもおかしい話だが」

中は吹き抜けのエントランス。正面奥には談話室……って表現は部屋じゃないから間違いか。ともかくフリーエリアなのか、ソファーやテーブル、テレビ等がいくつも並んでおり、現に何人かの生徒がそこでたむろしている。

内、1人がこちらの方へと振り返った。一瞬驚きの色を浮かべる。

……なんだ？ まさかまた俺が知らないだけで、顔見知りとかじゃないだろうな。二言三言仲間内で話したと思っただら、そこにいた3人全員がこちらへ向かって歩いてきた。

なにこれ。カツアゲ？ 俺、今シヤレじゃなく1円も持ってないんだけど。

「よう、初めまして。かな」

「……そのはずだが」

まずは初めましての言葉で力が抜ける。どうやら知り合いではないらしい。

「俺は2年A組の本城将人だ。将人でいいぜ」

「同じく、楠木とおるです。とおる、と」

「同じ、杉村修平だ。修平で頼むわ」

「俺は中条聖夜。こちららも聖夜で。明日からここに通うことになってる。よろしく」

「やっぱお前が転校生か!!」

将人が嬉しそうな顔でそう叫ぶ。

「やつりい、一番乗り!!」

「別に、一番とか関係なくない？」

1人でエキサイトしている将人に呆れた口調でおるがぼやく。それを宥めるように、修平が割り込んだ。

「ま、何にせよ。一番最初に会ったのは俺らってことだろ？ 何せ

学生寮の入り口なんだからよ。それとも聖夜。ここに来るまでで誰かと会ったか？」

「いや？ 会ったとすれば、守衛のおっちゃんくらいだが」

「ほら見ろ!! 一番だ!!」

「一番自体を否定してるわけじゃ……まあ、いいや」

将人の断言に、とおるが悟ったかのような口調でそう告げる。

「で、お前の部屋番号は？」

「ん？ えーと、405」

「あ、それ俺の隣だわ」

修平が名乗りを上げる。

「そうなのか？」

「ああ、案内してやるよ」

「ほんとか？ 助かるよ」

「俺らはどうする？」

「お前らは先に食堂行っててくれ。直ぐに行くよ。聖夜もそうするだろ？」

「ああ。もうそんな時間か」

ガラス張りの壁の外を見れば、もう日が陰り始めているところだった。周囲も赤く染まりだしてる。…まったく気づかなかったな。

「じゃ、とつとと行くか」

「ああ。よろしく」

「早く来いよ」

食堂と俺の部屋は、正反対の位置にあるらしい。将人とおるとは一旦その場で別れ、俺と修平は部屋へ向かう。階段を上って、上へ。405は4階だ。部屋へは、思いの外早く着いた。

「お前、力と体力あんのな」

「ん？」

「だってスニーカー持ってんのに、普通の奴が階段上るのと同じスピードだぜ。息も切れてねえし」

「まあな。体力には自信ありだ」

あの女の元で働いてりゃ、嫌でもつくからな。

通路を歩き、405と書かれたプレートの前で立ち止まる。

「んじゃ、俺はここで待ってるから。中、確認したらメシ行こうぜ。荷物整理は後でもいいだろ？」

「さんきゅー。ちよつと見てくる」

壁に寄りかかって待機の姿勢を見せた修平に礼を言い、学生証を通して扉を開けた。

「おおー。綺麗綺麗」

それに広い。小型だがテレビもあれば冷蔵庫もある。風呂は大浴

場があるみたいだし、生活面に関しては特に問題な

「いや、さて」

問題大アリだろ。俺、金持ってないじゃん。食堂で何も食えないじゃん。

「え？ これって任務完遂まで食事抜きってこと？」

ほんとに殺しちゃうよ？ あの女。

そんなどす黒い感情が心の奥底で渦を巻きだしたところで、机の上に置いてあるモノに目がいった。

「？」

そこには綺麗に畳まれた学生服、教科書類が置いてある。が、それは今はどうでもいい。問題なのは……。

「茶封筒？」

封筒が置いてあった。差出人は

『リナリ・エヴァンス』

ぐしゃっ!!

「おっと」

いけないいけない。俺ともあろう男が。ついさつきまで想っていた女の名前につい反応してしまった。それにしても、何やら固いモノが入ってるな。

茶封筒を逆さにしてみる。中身は、何の抵抗も無く俺の掌へと落っこちた。

「……500円？」

それ以外には、何も入っていない。念のため、封筒の中を覗き込んでみたが、結果は変わらなかった。……何の真似だ？ このワンコインでどうしろと？

「……ま、いいか」

考えたって答えは出ない。あの女の行動全てが謎なのは、今に始まったことじゃないしな。コイントスのように親指で弾いてみる。

封筒の住所を見れば、普通に海外からのエメールだった。これじゃ跳べないな。そんな距離跳んだら座標が狂って海の底とかにジャンプしそうだ。あの女をとっちめるのは別の機会にした方がいい。「とりあえず、今日の晩飯代は確保つと」
……バイトでも考えた方がいいかもな。

扉を開けると、待っていたのは修平1人ではなかった。

「あれ？ お前ら何でここにいるんだ？」

「まあ、俺も食堂で食おうと思ってたんだけどよ……」

将人の言葉を、とおるが引き継いだ。

「少なくとも、明日のお披露目が終わるまでは、君は人前に極力出ない方がいいよ。何せ噂の転校生だ。食堂に行こうものならパニックになりかねないからね」

そう言ったとおるの手には、テイクアウトされた夕飯が乗っていた。

「んじゃ、邪魔するぜ」

「ん？ ああ」

将人が遠慮の無い足取りで、中へと入っていく。それにおるが続いた。

「入って平気か？」

最後に修平が苦笑いで話しかけてきた。

「もちろん」

「そうか、では遠慮なく」

俺の答えを聞いて、修平も扉を潜る。……プライベートとの線引きが上手いというか、修平って案外気が利く奴だな。将人は何も考えて無さそうだが。で、とおるが機転が利くブレーン……と。

って。さっきから、噂って何？

「噂は立つさ」

俺の疑問に、至極当然と言った風情で。とおるは開口一番そう断言した。

「私立・青藍魔法学園始まって以来、そう無い事例なはずだよ」

「そうなのか？」

「あつたりまえだろ？」

もぐもぐ飯にありついていていた将人が、米粒をまき散らしながらそう言う。

「ここは魔法高校の中でも有数な名門校だぜ？ 入試試験の倍率もヤバけりや難度もヤバい。転校の為の転入試験なんざ、普通誰も受からねえよ」

「入試よりも転入試験の方が難度上がるからな。ある意味当然と言えば当然だが」

エキサイトする将人の発言に、修平がフォローを入れる。ちらりと俺に目を向けた。……何だ？

「つまり、お前は超エリート校の転入試験をパスした、超々エリートだと思われてんのさ」

「なにその単語!？」

そんなエリートの上位種の名称なんざ初めて聞いたわ。

「それに、お前イケメンだしさ。完璧超人って奴？ すげーなあ。ちよつと目つき悪いけど」

よく言われるよ。その目さえなけりやってな。って、そんなことはどうでもいい。

「エリート？ 俺が？」

「それは新手の嫌味か何かかい？」

とおるが苦笑しながら俺の言葉を払う所作をする。

「転入試験をパスした君にこの単語が与えられないのなら、この学園にエリートは存在しなくなるね」

「いるだろ。少なくとも、うちのクラスに2大お嬢様がさ」

「おっと失礼。失言だったね」

「ちょ、ちょちよっと待とう。待ってくれ。一回落ち着こう」

「お前が落ち着け。噛んでんぞ」

「あははは。ちょちよっとね」

「うるせえ!!」

「はぼふっ!?!」

「っ!! 速い!!」

「やはり、お前只者じゃないな」

あ、やべ。つい将人の顔面殴っちゃまった。とおると修平が感心したかのような素振りを見せているが、今はそれもどうでもいい。

「あ、あのさ」

「うん？」

「何だ？」

「は、はんだよ？」

俺の呼びかけに、将人も律儀に応えてくれる。

「俺、転入試験なんて受けてないんだけど？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

凄く沈黙だな。

「は？」

復帰したのは修平が先か。

「ど、どういふこと？」

次いでとおる。

「お前、侵入者か!!」

「アホか」

最後に将人。勘違いの発言は、俺ではなく、修平が制してくれた。「少なくとも、聖也は自分の学生証を持つてるし、学園にも転校生の話はきてるんだ。悪い方のケースではないと見るべきだろう?」

「それには同意。だからこそ、分からない。じゃあ、聖夜。君はどうやってこの学園に転校してきたんだい? 転入試験をスルーして転校だなんて。それこそ前例がないんだけど」

とおるが訝しげな視線を送ってくる。それは修平も将人も同じか。さて、どう言い訳するのだが。ま、適当でいいか。あとは泰造氏が何とかしてくれんだろ。

「いや、実は俺。魔法もまともに使えないんだよね」

「は?」

「へ?」

「ほう?」

順にとおる・将人・修平ね。

「正確に言えば、呪文詠唱ができない。俺がここに内定された理由は、只一つ。俺の魔力容量だ」

とんとん、と親指で自分の胸を叩く。ま、嘘は言っていないな。魔力だけは一人前どころか百人前以上のモノを持つてる。あの女のお墨付きだ。

「魔力だけで、転入って……。お前どれだけ魔力もってんだよ」

「……それももつともな疑問だけど」

将人の呆然とした表情に、とおるが疑問を上書きする。

「呪文詠唱ができないって、どういうことだい? 口が不自由しているならまだしも、君は普通に喋っているようだけど」

「ああ。それは……」

あれ、名前でてこねえな。まあ、あの女からその病名を聞いたのも出会ってすぐだから、もう何年も前だし、俺自身あまり気にしなかつたから……。呪文詠唱なんちゃら症候群だったはずだが……。

魔力源、魔力回路だけじゃない。心が、体が。呪文詠唱を受け付

けない。呪文の音に敏感に反応し、体内部のバランスが崩れる。そんな不安定な状況下で、魔法なんて当然発動しない。そんな病気だ。ま、こいつら皆知らないってことは、一介の学生じゃ分からないレベルの、馴染みの無い病気ってことだな。

「あまり、そういつた質問をしてやるな。とおる」

「あ、そうだね。ごめん聖夜。ちよつと無遠慮な質問だった」

「ん、いや。気にすんな」

俺の言葉が続かないのを躊躇いだと感じたのか。修平が待ったをかける。その意図に気づいたのか、とおるも直ぐに謝罪してきた。

実際、気にしてないしな。詠唱なんてできなくても、やりようはいくらでもある。

「で？ お前はその現象を克服するために、学園に魔力を買われて転校してきた、ということでもいいのか？」

「ああ、そんなとこだ」

先天的なもので、治る見込みもないものだけだな。けど、理由づけをしてくれたのはありがたい。それに便乗することにしよう。あとで泰造氏に連絡しておかねば。

「そっか。中々の苦勞人なんだなあ」

お前もな。いや、俺が殴ったせいなんだが。将人は鼻血をティッシュで押さえながらしみじみとそう呟いていた。

「ま、俺たちに何ができるわけでもないが。協力はしよう」

「そうだね」

「任せとけ！！」

修平の言葉に、とおると将人も賛同する。

「助かる」

俺は素直に頭を下げておいた。

「さて、時間も時間だし。そろそろお暇させてもらうとするか」

「あ、ほんとだ。もうそんな時間だね」

「今日は時間経つのはえーなあ」

適当に4人で喋っているうちに、日はとっぷりと沈み、時計の短針は9の数字を指していた。

「俺たちはこれから大浴場行くけど、聖也はどうする？」

「いや、とおるの忠告もある。遠慮しておこう。狭いが、この部屋にもシャワーはあるしな」

将人の申し出はありがたかったが、ここは辞退しておくべきだろう。風呂場で男どもに群がられたくはない。

「賢明な判断だな」

「うん。その方がいいよ」

修平とおるが俺の出した結論に同意する。

「そっか。んじゃ、また明日な」

「明日の登校は付き合おう。最初に職員室に行くんだろ？ 案内する」

「朝8時30分に、ロビーでいいね？」

「ああ、ありがたいな。よろしく頼む」

「何水くせえこと言ってんだよ。じゃーな」

わりと友達運は良い方かもしれない。3人が出て行った扉を見つめつつ、そんな事を思った。

「……さて」

スニーカーから、荷物だしとかなないと。がさごと荷物を漁る。

「ん？」

中から見覚えのない携帯電話が出てきた。

「誰のだ？ あの女が使ってたものとはまた別だが……」

かと言って、このスニーカーは向こうで閉じたつきりで開いてない。誰かが紛れ込むはずもないのだが……。

首を捻りながら開いてみる。すると、メイン画面ではなく、メールの操作中の画面で止まっていた。読んでみる。そこには、こう書

かかれていた。

『この文章を見ているということは、無事青藍高校に潜入できたよ
うね。と、言うより折角お膳立てしてあげたにも関わらず、青藍高
校の敷居外でこの文面を見ているようなら、即座に読むのを止めて
詫びなさい。直ぐに死んで。早く。あ、でも人様に迷惑かけるとこ
ろで死んじゃダメよ。ちゃんと一目に付かないところで処理も楽な
こほん。ま、私は貴方のこと信じてるから、そんなことないつ
てことは知ってるけどネ（はあと）。

さて、ここで語るまでもないことだけれど。君には重大な使命が
下されたはずだわ。それを見事完遂なさい。一匹たりとも逃がしち
やダメよ。必要とあればやってよし。許す。あ、責任は取らないけ
ど。そんなわけで、その任務が終わるまで貴方に逃げ場は無いから
泰造さんによるしく伝えといて。

追伸。知ってると思うけど、私携帯代えたから。貴方、多分自分
の壊しちゃったんじゃない？ これは餞別よ。私の番号は登録して
ないから。私がかけるときは非通知でするわ。一方通行ってことで
よろしく。

貴方の愛しの師匠より』

「ふう」

自分を褒めてやりたいね。あやうくこの携帯も握りつぶすところ
だった。あの女からの連絡なんて碌なもんじゃないし、壊しても一
向に構わないのだが。ただ、壊してしまうと、今後あいつに連絡を
取る手段が無い。それで雲隠れでもされたら、一生殴れないだろう。
それは避けなければならぬ。俺の理性ナイス。

「……それにしても」

文面を読み返す。『君には重大な使命が下されたはずだわ。それを見事完遂なさい。一匹たりとも逃がしちゃダメよ』ね。

「主旨変わってんじゃないか」

護衛だろ？ 俺の仕事。必要とあればやってよし、つて。「ヤ」
がカタカナなのが怖い。殲滅しろと？

「はあ〜」

携帯を放り投げ、ベッドへとダイブする。想像を遙かに上回る面倒臭さだ。あの女が自発的に俺を手放し、受けた依頼だ。何かあるとは思っていたが。

「……」

一匹たりともという文面から察するに、単独犯ではない。グループであることに当たりは付く。それも、殺しの許可まがいも出している。間違はなく、相手はただの誘拐犯グループではない。

「め、めんどくせー」

そう呟きつつ、心の中では徐々にわくわくとした気持ちも生まれてきていた。その感情も、否定する気はない。別に、誘拐犯グループとやり合っのに気持ちが高ぶっているのではなく。

「久しぶりの、学校だからな」

アメリカでは、基本的にあの女に命令されるがまま仕事をこなし、魔法使いのライセンスなんて、一発試験だった。「あ、そう言えば明日試験の予約入れてたんだ」と言われたのが、試験当日の午前0時。気が付いたら試験を受けてました、そんなレベルだ。

「むちゃくちゃだぜ」

今のご時世。別に高校の卒業資格を得られずとも、ライセンスさえあれば魔法使いの仕事はこなせる。学力重視の会社もあるが、今は学力よりも実力だ（当然文武両道の方が好ましいわけだが）。実際のところ、学校なんて通わなくてもいいわけだが……。

「ま、折角だし。楽しませてもらうとしよう」

第3話 姫百合可憐（前書き）

私の作品に点数をつけて下さった方、ありがとうございます。
予想外の高得点で嬉しいです。

ひとまず、お気に入り登録件数が2ケタになるようがんばります
笑）。

あと、分かりずらいと思ったので、各話ごとにタイトル付けること
にしました。（改）と表記されてますが、中身変わってません。

第3話 姫百合可憐

朝。爽やかな日差しに照らされ、うつすらと瞼を上げる。見覚えの無い天井。ああ、そういや、昨日から青藍魔法学園学生寮に住むことになったんだっけか。ぼんやりとした頭でそんなことを考えつつ、視線をスライドさせて目覚ましを見る。

そこで、現状を理解した。

8：53

遅刻だネ。

「よっ、と」

トイレに行き、着替えて顔を洗い、歯を磨くので5分。8時58分。普通なら、ここで打ち止めだが、俺は違う。転移魔法を発動させて瞬時に校舎前に跳んだ俺は（とは言え、この魔法を周囲に晒すつもりは無かったので校舎前付近の茂みに跳んだのだが）、急いで下駄箱へとダッシュした。下駄箱はどれを使っているのか分からない為、ひとまず外履きは一番上に置いておく。スクールバッグから上履きを取り出し、いそいそと履いていたところで。

「あら？ もしかして転校生君？」

「はい？」

とある教師に出くわした。

キーンコーンコーンコーン

チャイムも、鳴った。

「まったく、初日から遅刻なんていい度胸ね」

「遅刻はしていません。チャイムは、担任である貴方に会ってから鳴りました」

「でも、教室には居なかったでしょう？」

「新生は、担任の後に入って自己紹介するのが習わしでしょう？」

「……確かにそうだよ。じゃ、じゃあ遅刻じゃないってことかしら」

あれ？ 納得してくれるの？ いや、そっちの方が嬉しいんだけども。

俺の横を歩いているのは、今日から俺のクラスとなる担任で、名前は白石はるか。今の短いやりとりからも分かる通り、温和でかわばわわしてるお方っぽい。ちなみに見た目もかわばわわしてる。

「……何か失礼なこと考えてない？ 中条君」

「いえ、滅相もない」

見た目に反して、鋭かった。

階段を上り切ったところから、徐々に生徒の喧騒が高まってきた。学校特有のざわざわとした音が響く。

「貴方のクラスは2年A組よ。さっきも言った通り、私が担任を務めるわ」

「はい」

……2年A組。あれ、何か引つかかるな？ 何かを忘れているよ。うな……。うな……。

「到着よ」

そんなもやもやを抱えているうちに、いつの間にやら教室の扉の前へと来ていた。

「じゃ、私が先に入って君の事を話すから。呼んだら入ってきてくれる？」

「分かりました」

俺の答えに頷くと、白石先生が扉を開け中へと入っていく。閉められた扉の中からの喧騒が大きくなった。

「どうやら、噂の転校生とやらは相当に注目されているようだ」
他人事のように呟いてみる。つーか、実際どうしろってんだ。ほんとに俺、期待されること何もできないよ？

そんな事を考えているうちにお呼びがかかった。

「中条くん、入ってきてー」

しょうがない。ま、何とかなるか。楽観的に結論づけ、目の前の扉を開いた。

「お？」

教室に入って、最初に目があったのは、一番前・出入り口に席を構えていた将人だった。ああ、そういや、昨日2年A組だっていつてたな。……ん？ 将人？

「あ」

思い出した。そういや、今朝一緒に行くって待ち合わせてたんだ。「聖夜あー！ てめえ今までどこにへばおっ!？」

「うるさい、落ち着け」

将人の叫びを、隣の席に座っていた修平のアップパーが止める。そのまま、くいつと顎で先を促してくれた。どうやら、一先ずは紹介を済ませておけということらしい。その後ろに座っていたとおるも、苦笑しながら頷いていた。……こりゃ、後で土下座だな。

「中条君？」

「あ、はい」

いつまで立っても入り口付近から動かない俺を不審に思ったのか、白石先生が声をかけてくる。流石にこのまま突っ立っているわけにもいかない。教卓まで移動する。

教室をぐるりと見渡してみる。将人・修平・とおる・舞。初めて来た学校、その自己紹介の段階で、既に顔見知りか4人。これはとて心強かった。

「初めまして、中条聖夜と申します。つい先日日本に戻ってきたばかりです。右も左も分からない身ですが、どうぞこれからよろし

」

……ん？ 4人？ ふと、我に返り、目を上げて後悔した。

「くしてくれなくて結構です。それでは失礼しました」

「は？」

担任の間の抜けた声を余所に、すぐさま踵を返す。やばいやばいやばいやばい。おかしいだろ？ 何で。

「どこに行くのかしらあ？」

突如。がっしりと俺の肩を掴む手。何で。

「人と目が合うなり、逃げるなんてつれないじゃない」

「は、早いな。ここまで来るの」

訳の分からない言葉しか出てこなかった。

「うふふ。アリガト。私、身体強化魔法には自信あるの」

引きつった顔になっていることは、重々承知してる。顔の表情が言うことを聞かない。何で。

「ま、舞……？」

「ええ、そうよ」

貴方がいるんでしょう。

「私は花園舞。よろしくね？ 転校生の中条聖夜さん」

わ、すっごい良い笑顔。こいつの性格を知らなけりゃ、多分惚れてるね。

「先生、申し訳ございませんがこの転校生。少々お借りしますわ」

「へ？」

白石先生が目を丸くする。その言葉に、黙っていた生徒の間にもざわめきが走った。当たり前だ。

「あ、あの……転校生の立場としては、この挨拶が最初のイメージを決めるわけでして……。流石にここで離脱するのは……」

「いいから来なさい。場所は屋上で良いわね」

「ひいひい！！」

弱き者である俺は、成す術なく引きづられていった……。

「ちょよ、ちょっと待って！ 今はもうホームルーム中よ〜！」
ばたん！

力の抜ける声で注意しながら、担任・白石はるかも教室を飛び出していく。閉められた教室の扉。残された生徒たちは、啞然とした表情のまま着席していた。

「な、なに？ 今の」

誰かがぼつりと呟く。その短い言葉に、このクラス全ての人間の疑問が凝縮されていた。

「アイツ、花園さんと知り合いだったのか」

「顔見知りのようではあったな」

将人の言葉に、修平が頷く。

「なるほどね」

とおるだけは、なぜか訳知り顔で頷いていた。

「何がなるほどなんだ？」

「いや、聖夜のことさ。彼、魔力を買われてここに来たって行つてたろ？ この学園がどうやって聖也の事を知ったのかが謎だったんだけど……。花園家の口利きがあったのなら、納得だと思つてね」

「おお、確かに」

とおるの考えに、将人がぼんと手を叩く。

「いや、だとしたら不自然じゃないか？ だって、聖夜の奴。花園の御嬢さん見て驚いてたろ。口利きしてもらったのだとしたら、あのリアクションはおかしいと思うが……」

「あ、そう言えばそうか。うむむ？ じゃあなんで……」

修平のもっともな話に、解けかけていた謎が思わぬところで泥沼に陥り、とおるが再び思考モードに移る。が、それも長くは続かなかつた。

「ちよつと、いいかしら……」

「ん？」

「え？」

「ほ？」

後ろ手に声を掛けられ、三者三様の声と共に振り返る。そこには、このクラスが誇る2大お嬢様の片割れ・姫百合可憐が立っていた。

「珍しいこともあったもんだ。何か用かい、姫百合の御嬢さん」

おそらく、向こうから話しかけてきたのは初めて。ぱくぱくと口が回らない将人とおるに代わって、修平が突然の来訪者に対応した。

「ええ。差支えなければ教えて欲しいのだけれど。今こちらにいらしていた転校生とはお知り合いかしら？」

「知り合いかと聞かれれば首を縦に振るが……。ただ、古くからの付き合いとかではないぞ。俺たちもアイツに会ったのは昨日だ。それも学生寮で偶然な。アイツに関する質問ならば、おそらく俺たちも答えられない」

「……。そう。……。もしやと思ったけど、花園さんのご友人ならまた別件かしら……。？」

何か思うことでもあるのか。可憐は自身の唇を撫でながら、そう呟いた。

「……。花園の御嬢さんも何やら面識があったようだし、何かあるのか？」

「え？ あ、いえ……。そういうわけではないの」

修平の質問に、可憐はふるふると首を振った。

「急にごめんなさいね。教えてくれて、ありがとう」

につこりと笑みを浮かべ、可憐は踵を返して自分の席へと戻っていく。それを見たとおるが、はあとため息をついた。

「相も変わらず、女性が苦手だな」

「ほっといてくれよ。それに苦手なわけじゃない。緊張するだけだ」
修平のからかいに、とおるが反論する。

「似たようなものじゃあ」

「いいや、違うね」

即答だった。

「分かった分かった。それにしても将人、お前まで黙ってどうした？　いつもお近づきになりたいとか言ってたじゃないか」

「……ふ」

「ふ？」

「不意を突かれた」

「あつそ」

将人の答えに興味を失ったのか、修平はその一言で会話を断ち切った。

がらららっ！！

ちょうどそのタイミングで、教室の扉が開く。見れば、白石はるかが1人でとぼとぼ帰還してきたところだった。

「うええ……。ダメだったよう」

やっぱりな。生徒全員が、同じ感想を抱いていた。

「さて、きつちり説明してもらいましょうか？」

女子から屋上に呼び出される。どうしてこいつも魅惑的なシチュエーションであるにも関わらず、胸が一向にときめかないのだろう。

ああ、分かっている。こんな疑問を持ちつつも、俺は既にその答えを知っているぞ。

なぜなら、呼び出してきた相手が花園舞だから。

理由なんて、これで充分だろ？　だって、こいつに引きずられるようにここまで連れてこられたんだぜ。しかもここから先、あるのは俺の告白であって（断じてラブリーな意味ではない）、可愛い女子からの告白ではないからだ。

「聞いているのかしら？　それとも、その耳は只の飾り？　ならいらないわよねえ」

「聞いてる！ あ、いや……聞いてます……！」

恐ろしいほどの怒気で、思わず敬語になっちまった。チキンとか言うな！ 知ってるから！

「で、どういふことなの？ アンタ、護衛の仕事するって言ったじゃない」

「いや、だからな？ その仕事をしにここへ来たのであってだな……」

「ほおっ？」

あ。やべ。

「護衛任務の為に、この学園へ……ね」

「あー。うー。えー」

やべー。何にも言い訳思いつかねー。

「私の護衛じゃないわね。だったら昨日逃げるはずもなし……。つまり」

目の前の相手を射殺しそうな視線が、俺を貫く。

「姫百合可憐、ね」

バレタ。

「何であの女なのよ……！」

「何でも何もあるか……護衛が対象選べるわけねえだろ……！」

「何で……あの……女……なのよ……！」

「っ……！ぐ、ぐるじい……！」

舞は思いっきり俺の胸倉を掴みあげたかと思うと、前後にぶんぶん揺らしてくる。これはまずい。ほ、ほんとに、きつい……。

「ぎ、ぎぶ……」

「ぶんっ」

どさつと崩れ落ちる。よ、ようやく酸素が吸える。呼吸のありがたみって奴を知ったぜ。

「はあ……はあ。何だよ……。お前、姫百合可憐と仲悪いのか？」

「良いわけないでしょ……！」

「……いや、知らんけども」

「つか、知るわけねえだろ。」

「あいつ、ほんつつつつつとくに、嫌な奴なの！！！！！」

「落ち着け。取りあえず、お前が本気で嫌っていることはよく分かったから」

「聞きなさいよ！ アイツったら、ちよつと顔が良くて成績優秀だからって、学園中の男たちから人気集めてんのよ！？ そのくせそれを気にしないかのような素振りしちやって！ 猫かぶってんだわきつと！ だから友達いないのね！！！」

「……それ、お前とどこが違うんだ？」

「……え？」

俺の発言がよほど心外だったのか、舞はぴたりと動きを止めた。

「お前は顔が良くて成績優秀でも、男たちから人気ないのか？」

「い、いや……それは、ちよつとはあると思うけど」

俺の質問に、舞がたじろぐ。畳み掛けることにした。

「お前はそいつらに誠心誠意全力で応えてやってるのか？」

「い、いや……。流石にそれは私のキャラじゃないというか」

「お前は猫かぶってないのか？」

「い、いや……。それはこのテンションだと周りヒいちゃうし多少はかぶるけど」

「最後だ。……お前に、友達はあるのか？」

「い、いや……。それがあれから友達なんて1人も って、

何言わせんのよ！！！！！」

「がぶへっ！？」

拳が、俺の右頬を容赦なく捉えた。

「いてえなこの野郎！！！」

「アンタが余計な事言わせるからじゃないの！！！！！」

「お、おい！！ 身体強化魔法を発動してんじゃねえ！！！」

>しばらく、そのままでお待ちください<

「はあ……はあ……。う、腕を上げたわね、アンタ」
「はあ……はあ……。お、お前に護衛はいらねえよ。俺は今確信した」

俺の体術についてこれるとは……。こいつが守ってもらおう立場になることは、未来永劫ないな。間違いなく護衛の方が足を引っ張るだろう。

「アンタ、その仕事降りなさい」

「……なんだと？」

舞からの予想外の命令口調に、思わず顔を上げる。

「軽く手を合わせて分かったでしょ？ 私だつて中々のもんよ。そうでなくとも、この学園のセキュリティは見た？ この学園に護衛なんて必要ないのよ」

そう断言される。確かに、それは俺も感じていたことではあるが

……。

「ま、そりゃ無理だな」

「何だよー!!」

「受けちまったからだ」

「っ」

俺の断言に、舞が口を噤む。

「俺は、この仕事を正式に受諾した。逃げるつもりはねえよ。めんどくせーけどな」

「……」

「それに、お前がいるから平気つて。女に任せてはい辞めますなんて言えるはずねえだろ」

「……ばか」

舞がぼそりと呟く。一度俯いたが、直ぐに顔を上げた。そうか、分かってくれたのか。

「そんなに、あの女がいいわけね」

「……は？」

あれ。話、違くない？

「アンタは、ああいう女が好みってわけ……」

「ジュジュジュ……」

「こ、この言いようのないプレッシャーは何だ!？」

「お、落ち着け舞! そもそもさっきの自己紹介で教卓立った時には、顔馴染みの方ばかりに気を取られてて、姫百合可憐の顔すらまだ見てねえんだから!！」

「そ、そうなの?」

俺のその言葉に、舞から発せられるどす黒いオーラがぴたりと止んだ。……よし、このまま押し切れ!!

「だ、だからさ。紹介してくんない?」

あ、やべ。ミスった。この発言は無いわ。

「……聖夜あ。アンタ」

「は、はい」

「死ねえっ!!!!!!!!!!」

どおおおおおおおんっ!!

屋上で、無慈悲の魔法が炸裂した。

後から知った話。どうやら、舞は青藍が全寮制と謳っているにも関わらず、ちよくちよく自宅へ戻っているらしい。無断で。本人曰く、寮の部屋では不自由とのこと。何が不自由なのかは怖くて聞けなかったが、どうせ“しもべ”の数が少なくて困ったとかそんな感じはずだ。……たぶんね。

ともあれ、俺が昨日感じた安堵感は、残念ながら見当違いも甚だしい空喜びだったのだ。舞が通っているのは、間違いなく私立・青藍魔法学園であり、そのクラスはまさかの俺と同じであり、将人・とおる・修平の3人も同じであり、俺の護衛対象である姫百合可憐とも同じでいわゆる2年A組という名を冠するクラスであり、つまりまるところ俺に平穏な日々は訪れないであろうことをその結果は雄

弁に物語っていたというわけだ。

すまん。言い回しがめんどくさかったな。端的言えば、俺と舞は同じクラスでした。

一時限目の授業は、当然のように遅刻した。担当は残念ながら白石先生ではなく、なぜ俺たちがいないのか分かるはずもない教師であり、俺が教室後方の扉を開けて入るなり訝しげな表情を見せるものの、後から続いて入ってきた舞を見て驚愕した表情を作り、特にお咎めの言葉を発するでもなくただ一言「席に着け」と言ってきた……舞、お前この学校でどういうキャラで通ってるんだ？

「授業を続けます」

教師が黒板へと視線を戻し、俺と舞も各々の席へと座る。席は一番奥の窓側から2番目だと白石先生から聞いていた為、迷わずに済んだ。それにしても、よくある転校生質問責めって奴には遭わなかったなあと思いつつ、それが不可能な状況であつたということに直ぐに考えが至る。そりゃそうか。だって、自己紹介もおおざなりに舞によって連れ去られ、授業中に戻ってきたんだからな。話す暇なんであつたもんじゃない。

と、いうよりも。折角登校初日の遅刻は免れたと思つた矢先、まさか1限目の授業を遅刻するとは。しかも教室移動で迷いましたとかでもなく、普通に自分のクラスでの授業であるにも関わらず、だ。どんなジョークだよ。

と、そこまで考えて窓の外へと視界を向けようとしたところで。「っ!？」

皆が皆俺の方へと意識を向けていたら、間違いなく不審な目で見られるだろうと断言できるような拳動で、俺は強引に顔を正面へと戻した。咄嗟の行動だった。許してほしい。だって、ビビるだろ。

俺の隣は、まさかの姫百合可憐。その人だった。

一瞬、こちらに視線を送ってきたようだが、直ぐに姫百合も前へと視線を戻した。怪しまれたか？ いや、何も言わずに前を向いたんだからおそらくはバレてはいない。あ、いや。別に視線が合ったところで問題は無いのか。悪いことをしてるわけじゃない。何見てるんですかとか聞かれたら、横に座ってる子が美人でびっくりしましたとか言えば……。無理でしょ。そんなこと言おうものなら、舞に木端微塵にされそうだ。っーかそんな齒の浮いたようなセリフを言う度胸も俺には無いな。はは。じゃ、やっぱり俺の行動は正しかったわ。

「くん。中条聖夜くん」

「へ？ あ、はい」

どうやら、いつの間にか呼ばれていたらしい。がたりという音を立てて、立ち上がる。

「答えは？」

……え？ 何の？ そういや、まだ教科書すら出してなかった。まずくない？ ここで聞いてませんでしたなんて言おうものなら、俺の好感度ガタ落ちじゃん。

「……53」

「へ？」

隣から、ぼそりと声を掛けられる。53？ なんだそりゃ……つて、答えか！

「う、53です」

「……正解だ。教科書すら出さずに何してるかと思えば……。ちゃんと聞いているじゃないか。座ってよし」
おお。

生徒間で、賞賛の声上がる。いや、これ俺がすごいんじゃないよ？ 席へ座りつつ、優しい隣人に声をかける。

「さ、さんきゅーな。助かったよ」

「……いえ」

姫百合は顔にかかった髪を耳へとかけつつこちらを向いた。

「転校初日では、色々とおあるでしょうし。お気になさらず
爽やかな笑顔を向けてくるお隣さん。」

この俺の醜態が、姫百合可憐とのファーストコンタクトとなった。

第4話 お待ちかねの…？（前書き）

ここで、作中で使ってる マークについて触れておきたいと思います。

基本的に文章の間に入るこのマークは、場面転換を意味しますが、第3話のように マークがつく場合もあります。

これは、文章が聖夜視点でないときに用います。

その後再び マークが付けば、視点が戻ったと考えて下さい。

そんな感じで、これからもお願いします。

第4話 お待ちかねの…？

突然だが、この場を借りて改めて明言しておこうと思う。俺こと中条聖夜は、呪文詠唱ができない。

魔法とは現代科学では証明出来ない未知なる力。あるものは物体を燃やし。あるものは物体を浮かせ。あるものは物体を消し去る。そういった現代科学のメカニズムでは証明できない力の総称として用いられる。

魔法使いが表舞台に胎動してから、どれほどの月日が流れたのだろうか。一昔前のテレビアニメを見てみると、魔法少女やら何やらが使い魔を連れつつ魔法のステッキか何かで華麗に魔法を発動させ、必殺技と共に悪を消滅させるものが多い。が、実際はそんなメルヘンチックなものなど使用されない。

魔法伝導体。通称・M a s i c C o n d u c t o r。

マジック・コンダクター

MCと略されることもあるが、それはいい。ともかく、この機械が魔法の杖の代わりつてわけだ。使い方は簡単。自分の腕なり足なりにセットするだけ。ベルトを巻くだけでいい。見栄えは杖に比べれば劣るだろうが、実戦にそんなものは必要ない。

とはいえ、このMCさえあれば誰でも魔法が使えるかと問われれば、その答えはN。だ。魔法は先天的な才能に左右される。魔力という名称とて、このエネルギーが無ければ人は生きていられない。つまり、魔力が0の人間は存在しえない。しかし、人間は誰しも魔力を持っているとはいえ、その魔力容量はそれぞれだ。魔法として具現化出来ない程の微々たる量しか持たぬ者もいれば、膨大過ぎる程の魔力を持つ者もいる。

後者の代表格としては、姫百合可憐・花園舞、そして俺とかが拳

げられる。自慢じゃないよ？ 詠唱できないくせに宝の持ち腐れとか言うな、そこー！ ……こほん、失礼。で、だ。話を戻す。何が言いたいかというと、MCがあれば誰しもが平等な魔法使いになれるわけではない。

魔法は、“一般的に”呪文詠唱を行うことで発動する。

これは、自身の体内に眠る魔力を、“音”によって導き魔法を練るためである。呪文詠唱には、大きく分けて2つの種類がある。「始動キー」と「放出キー」だ。

「始動キー」とは、読んで字の如く魔力を始動させるために用いるキーを指す。どんな“音”を用いても構わない。これはあくまで自身の体内に眠る魔力を循環・活性化させる為のものであり、魔法発現には直接的には関係しない。つまり、『プリティ・プリティ・マイラブリ』とかでも構わないわけだ。ちなみに今の『マイ』は『my』の方ではなくてだな……。いや、ちょっと待って。それは構うわ。やっぱやめよう。人として大切な何かを見失いそうだし、いくら詠唱できないからって、呪文にケチつける必要は無かったね。で、もう1つの「放出キー」だが、これも文字通りだな。始動キーによって循環・活性化した魔力を、魔法という形に変化・放出させるキーってわけだ。こいつは始動キーと違い、どんな“音”でもいいってわけにはいかない。ま、当然っちゃ当然だろ？ なにせ、この“音”こそが魔法の源泉。つまり魔法を形作る核ってわけだ。放出キーにも2通りあり、自身の考えたオリジナルキーと、世界魔法協議会が公認するオフィシャルキーがある。

世界魔法協議会とは、魔法使いの魔法使いによる魔法使いの為に組織……。とまではいかないが、ともかく魔法使いによって構成される、世界的機関とでも考えてくれればいい。魔法に関する全ての権限を握っており、魔法使いの資格試験や法律、禁呪の指定なども執り行っている。

で。基本的に用いられるのは後者。オリジナルで魔法を発現するなんて、そうできることじゃない。仮に万が一。できてしまったら、魔法協議会に申請する。それが個人だけでなく万人によって使用できるということが証明されれば（ここで言う万人とは、あくまで魔法を使える者のみに限る）、晴れてオフィシャルキーとなり、新呪文開発者として『呪文大全集』という公認の呪文書に名を残すことができる。

これが呪文詠唱と呼ばれるものの仕組み。魔法使いは、このスタイルに乗っ取り呪文を詠唱し、魔法を発動させているというわけだ。つまるところ、MCなんてのは名前の通り、あくまで魔力を内から外へと伝導させるための補助道具でしかない。確かに、魔法発現までの工程をスムーズに進める為には是非欲しいツールではあるものの、これが無いから魔法の一切が使えませんかなんてことには成り得ない（当然、未熟なものであればMCに頼りきりで、無ければ魔法が暴走するってことは有り得る）。

そして、それは詠唱も同じこと。魔法に慣れてくれば、“音”の力を借りずとも魔法は発現できるようになる。魔法の核を形作る放出キーとて、それはあくまで魔法をそういつた形に変化させるよう刺激する為の“音”であり、それが物理的な核となるわけではない。卓越した魔法使いは、“音”を用いずとも自身の体内に眠る魔力を刺激し、思い思いの魔法を発現できる。それを、世間一般では“詠唱破棄”や“無詠唱”と言うわけだ。

別に気取っているとかではなく、俺はそれなりに勉強できる方だと思う。なにせこれまで俺を鍛え上げてきたあの女は、性格以外に欠点らしい欠点が見当たらない完璧超人であり、俺があの女に同行しているのとやっつてる時も（断じてエロい意味ではない）、暇を見ては俺に勉学を叩きこんでいた。

仕事の合間に魔法の修行と学生の本分とも言えるお勉強。正直なところ相当ハードだったが、今にして思えば後者2つはあの女なりの優しさだったと思えなくもない。

……いや、思えないね。やっぱり取り消す。あの女に感謝すべきことなどない。なぜなら、それを補って余りあるほど俺はあの女に貢献しているはずだからだ。ともあれ。そう言ったよく分からんことを考えながら、俺は2限目である呪文詠唱の授業を流しつつ聞いていた。そう、今は2限目の呪文に関する授業である。

結局、1限目と2限目の間にある10分間の休憩時間で、質問責めに合うことは無かった。別に。俺が皆から興味を持たれてないというわけではない……と思う。なぜなら、1限目で数学を担当していた教師は、授業終了のチャイムにまったく気づいた素振りをみせず、あるうことか2限目の教師が教室に姿を現したところで、やっと現状に気づき退室していったからだ。

よって休憩時間は一切なし。そのまま2限目の授業へと突入していた。が、それももう終わり、だな。

きーんこーんかーんこーん

そこでタイミングを見計らったかのようにチャイムが鳴り響いた。

「聖夜あー！！ てめえ今朝どこ行ってたんだー！！」

さっそく、将人がやってきた。

「いや、寝坊した。すまん」

「寝坊？ 俺たち、お前の部屋まで行ったんだぜ？」

「そうなのか？」

「結構強めにノックしたし、呼んだよな？」

「ああ、少なくとも俺とお前でお前を抑え込まねばならんくらいの大音量だな」

将人が後ろに声を掛けると、ついてきていた修平がそう返した。

どうやら、相当熟睡していたらしい。

「ほんと、悪かった。すまない」

「あ、いや。そこまでしなくていいんだけどよ」

素直に立ち上がり、頭を下げる。その姿勢に意表を突かれたのか、将人が若干たじろぐ。

「ちよつと本城！ なに貴方転校生にいきなり頭下げさせてんのよ！！」

「そうよ、さいてー」

「え！？ 俺悪いの！？」

いつの間にかこちらに集まり始めていたクラスメイトから、思わぬ口撃（誤字にあらず）を受け、将人が目を白黒させる。

「そーだそーだおーぼーだぞー」

「うん。いきなりアレは無いよね」

「てめえらも第三者演じてんじゃねえよ！！」

いつの間にか周囲を取り囲むクラスメイトに交じり野次を飛ばしていた修平とおるに、将人が抗議の声をあげる。しかし、善戦空しく数の暴力に飲み込まれた。

そして、ある意味でお待ちかねだった質問タイムが到来した。

昨日の内に泰造氏に連絡を入れておいたのは、正解だったということだろう。『俺が呪文詠唱できないことを克服するためにこの学園に来た』という捏造話は、俺と舞が戦線離脱している間に白石先生が説明していたらしい。

よって、クラスメイトから寄せられる声は「がんばれ」とか「力になるよ」とかそういったエールが多く、罪悪感に苛まれまくったあれ、こんな使い方で良かったつけ。まあいいか。

「向こうでは何をしていたんだい？」

「こつちと同じさ。親の事情で向こうに飛んできてだけで、大層な

目的を掲げてたわけじゃない。普通に学生やって普通に戻ってきた」
「普通で片付けられるのが凄いな。言語の壁とかあったら？」

「はは。そんなの気合でなんとかなるって、向こうで実感したよ」
「当たり前障りのない解答で遣り過ごしていく。喋るたびに、事実が
フィクションへと塗り替えられていくな。しょうがないことだけ
ども。」

「向こうでも魔法学校に？」

「ああ。実際のところ、俺はほぼ攻撃魔法も防御魔法も使えないか
らな。実習とかでは苦労しまくりさ」

「でも、それを補って余りあるほどの魔力があるんだろ？」

「宝の持ち腐れだけだな」

「羨むべきなのか複雑なところね」

「人間、自分に無いものを欲しがるものさ。君が俺を羨む気持ちが
あるように、俺は君が羨ましいんだぜ。詠唱できるできないじゃ、
大違いだからな」

「……大成してるね」

「そんなことないと思うけど……」

その感想には、苦笑せざるを得ないな。あの女のおかげでいろい
ろと悟りの境地に立った面もある。

「……で、多分ここに居る皆の誰もが聞きたい質問だと思うんだけ
ど」

一人の女子生徒が、急に思わせぶりな前置きを置いてきた。

「？」

「花園さんとは、どういったご関係？」

ぶっ。思わず心の中で嘖き出してしまった。一瞬、この輪に加わ
っていない舞の方へと目を向けるが、背を向けたつきりで反応は分
からない。さて、どう答えたものかと思っただころで。

きーんこーんかーんこーん

救いのチャイムが鳴り響いたのだった。

昼休み。チャイムが鳴ると同時に、2人の女子生徒が立ち上がった。それは、花園舞と姫百合可憐。そそくさと教室を出ていく。2人とも同じ行動を取るものだから、てっきり2人で飯でも行くのかと思いつつ、その考えは直ぐに改める。そういや、仲悪いつて舞が言ってたな。おそらく、別々でソロだろう。いや、姫百合の方は妹がいるんだっけか。多分一緒に食うだろうな。……それにしても「そんな壁作ってちゃ、友達なんてできるはずねえだろ……」

「うおつとお!？」

急に横から声を掛けられたもんだから、ビビった。そこには、将人・とおる・修平のいつも通り3人組が立っていた。

「学食行こうぜ」

「弁当ってわけじゃないだろ？」

「ああ、そうするか」

3人の誘いをありがたく頂戴し、席を立つ。ちらりと、主を失った隣の机を見る。……そんなに、敬遠されるような娘じゃなかったと思うんだけどな。1限目の時、こっそり解答を教えてくれたことを思い出す。お礼を言った時の反応といい、高飛車な感じも無かったし、寧ろ付き合いやすそうなイメージを受けてたんだが……。

「おーい、いくぞー」

「あ、ああ。今行く」

いつの間にもやら教室の外で待たせてしまっていたらしい。俺は思考を断ち切って教室を出た。

学食も、かなりの広さだった。将人たちが走って席を取りにくいような真似をしなかったので、それなりの広さだとは思っていたが

ここまでとは。確かにこれならば時間に追われることもないだろう。寮の食堂と同じく、テイクアウトも出来るみたいなので、急ぐ必要も無いということか。

「じゃ、食券買いに行くか」

券売機前の列に並び、ものの数分で機械の前に立つ。ポケットからがま口財布を取り出し、中身を確認する。残額150円。昨日の夕飯は将人たちがテイクアウトして来てくれたもので、生姜焼きのどんぶりものだった。350円。学生の為に存在する食堂ならではの低価格だが、俺にとってはそうではない。今日から飯どうするか。と、言うより今日の昼飯は……。俺は、色とりどりのメニューを視界に抑えつつ、泣く泣く一番安いものをプッシュした。

「それにしても、お前随分な人気だな」

「へ？ そうか？」

学食で素うどんをすすっていたところで、将人から随分と予想外なセリフを受けた。

「やはりイケメンは正義ってことか。目つきが多少悪くても何とかなるんだな」

「お前のセリフには、悪意しかないことだけはよく分かったよ」

うどんをすする手を再開させる。

「つーか、お前らだつて別に悪くねえじゃねーか」

将人は少々馬鹿っぽい印象を受けるものの悪くないし、とおるは長い前髪が中性的な印象を出しているが、それが整った顔を際立たせていると思う。修平に至っては、非の打ちどころのないイケメンっぷりだ。くそ。なんか段々負けた気になってきたな。いや、将人はともかくこの2人には負けてるんだらうけどさ。

「でも、聖夜の髪は凄い印象的だよ」

「ん？ ああ、これね」

前髪を摘んでみる。そこには見慣れた白色の毛があった。

「真っ白なその髪は、凄くインパクトあるよ?」

「だろうな。けど、好きでこうなったわけじゃないからな」

「らしいな。膨大な魔力による副作用で色素が抜け落ちたって話は、俄かには信じがたいが」

修平が俺の髪を見ながらそう呟く。髪の話は昨日のうちに既にしていた為、改めて説明するまでもない。

「信じがたくなんてないと思うけどな。舞だってあの赤い髪は膨大な魔力を持つ一族の遺伝だし、姫百合可憐だって……ああ、あいつは真っ黒だったか」

「それだよ、聖夜」

「何がそれなんだ?」

とおるの訳の分からぬ指摘に、首を傾げる。

「2人のお嬢様の呼び名さ。どうして姫百合さんはフルネームで呼び捨ててるのに、花園さんは下の名前で呼び捨てなんだい? やっぱり顔馴染みだったりするのかな」

「ああ、そういうことか」

何を疑問に思われていたのか納得した。まあ、別にここは隠すところでもないか。

「幼馴染さ。昔は一緒に遊んでた仲だ。俺がアメリカに渡ってから疎遠になっちまったけどな」

「お、幼馴染だと!?!」

将人が急に吼えたかと思ったら、急に立ち上がった。

「……そうだけど?」

「こ」

「なに?」

「このブルジョアジめるとっ!?!」

「うおっと、すまん。つい」

飛び掛かってきた将人に、反射的に膝を出してしまった。カウンのような形でみぞおちに吸い込まれていった俺の膝は、将人の

体に甚大なる被害を与えたらしい。その場で唸りながら蹲る。

「別に聖夜は悪くないと思う」

「ああ、今のは勝手に暴走して勝手にやられたそいつが悪いな」

とおると修平は、同情のかけらも見せずにそう言い切った。

「けど、聖夜って何かやってるのかい？」

「何の話だ？」

とおるとの疑問に、再び首を傾げる。

「お前の動き。ただの素人には見えないからな。素早いし、狙いも的確だ」

「ああ、そういうことか」

修平による言葉の補完で、質問の意味を理解した。

「体術を少々つてとこか。魔法が使えないからな。実技では肉弾戦に頼ることもしばしばだ」

「なるほど。昨日見た限りじゃ、力も体力もあるようだし良い選択だと思う。詠唱できずとも、それなりの魔法は使えるんだろう？」

「……驚いたな。その通りだ」

まさか、これまでの断片的な情報だけで、俺の根本的な魔法スタイルに考えが及ぶとは思ってもみなかった。修平への認識評価を、更に上げておく必要があるそうだ。

「ま、俺が得意とするのは身体強化魔法を用いた近接術だ。要は殴り合いつてことだな」

「俺と一緒だな!!」

「うおっ!？」

何の前触れも無くいきなり顔を上げて叫ぶ将人に、若干ヒク。

「俺も近接、肉弾戦バトルだ!! やっぱ男は拳で語らなくちゃな!!」

「……いや、別に俺は男の尊厳を賭けたスタイルだと思っているわけではないが」

「あはは。じゃあ、聖夜と将人が戦ったら面白いかもね」

「確かに。将人の近接術についていける使い手は、俺たちのクラス

にもそういない」

「? じゃあ、一応いるってことか」

「いるだろうってことさ」

とおるが曖昧な答えを返してくる。

「うちの誇る2大お嬢様は、その手の内を明かしたことがないからね」

「御嬢さん方は、基本的に実技でも力を発揮したがないんだ。する時はあの2人がタイムンで対戦相手に指定された時のみ。その時は戦争かっていうくらい大魔法が飛び交うけどな」

「普通にこえーな」

「怖いなんてものじゃないよ。それを見た教師は、あの2人を対戦相手として二度と指定しなくなるほどだからね。だから、あの魔法大戦が再現されたのは今までで2回しかない」

……つまり、1年の時に1回と2年の時に1回ってわけか。在学中にあるとしたら、後は3年に上がってからってことになるな。いや、流石に新しい教師に代わっても、2度もあった悲劇なら学習してるかな。

「ま、そんなわけで御嬢さんたちの近接術は謎のままってわけさ」

「そのまま永遠に謎のままでもいいと思うな」

そんな恐ろしい場面に出くわしたら、秘密なんてお構いなしに転移魔法使ってとんずらしそうだ。

「次はいよいよ魔法実習だぜ。今日はこの為に登校したといっても過言ではないっ」

いや、過言だろ。

「将人はそんなに実習が好きなのか?」

「当たり前だろ!?! 机に噛り付いてがりがり勉強なんて、性に合わねえんだよ俺は」

ま、そりゃそうか。お前ががり勉くんだったら、俺は一度眼科で精密検査受けてくるわ。

「つーわけで、今日の授業が実践形式だったら、俺と勝負しようぜ

「!!」

「どういうわけかは知らんが、断る。ふう。午後の授業はフケるか
な」

「な、なんでだよ!? 魔法実習だぞ!!」

「いや、その魔法が満足に使えないわけだから実習が苦痛なわけだ
けれども」

「うっ……。それは……。すまん」

「あ、いや。そういう意味で言ったわけじゃない。俺こそすまん。
何か意地の悪い言い返しだったな」

実際のところそんな気にしているわけではなく、ただ面倒臭かつ
たからこそ出ただけの軽口だっただけに、そうして謝られるとバツ
が悪くなる。

修平やおるもそうだが、こいつ等は何というべきか……。そう。
引き際を知ってる。どれだけふざけた会話をしていても、相手の触
れて欲しくないところや踏み込んでほしくないところには、手も足
もかけてこない。こうして日本へと帰国して最初にできた3人の友
人がここまでできた人間であったということは、俺にとって間違い
なく幸運なことだ。

……。だからこそ、これからは俺も気を付けてかないとな。

「しょうがねえなあ……」

ぼりぼりと頭を掻きながら、そう呟く。何だ何だという目でこち
らを見てくる修平とおるを視界の端に捉えながら、俺は将人と正
面から向かい合った。

「もし。次の授業で、実践形式の模擬戦だと言われたのなら。……
戦ってやるよ」

「おおっ!? 本当か?!」

将人が嬉しそうな声で叫ぶ。依頼の件に片が付くまでは、実力は
隠しておきたかったが、ある程度は仕方がない、か。そう思いつつ、
将人へ力強く頷いた。

結果から言えば、次の魔法実習の内容は魔法模擬実践だった。しかし、俺と将人の対決が実現することは無かった。なぜなら

第5話 魔法模擬実践（前書き）

初バトル、です。

聖夜にやる気がなかったなので、直ぐに終わっちゃいますけど（笑）。魔法理論等、第4話に続き、少々説明口調な部分も出てきますが、気長に付き合って下されば幸いです。

評価を5点つつ加算して下さいました方、ありがとうございます。

第5話 魔法模擬実践

属性付加という技法がある。それは読んで字の如く、魔法に属性を付加することだ。無属性魔法（何の属性も持たぬ魔法の総称）よりも難度の高い技だが、それ故に付与された属性に準ずる独自の強さを発揮する。一般的に、付与できると言われている属性は以下の7つ。『火』『水』『雷』『土』『風』『光』『闇』である。他にもいくつか確認されているが、それは魔法使いの中でもある特別な血族たちでしか扱えておらず、そのメカニズムは不明である。よって、ここでは先に挙げた上記7つについての説明だけに留めた

い。
下記に記すのが各々の特徴、そして強弱についてである。

『火』（『風』に強いが、『水』に弱い）
攻撃系の魔法に特化する。

回復、防御、操作、移動、視覚、回帰、重力、捕縛に適さない。

『水』（『火』に強いが、『土』に弱い）
回復系の魔法を得意とする。

操作、移動、視覚、回帰、重力に適さない。

『土』（『水』に強いが、『雷』に弱い）
防御系の魔法を得意とする。また、攻撃にも優れる。

移動、視覚、回帰、重力に適さない。

『雷』（『土』に強いが、『風』に弱い）
操作系の魔法を得意とする。また、攻撃、移動にも優れる。

防御、視覚、回帰、重力に適さない。

『風』（『雷』に強いが、『火』に弱い）

移動系の魔法を得意とする。また、攻撃にも優れる。
回復、回帰に適さない。

『光』（『闇』に弱い。『闇』を除く全ての属性に強弱関係は生じない）

視覚系・回帰系の魔法を得意とする。

闇との合成ができない（無属性へと戻ってしまう為）

『闇』（『光』に弱い。『光』を除く全ての属性に強弱関係は生じない）

重力系・捕縛系の魔法を得意とする。

光との合成ができない（無属性へと戻ってしまう為）

もちろん、適さないと記されてはいるものの、絶対に扱えないというわけではない。

例えば火属性で回復、防御、操作、移動、視覚、回帰、重力が絶対に使えないとは言いつてもいい。但し、それはその属性の限りなく極みまで上り詰めた者でなければ実用はできないだろう。特に『火』の「特化」とは、そういう意味合いも込めて使用されている。全ての属性には、それぞれの長所・欠点があるというわけだ。

そして、今まさに。

攻撃特化・火の魔法を纏った舞の拳が、俺の腹にめり込んでいた。意識を刈り取らんとする激痛と共に、宙へと舞い上がる感覚。舞の驚愕している表情と、周りの景色をスローな映像で捉えつつ、俺の意識は闇へと消えた。

……どうしてこうなったんだろうね？

昼休みが終わり、午後の授業。今日の5・6限目は、2限続けて魔法実習の時間だった。数々の運動施設が校舎向かって左側に集中しているのに対して、魔法実習ドームだけは右側。つまり学生寮の近くに立っている。着替えて、向かって。それを休み時間10分でこなすことは不可能。かといって午後の部だから昼休みを削らねばならないわけではない。魔法実習は初めから更衣・移動に時間がかかることを承知済みで、通常授業開始時間から20分後に始まる。そんな特殊な事情もあり、魔法実習がある時は必ず2限続きになっているようだった。

「へえ……。結構様になってるじゃん」

MCが、術者の魔法発動を補佐する武器であるのに対して、魔法服は術者の身を守る防護服となる。服には複雑な魔法が編み込まれており、術者の魔力に応じて効力を発揮する。それだけならどれでもいいじゃんと思うかもしれないが、そういうわけでもない。やはり、個人個人に合う魔法の編み方というものがあり、自分に合っているものを着ていた方が効力を発揮しやすいのだ。

よって、生徒は例外なく、オーダーメイドの魔法服を所持している。黒を基調とした魔法服。それを身に纏った俺の姿を見て、将人は感心したと言わんばかりに頷いた。

「そうだね。聖夜って名前によく合ってる。真っ黒な魔法服に映える真っ白な髪」

「ぴったりの名前を付けて貰ったってことだな」

とおると修平も、俺を見ながらうんうんと頷いている。それには、流石に苦笑せざるを得なかった。

だって、そうだろ？俺は、魔法が使えたから捨てられたんだ。

そんな親の心情は余所に、魔法服に名前が合ってるなんて。名付け親に対する皮肉にしか聞こえないな。ま、もうあんな親への感情な

なんてとうに廃れちゃったけどさ。

「じゃ、いくか」

「おう」

バタンとロッカーを閉めて、俺たちは更衣室を後にした。

「それでは、魔法実習の授業を開始します」

5限目開始から、丁度20分後。魔法実習としては時間通りに、授業は開始した。まずは、担当の教師を囲い円状になりながら教師の話を聞く。

「前回までは魔法球に、属性を付加させる授業でした。もちろん、まだできていない人も大丈夫ですよ。1年では魔法球の安定的な発現を。2年では属性の付加を。3年では応用を。2年の終わりまでに自身の得意属性を見つけ、発現できるようにしていきましょう」
……なるほど。泰造氏が不安になるのも無理はないか。つまり、3年になるまでは満足に魔法は使えないってことじゃないか。そりゃ、とおるが魔法大戦と称するくらいだから、舞やら姫百合可憐やらはちゃんと魔法は使えるんだろう。おそらく、見た限りでは将人やとおる、修平もそれなりの実力は有しているはずだ。が。それでもクラス全体からすれば、まだほんの一握り。そして、その程度の人数しか、魔法は扱えないということ。

「……日本の魔法教育カリキュラムが、ここまで遅れているとは」「ん？ 何か言ったか？」

無意識のうちに、ぼそつと声に出していたらしい。何でもないと答えると、将人はさよかと言って、再び視線を教師に戻した。

エリートと称される私立・青藍魔法学園。多少腕がある魔法使いが誘拐犯として潜り込んできたとしても、意外と何とかなるんじゃないかと思っていたが……。どうやら当ては外れたようだな。

「と、いうわけで。今日は少し魔法を使った実践を行って

「みましようか」

「おっしや、聞いたか聖夜。実践だつてよ実践」

「ん、聞いてたよ」

将人の問いにおざなりに答える。ほんと、どれだけ戦いに飢えてんだよ。

「但し、折角属性付加という魔法を勉強したのです。できれば、それを実践で再現できる生徒間の実践が望ましいですね。まだ属性付加が使えないという生徒たちに、どう属性付加が魔法として利用されるのかを魅せてほしいものです」

教師が、難度を上げてきた。

「聖夜。お前、属性付加使えるか？」

「ああ。一応な」

聞いてくるってことは、将人自身については無論、ということだ。やっぱそれなりにできるみたいだな。

「では、拳手制にしましょうか。立候補はいますか？」

教師がそう述べて、ぐるりと見渡す。

「おっしや、じゃあ」

「……聖夜。前に出なさい」

「は？」

はしゃぐ将人を尻目に、しょうがないなと思いつつ手を挙げようとしたところで。思わぬところから声を掛けられた。舞は、動揺する俺含むクラスメイトは気にも留めず、悠々とバトルフィールドへと足を進める。そのまま何の躊躇いも無く六芒星の光に包まれたフィールドへと踏み入った。

「何をしているの？ 早くしなさい」

「……」

「お、おい……。聖夜？」

呼ばれてるぞ、と修平から小突かれる。いや、もちろん知ってるわけだけれども。けど、最初の実践は将人とする約束した。困惑している表情を隠そうともしない将人と、既にバトルフィールド

でスタンバイしている舞。どうすべきかと考えていたところで。

「先生。最初の模擬実践は、私と中条聖夜で行います。よろしいですか？」

「え、ええ。構いませんよ」

勝手に試合を取り付けていた。

「……しようがねえなあ」

アイツのわがままは、やっぱり2年という月日では治らなかったらしい。ま、それでこそ舞なわけだけでも。

「いつてくるわ」

将人・修平・とおるに、それだけ告げて踏み出した。それを見た舞が、いつも通りの勝気な笑みを浮かべる。

だがな。勘違いしてるぜ、お前。俺は将人には戦うって約束をしたし、真面目に相手をするとか心の中で決めていた。けど、相手がお前になるなら話は別だ。お前と真面目に戦おうものなら、多分俺はかなりの手の内を曝け出すことになる。転移魔法が明るみにでるところの騒ぎじゃない。そうすりゃ本来の仕事に支障が出る。

俺は、呪文詠唱のできない欠陥品であり、それ以上でもそれ以下でもない。ノーマークで問題ない存在だと、思わせておく必要がある。敵がどこに潜んでいるか分からない以上、“誰に対しても”だ。バトルフィールドへと足を踏み入れ、舞と対峙する。教師を中心として輪になっていたクラスメイトたちは、バトルフィールドから少し離れたところで、思い思いの観戦場所を作っている。

「聖夜」

「何だ？」

「本気で来なさい」

「……何だって？」

「アンタ、今の自分がクラスメイトからどんな評価受けてるか知ってる？」

「さあてね。お前は知ってるのか？」

「愚問よ」

「そうか」

とりあえず、先を促しておく。

「女子更衣室での会話もそう。相当、気の毒に思われてるわね」

「……お前、会話してるのか？」

「立ち聞きしてるだけよ」

「会話しろよ。だから友達できねえんだよ」

「ほっときなさい」

俺の忠告を、舞は一言で綺麗に払った。

「あんな評価、納得いかないわ。そうでしょ？」

「……一生徒として言うならばそうだが。俺の立場としては言えば、罪悪感を感じるが他は特になにも」

「嘘っ!!!」

舞が突然叫ぶ。他の会話は聞かれてなかっただろうが、流石にこれは誰の耳にも届いたようだ。何事だとざわめき始める。

「……大丈夫ですか？」

審判役の教師が、バトルフィールドに入ってきた。

「はい、平気です」

舞は教師に目を向けることなく。それだけ告げ、俺を睨んできた。

「私は認めないわ。アンタのあんな評価、蹴散らしてやる」

「蹴散らす、て。……もっとお上品な言葉を使えよ」

ふんつと鼻息荒く、舞が踵を返した。後は魔法で語れということらしい。俺もそれに倣い、スタート位置へと歩を進める。

「……分かってる。不器用だけど、これは舞の優しさだ。我が儘なものもそうだが、その優しさも昔のまま。少し、安心したし嬉しかった。その優しさを、踏みにじってしまう行為であることは重々承知の上で。それでも。」

「……悪いな、舞」

俺は、本気ではやらねえよ。

「くっそく、やりたかったぜ」

「さて。これは予想外の展開になったね」

隣で呻く将人に反応は示さず。ゆつくりとした足取りでバトルフィールドへと歩いて行く聖夜の後姿を目で追いながら、とおるは逆サイドに座り込み観戦を決め込む修平に話しかけた。

「ん、そうだな」

「？ 修平はあまり興味無しかい？」

「いや、そんなことはない」

「その割には、反応薄だね」

「そりゃ聖夜のこと言ってるんだろ？」

「？」

ますます意味が分からない、といった表情をするとおるに、修平はぼーっとした視線を聖夜に送りつつ再度口を開いた。

「花園の御嬢さんからの、名指しだぜ？ 普通なら敬遠するなりなんなりするとは思わないか？ 相手はこの国五指に入る名家の御嬢さんだ」

「……そういえば」

確かに。聖夜は面倒臭そうな表情は見せたものの、特に畏怖した様子もなかった。とおるは、先ほどの聖夜の所作を思い出しながら頷いた。

「アイツが花園の御嬢さんの实力を知らないってんなら話は分かるけど、昔からの顔馴染みだったそうじゃねえか。そうでなくとも、昼飯でおるが魔法大戦の話はしてたんだからよ」

「んじゃ、何か？ 聖夜って実は相当凄い？」

将人が話に割り込んでくる。

「……本人曰く凄いの魔法容量だけらしいけど」

「手練れの魔法使いならば、詠唱なんてそうしないだろ？ 大魔法とかは流石に無理だが」

とおるの眩きに、修平が直ぐ切り返す。

「詠唱ができないってのは、ハンデには成り得ないってことか？」

「ハンデにはなるよ、それは。特に僕たち学生なら余計にね。手練れじゃないんだから」

「けど、修平は聖夜に限ってはそうじゃないと思ってるだろ？」

「……さあてね。ま、それはこれから分かるんじゃないか？」

修平が目線を前へと戻す。そこでは、舞と聖夜がお互いにスターラインにてスタンバイしたところだった。

「バトルフィールドは、フィールド外部に影響を及ぼさぬよう障壁が展開されているだけではありません。内部には、緩衝魔法が働いています。改めて説明するまでもないとは思いますが……。強力な魔法を体に受けたとしても、ある程度は緩衝魔法が自動的に発動し、身を守ってくれます。が、あくまである程度は、です。痛いものはやはり痛い。無理だと感じたら、直ぐに棄権すること。いいですね？」

上半身を、半分以上俺に向けての説明だった。ま、当たり前か。

俺が呪文詠唱できないことは既に周知の事実。でもって、相手はエリートどころの話ではない名家のお嬢様。結果は正直見るまでも明らか、ってこと。これが、舞の言ってた俺に対する評価ってわけだ。……俺だって、別にデキた人間じゃない。言われてみると、確かに何か癩だな。って、いやいやいや。ここで自己主張とかやめとこうね、俺。これで任務も失敗しようものなら、あの女に殺されちまうよ。

「では、お互い。構えて」

構えて、とは。つまり、MCを起動してという意。

キウウウウウウンッ

特有の機械音と共に、俺と舞のMCにスイッチが入る。

「……」
「……」

舞の、あの勝気な目が俺を射抜く。少しくらいはやり合おうとするか。……少しだけね。あまりやり過ぎると、俺も本気になりそうだし。

「始め!!」

教師の手が、試合開始宣言と共に振り下ろされる。

その瞬間には、もう。舞は俺の後ろにいた。

「うおっ!?!」

紙一重のところ、後頭部目掛けて突き出された足を躲す。

「危ねえな!!」

殺るつもりだったろ、今!!

「本気で来なさいと言ったはずよ!!」

「買いかぶんじゃねえよ!!」

そのまま軸足を蹴り上げ、回転しながらもう一度伸びてくる足を肘で受け止めて、弾き返す。……めちゃくちゃ魔力込めてやがる。

身体強化魔法。その名の通り身体を強化する魔法だ。全身に魔力を循環させ、スピードやパワーを向上させる技術。これは、決して簡単にできる魔法ではない。少なくとも、2年生の段階で発現できる奴などそうはいないだろう。舞は、それを無詠唱で瞬く間に発現し、俺に特攻をかけてきたってわけだ。

で。この時点で、俺がそれなりの魔法使いだということは証明されてしまった。舞の身体強化魔法のスピードに反応し、応戦。こちらも咄嗟に身体強化を発動させてしまった。けど、しょうがないかあれ、生身で受けてたら骨が砕けてる。

「ふっ!!」

「おっと」

数回拳を交えた後、舞が後方へと跳躍し距離を空けた。

「ルー・ルーブラ・ライカ・ラインマツク
MCに手を掲げ、魔力を練る。……呪文詠唱、か。何を放つてくるかね。ひとまず、傍観を決め込むことにする。とはいえ、魔法はすぐに完成した。」

「“ファイナス”！！」

舞がそのキーを唱えきるとほぼ同時。天にかざした手元から、膨大な魔力を纏った魔法球が発現する。付与された属性は、火。

「……いきなり攻撃特化属性かよ」

適当なところで適当に喰らって適当に負けようと思っていたが、あれは無いな。緩衝魔法が発動しているフィールドとはいえ、当たらばただじゃ済まないだろう。

「……ん？」

フィールドの外で観戦しているクラスメイトから、動揺の声が上がつている。何かあったのか……って。そうか。学生の立場からして見れば、この魔法は相当レベルが高いからな。向こうであの女と仕事こなしている間に、高レベルの魔法は見慣れちまってたからすつかり気づかなかったぜ。

「余所見なんていい度胸じゃない！！」

その声と同時に、舞は手を振り下ろした。それに倣い、火属性を纏った巨大な火の球が向かって来る。

「んな、真正面から撃って当たるわけねえだろ」

転移魔法を使うまでもない（つーか、使っちゃいけない）。それを横目で見ながら、舞の元へと迂回するような形で回り込む。……これで、躲せるはずだった。

「甘いわね」

これ以上、この魔法に手が加わらなければ。

舞がパチンと手を鳴らす。瞬間、火属性の魔法球が“弾けた”。それ以外に表現のしようがない。巨大な1つの球体を維持していた炎の球が、小さなつぶてに分かれて四方八方に拡散する。

「うおおっ！？」

避けたと思つた魔法球からの、予想外の攻撃。後方から襲い来る無数の火球のつぶてを、身体強化で纏つた足を使い、躲す。が、そちらに気を取られていたのがいけなかつた。

「はあああああつ！！！！」

その咆哮を聞いて視線を前に戻した時には、もう遅かつた。俺の眼前では、既に距離を詰めていた舞が、眩い炎を拳に纏わせ構えているところだつた。

……言い訳させてもらえるのなら。俺がこの試合に本気で取り組んでいれば、難なく躲せたと思う。転移魔法に頼らずとも、ある程度の身体強化に体術さえあれば、俺だってそれなりに強いはずなのだ。意識の差。意欲の差。最初からどこかで負けるつもりだつた俺に、本気で俺を倒しに来た舞の攻撃をあしらうことはできず。

攻撃特化・火の魔法を纏つた舞の拳が、俺の腹にめり込むところを。そんなどうでもいいような言い訳に頭を巡らせながらぼんやりと眺めていた。

次いで襲い来る、意識を刈り取らんとする激痛。同時に、体が宙へと舞い上がる感覚。この程度の一撃で、倒せるとは思っていないかつたのだろう。うそでしょと驚愕している舞の表情と、まるで目の前で大型トラックに猫がはねられた瞬間を目撃したかのような表情でこちらを見ているクラスメイトをスローな映像で捉えつつ、俺の意識は闇へと消えた。

……ほんと、どうしてこうなつたんだろうね。いや、俺が望んだ結果だつたわけだけでもさ。けど、もうちょい優しい魔法でやられたかつたよ。

第6話 夜の学園探索（前書き）

お気に入り登録を下さった方。

感想や意見を下さった方。

文章・ストーリーに評価を下さった方。

そして『テレポーター』に興味を持ち、この最新話を開いて下さった方へ。

ありがとうございます。

これしか言えないのが歯がゆいですが、それでも。

ありがとうございます。

第6話 夜の学園探索

「……ん」

目を覚まし、まず真っ先に見えたのは真っ白な天井だった。……あれ？ 俺、何してたんだっけか。ぼんやりとした頭で思い出そうと試みたところで。

「聖夜っ！！」

「へぶっ！？」

右サイドから、急に何かが進んできた。

「って、舞？」

ああ、抱き着いてきたのか。条件反射で応戦しそうになったよ。

「良かった……。良かった」

……？ 何が良かったんだ。って、ああそうか。そういや、模擬戦まがいのことをしてたんだっけか。気絶してたのか、俺。確かに思惑通り雑魚には見えたんだろうが、流石に恥ずかしすぎるな。想像を絶するやられっぷりだ。

「このくらいで俺がどうにかなるわけねえだろ。 緩衝魔法もあつたおかげで、無傷だぜ？ 何心配してんだよ」

抱き着いたまま離れない舞の頭を、ぽんぽんと撫でてやる。

「だ、だって……。相当魔力込めちゃってたし……。それに、そもそもあれは威嚇のつもりで、当てるつもりなんてなくて……。ごめん。アンタなら避けられると思う。 そうよ！！ なに手を抜いて当たってんのよ！！」

「切り替えも切り返しも早えなお前は！？」

「コンマ数秒の差で態度激変させてんじゃねえよ！！」

「本気で来なさいって言ったじゃない！！」

「出せるわけねえだろ！！」

「アンタ、身体強化以外何も魔法使わなかったじゃないっ！！ 何でもがもがが！？」

「しーっ!! しーっ!!」

下手なことを口走られるより先に、その口を塞いでおくことにする。

「ぶはっ!?! 何すんのよ!?!」

若干顔を赤らめながら、舞が抗議の声を上げてくる。

「少し落ち着け。あまり人に聞かれたくない」

「……平気よ。今何時だと思ってるわけ?」

「へ?」

時計を見てみる。20時だった。

「うそ……。もうこんな時間かよ」

「アンタ、ずっと寝てたのよ。この保健室でね」

そう言われて見渡してみる。ここ、保健室だったのか。今更だげど。

「先生は?」

「帰ったわよ、先に」

そう言っつて、舞は指に掛けた鍵をチャリンと回して見せる。

「……おいおい。生徒に鍵渡しちやっつていいのかよ」

「私がつつと寄越して帰りなさいつて言ったからね」
ひどい話だ。

「……つて。つまり、お前は俺が起きるまで待つてくれたのか?」

そういうことになる。しかし、舞の反応は予想外なものだった。

「そ、そんなわけないでしょ!?!」

顔を真っ赤にして立ち上がる。

「いや、そんなわけだろ? ずっと傍にいてくれたのか?」

「なっ……な、なっ……な」

口をパクパクさせているかと思えば、顔を下へと俯かせてしまった。

「お、おい……。舞?」

心配して、覗き込もうとする。が。結論から言えば、それが間違이었다。

「しょうがないじゃない!! 心配だったんだから!!」
「ぶぼっ!?!」

乗り出したところで、舞の拳が飛んで来た。回避もできずにまともに喰らった俺は、鼻を押さえてベッドに蹲る。

「……ひ、ひんぱいなら、グーでなくんらねえよ」

「あ、ごめん」

舞が慌てて拳を引つ込める。……もう遅いんだけどさ。

「それで? 何で実力を隠すような真似をするのよ」

「何でって……。俺の今回の仕事は護衛なんだぜ? あんまり俺についての情報を、相手に知られたくねえんだよ」

「……。ふうん」

「お、おい。舞?」

俺の答えに何か思う事があったのか、口元に手を当てて思案顔になる舞。……あれ、俺何か言っちゃいけないことでも言ったかな?

結局。それが何なのかは分からないまま。しばらく考え事をしていた舞が急に顔を上げて、そろそろ帰りましょうかと言う言葉に従い、俺たちは帰路につくことにした。

「閉めていいのか?」

保健室を出たところで、舞が扉に鍵を掛ける。

「問題ないわ。教員室にはスペアがあるもの。これは明日返す」

保健室の先生が舞に鍵を渡している以上、舞がここを閉めてしまつたら明日困るんじゃないかと思つたが。どうやら杞憂だったようだ。

「んじゃ、帰るか」

「うん」

俺の声に、舞は素直に頷いた。

「腹減つたな……。寮の食堂って、もう閉まつちまつたかな」

舞と並んで帰る寮への並木道にて。腕時計を見ながらそう呟く。既に21時を回っていた。

「開いてるわよ」

舞が素っ気なく答える。

「ほんとか？ 随分遅くまでやるんだな」

「部活やってる子とかは、食事遅くなるからね。流石にもう皆寮に戻った頃だけだ。だから、食堂は遅くまでやってるのよ。とはいっても、22時まででだけどね」

「あと30分ちよい、か」

「ラストオーダーは30分前よ」

「あと5分じゃねえか!!」

「急ぎなさいよ。間に合うかもしれないわよ」

「ああ、つて。お前はもう飯食ったのか？」

「食べてるわけじゃないでしょ。ずっとアンタの横にいたんだから」

「なんだよ。じゃ、一緒に行こうぜ？」

「え？」

舞が心外そうな表情で、俺の顔を見る。

「お、おい……。なぜそんな驚きの表情で俺を見る？」

「え、あ……。いやえつと……」

その問いに、舞は視線をうつろうつろさせながら口をもごもごさせる。その反応で、納得がいった。

「あ、そうか。お前、飯に誘ってもらえるような友達いなかったのか。だからどう反応していいか分からなくげっ!？」

「皆まで言うんじゃないわよ!!」

怒りの空手チョップが、俺の首を薙いだ。の、喉が……。い、息が……。

「げほっげほっ」

「しょうがないわね。付き合っただげるわよ」

人が痛みを咳き込んでいるのを華麗にスルーして、舞がそんな事を言ってくる。…素直じゃないやつ。

「なによ、その目は」

「イエ、ナンデモアリマセン」

ジト目で睨まれ、慌てて首を横に振る。これ以上ぼこぼこにされるのはゴメンだ。

「変な奴。じゃ、行くわよ」

お前に言われたかねえよ。という言葉が出かけるものの、寸でのところでは堪える。口にしてたら、殺されてたかもな。自分の口についているストッパーに心の中で称賛を送りつつ、重大な問題に気付いてしまった。

「あ」

「……？ なに？」

突如固まった俺に、訝しげな表情で舞が問いかけてくる。

「すまん、やっぱ俺無理だわ」

俺がそのセリフを言い切る前には、舞の両手は俺の胸倉を掴んでいた。

「！？ ちょっと、それどういいうことよ！！」

「うおおおおっ！？」

頭の中が強引にシエイクされる。

「ちよっ、ちよっと落ち着け！！」

「なによ嘘つき！！」

「ちげーよ！！ 俺の話を聞け！！」

舞の腕を振り払いながら、叫ぶ。

「何が違っつて言うのよ！！」

舞の反論に対して、後から考えてみるまでもなく明らかに人として残念すぎる一言を、俺は口にした。

「金が無いんだ！！」

「あ、なんかその……。すみません」

「……なにその低姿勢。アンタにそんな態度取られると鳥肌立つからやめてちょうだい」

「お、おう。じゃあ、いただきます」

「いただきます」

俺が箸を手にしたのを見届け、舞も自身の目の前に置かれた料理に手を付け始める。

結局。男としては甲斐性の欠片も無いと言われても甘んじて受け入れざるを得ない結果になった。何が言いたいかというと、つまり舞の奢り。金が無いと宣言した俺に対して、なにコイツ的な視線をした舞は、一言「じゃ、奢ってあげるわよ」と。流石に申し訳無いと思ひ辞退の旨を申し上げようとしたが、目で黙殺された。

ではせめて低コストな物をと、券売機にて素うどんを押しそうとしたら、「あら、アンタうどん好きだっけ？　じゃあはい」とか言いながらにゅつと横から手を伸ばし、うどんの中でも最上位である「青藍うどん」なるものをチョイスされる。食堂の女の子（青藍魔法学園では、食堂で学内アルバイトを雇っているらしい）に出し、それと引き換えに渡されたうどんを見て驚愕した。上に乗っている具材のせいで、麺が見えない。肉やら天ぷらやらがところ狭しと敷き詰められており、エビの天ぷらなんか大きすぎて器から垂れ下がっている。お値段はなんと……。少なくとも、ワンコインでは買えない。

なんか、すげー申し訳ないことしたな。素うどんを選択するつもりが、まさか余計な出費を生ませてしまうとは。

「どうかした？」

箸を置き、首を傾げてくる。流石はお嬢様。マナーがきちんとなっている。その様は、とにかく可愛いもので、こいつの捻くれた性格させ知らなければ間違いない。いや。こんなこと言うのは暫く控えよう。少なくとも、今俺にそんな権利も立場も無い。……

完全に餌付けされている構図だな。

「いや、ありがとな。助かったわ」

ひとまず礼を言っておく。

「別に？ このくらい大した出費じゃないし」

本心でそう言っているのだろう。舞はそんなことかと興味を失ったようで、再び自分の箸に手を伸ばした。

けど、違うぞ。舞。確かにお前はお嬢様だから、このくらいの金額はどうってことないんだろうけさ。それでも、恩着せがましく言うことなく。ただ自然に人の為に動けるのは、貴重な優しさだ。捻くれてるって言っても、根はいい奴だからな。

「あ、これでアンタは私に借りを作ったことになるわね。さくて。どう返してもらいましょうか」

……ちよつと訂正していい？ やっぱコイツは恩着せがましく言う奴だったわ。

「じゃあ命令ね。これから学園での食事は、私に付き合いなさい」得意顔で、そう宣言してくる。その光景に、思わず笑みが漏れそうになった。やっぱり寂しかったってわけだ。そりゃそうだ。学園生活、孤独は寂しすぎる。友達を作らないんじゃない。友達が、作れないだけ。……やせ我慢なんてしやがって。いつもは人一倍我が儘なくせにさ。

「おっけー。そのくらいドンとこいだ」

快諾する。舞は嬉しそうな顔をして、また食事に戻った。

……さて、このアルバイトは男でも雇ってくれるのかな。多分、コイツはその気なんだろうが、毎日毎日奢ってもらうわけにもいかないからな。

遅めの夕食を終え、舞とは食堂で別れる。男子寮と女子寮は建物ごと分かれている為だ。食堂やロビーのフリーエリアは共用だが、女子の生活拠点である寮は連絡通路を挟んだ別棟にある。別れると

きにちらりと見たが、どうやらパスワード式の嚴重な扉で仕切られているようだ。ま、お年頃の男子と女子だし当たり前だが。ということ、つまり。

「……寮に戻ってしまえば、護衛の必要はなさそうだな」

あくまで自分の部屋を見た上での判断だが、この青藍魔法学園では学生寮の窓や壁にも嚴重な魔法プロテクトを掛けている。鍵の閉め忘れでもしない限り、建物の中は安全ということだ。

「ま、そういった身の回りの施設は本人に任せるとして……」

腹も満ちて心地良い睡魔も漂ってきているが、生憎俺の本分はここからだ。

「見回りでも行ってみるかね。学内の地理も目で確認しておきたいしな」

学生寮のロビー、出入り口からの出入りは止めた方がいいだろう。門限が何時かも知らんし、入る時には学生証がいる。つまり、記録に残るということだ。転校生は、夜な夜な学園内を徘徊しているなんて目を付けられたくないし。

そう考えた俺は、ロビー近くの共用トイレに入り人目が無いことを十分に確認したうえで、転移魔法を発動した。

夏の大型連休、日本で言うところの夏休みなるものは既に過ぎており、青藍魔法学園が2学期に突入して少しした頃の転入扱いとなった俺。まだまだ残暑が残り、夜とはいえ歩き回れば汗ばむくらいの生温かい風を浴びながら先ほど舞と歩いた並木道を逆向きに歩く……」

聞こえるのは虫の鳴き声と互いを擦り合う草木の音のみ。活気を失った学校の寂しさを感じる。

当たり前と言えばその通りだが。夜とて昼間と変わりなく、校舎を包む魔法プロテクトは発動し続けていた。これなら、建物の中ま

では見回る必要は無いな。

「おっと、ここは校舎や寮に掛けられている奴よりも数段上だな」
守衛室に見つかからないよう木陰に隠れて正門の様子を伺う。そこには想像以上の障壁が展開されていた。守衛とは名ばかりだな。この障壁があれば、大概のものは防げるだろう。逆にこれが壊されるほどの大魔法を使われれば、中にいる人間が気付く。

おそらく守衛の主な仕事は、学園の守護というよりも、学園内に入ろうとする人物の見定めにあるのだろう。昨日、俺がここに入ろうとした時のようにな。

「ここも問題なしっつ」

ぼそりと独り言の様にそう呟いて、俺は次の目的地へと向かった。

「ここは何から何まで全部でかいな……」

校舎の左サイドより伸びる道を進み、運動系の施設が立ち並ぶエリアへと入る。まず目に入るのは部室棟。当然のようにここにも魔法のプロテクトが作動していた。

「部活動にこんなでかい建物を用意するとは……。いったいいくつ部活があるんだか。って、なるほど」

入り口に近寄ったところで、でかさの理由を1つ知った。入り口横には、各部活動の部室の分布図が貼ってある。どうやら、運動系の施設のみかと思っていたら、文化部の部室もこの建物の中に集約されているらしい。部活を一纏めにした建物ってわけだ。

「ま、それにしただってでかすぎるがな」

こここの入り口も寮と同じく学生証を通すタイプらしい。それだけ確認して、グラウンドの方へと足を向けた。

「……広い」

体育でマラソンとか言われたら面倒臭そうだ、なんてくだらないことを考えながらグラウンドを横切る。グラウンドの先には、体育

館が立っていた。

「ここもセキリユティは完璧だな。舞が言うとおり、本当に俺は必要ないかもしれん」

もはや、完全に外から隔離された空間といっても過言ではないだろう。仮に侵入されたとしても、近くの建物に籠城すればそれなりの時間は稼げるはずだ。

「さて……。回ってないのはあと一か所か」

歩いて行ってもいいが、遠いし面倒臭いな。転移魔法を使うか。

俺の転移魔法にはいくつかの制限があり、その1つに『自分が行ったことのある場所でない』と転移できない』というものがある。俺の転移魔法は、呪文詠唱という本来の魔法構築とは異なるシステムから発動されており、つまり俺は呪文詠唱の代わりに『自分が跳びたいところをイメージする』事で座標を固定する。

イメージが鮮明であればあるほど魔法展開はスムーズに行われ、意図した場所に限りなく近い場所へと跳べるってわけ。だからこそ、自分の見える範囲に跳ぶには、座標がイメージしやすいからそれぞれ一瞬で跳べるし、本来の俺の近接戦闘術の要はそこにある。

逆に離れている場所やうる覚えの場所なんかは、イメージにも時間が掛かるし、跳んだ際の誤差も起こりやすい。また、転移する場所が離れているほど使用する魔力も大きい。

そもそも転移魔法とは、Aという地点にいる自分を“無かった”こととし、Bという地点に“元からいた”という事実を書き換える魔法である。だからパツと見AからBへと一瞬で移動したように見えるわけだ。これが“瞬間移動”とも言われる所以なわけだが。

しかし、現実問題の話。ここからは2つめの制約に関わってくる事だが、質量保存の法則やら慣性の法則やらで縛られている事象を改変するという事は、そういった当たり前の法則を根本から捻じ

曲げないといけないわけで。例えば数c m移動するだけなら、神様も「あれ、そういやそこにいたんだっけ？」みたいなノリで多少は誤魔化されてくれるものの、数km単位になると、流石に転移魔法への抑止力が強くなってくる。それに抗う為には相応の魔力が必要となり、だからこそ国単位で転移魔法を使おうものなら頭がイカれるくらい魔力を消費するかもしれないし、突然そんな魔力がごっそりと体内から放出されれば、座標のイメージなんざ安定して展開することもできず、座標が狂ってどこかの海へと放り出されちまうってわけ。ま、実際にやったことないから分かんないけどさ。魔法球をできるだけ遠くへ放るためには、より大きな魔力が必要にあるのと同じ理屈だと考えてくれればいい。あ、あと神様つてのはあくまで例えね。実際にいるかなんて会ってみないと分からないわけだしさ。

そんな訳で、教会という行ったことのない場所に転移する事が出来ない俺は、一度校舎の草陰へと転移した。周りに人がいないことを確認し、がさがさと道へ出てくる。

「最後は校舎の向こう側だな」

ここからはのんびり歩いて行くことにしよう。そう考え、校舎裏から延びる緩やかな階段を、ゆっくりと上り始めた。

円状で真つ白な踊り場に辿り着く。ここにも正門付近にあったものよりは二回りほど小さいが、噴水が設置されていた。こちらの噴水は、裸の女性が何やら壺のようなものを抱え、そこから水が流れているものだ。明らかに、何かの宗教関連のものであるう。

「……ここまでくると、学園の敷地内だという事を忘れてしまいうだ」

神秘的な空間とでも言えばいいのか。別に信者ではないが、何となく心が清められているような感じがする。

「建物までは、もう少し」

噴水を迂回し、再び階段へと足をかける。ただ、先ほどまでの距離はない。少なくとも踊り場から教会は見えるレベルの距離だ。程なく上り終え、教会を前にして気付く。

「？ おや。まだ先があるのか……」

教会の横には、さらに上へと続く階段があつた。しかし、ここまで登ってきた階段とは違い、白いブロックによって綺麗に舗装されたものではない。どちらかと言えば、山登りとかそういった類のハイキングコースとかにありそうな雰囲気だ。

「……確か手渡された校内マップには表記されていなかったと思うが」

首を捻ってみても答えは出ない。生憎と、マップは寮にある自室の中だ。

「ま、考えてもしょうがないか。後で行ってみるとしよう」

ひとまず、こっちだ。というわけで、目の前の教会へと近づく。

「扉もすげー立派だな」

何というか、威厳がある。目の前に立ってみて、気付いた。ここには学生証を通す場所がない。来る者は拒まざってことか……？

何となくだが、そんな気がした。そして、これも何となく、だが。

今まで回ってきた中では一度もしなかったが、この扉にだけは自然と手が伸びた。

「学生証がいららないなら、記録に残ることも無いしな」

その何となくという気持ちに、誰に言っているのか分からないように言い訳まがいを口にして、扉に手をかける。

「どうせ、鍵は閉まっているはず……」

そう言いながら、押してみる。

ぐ、ごん……

厳格な音を立てながら、その扉は俺の予想に反してすんなりと開いた。

「何だ、一晩中開放してるのか……？」

開いたことに驚きながら、中に入ることにした。開いているといふことは、入っても構わないということであろう。そう勝手に結論付けた俺は、堂々と中へと足を踏み入れた。

「おお……」

テレビや映画でこういつた建物は何度も見たことがある。それほどほぼ内装は変わらない。しかし、その映像からは感じ得ないであろう神聖な空気を、肌で感じた。出入り口から一直線に伸びる通路。左右には、おそらく信者の人たちが使うであろう木製の椅子が並んでいる。天蓋にはガラスで彩られた絵が覆っており、月明かりを教会内へともたらししていた。一直線に伸びる通路の先には、祭壇があり。そこには。

「……」

直接の面識は一度もないが、おそらく間違いないだろう。

姫百合可憐の妹。姫百合咲夜がそこにいた。

第7話 姫百合咲夜（前書き）

第7話まで来て、まだ転校初日。
そして、やっと咲夜の登場です。

第7話 姫百合咲夜

神聖な空間。幻想的な雰囲気を携えて。彼女はそこにいた。手を胸の前で組み、祈りを捧げているのだろう。後姿からしか見ていないので、想像しかできないが。扉を開けた時、それなりの音がしたと思っただけだな……。姫百合咲夜であろう彼女は、一向にこちらに気付く素振りを見せず、黙々と祈りを捧げている。

……それにしても、まいったな。ここまで見回ってきた感想としてはよく分かった。何か邪な思いを抱いて侵入しようにも、容易にはいかないだろう。だが、やはり護衛する立場としては、護衛対象者には校内とはいえ外を1人で出歩いて欲しくは無い。それもこんな夜更けに、だ。校外でこんなことしたら、間違ひなく誘拐されてるな。恰好の的だ。ただでさえお嬢様という身分に加え、姉といいいこの妹といい綺麗な顔立ちをしているのだから。

「どうしたもんかね」

祈り自体を否定する気はない。俺自身宗教に思い入れはないが、他人の信仰を邪魔する気も無い（咲夜が信仰者なのかまだはつきりとはしていないわけだが）。

見つからぬよう出ていこうかと思っただ、止めた。最低でも、どのくらいの頻度で寮を抜け出しているかは聞き出しておく必要がある。場合によっては、それも含めた上での見回りスケジュールを組んでいた方がいい。転移魔法を使えば、この敷地程度ならどんな場所でも即駆けつけられるが、残念ながら俺に千里眼のような離れた場所を透視する能力はない。従って、移動手段があったとしても感知能力がなければ意味を成さない。

理想は、ある程度親密になり危機的状況に陥ったら迷わず助けを求めてくれる立場になることだが、それは難しいだろうな。なにせ泰造氏の話では護衛を付けたがらないとのことだ。「俺はお前の護

衛だから、何かあったら直ぐ言ってくれ」とでも言えれば楽なんだが、それでは本末転倒となる。間違ってもヘソを曲げられるのはまずい。護衛だつてのがバシて任務未達成のままこの学園を追い出されようものなら、泰造氏に社会的に抹消されあの女に物理的に抹殺されるだろう。

そんなところまで考えが至り、無意識のうちにぶるりと体を震わせたところで、ようやくお目当ての人物は祭壇の手前から立ち上がった。そのままターン。つまり俺が座っている最後部の椅子がある、出入り口へと向かって歩き出した。とぼとぼと。

……あまり元気が無さそうだな。月明かりでのみ光を得ているこの空間で、相手の表情を見分けるのは難しいが、少なくともポジティブな顔には見えない。顔を俯かせ、何か思いつめたような雰囲気を持ちながら歩いてくる姿を見ると、あまり良い状態とは言え無さそうだった。まあ、こんな時間に祈りに来てるんだから、気持ちが悪くハッピーなわけは無いか？ 毎日の恒例の祈りとかなら話は別だろうけど。

姫百合咲夜は、俺にまったく気付く素振りも見せずにこちらへと向かって来る。このまま何もしなければ、それこそ俺なんて一瞥もせずに出て行きそうだった。……陰ながら見守るつてのが多分正しいんだろうが、折角待ったんだ。アクション掛けてみるか。

「こんばんは。随分と熱心に祈りを捧げていたようだね」

「……？ ひっ！？」

話しかけられるとは思っていなかったのだらう。俺の声には直ぐに反応したが、それを認識するには多少の時間を要したようだ。焦点の合わぬ目線で俺を捉え、1秒ほど固まった後、驚いたように小さな悲鳴を上げた。

「すまん、驚かせるつもりじゃなかったんだが」

「っ！ ひっ！？」って……。やっぱり俺の目つきそんな悪いかな。ちよっとシヨック。というわけで、少し優しめの声で話しかけてやる。

「あ、え……えと。こ、こんばんは？」

それで平静を取り戻せたのか、律儀にも挨拶をしてくる。

「ああ、こんばんはだな。夜もかなり更けているが……、こんな時間まで随分と熱心なんだな？」

「え？ あ、いえ……そういうわけではないのですが」

俺の言葉に、控えめに首を振ってくる。どうやら、信仰者というわけではなさそうだ。

「あ……。もしかして結構お待ちになりましたか？ も、申し訳ございません。直ぐに出て行きますのでっ」

突然あわわしたと思つたら、こんな事を言ってきた。ああ、傍から見りゃ順番待ちしてたようにも見えるわけか。

「いや、必要ないよ」

とりあえず、そういつた目的でここに来たわけではないということ伝えておく。その言葉に、姫百合咲夜の焦った表情が消えた。

「そうなんですか？ 良かったです。私、結構ここにいてしまったみたいなので」

文字通り、ほっと胸を撫で下ろしている。

「それでは、こちらへはどうして？」

首を傾げながら問うてくる。その疑問は当然か。

「今日、2年に新しく転校生が入ってきたの知ってる？」

「？ ええ、存じておりますが」

やはり、噂の転校生は只者ではない。学年が違えど、話題性は変わらなかつた。

「それ、俺なんだ。で、今日はバタバタしてて学園うまく回れなくてさ。それで今いろいろと見て回ってたわけ」

「ああ、貴方があの……。お姉さまが話しておりました。お席が隣になった、と」

「情報が早いな」

「はい。お昼休みには、もう知ってましたから」

少し得意げにそう言う。確かに姫百合可憐から直接与えられる情

報なら、誰よりも早いだろう。

「お姉さまがご迷惑をお掛けしていませんか？」

「まさか、掛けたのは俺の方だ。なにせ1限目の授業から遅刻、教科書も開かずぼんやりしてたところで教師に目を付けられてな。君の姉さんがいなけりゃ、初日から廊下に立たされるところだったくらいだ」

「うふふ……。それは聞いてませんでした」

口を手で隠しながら笑う。仕草が完璧にお嬢様のそれだった。

「面白い方ですね。あ、えと……」

「聖夜だ。中条聖夜」

おそらく、名前を聞こうとしたのであることは、雰囲気でも分かった。あまり自分から聞ける性格では無さそうだったので、自発的に答えておく。

「中条様ですね」

「様は止めてくれ。流石に恥ずかしい」

「では……中条せんぱいで」

「ああ、そうしてくれ」

「で？ と顔で促しておく」

「あ……。え、えと……」

あれ？ 別に難しい返しをしたつもりはなかったんだが。こちらが名乗ったのだから、直ぐに向こうも返してくると思ったのに。なぜか悲しそうな顔をして、目を逸らしてしまった。

「あの……」

「ん」

何が頭を巡っているかは分からないが、ひとまず待つことにする。

「……私、その……。姫百合咲夜って言います」

知ってるけどね。

「姫百合、咲夜……。ね。いい名前じゃないか」

そう言ってるやると、目の前の少女は驚いたという顔をして俺を見つめてきた。……。あれ？ 無難な返しをしたはずなんだけど。地雷

だったか？

「け、敬語で……しゃべらないのですね」

「……ん？ だって、君俺より年下だろ？」

何だ、敬語を使えっていう遠回しな命令か？

「話して欲しいってんならそうするけど」

「あー！ いえ、しなくて結構ですっ！」

「うおっ！？」

急に前のめりに叫ばれ、びっくりして後ずさる。

「あ！？ その、ご、ごめんなさいっ」

我に返ったのか、姫百合咲夜は顔を真っ赤にさせながら一歩引いた。何とも言えぬ微妙な空気が、俺たちを包む。

「あー、えー。じゃ、じゃあとりあえずこの喋り方でいいんだな？」

「は、はい……。お願いします」

顔を真っ赤にさせたまま、かくかくと頷いた。

「えーと」

さて、じゃあこの子のことは何て呼べばいいんだ？ 首を傾げよ

うとしたところで、姫百合咲夜はその空気を察したのかおずおずと進言してきた。

「あの……苗字ではお姉さまと被ってしまいますし……。その、咲夜、と」

「いいのか？」

「はい」

「じゃ、咲夜で」

「は、はいっ。よろしくお願いしますっ！」

咲夜は嬉しそうにがばつと頭を下げた。

取り敢えず、夜も更けているし1人で帰るのは危ない等という言い訳をし、咲夜と一緒に教会を出た。……何となくナンパの決まり

文句のような気もしたが、仕方が無い。咲夜自身が嬉しそうに承諾したので良しとする。

噴水の近くまで来た辺りで、一度振り返る。そこには教会の横から延びる、廃れた階段があった。先ほど、後から行こうと保留にしていた場所だ。まあ、それより大事な要件ができたし、あの先はまた今度でいいか。

「どうかされたんですか？」

横からひよっこり顔を出し、咲夜が俺の見ていた方へと目を向ける。

「ん？ いや、あの階段の先には何があるんだろっなって」

別に隠す事でもないので素直にそう告げる。寧ろ、咲夜が知っていることを期待した返しだった。

「ああ、あの先には生徒会館があるそうですねよ」

……ちゃんと答えてくれたのにも関わらず。いくつか聞きたいことができた。

「生徒会“館”？ “室”じゃなくて？」

「はい。この学園の生徒会は、校内の一室に構えているのではなく、一軒分まるまる使っているそうなので」

「すげー集団だな」

……主に金銭面で。

「はい、私なんか戦ったらたぶん直ぐにやられちゃうと思います」
「……ほう」

館を丸ごと牛耳る生徒会っていうから、ただの金持ちの集まりかと想像したんだが、勘違いだったようだ。まあ、咲夜のこの性格からすると相手を立てまくってるという線も捨てきれないが。

「で？ その“あるそうですね”ってのはどういうことだ？ 行ったことないのか」

「はい。その館を拝見したことはありません」

「何で？ あの廃れたハイキングコースみたいな階段に、人除けの結果でも張られてんのか？」

「ぷっ……ふふふ。す、すみません」

思わず漏らした笑い声を抑えながら、咲夜が謝ってくる。別にウケを狙ったつもりはなかったんだが。気にするなと手振りでも伝え、先を促す。

「張られてはないと思います。ただ行ったことがないだけで」

まあ。山頂にある館なんぞ、何か用事でもなければ足も向かないか。

「何と言いますか……近寄りがたいじゃないですか」

あ、そっちな。

「生徒会の方々は皆、独特の雰囲気を纏われておりますし。私なんかが話せるはずもなく……」

「その独特な雰囲気ってのは分らんが、咲夜もお姉さんも魔法すげーんだろ？ 勧誘とかなかったのか？」

「まさか」

咲夜はぶんぶんと首を振る。

「……私たち姉妹にこうやって話しかけてくれる方なんて、いませんでしたから」

「は？」

「い、いいえ！ 何でもありません！！ さあ、行きましょう！！」

話はこれで終わりとはかりに、咲夜が俺の手を引いて歩き出す。

……話しかけてくる奴がいなくて。その言葉で、姫百合可憐の昼休みの行動を思い出す。そりゃ、あんな感じで壁作ってちゃ、誰も話しかけられないだろうよ。

結局。そのまま会話することなく寮へと戻って来てしまった。それも、随分と早歩きで。

「平気か？」

「は、はい……。はー……。はー」

そう答えつつも、咲夜は肩で息をしている。俺の足が速くて、ついてくるのが大変だったからこうなったわけではない。咲夜が俺を先導し、ひたすらに早歩きをし続けたからだ。

「だ、大丈夫……です」

ふーっと息を吐き、俺に向き直る。

「す、すみません。いきなり掴んで……歩き出したりして」

「いや、もともとここへ帰ってくる予定だったんだし、俺は構わないんだが」

「そ、そうですか……それなら……あっ……！」

「何だ？ その嫌な感じの“あ”ってのは」

「い、いえ……その……」

咲夜がちらりと寮の正面玄関の方へと目を向ける。……別に誰もいないじゃねえか……って。ああ、そういうことか。時計を見てみる。既に23時を回っていた。寮の門限時間は知らないが、間違いなく過ぎているであろうことだけは断言できる。

まあ、俺は転移魔法があれば直ぐ中へ入れるし、咲夜さえとつとと自室に帰ってくれりゃ発動できるんだが。

「あ、あの……じ、実は」

「女子限定の抜け道でもあんのか？」

「え？ あ、いえ、そうではなく」

俺の予想外の返しに、一瞬呆気にとられたようだが、直ぐに持ち直す。

「わ、私……。こういうことよくあつて……。門限前に寮は出るんですけど、門限までに戻って来ないことが。ええと……。だから、その。つまりですね」

……皆まで言わずとも分かっちゃった。

「よく、寮監督の方には怒られて……。け、けどっ……！」

ずいっと身を乗り出して声を上げる。

「中条せんぱいは平気だと思いますっ……！ ま、まだ来たばかりで、門限なんて知らなかったですよっ……！」

「……まあ、聞かされてはなかったけど」
予想はしてたけどな。

「じゃあ、平気です！ わ、私が事情を説明しますからっ！」「
それだけ告げて、勇み足で寮の入り口へと突き進む。……って。
「待て待て待て」

早々に謝りに行こうとする咲夜の腕を掴んで止める。

「きゃっ」

「あ、すまん」

咲夜のその声に、条件反射のように口から謝罪が出る。あまり強く掴んだつもりはなかったんが。

「いえ、平気です。それで、何でしょうか？」

早く行かないと、どんどん時間過ぎちゃいますよ？ という顔を
して、咲夜が首を傾げてくる。

「謝りに行く必要は、ない」

そう言って、俺は携帯電話を取り出した。

お目当ての人物に連絡を取り、移動を開始する。確か俺の隣の部屋
って言うってたな。だとしたらこの辺りか。外からだど、建物内部
の位置取りが分かりづらいな。しかも夜で見えづらいし。

「中条せんぱい？」

急に進路を変えられ、戸惑いながらも咲夜はちゃんとついてくる。
なるほど。泰三氏が不安がるのも無理はないな。こんな純粹な子、
1人にしてちゃダメだろ。今だって真っ暗な中、今日初めて出会っ
た男に従い、人目につきづらい場所まで来てるんだぞ。俺がその気
なら、ここで咲夜はアウトってことだ。

「……確かこの辺りだと思っただが」

その呟きを見計らったかのようなタイミングで、頭上の扉の1つ
が開いた。ビング。

「咲夜」

ちよいちよいつと手招きする。頭に「？」マークを浮かべながらも、咲夜はててつと近づいてきた。

「声出すなよ」

「え？」

あ、このやりとりは犯罪つばかったわ。そんなアホな事を考えつつ、俺は咲夜を抱き寄せて身体強化魔法を発動させた。魔力を纏った足で、地面を蹴り上げる。

「っ！？ わわわわっ!？」

咲夜の驚きの声を耳にしながら宙へと舞い上がり、4階のベランダの柵に足を掛けた。ゆっくりと咲夜の体から離れる。

「到着つと。咲夜、平気か？」

「ぼー……」

「咲夜？」

ひらひらと手を振ってみる。

「は、はい!？ 平気ですっ!！」

過剰な反応を示した。逆に不安に駆られるが、取り敢えずは反応が返ってきただけよしとする。俺はその場で靴を脱ぎ、窓に手を掛けて部屋の中へと入った。

「悪いな、こんな真夜中に」

この部屋の主に声をかける。そこには、訳が分からないという顔をしたイケメン・修平が、携帯電話を片手に持ったまま固まっていた。

「……何してんの？ お前」

その疑問は、もっともだと思う。

「って、何おもむろに携帯電話のボタンをプッシュしようとしてるわけ？」

「いや、警察に通報しようかと」

「待て待て待て待て!！」

まだ魔力が足に残っているのを確認して、瞬時に修平の元へと移

動する。携帯電話を取り上げた。

「……やっぱやるな。お前」

「あん？」

「花園の御嬢さんとの試合でもそうだが、身体強化魔法に関しちや、既にこの学園でトップクラスだよ」

「……ああ」

そついう事ね。そついや魔法模擬実践で気絶したせいで、あの試合に対するクラスメイトのリアクション、まだ知らなかったわ。

「で。通報して欲しくなきゃ、説明してくれるんだろっな？」

「何をだ？」

俺の返しが面白かったのか、修平は苦笑を漏らしながら窓の方へと目を向けた。

「真夜中・男と女・2人つきり。スリーアウトだな」

げ。

「しかも女の方は頬を赤らめるときた。フォーアウトじゃないか？」

「それってツーアウトの状態でゲッツー喰らった時のような感じか？」

「誤魔化すなよ。やるじゃないか。転校生活初日から逢引きなんぞ、普通できない」

「してねえよ！！」

「ははは。姫百合の妹さんの方だな。入って来なよ。いつまでもそこにいるわけにはいかないだろう」

「……あ。はい」

修平からの声掛けに頷き、咲夜も靴を脱いで上がってくる。

「ま、詳しい事は聞かんさ。うっかり口が滑って、将人やとおるに話しちまつかもしれないが、それだけだ」

「十分アウトだよ、それ！！」

フォーでもファイブでも無いゲームセットだろ！！ ライフエントだよ！！

「いーから、とつとと出てけ。あまり叫ぶと近所迷惑だし、姫百合の妹さんだつて早く女子棟に帰らなきゃヤバいんじゃないか？」

「そ、そうだな。行こう、咲夜」

「え？ あ、はい」

修平の部屋を横切り、玄関の扉へと手を伸ばす。

「ありがとな、助かったよ。修平」

あのままじゃ、素直に怒られるか転移魔法しか方法無かったからな。

「気にすんな。ま、明日の昼飯でも期待してるさ」

つまり奢れつてことね。……俺、言葉通りの無一文だけどな。

周囲の気配に気を配りながら、男子棟を歩き下へ下へ。慎重に歩を進めるとはいえ、たいした距離ではない。ものの数分で共用のロビーへと到着した。

「ここまでくれば、もう平気だろ」

「……はい」

ちらりと咲夜の方をしてみる。まだ顔は赤いままだ。それにさっきから反応が悪い。

「平気か？」

頭とか打つては無いはずだが。

「あ、へ、平気です」

「そうか」

ま、一晩寝れば治るだろ。風邪とかでもなさそうだしな。

「んじやな」

ここまで来れば、もう問題はないだろう。そう思い、咲夜に背を向けて歩き出す。

「あ、あのっ！ー！」

「ん？」

呼び止められ、足を止める。見れば、咲夜は俯いたまま手をモジモジとさせていた。何度か口を開くが、直ぐに閉じる。……何だ、そんな言いづらいことなのか？ 俺が訝しげな視線で見つめているのを感じたのだろう。咲夜は口を一度閉じると、目をぎゅっと瞑りこつ言った。

「また、会えますか？」

その問いに、思わず苦笑する。

「俺たちはここでどんな別れ方をするんだ？ 同じ学園のただの1年とただの2年だ。学園生活を送ってれば、またどこかで会うだろうよ」

当たり前のように答えた俺の言葉に、咲夜がにっこりと笑う。

「はいっ！ 中条せんぱい、それではまた！！」

そう言つて、女子棟の扉の向こうへと吸い込まれていく。

「……中条せんぱい、ね」

もう見えなくなった後姿を未だ目で追いながら、そつと呟く。：

…あの時はあまり感じなかったが、思いの外恥ずかしいな。後輩の女の子に「せんぱい」って言われるのは。

「あほか」

そんな下らない事考えるのは止めて、とつとと部屋に戻り風呂に入り寝るに限る。

「ふああ」

思わず出た欠伸をかみ殺す。あとは寝るだけ。

そう思っていたのだが、まだもう1つ。イベントが残っていた。

「……あの女はいつたいどういふつもりなんだ？」

部屋の鍵をかけ、ベッドに腰掛けながら手元にある物を凝視する。それは、紛れもなくただの茶封筒だった。

部屋の扉にはポストが付いており、学園の生徒宛てに届けられた品物は、学園の関係者がわざわざ生徒の部屋の扉まで持ってきかれるようだ。そして帰宅するや否や、ポストからはみ出していた茶色い物体。引き抜いて見れば、どこかで見たことのある茶封筒だったわけだ。

「また何やら固いモノが入っているが……」
ひっくり返してそれを掌に落とす。

「……」
500円。それ以外には何も無い。

「まさか……」
何となく、あの女の意図が読めてきた気がする。徐々にもやもやが晴れていく。それと同時に湧き起こる、どす黒い衝動。

「……いや、俺の勘違いかもしれん。取り敢えず、明日どう出るかを待とう」

結論を出すのは、それからでもいい。ひとまず、今日はいろいろあつて疲れたよ。

「お休み」

電気を切つて、ベッドへとダイブする。程なく、意識も途絶えた。

第8話 運命的な出会い

真つ白な世界の片隅で、違和感。何かが振動する物音。それに意識を惹かれ、ゆっくりと世界が薄れていく感覚。同時に、徐々に感覚を取り戻し始める五感。まどろみの中、音の正体が頭に過ぎる。ああ、そうか。重たい腕を動かす。直ぐにお目当ての物は見つかった。

「もう朝か」

そう呟きながら、俺は携帯電話のアラーム機能をOFFにした。

「すげーじゃねーか、聖夜！！」

朝。昨日は初っ端から約束を破棄されたにも関わらず、将人・とおる・修平の3人は律儀に寮の共用スペースで待っていてくれた。それに気付き、近づいたところで開口一番将人がそうのたまう。内心冷や汗をかきつつも、修平を無言で睨んでみる。すると、修平は肩を上げて首を傾げるといふ反応を示して見せた。どうやら、昨晚の事とは別件らしい。

「お前、詠唱使えなくても十分魔法使えばぶっ！？」

「あ、すまん」

咲夜との話じゃないって分かってほつとしたらつい。暴力はイケナイな、うん。

「それでも、驚いたのは確かだよ。直ぐにやられちゃったのは事実でも、最初の格闘術は凄かった」

「ああ、それに花園の御嬢さんが近接術を使えるという事にも驚いたな」

「？ いつもはどんなスタイルなんだ？」

とおると修平の称賛を受けつつ、気になったことを口にしてみる。

「ぬいぐるみだよ」

ああ、やつぱり？ とおるの答えに、俺は納得した。

「非属性無系統魔法。花園の御嬢さんは、特異な能力を保有しているようだからな」

修平が、ちらりとこちらの反応を窺う。

「むしろ。その点についていえば、お前の方が詳しいんじゃないのか？」

「さあてね」

非属性無系統魔法。

魔法には属性を付与できるという話は以前にしたことがあると思う。属性付与とされない魔法は総称して無属性魔法というわけだが、その無属性魔法についても、2つの種類がある。「無属性」と「非属性」だ。属性が付与されていないという点では同じだが、その言葉の意味はまったく異なる。

「無属性」とは、前述の通り属性付与を行わないただの魔法。というよりも魔力の塊と言った方が正しいのか？ とにかく、初心者が作り出す魔法球や、物体を浮かせたりするとき用いる魔法属性だ。

対して、「非属性」。これは、どの属性にも当てはまらないが故に無属性にカテゴライズされるものの、通常には成し得ない現象を起こすことができる魔法の総称だ（魔法自体が通常には成し得ない現象を起こすものではあるが、ここで言うものは更に特別なもの）。どれだけ無属性魔法を極めようが、どんな属性を付与しようが、通常では成し得ない特殊な魔法。別名、というよりもこっちが正式名称だが、非属性無系統魔法ともいう。

そして、非属性無系統の魔法は鍛えてできるようになるものではない。魔力が先天的に宿るものであるように、この非属性も先天的な才能に左右される。最初からその境地に立っている者でなければ、それは扱えない。舞のものもそうだし、俺の“転移魔法”もこちら

に属している。

誰も扱うことのできない、選ばれし者だけの領域。そう言えば、かなり格好よく聞こえるな。属性付与を行い、限りなく近い現象を発現できる魔法使いも当然いる。が、まったく同じ効力を及ぼすことは不可能。例えば、移動系の魔法に優れる風属性の身体強化を纏い、限りなく速く移動したとしても、それはあくまで速度が速いというだけで、根本的な事象から書き換え最初からそこに居たことにする転移魔法には到底成り得ない。唯一にして絶対の魔法。こと同じ効力を及ぼすためには、同じ非属性無系統魔法を持ちうる人間でなければならぬ。同じ無属性非系統を持つ人間なんて、そうはいないけどな。そもそもこの領域にいる魔法使いすら、世界見渡してみてもほんの一握りだ。

「で？　で？　花園舞さんの無系統はどんな名前でどんな能力なんだ？」

「そういう事は本人に聞け。他人がペラペラ喋っていいモンじゃないよ。この件に関して、俺はあいつが非属性無系統を持っているか否かも話すつもりはない」

「くあーっ。やっぱりそうだよなあー」

俺の返しを半ば予想していたのか、将人は悔しそうな声は漏らすもののそれ以上追及はしてこない。とおるも修平も、やっぱりねという顔をしただけだった。

「つか、ぬいぐるみ見たんだろ。じゃあ、どんな能力かくらいは分かるはずだ。」

「おっ！！　勇者様のご登校だ！！」

「は？」

教室に入るなり、わらわらとクライスメイトたちに囲まれる。

「勇者つてなんだ？」

遅れて教室に入ってきた3人に尋ねる。

「皆の話を聞けば分かるんじゃないか？ 勇者様」

欠伸をしながらぼんと俺の肩を叩き、自分の席へと移動する修平。

「さて、僕も巻き込まれない内に非難するとするよ」

爽やかな笑みを浮かべつつ、全てを丸投げするとおる。

「ははっ。頑張れよ」

アホな顔してアホな事を言いながら、スルーを決め込む将人。

「ちよつと、これいったい」

「身体強化魔法を使いこなせるなんて凄いいじゃないか！！」

「花園さんの魔法を受けきるなんてすごい！！」

「あんな高レベルの近接戦を、同じ年が演じられるなんて思わなかったよ！！」

「直ぐにやられちゃったのは残念だったけど、でも格好良かったよ！！」

「うおおっ！！？」

クラスメイト達の熱い視線にやられて仰け反る。昨日の試合は、俺への魔法評価を予想以上に跳ね上げさせていたらしい。数々の称賛を受けていた中、スルーできないものが混じった。

「流石は花園舞さんに認められる男だけはあるね」

「へ？」

思わず間の抜けた声を出す。

「あの花園さんにあれだけの啖呵を切らせるなんて、中条君つて只者じゃないよね」

「ちよつと待って。ど、どういう意味だ？」

認められる？ あれだけの啖呵？ 嫌な予感に駆られながらも、おそるおそる問うてみる。

「いや。君が保健室に運ばれた後、皆で君の魔法力について話したら、花園さんが言ったんだ」

「……何て？」

「『私の認めた聖夜は、あんなもんじゃない』ってね」

ま、舞いいいっ！？ がばつと舞の席へと振り返る。昨日の質問責めの時と同じく、舞は我関せずを貫いており、こちらに向けているのは背中のみで振り返るうともしていない。昨日と違うのはただ一点。うなじが、髪の色と同じくらい赤くなっていた。

「舞っ！！」

舞の元へと駆け寄り、強引に腕を取って立ち上がらせる。

「なっ、何よ急になって、聖夜？」

「とぼけんのはやめる！！ いいからこい！！」

「え？ だつてもう直ぐ授業つて、聖夜あああ！？」

昨日とは完全に逆の図式で。舞を教室の外へと連れ出した。……
行先は。屋上でいいか。

「……それで？ 急に何の用よ。屋上まで呼び出して」

重い鉄の扉を後ろ手に閉じたところで。舞が口を開いた。

「あのなあ」

それのために息交じりで答える。

「俺があまりこの学園で目立ちたくないって事は教えたろ？」

「それは保健室で聞いた話でしょ。あの時はまだ知らなかったんだもん」

あ、そうか。そっぴやクラスメイトたちは、俺が保健室に運ばれた後つて言つてたな。つまり、俺と舞が保健室で会話する前だつたつてわけか。そりゃ確かにどうしようもないわ。舞はこのことを知らなかったんだからな。

「そっか。あー、すまん。俺が悪かった」

「うっん、私も悪かったわ。ごめんなさい」

舞が、頭を下げる。

「私としては、アンタが姫百合可憐の護衛だつて聞いて、敵対する

相手への抑止力として雇われたのかと思っただから……」

なるほど。だから逆に力を誇示させなければと思っただってわけか。

「……それに、私情も混じっちゃってたし」

たははと頭に手を当てながら、舞が恥ずかしそうに笑う。確かに、めっちゃくちゃ込めてはいたな。…俺の為だったけどさ。

「アンタがどういいうスタイルで姫百合可憐を護衛していくかについては理解したわ。ここまでしちゃっついてなんだけど、私も協力する」

「……なんか、悪いな」

「いいえ？ 私が好きでする事だから。聖夜の足、引つ張りたくないしね」

どの口が言うんだ？ 強いくせに。

「アンタ一人で危ない橋渡らせるわけにはいかないでしょ」

「あん？」

その言葉に、引つ掛かりを覚えた。

「気付かないとも思っただわけ？」

舞の眼光が、俺をギロリと睨んでくる。

「アンタが抑止力として機能しない以上、本当に敵が存在するならば、姫百合可憐をノーマークだと思っ込んで襲ってくるわ。いえ、襲わせようとしている」。アンタの目的は、姫百合可憐の護衛じゃない。……ううん、この表現は少し違うわね。それもあってしようけど、本当の目的は別にあるって感じかしら」

「……本当の目的ってのは？」

表情が固いものになっているであろうことを自覚しながら、舞に先を促した。

「襲ってくる敵の殲滅、でしょ？」

たぶん、ポーカーフェイスは崩れた。俺の視線の揺らぎに、舞が反応したのが分かった。端正な眉を、ぴくりと吊り上げる。

「リナリーがアンタをわざわざこっちに送り込んできての仕事だっというから、護衛なんて嘘だとは思ってたけど……。随分物騒な仕

事引き受けてきたじゃない」

「……お前、探偵になるといいよ」

「誤魔化さないで」

俺の渾身の軽口は、ぴしゃりと遮断された。……渾身の軽口って、矛盾してるな。

「相手は誰？」

「分からん」

「聖夜」

「本当に分からないんだ」

舞のこれ以上隠し事は無しよという視線を、首を横に振ることで応える。

「そもそも、頼まれたのは本当に護衛だ。ただ、あの女から貰ったメールから、俺がそのように判断しただけ。確かにお前が言うとおりの、あの女は今回の件について、相手を殲滅したがつてる。それは間違いないだろう」

『見事完遂なさい』 『一匹たりとも逃がしちゃダメ』 『必要であればやってよし』。

そもそも護衛任務の仕事に終わりはない。護衛とは対象者を守るための仕事であり、その仕事が終わるということは、クビにされるか、対象者が死ぬか、敵を倒すかの3つに絞られる。

確実に、1つめと2つめは無い。そうなると、残るものは1つ。『敵を倒す』ということ。『見事完遂なさい』という文面だけで、既にこれ以外の選択肢は無かったわけだが、その後ろ2つがこの考えを決定付けていた。

「うっん……。リナリーでも分からない敵かあ」

「いや、単に教えてないだけだろ。あの女はいつもそうだ」

首を捻る舞に、俺は呆れ顔でそう告げた。

「でも、本当に知らなかったら？」

「あり得ないな。あの女が知らないことなんて存在するのか？」

「でも、ただの護衛任務くらいなら、聖夜を起用する必要なくない

「？」

「……」

その点だけが気がかり。単に知り合いの頼みだから受けたという可能性も否定できない為、棚に上げていた疑問ではあるが……。

「まあ、どんな敵だろうが関係ない。ようは潰せばいいってだけだ」

「そうね。頑張ろう」

「いや、ちよつと待て」

俺の意見に同意してきた舞を抑える。

「お前、本当に協力する気か？」

「何度も言わせないで。アンタ1人に危ない橋は渡らせないわ」

「だから、そうと決まったわけじゃあ」

「そうじゃないと決まったわけでもないわ」

舞が俺の言葉に被せるようにそう返してくる。……その通りだけども。

「俺1人でも、十分だとは思うけどな」

「成果を上げる為には、万全を期しなさい。私だってあのコたち使わなくても、なかなかのものだったでしょ？」

「ああ、確かに。お前随分と腕を上げたな……って、そうだった」
「なに？」

その話で今朝修平たちが言っていた事を思い出した。ぼんと手を叩く俺に、舞の視線が訝しげなものへと変わる。

「お前、実習で無系統“操作”魔法を使ってるのか？」

「はあ？」

舞が、何言っちゃってんのみたいな顔を作る。

「使っわけないでしょ、こんな学園の実習で」

「いや、まあそうだろうとは思っけど」

「……こんな学園って。一応、ここ名門校だったよな？」

「どうしてそんなことを？」

「いや、今日将人たちが言っただけ。お前がぬいぐるみで戦ってるって」

「将人つて誰よ」

「……いや、クラスメイトだけど。俺とかお前の」

まさかクラスメイトの名前が通じないとは。恐ろしいまでの無関心ぶりだな。

「ああ、そういうことね」

舞が納得いきましたとばかりにため息をつく。

「この学園であのコたちを動かすときは、こっちよ」

掌を俺の前に差し出してくる。バチツと弾ける音がした。

「なるほど。雷系魔法ね」

「ええ。軽く戦わせるくらいなら、操作系を得意とするこの属性魔法だけで十分よ」

属性付加をクラスメイトに匂わせず、雷系操作魔法を操るか。どうやらこの2年の間に舞の腕は相当上がっているらしい。

「まあ、姫百合可憐にはバレてたみたいだけどね」

「無系統がか？」

「まさか、属性付加の方よ」

ですよね。使っていないなら、バレるはずもない。

「『恐ろしい程に静かな属性付加魔法。感服致しました』ってさ。失礼しちゃうわ！」

……それ、褒めてるだけじゃないのか？ その疑問は、心の奥底に幽閉した。プリプリ怒っている舞に、油は注ぎたくない。

「……おっと。そろそろ時間か」

ふと時計を見て気付く。始業まで、あと5分を切っていた。

「じゃあ、行きましようか」

「ああ」

舞の言葉に頷いて、俺は出入り口の扉に手を掛けた。

「……」

「……」
「……」
「……」
かちやかちかと、食器がぶつかり合う音だけが鳴り響く。その音がするのは当然。ここは学食だ。今は昼休みであり、学食では顔も名も知らない生徒たちが、皆思い思いのメニューをチョイスし食べている。しかし、考えてほしい。こんな学園の昼休みの学食で、食器がぶつかり合う音“だけ”が響くって何かおかしくない？

「……」
「……」
「……」
沈黙に耐え切れず、無言で目線を上げてみる。そうしたら、丁度向かいの席に座っていた咲夜も目線を上げたところだったようで、ばつちりと目があつた。お互いに、頬を引きつらせながらも笑いあう。

「……」
「……」
「……」
「……」
顔ごと振り返るような真似はしない。ちらりと目線を横にずらし、みれば、明らかに不満ですという顔の舞が、上品に Pasta を口に運んでいる。視線を斜め前に向ければ、咲夜の姉こと姫百合可憐が上品にお蕎麦を啜っていた。こちらは不機嫌さは一切現しておらず（というよりも、舞の言う“お互いに”嫌い合っているというのはウソだと思われる）、育ちのいいお嬢様をまさに実写化したかのよくな佇まいを見せていた。

4人席を確保し、それぞれが自分の食事を前に昼食をとる。学食で行うべき最低限はこなしているものの、会話の1つも無いっておかしいだろ。

事実、俺たちの周辺に席を構えている生徒はおるか、この学食に
いる全ての学生たちが俺たちの中の険悪な雰囲気呑まれ（ヤバい
オーラを出してるのは舞のみだが）、誰も一言たりとも口を利かな
い。自分のものを食べ終わると、そそくさと食器を下げ退散。鼻歌
交じりに学食へやってきた生徒たちは、例外なく「ひっ」という声
と共にUターン。たぶん、あの様子じゃ今日は購買で済ませるだろ
う。

この局地的絶対零度悪寒具合絶賛保障中のどこぞの冷戦のような
状況は、俺たち4人が学食に来た時から一向に変わらない。

さて、まずはどうしてこんな状況になったのかを説明しておこう
かね。

「聖夜あー、メシいこうぜー」

昼休み。教師が教室を出て行ったのとほぼ同時に、将人が俺のと
ころへ来た。後ろには、とおると修平も一緒だ。昨日も一緒に食っ
たし、今日もそうだろうと思うのは当たり前だ。ただ、残念ながら
それは当たり前にはならなかった。

「行くわよ聖夜」

同じく、昼食を俺と取るつもりだった舞が寄ってくる。

「お？」

「……ふむ」

「へえ」

将人・とおる・修平が三者三様の反応を示した。

「どうしたのよ、早く行くわよ」

「あ、ああ」

俺がぎこちなく頷くと、舞は満足したのか俺を待つことなく教室
の外へと向かう。

「どうしたってんだよ、聖夜」

「花園さんが昼食に誰かを誘うなんて珍しいね」

将人とおるが声を潜めつつもそう話してくる。

「あ、わり。説明はめんどいから省略で。修平、お前両替できる?」

「両替? 何を何にだ?」

「500円玉を100円玉に」

「……できると思うが」

修平が自分の財布を取り出し、小銭をじゃらつかせる。

「頼む」

「ん」

何だという顔をしながらも、俺が差し出した500円玉を受け取った修平は、100円玉を5枚取り出して俺に差し出してくる。俺はそのうちの2枚だけを受け取り、3枚を修平の財布へと流し込んだ。

「これ、昼飯代つてことでよろしく。んじゃな」

「あ、おい」

「聖夜てめー裏切んのかよ!!」

「将人、その発言空しいだけだからやめた方がいいと思うよ」

3人の言葉を背で聞きながら、俺は遅れて教室の外へと飛び出した。

ここまでではいい。問題なのは、その後だった。

「あ」

「あ」

「あら?」

「あっ」

運命的な出会いを果たした。間違いない。これは運命だったね。破滅の。

学食へ向かう為に校内を歩いていた俺たちは、丁度待ち合わせを

「え、え？　べ、別に仲が良いとかじゃ……」

「下の名前で呼んでるじゃない!!」

「いや、それはそう呼んでくれて言われたからであってだな」

何この不倫がバレた言い訳みたいなの……。

超至近距離で、舞がギャーギャー言ってくる。この上ない騒音を受けつつも、俺の鼓膜はその一言を敏感に察知した。

「ええ……？　わ、私とお友達になって下さったのではなかったのですか……？」

今にも飛び掛かってきそうな舞を宥めながら、確かに俺は聞いた。ちらりと声の発信源を見てみれば、可憐のすぐ横で目をちよっと潤ませながら咲夜がこちらの（というより俺の）様子を窺っている。

負けた。素直にそう思ったね。

「ああ、仲良いな俺ら」

だから、条件反射で断言してしまったのも、別に罪ではないと思う。

「聖夜あ　　っ!!」

舞がキれるのは、半ば予想できていた事で。可憐との仲が悪いと知っていた以上、遅かれ早かれこういった事態に陥るであろうことは、昨晚咲夜と話した時点で予測済みだ。ただ、早過ぎた。心の準備ができてない。

取り敢えず俺はボコボコにされ、根掘り葉掘り真実を聞かれた後今後の対応なりなんなりについて舞と話し合う必要があるんだろうなあとか現実逃避していたところで。

第2の爆弾が投下された。

この裏切り者とはかりに詰め寄ってくる舞と、それを宥めようと必死な俺。俺の断言にほっと安堵の息を吐きつつも、この事態をど

う收拾すべきか分からずオロオロしている咲夜。そんな中、可憐が予測不可能信じられない発言をしてきた。

「咲夜の昨晚のお礼も御座いますし、よろしければお昼ご一緒致しませんか？ もちろん、花園さんも」

「え？」

「へ？」

「わっ、それ素敵ですっ」

俺・舞・咲夜の順ね。何それ。うちのクラススイートツプによるお食事会じゃん。舞と可憐がテーブル挟んで共にお食事？ そこでは何が起ころの？

「お、俺の出る幕はなさそうかな」

「呼ばれてんのはアンタでしょ」
「ですよね。」

かくして、学食は日ごろの活気を失うのであった。

第9話 異常事態発生？

……そろそろ食い終わっちゃうんだけど、俺。

修平に300円を献上したお蔭で、今日も俺のメニューは素うどんのみ。残金は50円。……晩飯どうしょ。ラーメン頼まなくても替え玉(50円ナリ)だけって注文できるのかな？

そんな場違いな事を考えつつ、器を持ち上げだしを嚙っていたところで、ようやく今回の昼食会発起人である可憐が口を開いた。

「まずは自己紹介かしら。中条さんにきちんとご挨拶をした記憶が御座いませんし……。たぶん、花園さんは、妹とは直接の面識が無かったと記憶しておりますので」

可憐がちらりと舞の様子を窺う。舞はそれに鼻を鳴らすことで応えた。……もうちょっと淑女らしく振舞え。

「私の名前は姫百合可憐、貴方がたと同じクラス。この子は姫百合咲夜。私の妹で、1年B組に在籍しております」

「姫百合咲夜です。よろしくお願いします」

「花園舞よ。姫百合可憐、聖夜と同じ2年A組にいるわ。よろしくね」

「花園様の事は、お姉さまからお聞きしております」

「様はいらないわ。聖夜と同じ感じで結構よ。それで？ 姫百合可憐からお聞きしているっていうのは？」

「え？ 魔法がとても凄い方だって……」

「そ、そう……」

「何急に照れてぐあつ!？」

「? どうかされたんですか？ 中条せんばい」

「い、いや……別に」

舞の奴……。テーブルで死角になってるからって、思いつきり足を踏んできやがった。

「私、照れてないわ。聖夜」

「そ、そうだネ」

顔赤くしているくせによく言う。

「俺は言うまでも無いとは思うが……。中条聖夜だ。昨日付けでこの青藍魔法学園に転校してきた。よろしくな」

「よろしくお願いします」

「はいっ。よろしくお願いします、中条せんぱい」

丁寧な返しで可憐が、ニコニコと笑いながら咲夜が返してくれる。お互いの自己紹介が終わったところで。

「昨晚は咲夜がお世話になりました。まずはお礼を言わせて下さい。可憐が、お辞儀の教本にでも載りそうな完璧な姿勢で頭を下げる。その言葉に舞が昨晚って何よという視線を向けてくるが、ひとまず無視する。」

「いや、たまたま足が向いた先に咲夜がいただけで、あまり気にする事じゃない。一緒に帰って来ただけだからな。それより、咲夜。お前、いつもあんな時間まで出歩いてるのか？」

正直、夜な夜な徘徊するような性分には見えないんだが……。

「い、いえ。いつもって事はないです。あの日は、本当にたまたまで」

俺の問いに、咲夜がぶんぶんと首を振る。

「個人的には、いくら学園内とはいえあの時間に外をうろつくのはお勧めしないが……」

「私もいつも言ってる聞かせているのですが……」

俺の言葉に同調し、可憐がため息をつく。

「あ、いえ……。その。今回で、止めにしようかと……」

「え？」

「お？」

可憐の声と俺の声が重なる。

「そりゃどうしてまた？」

今の可憐の様子じゃ、諭しても止めなかったように聞こえた。もちろん、こちらとしては都合が良いが……。

「その……。お願いは、もう叶いましたから……」

俺の方へちらりと一度だけ目をやり、小さな声でぽつりと呟いた。

「へーえ。随分と青春を謳歌していらっしやるようですねえ、聖夜あ。転校2日目にしてもう？ 手がお早いですこと」

「……その問答無用で殺気を振りまく感じ、止めない？」

隣でどす黒いオーラを放ち続ける舞に、そう告げる。

「ふんっ。アンタがどこの誰と仲良くしようが、私には関係ないけどねっ」

めちやくちや関係有りそうにそのセリフを言うんじゃねえ。

「咲夜は今日も朝から中条さんの事ばかりで……」

「お、お姉さまっ」

可憐が苦笑しながら話すのを、咲夜が慌てたように口止めする。

……頼む。咲夜の中で俺がどのように好感度を上げたのかは知らんが、これ以上舞に油を注がないでくれ。

「ふふ……ふふふ」

ほら、明らかにヤバそうな笑い声漏らしてるし。

「だ、だって……。初めてだったんです。私の事、お嬢様として扱わなかった人……」

「……」

咲夜の言葉に、舞のオーラがぴたりと止まる。

……なるほど。そういう事か。

『け、敬語で……しゃべらないのですね』

あの時の、咲夜の反応はこういう事か。今までは、自分が名前を言えば例外なく下手に出られていた、と。確かに、俺は身近に舞がいる分お嬢様相手でも物怖じしなくなってるから（それが良い事なのかどうかの言及は避ける）、あまり意識していなかった事ではあるが……。咲夜からしてみれば初めての出来事だったってわけか。

「……貴方」

舞が口を開く。可憐と咲夜が同時に舞へと視線を移した。

「貴方じゃなく、えー……咲夜……ちゃんの方。どんな祈りを捧げてたの？」

「……祈りというほどの事では」

咲夜はその問いに顔を赤くしながら、

「お友達が欲しい、と。私の事を特別に扱わない、友達が欲しいと願ってました」

「……」

「叶って、良かったです」

相当恥ずかしいのだろう。顔を真っ赤にしながらも、俺を見て微笑んでくる。ずきんと、心の奥が傷んだ気がした。

「さて、そろそろ教室に戻りましょうか」

話がうまく収まった事を読んだのだろう。可憐がさり気の無い所作で、昼食会の終わりを告げる。

「これからもよろしくお願いします。中条せんぱい、花園せんぱい」「本日はお付き合い頂き、ありがとうございます。今後も、姉妹共々仲良くして頂けると嬉しいです」

姫百合姉妹は、席を立ち完璧なる仕草でお辞儀をした後、食器を手に取り回収場所へと向かっていった。

「……聖夜、アンタ」

「分かってる、それ以上は言わないでくれ」

舞の目線が、怒りから非難めいたものへと変わっている。そして、俺はその理由を十分に理解しているつもりだ。

咲夜は、俺の事を“せんぱい”と呼び、自身を対等な相手として見てくれる友達だと思っている。しかし実際は……。俺はあくまで護衛対象として咲夜に近付き、縁を持っただけに過ぎない。仮に、仮にだが。もし俺が一般生徒として、この学園に入学あるいは転校してきたのだとしたら。俺は、夜の見回りなんか当然しなかったわけ。そうしたら咲夜と接する事など無かったはずだ。もし、たまたま教会で出くわしていたとしても、あの状況下ならば積極的に声

など掛けなかつただろう。

雇い主とボディーガード。俺と咲夜は、それだけの関係だ。対等なんかじゃ、ない。

「……いくか」

「言わなくていいの？ 先延ばしにすればするほど、後が辛いわよ。アンタは自業自得としても、あのコ泣いちゃうかも」

「クライアントからは、影ながら護衛をしてくれと頼まれている。何らかのアクシデントでも起きない限り、俺からその事を告げる気は無い」

「仕事人としては満点の考え方でも……。人としては、最低ね」
「知ってるさ」

だから余計に、性質が悪いんだ。依頼内容を逃げの口上に使っていることが、この上なく恥ずかしかった。

……しかし。結果として、この問題に関しては長く悩む必要は無かった。もちろん、この段階では知る由も無かった事ではあるが。

きーんこーんかーんこーん

「聖夜あー、帰ろうぜー」

終業チャイムが鳴った直後、将人から声を掛けられる。

「おお、そうするか」

がたりと音を立てて椅子から立ち上がる。先に荷物を纏め終え、席を立ったところだった可憐と目があつた。

「それでは中条さん、また明日」

「おお、じゃーな」

ぺこりと頭を下げてきた可憐にそう返す。その対応に満足したのか、彼女はにこりと笑うと振り返ることなく教室を後にした。

「……聖夜。お前、何者だ？」

「その激しく心外な問いかけは何なんだ？」

修平からの問いに、不機嫌そうな声色を混ぜて返してやる。

「いや、だって転校2日目にしてあの難攻不落の2大お嬢様と、もうそんな関係になってるなんて……」

「どんな関係だよ……！」

とおるの著しく誤解を招きそうな発言に、全力で抗議する。

「聖夜あああ！！ このプレイボーイ野るぶべっ!？」

「違うっつってんだろ……！」

怪しい噂を助長しそうなセリフを吐きそうだった将人を、物理的な手段で黙らせる。

「はは、けど真面目な話。俺ら邪魔だったら多少の遠慮はするぞ？」

修平が蹲る将人を見て苦笑しながら、俺に提案してくる。……すごく気の利いた提案ではあるが、あいにくお門違いだ。

「いや、本当にそうだった事は一切ないから」

「そうなのか？ ……いや、お前がそう言うなら構わないんだが」

俺の断言に、修平がこくりと頷いた。

「そうかい？ 少なくとも、あのお嬢様たちとの距離は断トツで君が近いと思うけどな」

「……どれだけこのクラスでアウェイなんだよ、あの2人は」

ただ帰りの挨拶しただけでこれかい。……っと。ん？

懐で振動している物を取り出す。

ブーブー

携帯電話がマナーモードという状況下にありつつも必死に自己主張を繰り返していた。

「何だ、電話か？」

「いや、メール」

パカリと開いて見てみる。差出人は。

『花園 舞』

ちらりと舞の席を見てみれば、いつの間居なくなっただのか。既にもぬけの殻になっていた。言いたいことがあるなら、帰る前に直

接言つてきやいいものを。そう思いつつ文面を開いて、固まった。

『今日から見回り、私も付き合うから』

……あれ？ 見回りしてるって、教えたっけ？

「別に言われなくても分かるわよ」

放課後。将人たちと帰宅し、改めて共有スペースにて舞と落ち合った。先ほどの疑問を投げかけてみれば、当然でしょとばかりに返される。

「姫百合可憐が、咲夜ちゃんに関するお礼を言った時点で分かってたわよ。『昨晚は』ってね。アンタは昨日の模擬戦以降、夕食までは私と一緒に行動していた。それなのに、私の知らない出来事がある。ならばそれはいつ起こったの？ 当然、答えは1つ。私とアンタが別れた後。あの時間から外に出るなんて、それこそ見回りしていたとしか考えられないじゃない」

「お前、ほんと魔法使い辞めて探偵目指せ」

「どっだけ鋭いんだよ。」

「それで？ 昨日はどんなルートで回ってたのよ」

「んー？ あまり意識はしていなかったが……。確か最初に校舎、次に正門、部室棟にグラウンド、体育館回って……。で、教会だな」

「なるほど、そこで咲夜ちゃんに会ったってわけね」

「ああ、だから一か所だけ回れてないんだ」

「どこ？」

「生徒会室……じゃない。生徒会館か」

「あら、よく知ってるわね？」

「ああ、昨日咲夜から聞いた」

「なるほど。けど、あそこまでは回る必要無いと思う」

「何で？」

「生徒会の人って、アンタが想像している以上のやり手よ。本当に同じ学校の生徒かしらって思う時あるわ」

「へえ……」

舞がここまで称賛するのは珍しい。昨日は咲夜が持ち上げているのかとも思ったが、どうやら本格的に凄い集団のようだ。

「生徒会館に身を潜めるなんて不可能でしょうね。彼らが見逃すはずもないわ」

「ふむ」

「もしかしたら……。そのうちアンタの事スカウトにくるかもね」

「冗談だろ？」

「学園内での“噂の転校生”の株は急上昇中よ」

「なぜ？」

「クラスメイトたちが、話しちゃってるからじゃないかしら。みんな別のクラスにも友達いるみたいだし。信じらんない」

……俺はお前のその思考回路が信じられねえよ。

「呪文詠唱が使えないのは事実。それを逆手に取った転校理由だったんでしょけど、完全に裏目に出てるわね。詠唱ができないにも関わらず、それなりのやり手だって認識にすり替わってるみたいだから」

「そうか、まいったな」

クラスメイトに口止めするわけにはいかない。止めようがないという事だ。

「でも実際のところ、任務にはあまり支障はないんじゃない？ “それなりのやり手”ってところがミソよ。アンタが模擬戦で派手に気絶したお蔭で、それほどのインパクトにはなってる。本業の敵からしてみれば、そう注目すべき事柄でも無し。それに、敵が在中しているかどうかは別として、噂話まで聞きつけられるところに潜伏できるのなら、とうに姫百合可憐なり咲夜ちゃんりにアクシヨン掛けてるわよ」

「……そう、だな」

確かに、舞の意見は的を得ていると思う。この学園はほぼ外界から隔離されている空間だ。噂程度の話が、外に出ることは考えにくい。

「あまり煮詰めない方がいいと思うわよ。考え過ぎるのは、アンタの悪い癖。相手の偶像を勝手に作り出すと、いざという時体が動かないわよ」

「ああ」

その舞の言葉で、ひとまずこの話は止めにする。

「それで？ 見回りについてだけど」

「……本当にお前もやるのか？」

「もちろん。安心して、ちゃんとこのコも持つてくから」

舞はそう言つて、今まで抱きしめていたものを差し出してくる。

「……こいつか」

それは、帰国した初日。舞の部屋で目撃したエメラルドグリーンのカマのぬいぐるみだった。

「クマシリーズねえ。力任せの戦闘ならばちりだが……。見回りには不適切だな」

「じゃあ、後で私の部屋にでも跳ばしといてよ」

「できるか。お前の部屋に行ったことないんだぞ。他にストックは無いのか？」

「一応、ウサギが2つあるけど」

「そっちの方がいいだろうな」

「ん。分かった。けど、このコも念のため連れて行くわ」

「仮に戦闘になったら、心強いかもな。とはいえ、実際のところ来ないんじゃないかと踏んでいる」

「あら、どついう風の吹き回しかしら。学園の障壁に惚れたの？」

「微妙な言い回しではあるが、その通りだ。昨日確認して痛感した。ねずみ一匹通す隙間も無いな、ここは」

「だから言ったでしょ？ 護衛なんて必要ないのよ」

「そうである事を願いたいね」

ぐるりと見渡しながら、そう告げる。ある物に目が留まった。

「……公衆電話なんてあったのか」

ロビーの一角。少し壁の奥まった場所に、緑色をした電話機が2台置いてある。

「携帯持っていない子だっているのよ？　と言っても、公衆電話が設置してある場所なんて、ここと教員室前だけだけ」

「そうなのか。ま、そんなあちこち設置する物でも無いしな」

「それもそうね。それで？　見回りは何時からかしら」

ち。うまく誤魔化されておけばいいものを。

「夜10時にここに集合だ」

「10時って……。門限ジャストじゃない。出られないわよ？」

「跳ぶ」

「ああ、なるほど。流石ね。……って、まさか咲夜ちゃんに教えたんじゃない……」

「いや、身体強化でベランダまで上がって、窓から入った」

「あっそ。一応の線引きはできてるみたいね」

「一応って何!？」

ジト目で言われ、心外だとばかりに呻く。

「まあいいわ。じゃあ、そんな感じにしましょうか。それで聖夜、今日の夕食は？」

「今から食つところだ。一緒に行くか」

「うん」

一緒に食堂へと足を向ける。

無論。麺だけを注文するという奇妙な行動を取る俺に対し、舞が白い目で見っていた事は言うまでもない。

夜10時。

一分の遅れも無く現れた舞を、人気の無い事を確認済みの共用トイレへと招き入れる。

「……この光景。傍から見ると、どう感じるのかしらね」

「それは考えたくないな」

普通にアヤシイ感じに見えるだろうね。ただ、そう断言できないだろうとも思う。

「魔法服着てるんだし、そうは思われないと信じたい」

「そういうプレイって思われるかも」

「お嬢様がプレイ言うな」

そんな軽口を言いながら、俺はいつも跳ぶときに利用する校舎脇の茂みに座標を合わせた。

「跳ぶぞ」

「いつでも」

舞の返答を聞いた瞬間、転移魔法を発動した。

「じゃ、私はこっち行くから」

「お、おいおい。一緒に回らないのか？」

着くなり個人行動を開始しようとする舞を、慌てて呼び止める。

「何よ。敵が来ないって言ったのはアンタでしょ？」

「い、いや……。それはそうだが」

「なら、2人で真剣に1つずつ回るよりも、バラけてさっさと終わらせた方がいいと思うけど。今日明日で解決する問題でもないわけだし、毎日全力で回ってたら持たないわよ？」

「……いや、確かに言う通りではあるけれども。」

「そういうわけで。私はこっち行くから。見回り終わったらここで落ち合いましょ。何かあったら連絡頂戴？」

「あ、おいっ！」

舞はそう言うや否や駆け出して行ってしまった。

「……つたく」

アイツは一度決めるとそれに向かって突っ走っていく奴だからな。言っても無駄か。まあ、狙われてるのはアイツってわけじゃないんだし……。

そこまで考えて、悪寒が体を走り抜けた。

アイツが狙われてないなんて、誰が決めたんだ？

泰造氏の話では、狙われているのは“魔力の高い学生”。たまたま受けた護衛対象が可憐と咲夜であったというだけで、それは舞がターゲットから除外される理由には成り得ない。護衛の依頼を受けたことで、“狙われるのは可憐と咲夜”というおかしな先入観を持っていたが、そうじゃない。舞は、魔力が高いと称される魔法使いの家系のお嬢様。可憐や咲夜と何が違う。違わないだろ。舞とて、ターゲットになり得る。

そう思い、舞の走って行った教会の方角へ足を向けようとしたところだ。

「……」

無意識の内に、振り返る。不自然な魔力の揺らぎを感じた。場所は……。

「……舞が向かった方角とは、逆か」

揺らぎは、徐々に強くなる。数も複数だ。そして、その中の一つに。見覚えのある魔力を感じた。

「……嘘だろ」

まだ魔法で手合わせをした事は無いが、普段近くにいた事で十分特定できる。

可憐だ。間違いない。

どのような手段を用いたかは知らないが、どうやら本当に敵は学園内に侵入してきたらしい。

思わず、舌打ちをする。携帯電話を取り出そうとして、止めた。舞に連絡するのは避けた方が良く。舞とてターゲットになり得るのなら、一緒に連れて行く事は得策じゃない。俺1人でどうにかするべき。逆にできないような相手なら、それこそ舞は呼ぶべきじゃない。

そう考えて、駆け出した。

相手の侵入手口も、なぜ咲夜ではなく可憐の方がこの時間に外を出歩いているのかも、ひとまず棚上げ。とにかく、魔法戦になる前に駆けつける必要がある。跳んでもいいが、正確な位置関係が把握できていない以上、戦闘のど真ん中に現れでもしたら意図せぬ流れ弾でノックアウトされかねない。

舞の方も心配ではあるが、仮に何かあるようなら舞は俺に知らせてくるだろう。そうすれば、場所を聞き出して直ぐそこに跳べばいい。明らかに、楽観論である事は承知の上で。

……まずは、こっち。

『今日明日で解決する問題でもないわけだし』

不意に、先ほど舞が口にしていた言葉を思い出す。それに軽々しく同意していた自分に、吐き気がする。今更ながら、浅はかな考え方しかしていなかった事を自覚した。

第10話 真夜中の戦闘(前書き)

お気に入り登録件数が、2000を突破しました。
皆様の応援の賜物です。

本当に、ありがとうございます。

と、いうわけで。

やっと本題に入る本編をどうぞ。

第10話 真夜中の戦闘

駆けつけた時には、まだ戦闘は開始されていなかった。理由は知らないが、可憐は魔法服を身に纏っており、既にMCを起動している。

周囲には、20人程度の黒いローブを被った男たち。それぞれが片腕に手を添えているところから見て、全員が魔法使いであり、ここにはMCが隠されているとみていい。

「そこをお退きなさい。邪魔をするのならば、痛い目を見ますよ」
普段の彼女からは考えられぬ程、冷たい声色でその言葉は発せられた。しかし、震えている。まあ普通に学生やってればこんな事態に遭う事もないだろうし、当然だろうが。

「ひひひ。そう言われて退くくらいなら、ハナからこんな事はしねえよ」

「お嬢ちゃん、いくら君に魔法の心得があるからって、この人数に勝てると思っているのかい？」

その言葉に、可憐の顔がしかめられる。どうやら自身の実力と現状から、結果は推察できたらしい。思ったよりパニックに陥っていないようで安心した。

それだけ確かめられれば、十分。俺は、その輪に無理矢理介入する事にした。

「はいはい、ちよつと失礼しますよ」

「は？」

「何っ!？」

身体強化魔法により機動力・打撃力を上げた体で、瞬時に襲撃者たちとの距離を詰める。囲まれている可憐の元へ駆け寄り間に、2人3人の顎を殴りし戦闘不能にしておいた。

「あ、貴方っ!？」

「よつと」

「きゃっ!？」

可憐を抱きかかえ、跳躍する。ここでいう跳躍は、身体強化を纏った足での跳躍という意。輪になっている襲撃者たちの頭上を軽々と飛び越え、離れた場所に着地した。

「あ、貴方……どうして」

急に現れた俺に対して、どう声をかけていいのか分からないのだろう。可憐は目を白黒させて俺を見つめている。

「よっ。また明日って言うてたが、今日の内にまた会っちゃったな」
「え？ ええ……。え？」

うまく頭が回っていないようだな。

「てめえ、何者だ!？」

「あん？」

いかにも悪者っぽい声色でそう叫びながら、男たちが皆こちらの方へ振り向く。

「どこから現れやがった!！」

「こいつ等に何したんだ!！」

「……質問は1つずつ、ゆっくりと言ってくるか。何言ってるのか分からん」

「ふざけんなあ!！」

男が炎の魔法を放ってくる。

「へえ。無詠唱の割には、なかなかの威力だな。でも、後ろ気を付けた方がいいんじゃないか？」

「へ？ ぐぎゃああ」

男が自身の魔法弾に焼かれて火だるまになる。それを見た周囲の人間にも動揺が走った。当然だろう。放たれた魔法が、突如狙いを変えて本人に当たったのだから。

いや、厳密にいうと違う。魔法弾は狙いを変えてなんかいない。

俺は、俺の方へと向かってきた魔法弾を利用するために、魔法球を男の背後へと転移させた。魔法球の起動も速度もそのままに。男の魔法はそのまま直進し、ある意味で“狙い通りに”その直線上にい

た人物を襲ったというだけ。

ただ、転移魔法を知らぬ襲撃者たちにはそう簡単に受け入れられなかったようだ。絶対的有利の立場から一転すると、人の心情は思いの外脆くなる。

だからこそ、そこが付け入る隙になる。

「なにこれくらいで動揺してんだよ。たかが仲間1人が黒焦げになっただけだろ?」

にやり、と。相手を威圧してみせる。わざと、言葉を乱暴なものへと変える。

「アンタら、魔法学園に侵入してんだ。仲間の1人や2人、死ぬことくらい承知済みじゃねえのか?」

その口調・言葉に、何人かが僅かに後退した。……なんだ。どれだけ甘ちゃんを寄越してんだよ。何ともいえぬ脱力感に浸されたところで、離れたところからおそるおそる声を掛けられた。

「……中条さん?」

自分を守ってくれる味方に対する声色じゃなかったね、間違いなく。どうやら俺の豹変っぷりに理解が追いつかず、どう接していいか分からなくなっているんだろう。まあ、ここまで大々的にやっつてしまえば、もはや隠す必要も無い。護衛の事も、転移魔法の事も、だ。

「下がっててくれるか。あまり近寄られるとうまく戦えん」

「で、でもっ!! 貴方攻撃魔法も防御魔法も使えないって!!」

「あーあー。それ言っちゃう? 敵に囲まれたこの状態で」

「っ!?!」

可憐は急いで口を手で覆う素振りを見せたが、もう遅い。つーか、喋った後にそんなことしてどうなるんだ……。意外とお茶目な娘だな。「へ、へへっ……。なるほどなあ。攻撃魔法が使えない、か」

その事実を、絶望の淵に囚われていた襲撃者たちを、見事救い出

したようだ。一変して、再び殺伐とした雰囲気を纏い始める。

「だから、お前の情報なんて無かったわけだ……。攻撃できないなら」

その男のセリフは、そこで途切れた。

「話は簡単だ。そう思ったのか？」

ぐるんと眼球が回り、白目を剥いて男が倒れる。無防備な顎に一撃を決められ、意識を保つことができなかつたらしい。その光景を見て、再び襲撃者たちの間にざわめきが走った。

「攻撃魔法が使えなかるうが、防御魔法が使えなかるうが。関係ないだろ？」

ホントは詠唱ができないってだけで、攻撃も防御も一応魔法使えるけどね。ま、詳しく教えてやる必要もない。俺はここぞとばかりにドスの効いた声色で次の言葉を放った。

「俺にはそんなもんなくとも、お前らを皆殺しにできるんだからよ」「ひっ!？」

その言葉に、耐えきれなくなったのだろう。襲撃者の1人が突然、背を向けて逃げ出した。……いや、逃げ出そうとした、か。どさりと。その男は音を立てて力なく地面へと倒れた。もちろん俺が意識を刈り取ったんだけどね。

「俺に背を向けた奴、俺に向かってくる奴から順に仕留めていく。次の奴、早く動きな」

「う、うああああ!!」

静寂は一瞬だった。侵入者たち全員が、散り散りになって逃げて行く。逃げられるはずもないのに……。

「……めんどくせーなあ」

ついたため息が零れる。ここは『その言葉に凍りつき、皆身動きが取れなくなつた』とか、そんな感じになるんじゃないのか？

「待って下さい!!」

仕方無しに跳ぼうとしたところで、制止の声が掛かる。振り返って見ると、可憐が驚愕だか混乱だかわけの分からない顔をしていた。

「何をしようとしているのです!!」

「何って……残党狩り？」

うん。表現としては悪くないだろう。

「ぞ、残党って……。相手にはもう戦意は無いのですよ!？」

軽口を叩いたつもりが、思わぬ言葉のアッパ―を喰らってしまった。

「おいおい。戦意も何もアンタを狙ってた輩なんだぞ」

「そ、それでも……。もうその気はないじゃないですか!!」

「その気って……。アンタなあ……」

ゆらりと。可憐の後ろでうごめく影。俺が跳ぶよりも、その男が目的を達成する方が早かった。

「捕えたぞ!!」

「きゃっ!？」

各々が任務を放り出し、逃亡を図った中で、1人だけは未練がましくこの場に残っていたようだ。可憐を羽交い絞めにした男が、勝ったという顔でこちらを睨んでくる。

「……捕まっちゃったな。その気は無いんじゃないのか？」

「くう!!」

俺の言葉に、可憐は悔しげに表情を歪める。

「お前ら!! 構えろ!!」

人質を取ったことで再び立場が逆転したと思ったか、逃げ出していた侵入者たちは全員足を止め、こちらに振り返った。

「いいか、ガキ。少しでも魔法を使う素振りを見せれば、この女は殺す」

「ひっ!？」

「……」

可憐の首を片腕で絞めながら、男はナイフを取り出した。

「ナイフって……。お前、魔法使いじゃねえのかよ」

「詠唱するよりも手っ取り早く結果が出せるだろ？」

「ああ。それは確かに」

刺せば終わりだからな。それ。

「お前は危険だ。ここで死んでもらうことにしよう」

男の言葉と同時に、周囲を包囲していた男たちがMCに手を添えたのを視界の端に捉える。……蜂の巣になれってか。冗談じゃねえ。

「お逃げ下さい!!」

「あ?」

この距離なら、直ぐに殺れる(もちろん、息の根は止めないが)。忠告を無視して跳ぼうとしたところで、可憐が叫んだ。

「貴方の魔法を使えば逃げられるはずです!! 私のことには構わず早く!!」

「何好きな事言っただ!! 黙れ女!!」
ばきっ

「っ」

男が、ナイフの柄で可憐の頬を殴った。羽交い絞めになっている状態で、振りかぶりもせずと与えた一撃。そう威力は無いだろう。が、温室育ちのお嬢様じゃ耐えられないかもな。

「……こ」

「?」

「これは、私の過失です。……私なら、平気ですから」

「……へえ」

驚いた。この場面で、そのセリフが吐けるか。白い肌に、赤い鮮血が映える。おそらく口の中を切ったのだろう。それでも気丈に振舞おうとするその根性は。

「喋んなって言ってん」

「勇気あるじゃん、お前」

「え?」

可憐が驚きの声を上げたのと、羽交い絞めになっていた男が崩れ落ちたのはほぼ同時。無理な体勢から、突如支えを失った可憐がよるけそうになったところを、できる限り優しく肩を抱くことで支えてやる。

「あ、貴方……… いったいどうやって………」

「話は後にしようか」

「え？ あ」

周囲の侵入者たちは、既に各々の詠唱を始めている。どうやら、ここまできたらやってしまえという、無茶な境地に達したらしい。

「わ、私の後ろに下がってくださいー!!」

可憐が、自身のMCに手を伸ばそうとしたところを、俺が抑えた。どうしてという表情を向けてくる。

「アンタが凄腕の魔法使いだってのは知ってるが、この人数に1人の障壁じゃ無茶だ。だから、俺の魔法を使う。信じてくれるか？」

我ながら、無茶な話だと思う。ついこの間転校してきた男子生徒。膨大な魔力は所持するものの、魔法らしい魔法は一切使えず、魔法実習でも醜態を晒したばかりだ。

一瞬、何を言われたのか分からなかったのだろう。しかし、そのきよとんとした表情は直ぐに押しこめ、可憐は力いっぱい頷いていた。

「はいっ」

アンタも物好きだな。ランクで言えば、俺なんかよりも遙か高みにいるお嬢様がさ。自分で信じると言っときながら、この考えは失礼だけれども。

ここまですがタイムリミット。俺たちを包囲していた侵入者たちから、次々と魔法が放たれる。火・雷・風等使用された魔法はバラバラだが、全てが同じ目的を持ち俺たちに向かって飛んでくる。

一瞬、可憐と目が合う。にっこりと笑ってくれた。こんな状況で笑う度胸があるのか。

「少しでも魔法を使う素振りを見せれば？ 前提から間違ってるよ、アンタら」

そんなに信用されちゃ。

「俺がそんな素振りを見せた時には」

その場から、姫百合ごと転移して消える。

「もう全部終わってんだよ」

期待に応えるしかないじゃんか。

「……………凄い」

気が付いた時には、先ほどとは全然違う場所に立っていた。いきなり私を襲ってきた人たちが放った魔法が。私たちを狙っていたはずの魔法が。全然、違うところで着弾している。彼が、どんな魔法を使ってくれたのか、見当もつかない。

……………いえ、それは嘘。彼はいつの間にか私の隣から姿を消し、侵入してきた人たちの中で縦横無尽に動き回っている。早いだけじゃない。“消えて、また現れる”。たぶん、目で追えていないわけじゃない。あれは……………。

「転移魔法……………」

本当に使える魔法使いが、存在するなんて。ワープは空想上のもので、実用できるなんて思いもしていなかった。呪文詠唱ができないと言った彼の使う魔法。非属性無系統による先天的な能力。もしかすると彼が呪文詠唱できないというのは、この力の副作用なのかもしれない。

彼を襲う火球が、当たる直前に別の場所で別の人間を捉える。彼を殴ろうとする腕は、突如目標を失い空を切っている。真正面から対峙するのかと思いきや、いつの間にか彼は相手の背後を取っていた。遠目からでも見ていれば分かる。圧倒的な人数の差は、彼の障害には成り得ない。魔法の、魔法使いとしてのスペックが違い過ぎる。

そう呆然と戦況を見つめているうちに。彼の前に立っていた最後の1人が崩れ落ちた。

「……手ごたえの無い奴らだ」

汚れた魔法服を手で払いながら、吐き捨てるようにそう呟く。

この学園のセキュリティをどう破ったのかは知らないが、これだけの人数だ。ほぼ完全に隔離されたこの空間にこれだけの侵入を可能にしたという事実から、少しはやる奴らだと思っただが。とんだ買いかぶりだったようだ。

地面に伏す男たち。一番近くで伸びていた男の胸倉を掴んで引き寄せる。

「おい、起きろ」

「……」

返事が無い。完全に気を失っているようだ。くそ、1人くらい残しとくべきだったな。聞きたいことも聞けやしない。手を離す。男は重力に従い、そのまま地面へと崩れ落ちた。うむ。気絶した振りとかではなかったようだ。モロに顔面から落ちたから。

……しょうがない。後はあの女に引き渡してから、じっくりと聞き出すとするか。そう考えて、懐から携帯電話を取り出したところ
で。。。

「あ」

ダメじゃん。俺、あの女のアドレス知らないじゃん。どうすんだよ、こいつら。泰三氏にでも引き渡せってか？

「な、中条さんっ!!」

どうしようかと悩んでいたところで、可憐が駆け寄ってきた。

「おう。怪我は無いか？ 可憐」

「え、ええ。私は平気です。それより、貴方……いったいどうして「そりゃこっちのセリフだ。お前、こんな夜中に魔法服着こんで何してんだ？」

「あつ!?! そ、そうですっ!!」

俺の言葉に、何か思い出したのか。急に可憐が狼狽し始める。

「お、お願いしますっ!! 中条さん、助けて下さいっ!!」

「は？ ちょ、ちょっと落ち着け」

いきなり距離を詰めてきた可憐の肩を掴み、引き剥がす。

「あ、す、すみませんっ」

「いいから。で、何の話なんだ？」

「さ、咲夜が……」

可憐からその言葉が漏れる前に、嫌な予感がした。

「咲夜が、誘拐されてしまったのですっ！！」

「……なるほどね」

可憐からの説明を受け、舞が神妙な顔で頷く。

あれから、咲夜を連れ去ったという何者かの連絡を受けた可憐からの報告を聞き、ひとまず舞を呼び戻した。まだ不審な輩が学園にいる可能性がある以上、舞をぶらつかせるのは得策ではない。可憐には、相手が可憐を呼び出そうとしている以上、可憐自身がその場に行くまでは咲夜に手出しはされないだろうと説明し、何とかパニック状態から回復してもらっていた。舞は、最初はこの付近一帯に転がっている気絶した男たちを見て目を真ん丸にしていたが、可憐からの報告を受けて声を荒げた。

「……女の子相手に、こんな人数を送ってくるなんて……。拳句に誘拐？ ホントさいてーね」

「まあ、善人は誘拐なんてしないだろうな」

「うっさい。姫百合可憐、アンタ顔の怪我は平気なの？」

「……は、はい。私は……。そう強く殴られたわけでもないですしそれに今は妹の方が気がかりだと、その表情が告げている。

「……そう。強いよね」

それつきり関心を無くしたようで、舞は可憐から視線を外した。

「それで、どうする気？」

「どうもごうも。色々と不安材料はあるが、乗り込む他ないな」

可憐の話じゃ、今は体育館を根城に立て籠もっているようだ。おそらく可憐に咲夜誘拐の情報を伝えたのは、安全圏である寮から引っ張り出すだけでなく、ここで襲わせた第一波が失敗してもきちんと自身の足で自分たちの領域まで来て欲しかったからだろう。

「いいじゃない。シンプルで好きよ？ そういうの」
舞がにやりと笑う。

「いや、お前と可憐は寮に帰れ」

「なっ！？ 何だよ！！」

「狙われているのは、姫百合姉妹だけじゃないからだ」

俺の言葉に、舞が眉を吊り上げる。

「どういう事？」

「俺が与えられた情報は、“魔力が高い学生が狙われている”という事だけ。分かるか？ “対象を姫百合姉妹に限定した誘拐犯”では無いって事だ」

つまりは、相手はお前でも良いんだよ。と、言外に伝えてやる。

しかし、引導を渡せるはずだったこの言葉は、思わず墓穴に繋がった。

「……聖夜。アンタ、自分が言っている事を、もう一度自分に言って御覧なさい。“魔力が高い学生”なら、“アンタも十分素質ある”のよ」
「……」

至近距離で睨み合う。お互い、譲れない事は百も承知。どうしたものかと考えていたところで、思わぬ横やりが入った。

「……中条さん。さっきから、貴方はいったい何をお話になっっているのですか？ 花園さんも。この件について、何かご存じなんですか？」

会話についていけない可憐からしてみれば、この疑問はもったもであると思う。舞が、どうすんのよという目を投げかけてくる。どうするも何も、可憐の前で堂々と魔法戦闘をやらかした以上、もう

隠すつもりも無かった。

「お前たち姉妹が狙われるかもしれないという話は、初めから知っていた。情報源は、お前たちの父親・姫百合泰造氏だ」

俺の言葉の中から、自身の父親の名が出てくるとは思わなかったのだろう。可憐は目を白黒させた。

「お、お父様が……？ あ、貴方いつたい……」

「想像は付いてるんじゃないのか？」

皆まで言わせるなど思うものの、それが場違いな感情である事は自分が一番良く知っている。自分が蒔いた種なのだ。自分で刈らねばなるまい。

「俺は、お前たちの護衛役なんだよ。転校生なんかじゃない。その立場を利用して、お前たちに近付いただけだ」

その言葉に、可憐の動きがぴたりと止まる。けど、それは可憐だけじゃない。俺も同じだ。自分が自分の役割を口にしたただけなのに、ここまで苦しい思いをするとは。

「……そ、そんな。じゃ、じゃあ……。咲夜の事はどうなるのです？ あの娘は貴方の事を友達だと……」

核心を突かれ、ずきりと心が痛む。たかが1日。にも関わらず、咲夜のお友達発言は自分の中で想像以上に重いものだったらしい。

舞は何も発さない。冷徹な目で、傍観を決め込んでいる。

俺の言葉の意味と現状が、飲み込めてきたのだろう。可憐は、ふるふると身を震わせながら、ぼつりと呟いた。

「……さ、最低です」

「ああ、自覚してる」

予想通りの発言。けれど、予想外の痛みだった。

咲夜が誘拐されているかもしれないという状況下では、こんな事を話している場合ではない。それでも、どう事態を收拾すればいいのか、誰も分からなかった。

が。事態は思わぬところで急展開を迎えた。

第11話 体育館での乱闘騒ぎ

ブルルルルルルル

「っ!？」

「え？」

「ん？」

地に伏した男の内、1人の胸元から電子音。携帯電話の呼び出し音だ。このタイミング。おそらく可憐誘拐の件についての問い合わせだろう。

息を飲んだまま動かない可憐と俺のアクション待ちの舞を尻目に、俺はその男から携帯電話を抜き取って二つ折りのそれを開いてみた。そこに表示された文字に、違和感を覚える。舞たちの元へと戻り、無言で携帯電話の画面を見せた。

「……公衆電話」

可憐が表示された文字を律儀に読み上げる。舞は、それを見て俺と同じ考えに至ったのだろう。にやりと笑って見せた。その反応を確認し、俺は躊躇いなく通話ボタンを押す。

「ちよっ……」

「黙ってて」

俺の行動に驚いた声を上げる可憐を、舞が制する。俺は2人を無視しつつ、携帯電話の音量を最大にして口を開いた。

「待たせたな」

「!？」

「……」

普通に話し始める俺に対して、可憐がさらに驚愕の表情を作る。舞は無言で口の端を吊り上げた。

『随分と掛かっているみたいですが、どうなりました? 普通に通話できるという事は、返り討ちに遭ったわけでもないみたいですが』

携帯電話という媒体から発せられる声色。その為断定はできないが、おそらく30代から40代前半の男の声だ。

「ああ、学園の見回りの目を盗んで移動するのに時間が掛かってなだが、ちゃんと目的は達成したよ。妹の名前を出した途端、大人しくなりやがった。声を聞かせようか？」

『ふふ……。お願いします』

俺は可憐ではなく、舞の方へと携帯電話を向けた。その意図を瞬時に理解した舞が、声を張り上げる。

「卑劣な真似を！！ 貴方たち、こんなことをして、ただで済むと思っっているのですかっ！！」

『ふはは。元気なお嬢様ですね』

通話先の男から、呑気な声が漏れる。まあ、電話越しの相手の声を聞き分けるなんて、知り合いでもない限り無理だよな。ちらりと俺を見てきた舞に、先を促すように頷いた。

「さ、咲夜は無事なのですか！？ ちゃんとそこにいるんでしょうね！？」

『もちろんさ、姫百合可憐。君がここへ大人しく来てくれれば、危害を加えないと約束しよう』

「くっ！！」

迫真の演技だ。隣で事の成り行きを見守っている本物の可憐は、口1つ開かず俺たちの行動に固まっている。

さて、聞きたい情報はもう聞いた。まだ続ける？ という視線を向けてくる舞を手で制し、俺は再び携帯電話に口を近付けた。

「んじゃ、体育館に連れてくぞ」

『ええ、お願いします。見回りに見つかるなんて、恥ずかしいマネしないで下さいね？』

「もちろんだ」

そう言っつて、通話を切った。

「あ、あ、貴方たち……。いったい何……。を……」

声を震わせながら、可憐が口を開く。しかし、俺や舞が弁明する

よりも先に、可憐は踵を返して走り出した。

「待てっ！！ 行くな！！」

俺の制止に、可憐が信じられないという表情をする。

「どうしてですっ！？ 早く行かないと、咲夜が危ないのですっ！！」

「いいから落ち着け！！」

直ぐに追いついた俺は、可憐の腕を掴んで呼び止めた。しかし。

「ふざけないで下さいっ！！」

可憐は俺の制止を振り払い、普段の彼女からは想像できぬほどの怒声を上げた。

「貴方には失望しました！！ あの咲夜が心を開いた殿方でしたから、どれほどの器量をお持ちかと思えば！！ 咲夜の心を踏みにじり、あまつさえこの私に助けに行くなと？ 言語道断ですっ！！」

「苦情も文句も！！ 後でいくらでも受け付ける！！ だから今は落ち着け！！ 咲夜を助けたいんだろ！！」

「っ！？」

その言葉に、可憐が一瞬怯む。その隙に両肩を掴み、至近距離で双眼を覗き込んだ。

「まずは、連絡だ。携帯にかける」

極力、冷静にそう告げる。

「な、何をっ！！ もし今の男が傍に居たらどうするのですっ！！」

「近くに咲夜がいるって言うてる奴が、公衆電話なんて使えるわけないだろ！！ この学園で公衆電話があるのはどこだ！？ 寮のフリースペースと教員室前だけじゃねえか！！」

咲夜は魔法実習ドームで捕らわれていると話していたのなら、不可能。俺の言葉で、その考えに直ぐに至ったのだろう。

「っ！！」

可憐は我に返ったかのように自身の携帯電話を取り出した。素早く操作し耳に当てる。

「音量は最大にしといてくれ」

一度は睨んでくるものの、無言で頷きボタンを押す。すると、可憐の携帯電話からコール音が鳴り響いた。

……頼む。平気なはずだと思いつつも、心の中で祈り込む。程なくして、コール音は途絶えた。代わりに

『はぁーい。お姉さま、どうかされたんですか？』

聞き間違いのない、咲夜の声が響いた。

「よ、良かった」

「お、おい」

がくりと可憐が膝を折り、その場にへたり込む。

『……よかつたってどうかしたされたんですか？ お姉さま』

「いいえ、なんでもないので。あのね」

「おい」

すっかりと安堵した表情の可憐を小突く。

「いくつか咲夜に質問をする。俺の言うとおりの質問をしてくれ。

まず最初。今日のお昼はどうだったかと聞け」

「……さ、咲夜。今日のお昼はどうだった？」

いきなり何の話だという顔をしながらも、可憐は俺の言うとおりの質問を投げかける。

『楽しかったですよ！ 中条せんぱいや花園せんぱいともお話しできて、嬉しかったです！』

……。「中条せんぱい」「花園せんぱい」、ね。少なくとも、声を偽造した別人相手では無さそうだ。

「今はどこにいるか聞いてくれ」

「今はどこにいるの？」

『え？ お部屋だけ？』

「部屋番号は？」

「……あ、貴方の部屋番号って何番だったかしら」

『ど、どうされたんです？ お姉さま。286ですけれど』

「間違いは？」

「ありません、本当です」

俺の問いに、携帯電話の口元を抑えながら可憐が首を横に振る。

「今から行くと伝えて」

「い、今から少しだけお邪魔してもいいかしら？」

『構いませんよ。お待ちしてます』

「切ってくれ」

「では、直ぐに」

『はい』

そう言つて、可憐は携帯電話を切った。

「俺も行く」

「え？ な、何を……。咲夜の部屋は女子棟にあるのですよ？」

「そうよ。アンタ何考えてんの？」

可憐に続き、舞までもが訝しげな顔を俺を見る。

「中からはいかない。外から入る。身体強化を使えば、ベランダまでは直行だ」

「あ、なるほど」

ぼんと舞が手を鳴らす。しかし、可憐は納得いかなかったようだ。

「そ、そんなこと……」

「言つておく。咲夜が部屋に監禁され、無理矢理に話をさせられていた可能性は、ゼロじゃない」

「っ！？」

俺の発言に、可憐が言葉を失う。

「安心しろ。隠れて覗き見るような真似はしない。あくまで咲夜の無事を確認するだけで、お前が窓から入る一歩手前に退いていよう。問題ないと判断できれば、俺は直ぐにでも退散する」

「あ、あの……」

「これはお願いじゃない。俺はお前の“同級生”であり咲夜の“せんぱい”であるわけだが。それ以前に俺はお前たちの“護衛”だ。

不安要素が残つたまま、ここで仕事を放棄する気はない」

「……」

「……」

俺の断言に、可憐が押し黙る。少しの間だが、沈黙が続いた。

「中条さん」

「何だ」

沈黙を破ったのは、可憐。呼びかけに、瞬時に応える。

「1つだけ、聞かせて下さい」

「答えられる事ならな」

可憐は、一度目を逸らして直ぐに戻した。

「貴方にとって、咲夜は何なんですか？」

たった2日。それだけの短い期間を過ごしただけの俺に、どんな答えを求めようと言うのだろうか。

「護衛対象だ」

きつぱりと、言い放つ。可憐の端整な顔が。少しだけ、皮肉気に歪んだ。

「……ただ」

本当であれば、言うてはならない言葉を紡ぐ。

「赦されるのなら、友達になりたいとも思ってる」

「っ」

その言葉に、可憐は敏感に反応した。至近距離で、見つめ合う。可憐の大きな瞳には、吸い込まれそうな力を感じた。俺が今放った言葉の真意を、直接探られているかのような錯覚に陥る。

「……こちらです」

それだけ言つて、可憐が踵を返す。無言で歩き出した。

「今のも、演技？ だとしたら、アンタ本当に救えないわよ」

舞が、可憐には聞こえないように囁く。

「……俺としては、演技でいられた方が良かったんだけどな」

今はあまり顔を見られたくない。舞にはそれだけ告げて可憐に続いた。

「不器用な奴」

クスリと笑うように呟かれたその一言は、聞かなかつた事にした。

「お、お姉さま。何でそんなところから？」

「い、いろいろとあってね……」

窓からの突然の来訪に、咲夜の驚きの声が聞こえる。

「……問題は無かったようだな。舞、どうだ？」

「おかしな魔力の波動は見えないわ。操られてるといった心配も無さそう」

「そうか」

舞の言葉に、頷く。じゃあ、ここに居る必要は無いな。

「舞、1つ頼まれ事をしてくれないか」

「用件によるわね」

俺の言葉に、ジト目で睨んでくる。おそらく、俺が、この後可憐が呼び出された場所に1人で向かう事に勘付いているのだろう。

「一度学生寮の中まで跳ぶ。お前は俺の制圧が終わるまで、咲夜の部屋前で張っていてくれないか」

まだ残党がうろろろしていて、学生寮に侵入してくる可能性も0ではないからな。

「……そうやって、私を安全圏に入れておくってわけね」

やはり、裏までしっかりと読まれていた。

「1人で平気なの？ 相手は仮にも学園の障壁を突破してくる連中よ」

「仮に本命が体育館の方に潜んでいるのだとしても、あの襲撃者たち一同のレベルはお粗末なものだった。そう強いというほどの事でもないだろう。寧ろ、厄介な奴がいるとしたら、それはさっきの電話の相手くらいだろうよ」

「敬語使ってる割には、高圧的な感じだったものね」

「ああ」

「はーっ。しょうがないわねー」

舞が大げさにため息をつく。

「今回だけは、アンタの口車に乗ってあげるわよ」

「助かる」

「何言ってるの。助けしてくれるのは、アンタの方でしょうが」
額を小突かれる。

「早く跳んで頂戴」

「ああ」

転移魔法を発動した。

昨日の学園探索で確認していたことだが。ここの体育館は学生証による認証式ではなく、普通の南京錠が使われている。魔法実習ドームとは別に建っている事から、こちらは体育の授業で使用するような一般的な建物。普通の学校が取っているような施錠で問題ないと思っただろう。

「その考え方が、今回の襲撃者籠城に付け込まれたわけだが」

体育館、その扉の前に立つ。南京錠は見事に破壊されていた。気配を探ってみれば、中には複数人いる事が分かる。まあ、何人いようと関係ないけどな。

……さて、いくか。

「おせえなあ、アイツ等……」

お？

「あ？」

こちらが手を掛ける前に、扉は勝手に開かれた。中から出て来た1人の男によつて。思わず見つめ合う。

「て、てめえいったびべつ！？」

「出迎えご苦労。通してくれたまえよ」

こつそり侵入しようかとも思ったが、もうダメだね。しょうがない。いきなり怒声を上げかけた男の顔面を殴り飛ばし、中へ。身体強化を纏った拳で殴ったため、男は面白い程に吹っ飛び、出入り口

から離れたところで転がっていた。

「お、おい！！ お前どうしたんだ？」

「しっかりしろ！！」

中で待機していた男のうち数人が、いきなり吹き飛ばされてきた男の元へと駆け寄る。皆の視線は、完全に伸びている男へと向かっていた。

……その中で。

「お前がやったのか、こいつを」

1人だけが、たった今体育館へと足を踏み入れた俺に意識を向けていた。

「ああ。いきなり目の前に現れるもんで、ついね」

「ついじゃねえだろ！！」

「ふざけてんのか！？」

俺の答えに視線を向けた男たちから、口々に怒声上がる。

「おめえら、落ち着け。話が聞けねえだろ」

「俺に聞きたい事でもあるのか？」

騒いでいた男たちが収まるのを見計らって、問ってみる。ま、何が聞きたいかなんて分かっているけどさ。

「ああ。俺たちはここで、とある人間を待ってるんだが」

「待ち人は来ねえよ」

向こうのセリフをぶった切り、簡潔に告げてやる。

「そして……」

MCを起動する。特有の機械音が耳に届いたところで、再度口を開いた。

「お前らも、ここで終わる」

「なめん が……」

群がる集団の内、一番最初に吠えた男の顎を打ち抜く。男の怒声は急激に弱々しくなり、そのまま言い切ることなく崩れ落ちた。

「なっ！？」

「お前っ！？ いつの間に！？」

「やめとけ」

両サイドで驚愕する男たちに話しかける。

「何が起こっているかなんて、お前ら如きにや分からねえだろうよ」

「はあっ！！」

「ふっ！！」

俺の一言に血が昇ったのか。男たちは魔法を使う事も無く殴りかかってきた。

「よ……っつと」

当然、身体強化を纏っている俺の方が、動きも威力も早い。相手の拳が届く前に鳩尾を蹴り飛ばし、2人とも戦闘不能にしておく。

「魔法使いに対し素手で殴りかかるなんざ、どれだけ素人だ」

「喰らええっ！！」

「ふん」

放たれた魔法球を、身体強化を纏った拳で打ち砕く。

「なっ！？」

「戦闘中に気を抜いたら、その時点で負けだ」

「がはっ！？」

男の懐に転移し、腹に一撃をくれてやる。何の抵抗もなく倒れた。
……さて。

「その餓鬼を殺せ！！」

最初に俺に目を付けた男が、周りの仲間にも命令する。どうやら、あの男がここでのリーダーらしい。初めにあの男を無力化し、周りの奴らに降参を促す手もあるがそれは無しだ。あの女は、殲滅したがつてるからな。

「精々楽しませてくれ」

ざっと30人くらいか。望むところだ。

「はあっ！！」

「お？」

同じく身体強化を纏った男が殴りかかってきた。顔面を狙うその拳を、右腕でいなす。そのまま無防備な顎に、足を振り上げた。

「ぐおっ!?!」

「切り刻まれる!?!」

「あん?」

目の前の男が気を失い、仰向けに倒れたところで。正面から、風の付加が掛かった魔法が数発、放たれた。俺は魔法を発現しようと詠唱の構えに入っていた男のうち1人を選び出し、俺の目の前に転移させる。

「リア　へ?　うぎゃあああああっ!?!」

何かがおかしいと気づき、顔を上げた時にはもう遅い。男は何の抵抗も無く風の刃によって切り刻まれた。

「き、貴様ああ!?!　ぐはっ!?!」

「何怒ってんだよ。お前の魔法がやったんだろっが」

怒り狂う男の首を薙ぎ、意識を刈り取る。

「おらああああ!?!」

「数いりや良いつてもんでもないぞ」

今度は3人同時だった。全員が身体強化を纏い、俺の元へと突っ込んでくる。俺は俺の真上に座標を固定して転移魔法を発動させた。

「ぶぼっ!?!」

「ふげっ!?!」

「だぶっ!?!」

突如標的を失った3人は、仲間同士で無残に打ち合った。

「ほいっ」と

「ぶっ!?!」

着地がてら、1人の男の頭上に足を乗せ、そのまま地面へと振り下ろす。踏み抜かれた男は、そのままぴくぴくと痙攣し、動かなくなった。その間にも、同士討ちで蹲る残りの2人を蹴り上げて戦闘不能にしておく。

「ん?」

体の動きが、突如鈍った。

「……これは」

「掛かったな！！ 俺の重力魔法はすげえだろ！！」

瞬間、足元に魔法陣が展開される。どうやらトラップに引っかかったらしい。

「今だ！！ やっちまえ！！」

今度は5人がかりで襲ってきた。

「……いい加減、集団で襲う非効率さに気付け」

転移魔法を発動する。今度は、俺だけじゃない。この重力魔法を発動したと思われる男を、俺の代わりに魔法陣の中央へと跳ばしておいた。

「ひやははは！！ ぼこぼこにしてやれ って、よせ！？」

大笑いしていた男が、俺を襲おうとしていた集団が自分に向かってきている事を悟り悲鳴を上げる。大きな音を立てて、計6人のアホどもはまとめて潰し合った。

「な、何なんだコイツ！！」

「とんでもなく、早え！！」

俺の動きに畏怖した2人との距離を詰め、蹴り飛ばして無力化する。……残りは、15ちよつとか。俺の動きを早いと感じているようじゃ、俺には勝てねえよ。

「どけいっ！！ 俺がいく！！」

「？」

たむろしていた中でも、特に大柄な男が仲間を押しつけて俺の前に立つ。

「餓鬼、お前……なかなか近接術に優れているな」

「どうも」

「だが、ここまでだ。俺は1発や2発顎に貰った程度じゃあ、倒せやしねえよ！！」

「そうかい」

少し、スタイルを変える事にした。纏っていた身体強化魔法に、属性を付加する。付加するのは。

「さあ、掛かってこい！！ 捻りつぶして かはっ！？」

男のセリフを聞き終わる前に、攻撃特化・火の身体強化を纏った俺の拳が、男の腹を捉える。口しか動かしていなかった大柄の男は、そのまま後方へと吹っ飛び体育館の壁に打ち付けられて地面に伏した。

「言いたいことがあるなら魔法で語れよ。これは餓鬼の喧嘩じゃないんだぜ」

「やつ！？ やめびぶべっ！？」

もはや打ち抜く必要もない。恐怖に慄く男との距離を詰め、火の力を纏った掌を撫でるように男の顔へと添えるだけで、その男は地面へと叩きつけられた。やべ、これはやり過ぎだな。足元でぴくぴくと痙攣しながら呻く男を目に、そう思った。大柄の男には良い具合だったんだが、ほかの奴らには効き目が強すぎるか。

そう考え、身体強化魔法はそのままに、付加していた火属性だけを消し去る。気を取り直して、俺から一番遠くにいる男へと目を向けた。

「お前、足元気を付けた方が良いな」

「へ？」

1人の男を指差しながら、そう忠告する。その時にはもう、男の姿は俺の視界から消えていた。

「う、うああああああああつ！？」

頭上から、男の悲鳴が聞こえる。転移魔法により、突如体育館の天井付近に跳ばされた男からすれば、急に足元から地面が消えたような錯覚に陥っただろう。そのまま男は成す術なく地面へと叩きつけられて動かなくなった。

「ぎゃっ！？」

「ぐは！？」

「げぼっ！？」

「びぎいつ！？」

不可思議な現象に目を奪われているバカどもを、殴り飛ばし蹴り上げ押しつぶす事で無効化する。俺へと放たれた3発の魔法球は、

位置はそのままに向きだけを反対側に転移させる事で元の位置へと戻り、術者自身を仕留めていた。

「あと10人ね、あ、9か」

手短な男を蹴り上げ、そう呟く。

「はあっ うおわっ!？」

殴りかかっってきた男の拳をガードする。そのまま一本背負いで投げ飛ばしてやった。

「おとといきやがれー」

壁へと打ち付けられ意識を失う男に、そう告げてやる。もう聞こえてないだろうけどさ。

「ほっ」

「ぐひゃっ!？」

「はっ」

「ずべっ!？」

「とっ」

「ごぼっ!？」

続けざまに3人ノックアウトする。そこで、俺の周囲にはもう誰もいないことに気が付いた。

目を向けた先。体育館の最奥。檀上になっているところに、リーダー格の男を中心として5人の男が構えている。

「やるな」

リーダー格の男が、口を歪ませる。

「姫百合家の当主は、良いボディガードを雇っていたようだ」

「そりやどうも」

「動くな」

称賛を払いながら足を進めようとしたところで、制止が掛かる。

「俺の隣に立つ5人は、既に魔法式を組んでいる。俺の合図1つで、それは直ぐにでもお前を捉えるだろう。この距離だ。お前が俺を捉えるよりも、こちらの攻撃の方が早い」

いや、普通に俺の方が早いけどね。

「お前のような輩が居たのは、こちらにとって誤算だった。今日の所は引くとするよ。俺たちはここの裏口から外へ出る。お前がその間そこから動かなければ、魔法は発動させないと約束しよう」

そう言いつつ、リーダー格の男は後ろにゆっくりと後退した。

「まあ待てよ」

それを呼び止める。

「なんだね？」

男の問いかけと同時に、横に控えていた男の内1人を俺の手元へと転移させ、そのまま頭を掴み地面へと叩き込んだ。凄まじい音が響く。殺してはいない。頭蓋骨にヒビくらいは入ったかもだけど。

その光景を見て、リーダー格の男は目を見開き素早く自身の左右へと目を奔らせた。5人控えていたはずの仲間が、1人足りない。それを確認した男が、再度俺の方へと目を向ける。

「分かったろ？」

にやりと顔を歪めながら口を開く。

「アンタの条件じゃ、俺が見逃す理由にはならねえな」

「くっ！？」

素早く身を翻そうとした男を見て、即座に転移魔法を起動させる。壇上に跳んだ頃には、既に俺に背を向けて駆け出しているところだった。

「なるほど、裏口ってそこね」

壇上の横。赤い垂れ幕の影になっている部分に短い階段。下は舞台袖となっており、そこに出入りするための扉も付いていた。目で見てしまえば、頭の中でイメージできる。座標が固定される。男たちが手を掛けるより先に、俺は扉の前へと転移していた。

「なっ！？」

「急に逃げるなよ。つれねえな」

「お前っ！？ いったいつ！？」

「その質問は、聞き飽きた」

リーダー格に一撃をくれてやる。狭い階段を駆け下りていた男た

ちは、前方から飛んできたリーダー格の体から逃げ切る事は出来ず、そのまま潰され階段を転がる。

「終わりだな」

4人の男たちは、何かを言いたげに口を開いたが、別に見逃すつもりなど欠片も無く、容赦なく顔を踏み潰す事で意識を刈り取った。はい、これで終わり。

伏す5人を避けながら壇上へと上がる。見渡してみると、見るも無残な男たちがごろごろと転がっていた。全員、殺してはいないはずだ。どこかしら骨が折れるなりなんなりしているだろうが、こういつた仕事に手を出した以上、当然のリスクだと思つて貰いたいね。「ふああ」

欠伸が漏れる。携帯電話を開いて見れば、もうそろそろ日付が変わろうかという頃合いだった。

舞台袖に視線を向ける。そこには、ここでのリーダーであろうと思われる男が、手下どもの下に埋まり気絶していた。

「つまんねー奴だったぜ」

吐き捨てるように、そう呟く。戦えば、たぶんそれなりに強い奴だったと思う。それなのに、ハナから逃げの姿勢とは。面白くもなるともない。拍子抜けし過ぎだ。面倒臭いという言葉すら出す暇が無かった。公衆電話から電話してきた男含む残りの連中は、もう少しまでもな奴らだといいたが……。

俺は手に持っていた携帯電話を操作して、耳元に当てた。

第12話 同盟（前書き）

今回は、聖夜視点少なめです。

第12話 同盟

「……成程」

目の前で泰造氏が、重々しく頷く。ここは、姫百合家・泰造氏の書斎。デスクに座すはこの部屋の主である姫百合泰造。そのデスクの前には、可憐と咲夜が並んで立ち、その後ろに俺が立っているという構図だ。

今は丁度昨晚に起こった騒ぎの報告を終えたところだった。

「まずは、中条君。礼を言わせてくれ。うちの娘たちを守ってくれて、本当にありがとう」

「いえ、仕事ですので。それに、守り切れていません。姫百合可憐さんに危害が加わってしまったのは、私の過失です」

「……そ、そんな事はありません！ あれは、私が中条さんを止めたからで」

「そうだな……」

俺の言葉を否定しようと言葉を紡いだ可憐に、泰造氏が同調する。「可憐、お前のその行為は愚かなものだった。お前は自分の味方である中条君の動きを制限したばかりか、自ら敵の活路を作り出してしまったのだ。中条君に打破するだけの力がなければ、お前はここで終わっていた」

「……はい」

可憐が悔しげに俯く。

泰造氏の言い分は確かに正しいし、俺もそう思っている。だが、それが可憐の美德であるのも確か。愚かなもので片付けてしまうのは、ちよつと可哀想だけだな。

「昨晩の侵入者たちは、1人残らず捕え警察に管理を任せている。とは言え、君に言われた通り公にはせず、文字通り管理してもらっているだけだが」

「ありがとうございます」

泰造氏の言葉に、頭を下げる。姫百合家の権力に感謝だな。

「一体、どうするつもりだね？」

「情報を吐かせます。まだ、誘拐犯の首謀者を捕えてませんので」

俺の言葉に、泰造氏は目を丸くした。

「そういった事については、警察が適任かと思うが」

「いいえ。それでは時間が掛かってしまうので」

「君ならば直ぐにできると？」

「はい」

断言する。

「……そうか。まあ、彼女の弟子である君だ。ひとまずは君に任せるとするよ」

「ありがとうございます」

礼を言い、もう一度頭を下げる。

「……さて、それとこれからの護衛についてだが」

その言葉に、咲夜の肩がびくりと震える。咲夜程ではなかったが、可憐も僅かに体を震わせたのが分かった。

「申し訳ございません。泰造氏の依頼条件を、守ることができませんでした」

「いや、仕方のないことだ。聞いた話の状況下では、可憐の前での戦闘は避けられなかったようだからね」

「心遣い、痛み入ります。しかし、もう私は護衛から外してもよろしいかと思われます。捕えている者から情報が引き出せ次第、今回の首謀者は直ぐにでも抑えますので」

俺の言葉を聞いた可憐と咲夜が、驚いたように振り返る。今のどの言葉に反応したのかは知らないが、ひとまず無視しておく。

「学園のセキュリティの穴も見つけられた事です。これ以上侵入を許すことはないでしょう？」

「……うむ。そうだな。その件に関しては、この学園の理事長として恥ずかしい限りだ」

昨日。体育館を出た後で見つけた不審なトラック。どうやら侵入

者たちは、これを使って学園内に潜り込んだらしい。手口は実に簡単。守衛に夜間清掃だと嘯き、堂々と正門から踏み込んだらしい。

騙されたとして、守衛に非があるのも事実。学園内に入る業者は、前以て学園側に通達されている。これからは、それ以外の知らされていない者は、例えいかなる理由があるうと通してはならないと守衛に言い渡された（と言うより、これは以前から取り決められていた事であり、正しくは再度徹底された形）。

「では、私はこれで。もう行きますので」

「ああ。今回の報酬についてだが……」

「そのお話は、首謀者を抑えてから改めてという事で。まだこの件が解決したわけではありませんので」

「分かった。よろしく頼むよ」

「な、中条さん……」

「中条せんぱいっ……」

「失礼します」

可憐と咲夜の、俺を呼ぶ声が聞こえたが。立ち止まる気にはなれなかった。一言告げて、扉を潜る。固い木製の扉を、後ろ手に素早く閉めた。本当ならどんな誹謗も中傷も甘んじて受け入れねばならない立場だったが、どうしてもそれを聞きたくなかった。

「……どれだけへたれなんだか」

自分の弱さに、呆れて泣きたくなる。

「お疲れ様でした、中条様。外までご案内致します」

外で控えていた大橋メイドから声を掛けられる。

「はい、お願いします」

その背中について、廊下を歩く。……今の独り言、聞かれてないよね？

屋敷を出るなり、俺はポケットから携帯電話を取り出した。何と

なく、掛かってくる気がしたからだ。

ピリリリリリリリッ

案の定。その瞬間に着信音が鳴り響く。画面には、『非通知』の文字。躊躇いなく、通話ボタンを押した。

『やっほー』

「師匠、何処かで俺の事監視してますよね？」

相も変わらず、タイミング良すぎだ。

『まさかー。そんな筈ないよ。だって今私ロスだもん』

「……まあ、俺にはそれが本当か確かめる術は無いですけどね」

『ふふふ。そんな拗ねないでよ。折角労いの電話を掛けてあげたのに』

「どうせなら、仕送りの金額を上げてください」

『ええー？　だってそれ以上上げちゃったら、外でも生活できちゃうじゃない』

「やっぱりそういう意図だったのか！」

思わず敬語も忘れて声を張り上げる。

今まで送られてきた500円玉の謎は、張本人によって解決された。ようは、全てが外界よりも、低価格で抑えられる学園内生活の必要最低金額を俺に送ってきていたのだ。仕送りとして。住む場所から食べるものまで、外では500円で抑えられるような場所がない。

この女の屋敷に行けば何かしらあるかもしれないが、無理だ。屋敷は、この女が不在時に何者かが足を踏み入れた場合、容赦なく牙を剥く。つまりは、大量のトラップが仕掛けられているのだ。おそらく、日本で最も安全な場所であり危険な場所だろう。

『そんな怒らないでよう。聖夜、逃げちゃうと思ったんだもん』

「今すぐにも逃げ出したいですけどね！！」

「冗談じゃない。こんなの労働基準法とかに引っかけてるだろ。労働条件が劣悪過ぎだ。」

『まあまあ、冗談は置いといて』

「冗談じゃ済まされないのでしょ〜!？」

『今から、行くんでしょ?』

「っ!!!……………はい」

真面目さを帯びた声に、こちらとしても相槌を打つ他なくなる。

『きつちり情報を聞きだし、根絶やしにしないさい。これは師匠命令よ』

「……………」

過激すぎる言葉。その意味するところは。

「師匠」

『何かしら?』

朗らかな声に戻っている。おそらく、これは聞いてもはぐらかされるだけだろう。

「今回の件、その黒幕について。何かご存じなんですか?」

『……………さあね』

……………てつきり全否定されるかと思ってたんだが。すごく曖昧な返しだな。

『私が想像しているものと違う場合も有り得るから。余計な情報は持たない方がいいわ。必要だと感じたら、私の方から話す』

「……………分かりました」

こう言われては、もう聞き出す事は不可能だ。話術でこの女に勝てるはずも無い。渋々携帯電話を切るうとしたところで。

『あ、そういえば』

なぜかワザとらしくそう言ってきた。

「……………何です?」

『聖夜、泰造さんの2人娘にはもう会ったんでしょ? どう? 可愛かった? 惚れた?』

「あ、すみません。何か電波悪いみたいでノイズが、じゃ」

『え? あ、ちよっ』

ぶちっ

取り敢えず関係なさそうな用件だったので、強制的に切っ

た。

「……さて、行くかね」

襲撃者たちが収容されている場所については既に聞いているが、無論行った事は無い。転移魔法は使えない。ひとまず駅前に行つて、タクシーでも拾うかね。

授業中だった教室の扉が、ゆつくりと開かれる。黒板に集中していた視線が、一斉にそちらへと向けられた。入つて来たのは…。

「ああ、姫百合可憐さん。都合はお家の方から聞いていますよ。どうぞ、席に着いてください」

「……はい」

一礼して、可憐が無言の教室内を歩く。可憐の席は、一番後ろの窓側。教室を縦に横切るように歩いていると、舞の席とすれ違う。

一瞬、自分に目が向けられているのかと、可憐は舞へと目を移した。が、勘違いだったのか。舞は遅れてきた可憐に何の興味も抱いてはいないようで、素知らぬ顔で窓の外を眺めている。頬杖を突きながら、その瞳が捉えているものとは何なのか、可憐には分からない。

可憐が席に着くと、授業は再開された。隣の席は、当然の様に空席だった。それもそのはず。可憐は先ほどまでその机の主と一緒にいたし、彼が今いない理由も彼自身から聞いている。今頃は、襲撃者が捕えられている場所で情報収集でもしているのだろう。

彼の事を思い出し、無意識の内に窓の外へと目を向ける。そこで可憐はふと気付いた。多分、舞も自分と同じ人物を追いかけ、窓の外を眺めていたのではないかと。

結局。可憐にしては珍しく、内容がまったく頭に入らないまま授業は終了した。チャイムと共に、学内の喧騒が高まる。昼休みだ。可憐のクラスも例外ではなく、早速お弁当を広げている者。学食へと向かう者。今日はどうするかと友達と相談する者。様々な声や音が入り乱れる。

「聖夜の奴、何かあったんかね」

その声に、可憐ははっと顔をそちらに向けた。そこでは、将人とおる・修平が、授業道具を片付けながら会話をしているところだった。

「言葉通りの意味だったんだろ？　そういう日もあるって」

修平が将人の心配そうな声色を払う。

「けど、それならもう少しまともな言い訳考えそうなものじゃない？　『今日は学校フケるから、先生によく言っというて』って言い訳、始めて聞いたよ」

「いや、それも言い訳じゃねえから。ま、伝える身にはなっ欲しいけどな」

とおるの言葉に、修平が笑いながら答える。

「確かに。あのまま文字通り伝えてたら、まず怒られたのは僕らだっただろうっね」

「何で？」

将人が首を傾げる。

「そりゃそうだろ。そんな伝言受け取ってくる余裕があったら、引っ張ってでも連れてこいって言われてたね」

「ああ、そりゃそっか」

ははは、と将人が笑う。

「さてと、お喋りが過ぎたね。そろそろ学食にいくかい？」

「そうしよう」

「腹減ったー。今日は何食うかねー」

ガタガタと音を立てて、3人も立ち上がる。その光景を、可憐はぼーっと見つめていたが、急に視界が遮られて視線を上げた。そこ

には。

「姫百合可憐、ちょっと付き合いなさいよ」
舞が、立っていた。

「……………何か御用ですか？」

連れて来られた先は、屋上。咲夜には、今日お昼は一緒に食べられないという内容で、メールを既に送信済みだ。可憐は後ろ手に屋上の扉を閉めると、呼び出した張本人に話しかけた。

「聖夜つてさ」

振り向かず、可憐には背を向けたまま。舞は空を見上げながらぼつりと呟いた。

「アイツには、魔法使いの師匠がいてね。今はその人アメリカにいるの」

「……………はあ」

最初に聖夜の名前が出た時には、どきりとしたが。その後が続いた言葉で、可憐は曖昧な相槌を打ちながら首を傾げた。

「アイツは呪文詠唱ができないから。この国の評価システムじゃあ、魔法使いの資格は取れない。だから2年前からアメリカに飛んできた。この間取ったみたい」

「え？ 魔法使いのライセンスを？」

可憐は目を真ん丸にした。舞は呆れ顔で振り返った。

「そりゃそうでしょ。仮にも、アンタの護衛役を任されたのよ？ 資格が無けりゃそんな事できるはずないわ。気付かなかったの？」

「……………そ、そうですね」

気恥ずかしそうに、可憐が視線を落とす。舞はそれに構わず再度口を開いた。

「アイツが日本に戻ってきた理由は、ただ1つ。アンタの護衛の為」
「よ」

「はい……」

言っている意味は分かるが、意図は分からない。この話の終着点
が何処なのか、可憐は計りかねていた。

「言ってる意味、分からない？」

「……」

舞は、大げさにため息を1つ付く。

「アンタ、護衛嫌いだそうね」

「……？　そうですけど」

謎な質問をされたと思ったら、急に矛先を変えられた。可憐は何
の話だと思いつつも頷いた。

「私も嫌いよ。黙って前やら後ろやらをうろつろされると目障りだ
からね。けど、相手による」

その言葉に、可憐の頭には一瞬聖夜の顔が過った。舞は、可憐の
言葉を待たずに続ける。

「聖夜は、アンタの護衛の為に日本に戻ってきた。けど、昨晚の戦
闘で大方の目途は立ち、事態は収束に向かっている。これが何を意
味するか、分かる？」

何が言いたいのかに思い至った、可憐はがばつと顔を上げる。

「聖夜、帰っちゃおうよ。アメリカに。転校から、一週間と経たず
ね」

「っ」

「アンタにとって、アイツはどうだった？　いつもアンタに付き従
う、護衛連中と同じ？　それとも、2日程度顔合わせたくらいじゃ
違いなんて分からなかったかしら？」

自分の鼓動が、どくと波打ったのを可憐は自覚した。

「アンタにとって、アイツはどうだった？　いつもアンタに付き従
う、護衛連中と同じ？　それとも、2日程度顔合わせたくらいじゃ

「違いなんて分からなかったかしら？」

その言葉に、昨日の出来事がフラッシュバックする。

『勇気あるじゃん、お前』

止めたのは、私。追撃を掛けようと構えた彼を、私は無意識の内に止めてしまった。もうこれ以上魔法で相手を追い詰める必要などないと、勝手に思い込んで。結果として、捕まった。目も当てられないほど、愚かな行為だったと思う。見捨てられても文句の1つも言えない、自業自得な行動だった。

それでも。彼は怒るところか、褒めてくれた。私の事を。勝手に捕まっておきながら、自分を見捨てて逃げてくれ等と低劣な言葉しか紡げぬ私に、勇気がある、と。

『苦情も文句も！！ 後でいくらでも受け付ける！！ だから今は落ち着け！！ 咲夜を助けたいんだろ！！』

裏切られた、と思った。咲夜の事しか口には出さなかったけれど、私もそう。同年代で、初めて対等に話しかけてくれる男の子。まだ、咲夜から貰った情報しか持ってなかったから。これから少しずつ、仲良くしていければいいな、と思っていた矢先に護衛というあの言葉。

見当違いな考えだとは今でも思っていないけれど、場違いな発言だったと思う。咲夜が誘拐されているかもしれない状況で、こんな会話はするべきじゃなかった。

それでも。パニックに陥っていた自分を、一喝して諭してくれた。あのまま冷静さを欠いた状態で、単身体育館に飛び込んでいたら。それこそ相手の思う壺だっただろう。

『だから、俺の魔法を使う。信じてくれるか？』

その言葉を思い出した瞬間、顔が熱くなるのを感じた。護衛の間なんて、皆同じ。危険な場所でもないのに、「お下がりください」の一言。必要ないほどピリピリさせた空気を纏いながら、私の周りを警戒している。あんな危険な場面、初めての体験だったけど。多分、もし違う護衛が付いていたのなら、「信じてくれるか」なんて言葉、絶対出なかっただろう。

『赦されるのなら、友達になりたいとも思ってる』

申し訳無さそうな顔で告げる、あの言葉。嘘は、許さないつもりだった。彼の返答に、全神経を傾けて聞いた。あの眼は、嘘を付いている人のもではなかった。

「友達になりたい」という言葉。その言葉を、私も、咲夜も。どれだけ待ち詫びたのだろう。高校に上がっても、友人など1人も出ず。私を見る目は好奇心な色でいっぱい。話しかけられるときは、下手に出られいつも敬語。「流石は名家のお嬢様」なんて賞賛、欲しくは無かった。欲しかったのは。私たちがいつだって欲しかったのは。

もし、もう一度。彼と1からやり直せるのなら。

「……彼は、中条さんは。違いました」

絞り出すような声色で、可憐が答える。舞は、その返答に目を細めた。

「そ」

素っ気の無い返事。可憐は顔を上げ、正面から舞と向き合った。

「私は、ずっと待ってた。アイツが、日本に戻ってくるのをね。こ

んなに早く、またいなくなるなんて、絶対にイヤ。どんな手段を使つても、聖夜はここに残らせるわ」

少しだけ、頬を染めながら断言する。そんな舞を見て、可憐もここで自分の意志をはっきりさせておかなければならないと感じた。

「……私は、まだ中条さんについて良く知りません。それでも、彼には惹かれるものがあります。彼は私や咲夜の事を護衛対象だと言いましたが、私たちに“普通”に接してくれました。悪い人だとは思えません。彼がどのような人物なのか、見極めたい。そして、もしできるのなら……」

意を決して、可憐は口を開いた。

「私も、友達が欲しい。対等に付き合ってください、友達が」

「決まりね」

可憐の宣言に、舞がニコツと笑う。

「私と手を組みましょう。これ以上、聖夜の好き勝手にはさせないわ」

「はい、よろしくお願いします。花園さん」

差し出されたその手を、可憐が握る。

「舞」

「え？」

「こ、これからは、舞って呼んで頂戴」

少し視線を泳がせながら、舞がそう言う。可憐はその仕草に思わずクスリとしそうになったが、堪えた。

「では、私の事も。可憐と」

「ええ、よろしくね。可憐」

「よろしく願います。舞さん」

挨拶を終え、手を離す。舞は、自身の燃える様に赤い髪の毛をそわそわ弄りながら、一言。

「そ、それから……。悪かったわね。今まで、冷たく当たってて」

先ほど断言していた時よりも、さらに真っ赤になっている。この一言には、可憐も思わず目を丸くした。

「…………え？」

「そ、その…………」

舞はもごもごと口を動かしながら。

「ひ、ひがみ？ と、言うか…………八つ当たり？ な、なんかそんなので、アンタには強く…………というか、失礼な態度で当たっちゃったからさ…………」

「…………」

「だ、だから…………ごめん」

がばつと、舞が頭を下げる。可憐は、自身の心の中が何か温かいもので満ち足りていくのを感じた。

もしかすると、これが ……。

「舞さん、顔を上げてください」

可憐の言葉に、舞が恐る恐る顔を上げる。可憐は、にっこりとほほ笑んだ。

「平気です。気にしてません。だから、これから仲良くしてくださいね」

「…………ええ、もちろん！」

人気の無い昼休みの屋上。2人で笑い合った。

「ふっ」

額に滲む汗を拭う。身体強化によって脚力を上げて移動していた為、時間はそれほど掛かっていない。しかしまあ…………。疲れるものは疲れるわけで。

俺は恨めしげに自分の財布を取り出して開いて見た。中身は、最後に見た時と一切変わっていない。残金、500円。

「…………タクシー代の初乗り運賃にもなってやしねーよ」

吐き捨てる様にそう呟く。何がタクシーでも捨つかだ。阿呆か俺は。

今回の件が片付いたら、俺も日本に口座を1つ作るう。あの女の息が掛かっていない口座が無ければ、絶対に死んでしまふ。前々から作るう作るうと思いつつ、面倒くさいから後に後に伸ばしていたが、もう無理。無理だね。今回の件で良く分かった。普通に死んじやうね。泰造氏からの報酬は、全額そっちに振り込んでもらおう。絶対にそれが良い。そうしよう。

そんな場違いな事を考えながら。俺は目の前の扉をゆっくりと開いた。

第13話 尋問と謝罪と和解と

「エヴァンス様の使者の方ですね、どうぞこちらに」

建物に入り用件を伝えると、話は直ぐに通った。泰造氏がつけてくれているものかと思えば、どうやらあの女が直々に声を掛けていたらしい。

魔法使いがこの表舞台に立つてから。同時に、魔法犯罪もその姿を現した。

今までは、不可能だと思われていた犯罪。警察はそれらの犯罪に對抗するため、新たに魔法警察という部署を設立した。常人には成し得ないトリック。それが、魔法の一言で片付けられていく。一般警察とは違い、構成員は皆魔法使い。それ故の絶対数の少なさがあるが、これにより大部分の魔法犯罪が露呈されるようになった。現場検証では、指紋と同じくらい重要な証拠として、魔力の残滓も取り上げられる。

そして。絶対数が少ないが故に、魔法警察は“力を持つ魔法使い”との関係を密にする。これが良い事なのか悪い事なのかの言及は避ける。が、それが抑止力となっているのも事実。このような事情から、あの女含め姫百合家や花園家も、警察関係には顔が利く。今回の件について自由にできているのも、こういった理由によるものだ。

出迎えてくれた男の後に従い、ひっそりとした廊下を歩く。目的の場所には直ぐに到着した。

「この中です。指示通り、学園侵入者の中でそのリーダー格と思われる人物のみを収容しております」

「ああ」

「現段階で分かっているこの男の情報についてですが」

「いや、それは結構だ」
資料を取り出した警察官を、手で制する。
「必要な情報はこちらで聞き出す。5分、時間を貰うぞ」
「分かりました。では、どうぞ」
警察官が自分のIDを入力し、その扉を開いた。

部屋にいたのは3人。昨晚顔を合わせたリーダー格の男と、それを見張る2人の警察官。俺が入室すると、警察官2人は同時に敬礼し、リーダー格の男は顔を露骨にしかめた。

「済まないが、席を外してくれ」

「は？ あ、いや……しかし」

「エヴァンスから何も知らされていないか？ それとも、ここで本人に取り次いだ方がいいか？」

「い、いえ……」

2人の警察官は、俺の言葉におろおろしながら退出した。……ホント、悪意ある奴に乗っ取られたらおしまいだな、この国の魔法警察は。俺が言うのもなんだけどさ。

部屋に残るは俺とリーダー格の男の2人のみ。

「よお、気分はどうだい」

「最悪だな。よくもまあこのこと俺の前にやってきたものだ」

男は不機嫌そうな声色を隠そうともせずそう答える。

「そう言うな。こっちはお前に聞きたい事があったんだ」

「お前に教える事など、何もない」

「そうかい？ お前らのボスの居場所を教えてください」

「教える事など何もない。そう言ったら」

男はそれだけ告げると、俺から目を逸らす様に顔を背けた。頑なだな。ま、そりゃそうか。

「ふむ……。まいったね」

顎を撫でながらそう呟く。その仕草に、男はピクリと目尻を上げた。

「お前が戦闘において、それなりに手練れだという事は認める。だが、こういった事にまで首を突っ込んでくるのは感心しないな。何事にも適材適所という言葉がある。お前は、姫百合可憐の護衛なんだろう？ こんな所で油を売っていないで、とっとと居るべき場所に帰ったらどうだ」

「はは」

その助言に、思わず笑ってしまった。男が不可解な目でこちらを見る。

「……面白い事言うね、アンタ」

少し、威圧する様に口を開いた。

「っ!？」

ガタンと。大きな音を立てて、男の座る椅子が揺れる。殴ったわけでも、蹴り上げたわけでもない。男が勝手に鳴らしたただけだ。ゆっくりと男に近付き、口を開く。

「アンタの言う通りだ。俺は、姫百合可憐の護衛。それは間違いない」

「……」

ドスの聞いた声で語りかける。無意識の行動か。俺が一步近づく度に、男は一步遠ざかろうと足を動かす。……もっとも、手足を拘束されているため、ほとんど意味を成してはいないが。

「だが、アンタは間違ってるよ」

既に男は、俺の纏う霧囲気に吞まれている。俺が今口になっている言葉も、どれだけ男の頭に入り込んでいるか分からない。

「護衛対象を守る上で、ベストな環境って何だと思う？」

試しに問いかけてみた。返ってくるのは、言葉にならない悲鳴だけ。

「矛盾するようだが、敵がない事なんだよ。護衛対象を最も安全に護衛するためには、護衛対象に害を成す相手が、1人もいない事

が望ましい」

そこまで話して、足を止めた。椅子に拘束された男の目の前。見下すような視線で男を捉え、にやりと口角を歪める。「ひっ」という声が、聞こえた気がした。優しく男の頭髪を掴み、耳元で囁くように告げてやる。

「そして……。俺は、姫百合可憐を護衛するためなら、手段を選ばない」

「……っ」

今度ははつきりと、唾を飲み込む音が聞こえた。ここまで追い込めば、後もう少し。……ダメ押しに、“とっておき”を見せてやるか。既に捕まっているのだから、情報が漏れる事も無い。

「おい」

「……な、何だ？」

気丈にも、俺の呼びかけに応えてくる。

「よく見てろ」

俺は掌をひらひらさせて、男の視線がこちらを向いた事を確認する。手刀落とすかのような仕草で、ゆっくりと部屋に備え付けられていた机へ掌を下ろした。そう。ゆっくり、ゆっくりと。男の視線が、俺の掌を捉えて下がっていくのが分かるくらいに。徐々に、徐々に。下に、下に下がる。そして、今まさに掌が机に触れようとした瞬間。

バガンツ！！！！

何の前触れも、予兆も無く。机が真つ二つに割れた。「なっ!?!」

男は肩を震わせ、目を見開いた。もはや隠せなくなった体の震えが、ガタガタと椅子に流れて大きな音を鳴らしている。

良い反応だ。そうでなくっちゃな。

「何をしたのか、分からねえだろ? 言っとくが、身体強化の類じ

やないぜ」

そう言いつつ、今度は掌を男の両腕を縛る魔法拘束具へと向けた。「その魔法拘束具。知っているととは思うが、触れた人物から発せられる魔力を吸い出す優れものだ。発せられる魔力が大きければ大きいほどその吸収量は上がり、専門家からは魔法を使った破壊は見込めないとまで言われている」

「な、何をする気だ……っ」

「動くなよ？ “まだ” お前を狙う気じゃねえんだから」

「よ、よせっ！！」

ズバンツ！！！！

更に後退し、俺との距離を取ろうとする男を足で押さえつけ、手刀を振り下ろした。男の両腕を縛っていた拘束具が、綺麗に割れる。

「……ば、馬鹿な」

男が、震える声でそう呟いた。自身の手を、震わせながら凝視している。今まで左右を繋いでいた拘束具は、その中央から2つに分かれて男の両腕にぶら下がっていた。

「……さて」

現状を理解したであろうタイミングを見計らって、男に話し掛ける。

「次は、アンタの脚でも切り落とすか？」

「ひっ!?!」

もはや隠そうともせず、男は情けない声を上げた。

「ボスのアジトを聞き出すだけなら、胴から上があれば十分だもんなあ」

そう言って、これ見よがしに腕を振り上げる。

「よ、よせっ！！」

こつなれば、勝ちが決まったも同然だった。

結局。あれからは借りてきた猫の様に大人しくなった男は、俺の質問に対して誠実に洗いざらいを答えてくれた。

ボスの居場所さえ突き止められれば、こんな場所にもこの男にも用は無い。さつきは、護衛するに当たり手段は選ばないと言ったものの。実際のところ、こいつらの息の根を根こそぎ止めようとは思っていないかった。ぶっちゃけ、その気ならば昨晚の内に皆殺しにしている。

どうやら、昨晚の内に姫百合可憐・咲夜の誘拐が成立しなかった場合、ボス含めた残党は今までアジトにしていた場所から移動し、別のアジトで待機する手筈になっているようだ。

用心深いんだか馬鹿なんだか。居場所がバレぬよう移動するのなら、移動先はこいつ等に教えるべきではない。もっとも、今回情報を聞き出した相手が捕まった侵入者たちのリーダーらしかつたので、この男にだけ告げていたという線も否定できないが。

……何にせよ、あと一仕事だ。

「待て！ 待て！！ まさかお前、1人で乗りこむつもりか!？」

「……何だよ、アンタには関係ないだろ」

さて行くかと退出しようとしたところで呼び止められ、少し不機嫌そうな声色で返してやる。

「やめておけ。姫百合可憐は、あの学園から外に出ることは無いのだろう？ ならば、そのままの方がいい。絶対に安全だ。俺たちがとった手段が二度通じるほど甘いセキュリティでは無いだろう。1人でこのこ行ったら殺されるぞ!！」

「……心配してくれるのか？」

予想外の男のセリフに、驚きを隠しながらそう問う。

「気色の悪い言い方をするな!! ……忠告してやっているだけだ。ボスには、絶対に逆らわない方がいい」

「ほう?」

「ボスは、神の如き能力・非属性無系統をお持ちだ。お前が強い事は十分に知っているが、それでも……殺される」

男が自分の言葉に怯え、ぶるつと体を震わせた。

「無系統、ね。それで？ そのお前らのボスは、どんな能力を持ってるんだ？」

「転移魔法だ」

……は？

思わず言葉を失った。凄く馴染み深い単語が聞こえた気がするな。「驚くのも無理はない。あの能力にかかれば、どれ程手練れの魔法使いであろうと、無に帰する事になるだろう」

俺の絶句を都合の良いように解釈したと思われる男は、そう口にした。

警察官に敬礼されながら、建物を出る。

「転移魔法ねえ」

1人呟き、思わず吹き出す。

別に、あの男が嘘を言っているとは思っていない。あの表情・声色・態度から見て、ボスの能力に対して恐怖心を抱いているのは明白だった。

だが、だからと言って男が話している内容が真実かと聞かれれば、NOだと思う。昨晚の戦闘。俺はあの場で隠す事無く転移魔法を連用した。そのいくつかは、身体強化魔法だけでは説明のつかない効力もあの男たちに与えていたはずだ。

本当に自分たちのトップが転移魔法の使い手ならば、普通気付く。それなのに、周りの男たちも今日会ったリーダー格の男も。誰1人として転移魔法という単語は出てこなかった。俺の動きを「早い」と表現していた時点で、既にズレている。つーか、ホントに転移魔法が使えるなら、学園侵入なんて余裕じゃねえか。

「……さて」

このまま直接アジトに直行してもいいが、遠い。それに9割方嘘

だとは思つが、相手が本当に転移魔法の使い手だった場合、不意を突かれて転移されようものなら捕まえる事ができなくなる。襲うなら、日が落ちた後。寝首を搔くか。……これ、完全に悪役の手口だな。まあ、自分が正義の味方だとは思つちやいないけどさ。

「……一度学園に戻って寝るか」

欠伸をしながら、そうぼやく。何せ昨日は事後処理に追われて、あまり寝ていない。そう考えた俺は、転移魔法を発動させた。

ピリリリリリリッ

「……ん」

耳元で鳴り響くけたたましい音に、目が覚める。

「もう、時間か」

ぼやけた頭でそうぼやきながら、携帯に手を伸ばして、異変に気付いた。窓から差し込む夕日が眩しい。目覚ましは、夜に鳴るようセットしたはずだったが……。

画面を開いて見て、納得した。

『花園 舞』

通話ボタンを押す。

「もしもし……」

『ど、どうしたのよアンタ。声ガラガラじゃないっ』

携帯越しに、舞の驚きの声が響く。

「ああ、今まで寝てたんだ。心配するような事じゃない」

『……ね、寝てたって。アンタ、まさか本当に学校サボってた訳じゃないでしょうねえ』

「んなわけあるか。ちゃんとやる事はやったよ」

潰しにかかるのは、これからだけどな。

『……ねえ、聖夜。この後って、何か用事ある?』

「あん? ……。 ……別に無いけど」

「そう何度も口を滑らせてたまるか。」

『ち』

「今舌打ちしたよな!？」

『んんっ。そんな事よりも、聖夜。用事ないなら、少し付き合ってくれないかしら』

「……何の用だ?」

『19時に、教会で。遅れちゃダメよ』

「は? この電話で話すんじゃ駄目なのか?」

『そうそう。可憐も来るから』

「へ?」

『じゃ、そういう事で』

「ちよっ 待っ」

ぶちっ

電話は、一方的に切られた。

「……」

19時? 教会? そこで起こるドラマは一体なに? それに…

…。

「いつの間に、下の名前で呼ぶ仲になったんだ……」

確か舞が可憐を呼ぶときは、フルネームで呼び捨てだったはずだ。それが、下の名前で呼んでおり、拳句待ち合わせ場所に来る事を受け入れているかのような口ぶり。

「……」

……正直、嫌な予感しかしないな。

日はとっぷりと暮れ、そろそろ夜の19時になるうかという時間。指定された教会の元へと歩く。転移魔法で跳んでも良かったが、そ

んな気分にはなれなかった。舞だけじゃない。可憐がその場にいるという事実が、俺の脚の重さに拍車を掛ける。

「……いつたい、どんな顔して会えばいいんだろうな」

どんな顔も何も。ひたすら謝り続けるしか方法はないわけだけども。

しかもその後は、誘拐犯の残党狩りだ。どれだけ俺はテンションを落とせばいいんだろう。

「……はあ」

思いがけず、重いため息が漏れた。

「なーに黄昏てるの？ 若人よ！！」

「うおっ！？」

話し掛けられるとは思っていなかった。下を向きながらとぼとぼと歩いていた所に突然声を掛けられ、思わず後ろへと飛び退く。

「ちよ、ちよつと……。そんな後退しないでよ。流星に傷つくわ」

「え？ あ、すまん」

そう謝りながら、声の主に目を向ける。そして、びっくりした。

舞や可憐、咲夜といった知り合いを持ちながらも、目を見張る程の美人がそこに立っていた。髪は銀髪で流れるようなウェーブが掛かっており、腰あたりまで伸ばしている。バランスの取れた健康的な女性ライン（それでも出るところはしっかりと出ているが）。綺麗な青色の目をしている。話し掛けてきた女子生徒は、口元に優雅な笑みを浮かべながら、俺の様子を伺っていた。

「こんな時間にこちら側へ何の御用かしら？」

「……こちら側？」

その微妙な言い回しに、思わず聞き返す。

「だって、こつちには教会と生徒会館しか無いわよ？ まさか、迷ってるわけじゃないわよね？」

「まさか。それを言うなら君もだろ？ 女の子1人、こつちから戻ってくるなんて、何してたんだ？」

「えっ！？」

……へ？ 俺の問いかけに、目の前の女子生徒が目を真ん丸にして驚いている。俺、そんな可笑しな質問したか？

「お、おい。大丈夫か？」

驚愕したまま固まる女子生徒に、恐る恐る声を掛けてみる。

「……へ、平気よ。私の頑張りが、まだまだだつて痛感しただけだから」

女子生徒が、苦笑いしながらそう応える。……微妙に話が食い違っている気がするのはいのせいだろうか。

「ま、折角だしお互いの詮索は無しにしましょう。そっちの方が面白そうだしね」

「？」

面白そう？ 何の話だ？

「じゃ、門限にはちゃーんと戻るのよー」

「あ、おい」

女子生徒はそれだけ告げて俺の横をすり抜け、駆け足で階段を下つて行った。女子生徒が付いていたのだろう。僅かな香水のような香りと、俺だけが取り残される。

「……何だつたんだ？ 今の」

そう呟きながら、ふと時計を見て気付いた。

「あ、時間……」

重い扉を開き、中へと踏み入れる。呼び出した張本人・舞は既にそこにいて。同じく来ると伝えられていた可憐も、その隣に立っていた。

「来たわね」

俺の姿を捉え、舞が口を開く。流石はお嬢様と言ったところか。色ガラスから差し込む月明かりと、神聖な空間である教会に、2人の姿はとても映えて見えた。

「お待ちしてりました。中条さん」

隣に立つ可憐が口を開く。

「遅れてすまない」

「別にいいわ。急に約束させたのは、こっちだし」

俺の謝罪に、舞がそう答える。

「……それで、俺をここに呼び出したのは」

そう言いかけたところで、可憐がゆっくりと足を動かした。スタスタと、中央の通路を通り、俺の元へと歩み寄ってくる。

……やっぱり、その話か。何となく、予想は付いていたし、早めにケリを付けておかねばならないものでもあった。

可憐が、俺の前で立ち止まる。向こうが口を開く前に、頭を下げた。

「ごめん」

「え？」

「お前たちの信頼を、裏切ってごめん。護衛だという事を隠して、ごめん。……本当に、ごめん」

「……」

深く、頭を下げる。応えは返ってこない。いや、そもそもそんなものを期待する権利すら、今の俺は持ち合わせてはいない。本当なら、もっと早く謝るべきだったのに。

教会内は、静まり返っている。誰も、物音を立てない。可憐からの返事も返ってこない。それでも、向こうが何かをするまでは、絶対にこの頭は上げてはいけないと思った。

「……中条さん」

しばらくして。可憐が口を開く。

「顔を上げてください」

「……」

「人と話しをする時は、ちゃんとその人の目を見て。最低限の礼儀ですよ？」

「……」

そう言われてしまうと、下げたままにするわけにはいかない。ゆつくりと頭と共に目線も上げていく。ばつちりと可憐を目が合った。笑っていた。

「最初に、謝って頂けて嬉しかったです。私は、貴方を許します」

「……え？」

何を言われたのか、最初分からなかった。

「護衛というお話を最初に聞いた時には、確かに許せませんでした。同年代の子から特別扱いをされず、普通に会話して貰えるなんて初めての経験でしたから。この縁は、絶対に大切にしようと思ってたんです」

それなのに、俺はその縁を躊躇いなく否定してたってわけか。

「だから、許せなかった。いえ、この言い方には少し語弊がありますね。正確に言うならば……」

少し、その先を発言するのに戸惑う素振りを見せる。けれど、その先何が言いたいのかは、直ぐに分かってしまった。俺の表情から、悟られた事に気付いたのだろう。可憐は苦笑して、気を取り直したかのように続けた。

「悲しかった、のでしよう。あの時は咲夜の事を危惧するように言いましたが、私もでした。貴方へ向けたはずの信頼は、何も無かつたかのように跳ね除けられ、ショックだったのです」

「……すまん。あれは、俺の言い方が……」

「いいえ」

俺の弁明に、可憐は静かに首を振る。

「違いますよ、中条さん。あの場での、貴方の発言と行動は正しかったです。咲夜が誘拐されていたかもしれないという状況で、私はこの件に関して感情的になるべきでは無かったです。優先順位をはき違えていたのですから。結果として中条さんが止めてくれなければ、私は単身で体育館に飛び込み、敵の思う壺になっていたでしょう」

……それは否定できないが。

「だから、いいのです。契約に関する話も、お父様から聞きました。

この件に関して口止めをしていたのはお父様であり、貴方ではどうする事もできなかった。そうでしょうか？」

「……俺は。……俺は、お前たちを騙っていた事について、人のせいにするつもりはないが」

「ええ、そうですね。だからこそ、咲夜も貴方に心を開いたのでしょうか」

訳知り顔で、可憐が頷く。

「もし……。貴方が護衛秘匿の件に関して、契約のみを理由に弁明されるようでしたら、私は許さなかったかもしれませんが。例えそうであったとしても、私と咲夜にとってはそれ程重要な事だったからです」

「……」

無言で頷いて、先を促す。

「けれど、貴方は最初に謝ってくれました。誠実に。だから、許します。咲夜、貴方に避けられて悲しそうな顔をしてましたよ？ これからも、良き縁を築いて頂ければと思います」

……屋敷で報告していた時の話か。確かに、逃げる様に泰造氏の書齋を飛び出したからな。

「……分かった」

「ふふ。約束ですよ？ 嘘を付いた件に関しては貴方を許しましたが……。あの子の友達に相応しい方であるかどうかは、姉としてきちんとチェックさせて頂きますから」

「……。……あ、ああ」

咲夜とのやり取りには、十分注意しておく事にしよう。

「その不自然な間は何」

「ちよつと舞は黙っててくれるか」

ジト目の舞をしっしつと手で払う。

「もちろん、私の事も今後ともよろしくお願いしますね」

「ああ、もちろん」

可憐と握手を交わす。

「ふふっ。取り敢えず、これでこの件に関しては解決って事でいいかしら」

うんうんと頷きながら、舞がそう口にする。

「はい」

「ああ」

お互いに、頷き合う。

「さて、じゃあ本題に入りましょうか」

「これが本題じゃねえのかよ!？」

舞の問題発言に、思わず声を張り上げる。

「これもあるけど、メインはこれからよ」

マジかよ。これが前菜だったのか？ 可憐を見ると、確かにこちらにも思いの外真面目な顔をしている。俺、他にも何か悪い事してたっけ？

しかしその疑問は、次の可憐の一言で綺麗に一掃された。

「今回襲撃してきた方々の、リーダーとの一戦。私たちも参戦させて頂きたいのです」

「……」

……は？ そりゃいったい何の冗談だ？

第14話 突撃

「沈黙は肯定と取っていいのかしら」

「いいわけねえだろ」

舞の発言を払う。冗談じゃ無い。

「ふざけてんのか？ お前を、可憐を。敵の本拠地に連れていく？

冗談にしちゃ笑えないな」

「冗談ではありません」

可憐が真顔でそう口にする。冗談じゃ無い？ はっ、尚悪いわ。

「中条さんが、単身で1人。襲撃して来られた方々のリーダーと相対するところを、黙って見送るわけにはいきません」

「あのなあ……」

可憐のそういった考え方も嫌いじゃないけどな。俺はボリボリと頭を掻きながらため息を付く。

「お前らの間に何があったのかも興味あるが、一先ずそんな事はどうでもいい。何をそんなに結託して俺について来ようとしているかは知らないけどな、無駄だ。俺はお前らを連れて行くつもりはない」

「な、なぜですっ」

俺の断言に、可憐が驚きの声を上げる。ちょっとだけ、イラツときた。

「安い友情ごっこで敵を一掃できるのはな、フィクションの世界だけなんだよ。お前を狙った奴らが息巻く世界で、そんなものは無用の産物でしかない」

たった今頭を下げた相手に対して使う表現ではないが、しょうがない。下手な友達意識、助け合い精神で連れて行って捕まったら、目も当てられん。

「む、無用の産物って……」

可憐が悲しそうな顔をする。

「撤回する気は無いぞ。これについては、本心からそう思ってる。」

友達意識の付き合い感覚で連れて行って欲しいと言うのなら、やめておけ」

それだけ告げて、踵を返す。返答なんざ聞く必要も無い。これで可憐との関係がギクシャクするようになるのなら、それは仕方の無い事だ。そう思いつつ、教会の扉に手を掛けたところで。

「言いたい事は、それだけかしら」

舞から、お声が掛かった。

「あん？」

体ごとは振り向かず、顔だけ向けて先を促す。

「無用の産物。結構じゃない。その安い友情を、大切に胸に仕舞って行動してるアンタのセリフじゃないけどね」

「……何だと？」

自分でも、思考がスツと冷えた事を自覚した。

「敵を殲滅する事が目的なら、なおさら私と可憐は連れて行くべきだわ」

「抜かせ。誘拐対象者を連れて行く事に、どんな正当性がある」

「だから、アンタそれもう理由にならないから。狙われているのは

“魔力の高い学生”なんでしょ？」

「今回狙われてんのは、可憐じゃねえか」

「だから、そこよ」

「言っている意味が、分からねえな」

俺の言葉に、舞がはあとため息を付く。無性にむしゃくしゃした。

「確かに、今回狙われたのは可憐よ。それは間違いない。可憐の携帯の番号を不正入手して、咲夜ちゃんをネタに体育館へ誘き寄せようとした。まだ入手経路は調査中だけど、今のご時世、番号なんて平気でお金と取引されてるからこの点に関しては不思議じゃない」

「……で？」

先を促す。肝心の結論が見えてこない。

「今回、狙われているは可憐。間違いないわ。狙われているのは可憐よ」

「だからそう言っただけじゃねえか!!」

思わず吠える。突然声を張り上げた為、可憐がびくりと肩を震わせるが、今はそれに構ってやれるほど心に余裕が無かった。

「分かっているじゃない」

「ああ!？」

「狙われているのは可憐。……なら何で、私を可憐と同じ立場で見てるの？」

「っ」

言葉に、詰まった。熱くなっていた体が、急に底冷えするような感覚。

俺の内心の変化に気付いたのだろう。舞が、これ見よがしにもう一度ため息を付いて見せた。

「誘拐されそうになった張本人を連れて行きたがらないのは……ま、理由としては次第点ね。けど、私は違うでしょ。私はアンタと同じ“魔力が高い学生”というグループに属するだけ。アンタの理由じゃ、私を連れて行けない理由にはならないわ」

「……それは……っ」

うまく言葉が出てこない。舞の言葉に、反論できる言葉が見つからなかった。

「アンタが体育館に乗り込む時は譲ったけどね。今度はそうはいかないわよ。花園家も事後調査で、今回の事件についてはいろいろと探りを入れてるからね。あの時よりも、情報は持つてる」

「……どうやってそんな事」

「私の家系がこの国屈指のものだって事、忘れてない？ 欲しい情報なんて直ぐに手に入るわよ。リナリーに、ウチの使いと襲撃者の下っ端が面談できるよう頼んだりしたしね」

……あの女あ。

「だから、そういう事よ」

舞がもう分かったでしょとばかりにそう言う。

「安い友情ごっこを抱えているのはどっち？ アンタが私を連れて行きたがらないのは、ただ私が心配なだけでしょ」

「……」

ぐうの音も出なかった。

「護衛対象者を連れて行くべきでは無い、ね。ご高説は結構よ。結局、アンタは私と可憐をこの件から遠ざけたいだけ。理由なんてどれでも良かったんでしょ」

「てめえ……」

言わせておけば。舞に向かって一步を踏み出そうとしたところで。

「……中条さん」

可憐が、俺の名を呼んだ。

「私たちも、連れて行って下さい。絶対に……。お役に立てますから」

「……可憐」

半ば呻くように口を開く。

「お前は、そんな事を言える立場なのか？ 分かっているはずだ。

これは、お前を守るための戦いなんだ」

その言葉に、可憐が俯く。しかし、口は閉じなかった。

「……はい、分かっています」

「なら」

「それでも、です」

「何だと？」

可憐が顔を上げた。

「それでもです。貴方がおっしゃっている事は、分かっているつもりです。でも……。それでも。私は一緒に行きたいです」

「……」

思いの外強い断言に、一瞬圧倒される。同時に、少し興味が湧いた。

「……じゃあ、お前が戦いたいと思う理由は何なんだ？」

「え？」

「そうまでして参戦したいと言う、お前の動機は何なんだ？」

俺の言葉に、可憐は一度目を瞑る。恐らく5秒にも満たなかっただろう。可憐はゆっくりと口を開いた。

「私、お友達がいないんです」

……。衝撃の告白をされた。まあ、正面切つて言われてなかっただけで、今までのやり取りで十分分かってたけどさ。

「私は、お嬢様ですから……。日本有数の名家に生まれ、不自由無い生活を送る……。自分の立場が、人よりも恵まれている事は自覚しています。……。それでも私は、“普通”が欲しかった」

「……。ここで参戦する事が“普通”だと、俺は思わねーけどな」
どれだけ殺伐としたライフスタイルだ。

「私も、こうした戦闘が普通だとは思っていません」

「……。言ってる意味が分からねえな。じゃあ、お前のここで言う“普通”ってのは一体何だ」

「その質問にお答えする為には、中条さんに1つ問わねばなりません」

「あん？」

眉を吊り上げて、先を促す。

「貴方が、私を守る為に戦って下さる理由は何ですか？」

……。は？

「……。昨日から、何度も言っただけだったか？俺は、お前の護衛だからだ」

「はい。私がお嬢様だからですよ」

「へ？」

「“魔力が高い学生”が狙われる。これだけ見れば、この学園に通う生徒のほとんどが対象になるはずですよ。ここは有数の名門校ですから。けれど、護衛を雇っているのは私だけ。これは、私がお嬢様だからですよ」

「……。今回狙われているのはお前なんだが」

「それは結果論です。お父様が貴方をお雇いになった時点では、まだそれは分かっていなかったと聞き及んでいます」

……。確かに、そうだな。

「他の方々と同じ条件下にありながら、私だけが護衛の対象になった。これは、私が特別扱いを受けているからですよ？」

「……そうかもな」

まあ、そういう事になる。

「この私の我が儘が、中条さん含め様々な方に迷惑を掛ける事は分かっています。……でも……」

可憐の肩が、ぶるりと震える。

「も、もしかしたら……思っ……し、しまったんです」

目尻から、ぼたりと涙が零れ落ちた。

「貴方と出会って、も、もしかしたら……私も友達が作れるのかなって。も、もしかしたら。私も他の方々と同じように、特別なんかじゃない。普通の……ただの姫百合可憐として……見てくれるのかなって」

「……可憐」

普段の彼女からは想像できぬ感情の吐露に、隣に立っていた舞が可憐の肩を抱く。可憐は嗚咽を漏らしながら、舞の胸に顔を埋めながらも叫んだ。

「ここで貴方に甘えてしまえば！ 結局私は、何も変わらない！ 折角、私の事を見てくれる人が現れてくれたのにつ！ その人からも特別扱いを受けてしまえば！ 結局、私は姫百合一族の令嬢でしか無くなってしまっ！」

「可憐、お前……」

俺の何気無い仕草は、可憐の感情をここまで揺り動かしていたのか。

「だ、だから……っ」

顔を上げ、可憐が真っ直ぐに俺の方を見る。

「お願いします。私はどうしても、ここで引きたくない」

力強く、宣言された。

「貴方とは、対等なお付き合いがしたいから」

「……」

沈黙が、辺りを包む。可憐は、言いたい事は言ったという顔で、俺の顔を見ている。舞も、俺の次の言葉を待っているようだった。

何を甘えた事をと。可憐の考えを一蹴出来ないのは、俺もまだまだガキという事か。こうした事で感情に左右されるのは、一番やっ
ちやいけない事なただけだな。

「……しようがねえなあ」

頭を掻きながらそうぼやく。ちらりと可憐へ目を向ければ、目尻を腫らしながらも期待の眼差しでこちらを見ていた。

「舞」

「何？」

急に矛先を変えられたにも関わらず、舞は直ぐに反応した。多分、俺がする質問も大方想像が付いているんだろうな。

「可憐は、どうなんだ？」

曖昧な聞き方。それでも、舞には十二分に伝わったようで。

「強いわよ」

その一言だった。まあ、色々噂は聞いてたけど。

「魔法実習では2回戦ったけど、決着つかなかったしね」

ほう。舞の実力はある程度把握しているが、まさかそれについてこれるレベルとは。力量としては、申し分ないところだが。

「1つ、当たり前前の事を言っておく」

俺のその前置きに、舞と可憐は各々の姿勢を正した。

「実践と実戦。同じように聞こえるが、中身は全然違うぞ。緩衝魔法なんてものは、当然張られていない。敵の魔法を喰らうって事は、死ぬって事だ。その辺分かってるか？」

「ええ」

「……はい」

舞は速攻で。可憐は、やや躊躇いながらもこくりと頷いた。ま、

そんなもんか。「死」なんて言葉、普通に生活してりゃ、中々出てこない。多分今も言葉では分かっているけど、頭では解っていないんだろ。

まあいい。敵の力量を見て、少しでもヤバいと感じたら、本人たちの同意なく転移魔法で強制的に離脱させるという手もある。

「ついてこいよ。……その代わり。足、引っ張るんじゃないぞ」

「ええ！」

「は、はい！」

舞と可憐が、力強く頷く。2人で顔を見合わせ、手を合わせて喜んでた。おーおー。すげー良い笑顔してやがる。本当なら、その情熱をもっと別の方向へ向けて欲しかったけどな。

「ったく……」

呆れた声を出しながら、舞をジト目で睨んでやる。

「ことういった事は、本来ライセンスを持つ魔法使いの仕事なんだけどな」

「アンタだって、リナリーについてアメリカで仕事してるとき、ライセンス持ってなかったんでしょ」

ああ、そうだよ。どうせそう言われると思ったから、今まで言わなかったんだよ。

喜び合う2人を尻目に、俺はもう一度だけため息を付いた。

多分、泰造氏にバレたら殺される。それは予感であり、同時に確信でもある。そりゃそうだ。自身の愛娘を深夜に無断で全寮制の学園から連れ出し、向かう先は何とその愛娘を誘拐しようとする目論んでいる敵のアジト。どうしちゃったのかな？ 頭でもぶつけて気が狂っちゃったのかな？ 少し前の俺なら、今の俺の行動を見てそう言うだろう。間違いないね。今でも自分が信じられん。

「……凄いです。まさか私も一緒にテレポートできるなんて」

学園の正門の先、つまり敷居外へと転移したところで。可憐は、感動した様子を隠そうともせず、にそう呟いた。珍しい訳でもないだろうに、周りの風景をきよろきよろと見渡している。

「聖夜、可憐に転移魔法の事は話してたの？」

「……いや、目の前で使った記憶はあるが、話してはいない」

可憐の転移魔法と言う希少な魔法に対する呆気の無い受け入れに、舞が訝しげな視線で俺に問うてくる。

「見れば直ぐに分かります。身体強化の類じゃ説明できない動きもされていたのですから」

「……そりゃそうか」

直ぐに分からない集団もいたけどな。案外、俺が助けに入らなくとも可憐1人で返り討ちにできたかもしれん。

「で？ どつちよ」

「歩くと結構あるぞ。俺も行った事ないから、転移魔法は使えないからな」

「あ、行った事無い場所には行けないんですね」

「ああ」

可憐の質問に肯定する。もう隠しておく必要もないし。

「じゃ、タクシーでも拾いましょう」

「え？ えーつとですね、俺は」

「ああ、はいはい。お金無いのよね？ 大丈夫、出してあげるから」

「お金無いんですか？」

「……はい」

情けなさすぎる。

「では、私も出しましょう」

「いいわよ。割り勘しなくてもこのくらい」

「で、ですが」

「いいからいいから」

「でも……」

「……あ、あの……さ」

「何？」

「何でしょう？」

「お金、入ったら払います」

結局。タクシー代は舞持ち。但し、今回の件での報酬が入り次第俺が返すという形となった。舞は「別にいいのに」とか言っていたが、男の甲斐性としてそこは譲らなかつた（お金を借りてる時点で既に甲斐性とか言う資格無いかもだけど）。

行き先が行き先だったので、目的地までは行かずに少し手前で車を停めて貰う。運転手からは、さぞかし奇特な光景として映っていた事だろう。深夜に呼び出され向かった先に居るのは3人の魔法服を来た男女。そして訳も分からんところで停車、支払いが済んだら無用ときた。停車場所は、目的地には成り得ないような只の道。「お帰りは大丈夫ですか」という問いに舞が「平気です」と答え、運転手の頭には更なる「？」マークが浮かんでいた。そりゃそうだ。こんな辺鄙なところから帰る手段があるのなら、行きもそれを使えという話。ま、帰りは俺の転移魔法頼りなわけだから、向こうは分からなくて当然なだけだよ。

「……何よ。これから乗り込もうつてのに考え事？」

「いや、何でもねーよ」

舞からの問いかけに、首を振って答える。視線を正面に移した。茂みの隙間から見えるそこに立つのは、古びた廃工場。時間が時間という事もあり、気味悪さに拍車が掛かっている。明かりが見えないところを見ると、本当に寝静まっているか漏れないよう工夫されているかのどちらかだ。

「それで、どうなさるんですか？」

「どつって？」

可憐の質問に、質問で答える。

「え？ それはその……作戦、とか」

「ねーよ。正面から踏み入る。目に留まった奴からボコす。敵がいなくなるまで続ける。それで終わりだ」

「……」

啞然とした目で見られた。

「すまん、嘘です」

「……随分と余裕なんですね、中条さん」

ジト目で睨まれた。一応、そんな感じで昨晚の体育館騒動は片付けたんだけどな。それにしても、可憐にこんな表情ができるとは。新発見だ。

「で？ どうするのよ」

「ああ、まずは相手のボスを抑えたい。下っ端はその後だ」

「？ 普通、逆の順序を辿るのでは？」

俺の答えに、可憐が首を傾げる。

「そうなんだが、捕えた男から微妙な情報を貰っててな。もしかすると、相手のボスは転移魔法が使えるかもしれない」

「はあ？」

舞が、何言っちゃってんのみたいな声を出した。

「転移魔法？ 聖夜、アンタそれ信じてるの？」

「……言ったらう。微妙な情報だってな。だが、可能性が少しでもあるのなら、用心するに越したことは無い」

「では、私たちは？」

可憐からの問いに、少し考えてから答えた。

「雑魚は任せる」

「……え？」

「ふふ。そうこなくちゃね」

きよとんとする可憐と、強気な笑みを浮かべる舞が実に対照的だ。「転移魔法の有無に関わらず、敵のボスは俺が引き受ける。あの程度のレベルの刺客しか送って来なかった時点で、この組織の底は知

れている。周りの雑魚共は任せた。その代わり」

一旦切って、2人を見る。

「1人も逃がすんじゃねえぞ」

「分かつてる」

「……分かりました」

「舞、可憐からは離れるなよ」

「もちろん」

「わ、私は平気で」

「お前には、別の確認が必要だ」

「？」

可憐の言葉を遮って、口を開く。

「“やれる”んだな？」

何がかは、言うまでもない。非情に、なれるのかという事。敵に情けをかけ、自分たちの立場を危険に晒す真似は許さない、という事。

「！……やれます。弁えているつもりです」

「……そうか」

完全に安心できる回答、とまではいかなかったが。まあ、こんなものか。自分の性格をそう簡単に変えられるはずもない。元来、戦闘には向かないタイプって事だ。

「さて」

俺が廃工場を見ながらそう呟いたのを見て、2人の表情も固さを増した。

「まずは、偵察だな。舞」

「ええ、分かつてるわ」

舞の答えと同時に、肩からぴょんと飛び降りる2つのぬいぐるみ。

「あら……？ 舞さん、この魔法って……」

「気付いた？ 流石ね」

可憐の言葉を聞いて、舞が感心した声を上げる。

「今私が使ってる魔法は、属性付加による操作魔法じゃないわ。そ

れだと、感知タイプの魔法使いには直ぐバレちゃうからね」

「では、舞さん。貴方も？」

ちらりと俺の様子を窺ってから、可憐が問う。それに対し、舞は躊躇う事無く答えを提示した。

「ええ。私は非属性・無系統“操作”魔法を持ってる」

「……非属性を」

「ええ」

「い、いいのですか？」

「？ 何が？」

「舞さんだけでなく、中条さんなのですが……。私に、そんな大切な事を知らせてしまって」

非属性を持つ魔法使いは、ほとんどの場合その事実を隠す。他の者には扱えない自分だけの武器というのは、戦闘を行う上でこの上なく有利に立てるし、その特異性から対策も立て難い。それが前以って知らされた情報では無く、初見の相手ならば尚更だ。

また、それだけではなくこの属性の希少性からも、隠したがる者は少なくない。理由は簡単。その希少さ故に、どの組織・機関でも喉から手が出るほど欲しい能力だからだ。魔法警察等、公共機関からのアプローチならまだ良い。それこそ、今回可憐たちを誘拐しようとしたような組織から目を付けられたら、もう終わりだ。その組織が壊滅するまで追い掛け回されるだろう。

可憐が躊躇いなくその能力を明かす俺と舞に狼狽するのは、そういった意図からだろう。舞もそれが分かっているからこそ、これ見よがしにため息を付いて見せた。

「可憐」

「は、はい」

「アンタ、色々と考えすぎ」

「……え？」

舞の発言に、可憐が首を傾げる。

「別に隠す必要なんて無いでしょ。聖夜も、アンタも。と……仲間なんだから」

「ま、舞さん……」

その言葉に、感動したかのような声で可憐が呟く。素っ気なく伝えようと頑張つて、失敗した感じ。舞は明後日の方向を向きながら、髪を弄り倒している。本当は何が言いたかったのかも分かっていたが、口には出さなかった。多分出してたら、敵からも容易に察知できるであろう魔力がこちら一帯に吹き荒れることは必至だ。

第三者の視点からは、見ているだけで恥ずかしくなるようなやり取りだった。思いの外可憐には良い影響を与えたようだった。

「……ならば、私も。お2人の期待には応えねばなりませんね」
キユウウウウウン

可憐が、MCを起動させながらそう口を開く。

「中条さん、大丈夫です。私、ちゃんと“やれます”から」

「……そうか」

可憐の宣言に頷いたところで、舞が放っていた2羽のうさぎが戻つて来た。

「どうだ？」

「……入り口は2つ。前方の正面入り口と、反対側に裏口。後、出入りができそうな窓はいくつもあるわ。廃工場って環境のせいね、ほとんどが割れてる」

「なるほど」

「正面玄関と裏口……。二手に分かれますか？」

俺が思案顔になったのを見て、可憐が提案してくる。

「いや……敵のボスの位置が分からない以上、それは無しだ。俺が裏口から侵入している間に、正面から踏み込んだお前らが先に遭遇してしまつたら、目も当てられん」

「じゃあ、どうするの？」

「舞、お前。ちゃんと持つてきたか？」

「もちろん」

そう言って舞はクマのぬいぐるみを取り出す。2つ。

「1つを裏口に配置しておけ。それで十分だ。俺たちは正面入り口から踏み込もう。俺はボスを見つつけ次第、そいつを抑えにかかる。周りは任せたぞ」

「分かった」

「……本当に正面突破でいくのですね」

「隠密に事を運ぶには、それなりの経験が必要だ。学園で少し成績が良い程度の生徒が、ぶつつけ本番でやってできるようなものじゃない。そんな付け焼刃の行動でリスクを背負うよりも、正面から堂々と戦闘に入った方が良い。魔法力の勝負になりさえすれば、こっちのものだ。お前たちは強い」

「……分かりました」

俺の言葉に、可憐が神妙に頷く。可憐の魔法はまだ一度も見た事は無いが、その身に纏う魔力の洗練さから分かる。ただ名家の令嬢として、才能に頼りきりの魔法使いではない。学園では舞と魔法大戦を演じていたようだし、その気になりさえすれば戦力として申し分ないだろう。

「じゃあ、いいな？　いくぞ」

「ええ」

「はい」

俺たちは、廃工場の入り口へと踏み出した。

第15話 “神の書き換え作業術” (前書き)

注意

若干の残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

第15話 “神の書き換え作業術”

ガラララララッ！！！！

「か、証拠品は何も残さぬよう注意して下さいよ。でない
と」

鉄の扉を横へとスライドさせ、正面玄関を潜る。中は開けた広間で煌々と明かりが照らされており、やはり外へは漏れ出ないよう魔法によって操作されていたようだ。全員寝静まっているなんて事はなく、皆大きな荷物やら何やらを持ち、右往左往している。俺が音を立てて扉を開いた事で（無論ワザと立てたわけではなく、古びて軋んでいた扉だった為やむを得ず）、ちょうど中央付近で周りに指しを出していた男が口を止めてこちらに目を向けた。

「……おや？ 君たちは何です？」

長い黒髪を掻き揚げながら、その男が問いかけてくる。

「あの声……」

舞が隣でぼつりと呟いた。そして、あの口調。間違いないな。

確信した瞬間には、転移魔法を発動していた。何を答えるでも無く。問いかけてきた長髪の男も、その周りで作業をしていた男たちも。誰よりも先に行動を開始した俺の拳は、長髪の男の顔面を容赦なく捉えていた。

「ぶぼっ！？」

何の抵抗も無く拳を受け入れた長髪の男は、そのまま後ろへと吹っ飛び、奥にあった扉をぶち破って倒れた。

「ボ、ボスっ！？」

「な、何なんだてめえっ！？」

周りの男たちが一瞬で殺気立つ。ぐるりと見渡してみて、分かった。こいつ等、戦闘は完全に素人。魔法使いとしてのレベルも底辺もいとこだ。あの女の予想は外れたな。こんな低レベルの誘拐グループを、あの女が危惧するはずも無い。

俺は構う事無く、自身の足を奥の壊れた扉へと向けて歩き出した。お前らの相手は、俺じゃない。相手のレベルによっちゃ俺が全て片付ける予定だったけど、アイツ等だけで十分やれそうだった。

そう考えた直後、立て続けに鈍い音が5、6発鳴り響く。同時に男たちの呻き声と悲鳴が上がった。ちらりと後ろに目を向けて見れば、想像通り舞のクマが男たちをタコ殴りにしているところだった。「余所見してる暇なんて無いわよ!!! アンタたちの相手は私たちなんだから!!!」

舞が得意気にそう叫ぶ。エメラルドグリーンのクマは、非属性無系統“操作”魔法に加えて、その身に巨大化の魔法も掛けられており、もはや並大抵の魔法使いでは手に負えない程の凶暴さを発揮していた。

「ぬいぐるみにボコボコにされる大の男たちってのも、なかなかシユールな光景だな」

……一先ず、こちらは問題無い。寧ろアイツ等にとって、良い実戦経験になりそうだった。クマを襲う魔法球は、可憐の精密なコントロールを受ける魔法球によって、全て撃ち落とされている。舞もその分開いた手で魔法球をぶっ放し、次々に男たちを仕留めていた。

この分だと、制圧までに5分も掛からないかもしれない。頼もしい限りだよ。

「あん？」

そう思いつつ、壊れた扉の先へと踏み入ったところで。先ほど殴り飛ばした男が、そこに居ない事に気が付いた。

「……何だ。まだ動けたのか」

舞と可憐によって乱闘騒ぎになっている広間とは違い、扉の先の細い通路は電気が落とされ薄暗い。耳を澄ませてみれば、後ろのどんちゃん騒ぎではなく、左前方の鉄階段からカンカンと小気味のいい音が響いていた。

「転移魔法ねえ」

ホントに持つてるなら、それ使って逃げろよ。俺は苦笑しながら、

その階段へと足を掛けた。

聖夜が広間から姿を消した頃には、“既に”戦闘は終局へと向かっていた。

「可憐、そつちに2発いったわ！」

「平気です！」

可憐が飛んでくる魔法球へと掌をかざす。瞬間。可憐の正面には無詠唱で障壁が展開され、迫りくる魔法球2発は音を立てて砕け散った。

「ルー・ループラ・ライカ・ラインマック」

「呪文詠唱なんざ、させるがぶっ!？」

舞が呪文詠唱により無防備になったところを襲おうとした男。しかし、行動に移すより先に、エメラルドグリーンのクマに殴り潰された。

「“ファイン・ランス”!!」

舞の掲げた手の先。頭上には強大な魔力を纏った5本の炎の矢。問答無用で放たれたそれは、前方で構える男たちを容赦無く吹き飛ばした。

「ぎゃああああああっ!？」

「ぐわああああああっ!？」

それは、男たちに残る微かな戦意すら消失させるには十分すぎる威力を持っており。

「ひっ!？ 何なんだ、コイツ等!!」

「ただのガキじゃねえっ」

そう叫んでいる間にも、仲間はずんずん減っていく。50人近く居た男たちは、突如現れた2人の魔法使いによって成す術無く蹂躪されていた。圧倒的な実力差を見せつけられ、勝敗は結果を見るまでも無く明らかに。だからこそ。

「逃げる！！ 俺たちじゃ、こいつ等に敵わねえ！！」

そういつた思考に流れるのは、致し方の無い事であると言える。

「あ、ちよつと待ちなさい！！」

四方八方へと散らばる男たちを、舞の魔法球とクマが襲う。が、手数が足りない。無論広間にも窓は付いており、そこからの出入りも自由。男たちは、それぞれが分散する事で1人でも多くの人間が逃げられるよう賭けに出た。

そして、結果から言えばそれは失敗に終わった。

「スイー・サイレン・ウィー・クライアーク」

「な、何だ？ このキラキラ光ってるやつは……」

逃亡を図っていた男が呟く。広間を覆うように散らばる光は、照明に照らされ幻想的な風景を作り出していた。

「……氷？」

誰かが、そう呟いた瞬間だった。

「“フリージア”」

その言葉と同時に。広間に点在する全ての窓に、氷の花が咲いた。

「な、何だっ！？」

「あ、くそっ！！ 開かねえ！！」

窓全体を包み込むように咲いた無数の氷の花たちは、男たちの脱出経路を容易に塞いでいた。

「……可憐？」

この現象を作り出した人間に逸早く気付いた舞が、その人物の名を呼ぶ。可憐はそれに頷きで以って応え、普段の彼女からは想像できぬ怪しげな笑みを浮かべた。

「この空間は今を以って私の支配下となりました。皆さん、抵抗は

止して下さいね」

日本有数の名家・姫百合家の血縁のみが発現できるとされている、氷属性。それは、現代魔法では解明できぬメカニズムによって発現される属性魔法。この魔法によって、姫百合家現当主・姫百合美麗ひめゆりみれいは、世界中から“氷の女王”と称されるようになった。その神秘のベールに包まれし属性魔法が今。

姫百合可憐に発現していた。

ゴオオオオオオン
キイイイイイイインツ

階段を上がった先。頭上にて重い何か動く音と、MCを起動した時のような特有の甲高い音が鳴り響く。ただ、MCの起動音ではここまで響くほどの音量は無い。つまりは、それに似た何かが発動したという事になるが。

「へえ。廃工場に、こんなものを作っているとはな」
階段を上りきった先。目の前に広がる光景に、思わず感心してしまった。

長髪の男が逃げ込んだと思われる、硬い鉄の扉。その扉から広がり、その部屋を囲う壁全てに施される精密な防御魔法陣。ちよつとした簡易シエルターだ。

「情けない」

思わずそう呟く。自身の部下たちは、下で必死に抗っているというのに。そのボスは一撃で戦意を失い、仲間を見捨てて籠城か。転移魔法を操るだど？ 冗談だろ？ 本当に操れるのなら、こんな逃げ腰になんてならないと思うのだが。

足を動かしながら、座標を固定した。ワザと、魔法陣が描かれて

いる扉に“重なるように”。

ズバンッ

転移魔法を発動した瞬間。重なるように転移された掌を中心に、鉄の扉が真つ二つに割れる。重い音を響かせながら、2枚になった鉄の板は地面へと転がった。

「ほう……」

その光景を内側から見ていた男は、驚いた声でそう漏らした。

「結構嚴重な魔法陣を組んでいたつもりだったのですがね」

「そうか？ まるで手ごたえがなかったが」

「ふふふ。口だけは達者のようだ」

男が笑う。思ったより余裕があるようで。正直、少し拍子抜けした。

「鬼ごっこは、ここまででいいのか？」

「そうですね。ここなら、部下の目には入らないですし」

「？」

俺の問いに対して、曖昧な答えを返してきた事に首を傾げた。

「何か見られたく無い事でもあんのか」

「まあ、そんなところですよ」

俺に殴られた鼻を拭いながら、男が答える。手の甲が、じつとりと血に塗れていた。

「貴方も馬鹿な少年だ。3人で来たのなら、先に下を片付けてから全員で私の元へ来ればいいものを」

「アンタの魔法に転移魔法がある、と。捕えた男から聞いていたものでね」

その言葉を聞いて一瞬男は固まった後、何が可笑しかったのか腹を抱えて笑い出した。

「あはははは。なるほど、なるほど。それで目を離した内に転移されぬよう追って来たわけですか」

「ご苦労な事です、と言いながら男はせせら笑った。

「その情報を持ちつつも単独で私の元に来ようとは。やはり只の馬鹿のようですね」

「そうとも言えないんじゃないのか？」

「どつという意味です？」

男が顔をしかめる。

「アンタは、部下の前で魔法を使おうとはしなかった。その理由があるんだろ？ 転移魔法が使えない事がバレるのでも恐れたか？」

その言葉に、男は一瞬目を見開いた。

「ふ、ふふ」

怪しげに笑う。

「何か可笑しいか？」

「……いえ？ では、なぜ私は部下に転移魔法が使えると思われていると？」

「知った事か。大方、身体強化魔法が優れてるとかじゃないのか？」

「……まったく。可愛げのない餓鬼ですねえ」

そう言いながら、男は身体強化魔法を発動させた。バチバチと、鋭い音が鳴り響く。

「雷の属性付加か」

「ええ、そうです」

事も何気にそう答えてきた。

「雇ったのは皆、魔法使いの中で愚図も良いところのレベルでしたからね。正直、私ともう1人。あちらは既に捕えられてしまってますが……。2人さえいれば、令嬢1人の誘拐など楽だと思ったのですよ」

既に捕まった男。つまり、あのリーダー格の男か。

「残念だったな？」

「ええ、まさにその通りです。その男も、あまり腕利きとは言えませんでしたけどね。私の身体強化魔法を見て、転移魔法と勘違いしていたくらいですから」

「そんなに速いのか」

その質問に、男がにやりと顔を歪めた。

「確かめてみるといい」

その声が聞こえた時には。既に男は、俺の眼前で拳を振りかぶっていた。

バキッ！！

頬を、殴打される感覚。防御に多少の魔力を回していたとはいえ、受け身も何も取らなかった俺は、そのまま後方へと吹っ飛ばされた。

「ぐ……」

壁に激突し、尻餅をつく。血の味がした。どうやら口の中を切ったらしい。

「……ぺっ」

口に溜まった血を吐き出す。もごもごしてみても、分かった。歯は折れてない。良かった。油断で歯の1本でも折って帰ったら、あの女にどれだけ笑われるか分かったもんじゃない。

「どうです？ 早いでしょう。先ほどの借りは返しましたよ。もっとも。あの時の貴方の動きなど、やろうと思えばいくらでも避けられたのですがね」

「へえ」

嘘付け。あの時使ったのは本物の転移魔法だぞ。見えるわけねえだろ。

部下の事を散々に言っていたが、こいつも大して変わらない。危険視する必要も無かったな。

「さて」

長髪を掻き揚げながら、男が勿体ぶる様に口を開いた。

「私の秘密を堂々と聞かれてしまったのです。君にはここで死んでもらいましょうか」

お前が勝手に喋っただけだな。

「何か言い残しておく事はありますか？」

悪者にびつたりセリフだな。ホント、つまんねえ奴だよ。

「ばーか」

そう告げてやると、男は静かに頬をヒクつかせて。
「自分の立場を、思い知らせてあげましょう!!」

身体強化を纏った足で、踏み出した。瞬く間に尻餅を付いたままの俺との距離を詰めた男は、再び拳を振りかぶる。

「よっ」

それに対して。俺も身体強化魔法を発動させる事で応戦する。向けられた拳を手の甲でいなし、弾く。そのまま開いた腹に蹴りをくられてやるうと、右膝を振り上げた。

が。

「はあっ!!」

男はその動きを読んでいたらしく、左足を構える事で俺の蹴りをガードした。

「やるね」

「舐めないで頂きたいものですねっ!!」

バチッ!!

その咆哮と共に、男の左手が雷を帯びる。あれは、当たると厄介だな。

「しっ!!」

「っ」

突き出された掌底を、仰け反る事で躲す。そのまま浮き上がった右足は、流れに逆らわずに振り抜いた。

「がっ!?!」

見事に顎を捉える。急所に一撃を貰い、男がよろめいた。

「もう詰みか? チェツク ぐっ!?!」

余裕ぶった発言をしたところで、頭の中がぐらりと来た。うまく避けたと思っただが、男の手に纏わりついていた雷を浴びていたらしい。阿呆か俺は。めちやくちゃ恰好悪いじゃん。

「ふ、ふふふっ!! ば、馬鹿め!! レイ・メイカー・ランぐぶおっ!?!」

「詠唱なんざ……させるか」

男がふらふらになりながらも得意げに詠唱を開始したところで、顔を蹴り飛ばしてやった。足の踏ん張りが利かなかった男は、そのまま後ろへと倒れ込む。

追撃を掛けようとも思ってたが、一度距離を置いた。思わぬ電撃を喰らい、こちらも本調子ではない。その間に男は、ゆっくりと床に手を付いて立ち上がった。

「……まさか、餓鬼の分際で私の身体強化についてこれようとは」「そりやついてくれるだろ。ト口過ぎた。止まって見えるぜ」

その言葉に、男の何かがキレた音がした。

「舐めるなよ！！クソ餓鬼があっ！！」

バチチチチチツッ！！！！

男の体から迸る電撃量が、ワンランク上がる。へえ、まだ本気じゃあ無かつたって事か。

俺の驚いた顔を見て、男は露骨に顔を歪めて見せた。

「ははははははつ。今更恐怖したところで、もう遅いですよっ！！」「貴方は、ここで殺すと決めたのですからっ！！」

高らかに笑いながら、そう宣言してくる。もう少し遊んでやっても良かったが、あの属性付加は頂けないな。まともに取っ組み合ったらこちらが痺れてしまう。

「……しょうがないな」

あれを、使うか。

「ははっ！！ 潔いじゃないですかっ！！ いいでしょう！！」
一撃で楽にして差し上げますよ！！」

俺の言葉をポジティブに解釈した男が、そうのたまう。俺が何かを言うよりも先に、地面を蹴った。瞬く間に距離を詰められる。

一瞬のうちに、眼前に迫る拳。俺はその光景を冷静に捉えながら、人差し指を男の肩に突き出した。

「うっ！？」

何の音も、衝撃も無い。それでも、自身の肩に違和感を感じたで

あろう男の体から、一瞬で雷属性を纏った身体強化が消え去った。俺の顔を捉えるギリギリで拳を止めて、自身の肩へと振り向く。そこには。

男の肩に根元まで埋まった、俺の指があつた。

「　　つつう……」

電撃を浴びて一瞬意識が飛びかけるが、持ち堪える。この程度の電撃なら、悲しい事に喰らい慣れてるからな。

ブシューウウウウッ

固まつた男を見続けているのも面白いが、時間が時間だ。明日も学園はある。俺は早々に結果を知らせてやるうと思ひ、何のアクシヨンも示さない男の肩から、自身の指を引き抜いた。同時に、派手に鮮血が噴き出す。

「ひっ!?　ひぎゃあああああああっ!?!」

男はよろめいて倒れ、自らの肩を抱きながら痛みに転げまわっている。

「……おいおい、たかが指一本だろ?　一般人や素人でもあるまいし、何をそんな大げさに騒いでるんだよ」

打たれ弱いな、おい。こっちだって、一瞬とはいえ、お前の電撃喰らってんだぞ。顔に掛かった返り血を手で拭いながら、ゆっくりと立ち上がる。

「お、お前つ……何をしたっ!?!」

「何をしたと思う?」

真っ赤に染まつた人差し指をクイクイと動かしながら、問い返してやる。

「し、身体強化か!?　いや、それにしたって、突き刺さる衝撃が無かった!　ぐっ……くそっ。まるで急に指が俺の体に入ってきたみたいにつ!?!」

ほづ。いい線いくね。

これは、俺の持つ非属性無系統“転移”魔法の応用。

転移魔法。それはあるモノを、ある場所からある場所へと移すために、事象を書き換える魔法。その為に、俺の頭の中で座標をイメージするわけだ。しかし、ここでもし。その送り先へと転移させる際、その場にある障害物の座標に一点でも重なるように転移させたとしたら。今回の場合で言えば、俺の指を男の肩へと転移させた感じだな。

世間一般で言う空想上の転移魔法では、転移に失敗すると論ぜられるものが多い。もしくは死ぬとか。例えば転移先が岩の中で死亡とか。しかし、実際にはそうはならない。繰り返すが、俺の転移魔法は“事象の書き換え”だ。

そう。俺が書き換えた事象の方が“正しくなる”。

つまり。男の肩へと転移した俺の指は、そこにあっただのが当然だったと事象は書き換えられ、容易に男の肩を貫いた状態で転移される(表現としては“埋まっている状態”と言った方が正しいかもしれない)。しかし、指を転移させたとはいえ、俺の体を分裂させて転移させる事は出来ない。その為、必然的に俺の指に付随して掌も、腕も、体も、それに合わせて動く形になる。ようは、俺は別に男の肩に向かって指を突き出さなくても、転移魔法さえ発動させてしまえば、勝手に指を突き出した体勢になってしまっただけだ。

防御不能。発動さえしてしまえば、相手が回避する前に心臓を突き破る事だって可能な、俺の絶対的な能力の1つ。

「俺の師匠はこれを、神の書き換えリライト作業術と呼んでいる」

神なんて大それた名前、俺は好きじゃないんだけどな、と付け加える。

ここの魔法陣入り扉を割ったのも、リーダー格の男を脅した時に使ったのも、これ。傍から見ていると転移魔法には到底結びつかない上、恐怖心を煽りまくる効果を發揮してくれる為、非常に重宝している。必殺技と言っても過言ではないね。

「……リ、リライト？」

自身の肩を抱きながら。脂汗を垂らしつつ、男はオウム返しのように技名だけを呟いた。ま、能力の詳細の説明なんてしてないんだから、名前が分かったところで疑問が解消されるはずも無いんだけどさ。

「さて」

これ見よがしに、先ほどやられた仕草と同じように、髪を掻き揚げながらそう口にする。

終わらせるか。一步を踏み出そうとした瞬間。

「動くなっ！！」

男がそう叫んだ。懐から、何かを取り出す。

「これは、この工場の起爆スイッチだ！！ お前がそこから一步でも動けば、こいつを起動させる！！」

「……おいおい」

思わず、掻き揚げていた手を止める。自爆するって事かよ。狂ってるな。

「お前だって、まだ死にたくないはずだ！！ 俺が消えるまでお前が手出ししなければ、こいつは押さない！！」

ずいっと、俺の方へと向けてくる。その仕草・発言に、がっかりした。

“お前だって”という言い方は、自分自身が一番生に未練があるという事。“俺が消えるまでお前が手出ししなければ”という言い方は、つまりは自分さえ助かれば部下の命などどうでもいいという事。

「お前、つまらねえよ」

構わず一步を踏み出した。

「なっ！？ お前、狂ってんのか！？ 俺にはこいつがあるんだぞ

！！ 見えねえのか！？」

「押したきゃ押せよ」

「何っ！？」

俺の発言に驚いた男が問い返してくる。

「押したきゃ、押せよ。お前にその覚悟があるならな」

そう言っている間にも、ずんずんと男との距離を詰める。

「く、来るなっ！！！」

「……」

「来るなって言ってるだぼろっ！！！！」

「ま、お前に覚悟があるうが無かるうが、押させないけどな」

顎を蹴り上げながら、そう呟く。男は白目を剥いて、その場に崩れ落ちた。カラシカラシという音を立てて、スイッチが転がる。俺はそれを踏みつぶして破壊した。思っていた通り、それは。

「贖作か。本当に、1から10までくだらない組織だったな」

ピクピク痙攣しながら泡を吹いている男を見て、俺は重くため息を付いた。

「……へえ」

俺はその光景を見て、思わず感心してしまった。ひとまず気絶した男を引き摺りながら、階下に降りてみれば。既に広間での騒動は沈静化されており、男たちは全員地面に這いつくばっていた。ピクリとも動かない。

そして、何より目を睜みはったのは。この空間を彩る、氷の世界だった。

ぶつちやけ、寒い。吐く息も白かった。

「中条さんっ！？」

「聖夜！？」

広間に立っているのは2人だけ。俺が壊れた扉を跨ぐようにして広間に踏み入ったのと同じ。こちらに気付いた2人が、驚いた顔をして駆け寄ってくる。

「ちよつと、どうしちゃったのよアンタ!!」

「だ、大丈夫なのですかっ!?!」

「……すまん、何の話だ?」

必死の形相で言い寄られるが、意味が分からない。

「こ、こんなに血を出しといてよくそんなケロリとしてられるわねっ!?!」

「ま、待つて下さい。今、ハンカチを」

「待て待て待て!!! これは俺の血じゃねえよ!!!」

やっと分かった。どうやら俺の姿を見て、相当な深手を負ったものだと勘違いをしているらしい。自身の体を見渡し、顔を拭って見て分かった。うん。相当汚い。

「アンタの血じゃないって……」

「ああ。あまり見ない方がいいぜ? 返り血だからよ」

「ひっ!?!」

舞の質問に答えたところで、もう遅かった。可憐が覗き込むように、俺の手で引き摺られてきた男の有り様を見て、悲鳴を上げる。やっぱりお嬢様にはショッキングな映像か。俺からして見りゃ、目立った外傷は肩傷だけだし、大した事ないけどな(それでも肩からは相当量の出血をしているが)。

そのまま固まって動かなくなった可憐を不憫に思い、ひとまず話題を変える事にした。

「それにしても、やるじゃないか。まさか本当に2人だけで殲滅しちゃまうとはな」

ぐるりと見渡しして、そう評価する。脱出経路として危惧されていた窓は1つ残らず氷漬けにされており、聞くまでも無く1人も逃がさず処理し終えたのだと分かる。

「この魔法は可憐か?」

「……………」

「ちよつと、可憐」

未だ放心状態の可憐を、舞が小突く。

「……………あ、はい。そうです。って……………中条さん。私が氷属性を使える事、知ってましたのですか？」

「おかしな事聞くな？」

含み笑いをしながら、可憐の質問に答えてやる。

「姫百合家の氷属性っていや、日本国内に限らず有名だろ。“氷の女王” 姫百合美麗の名は、向こうでも良く耳にしていた」

「……………そうでしたか」

可憐が納得する。

「舞。あの女の電話番号、知ってるか？」

「え？ そりゃ知ってるけど……………」

舞が携帯電話を操作する。

「繋いでくれ」

「は？ 構わないけど……………。アンタ、電話代すら払えなくなってるの？」

「事情は後で話すから」

電話番号教えて貰ってねえんだよ。まあ、その愚痴は帰ってからゆっくりと聞いてもらおう。

「はあ」

舞が訝しげな声を上げながらも、俺に言われた通り通話ボタンをプッシュする。

「はい」

「さんきゅ」

舞から携帯電話を受け取り、耳に押し当てる。

用件は言つまでもない。事後処理だ。男たちをこのまま放置しておくわけにもいくまい。場所は特定できていなくても、あの女なら既に警察には根回しをしてあるはずだ。組織のアジトの場所を伝えさえすれば、後は全てやってくれるだろう。

そう考えて、後始末の全てを放っておいたわけだが。

そのせいで、俺は大切な事を見落とした。

第16話 報酬

結論から言おうと思う。

可憐を連れて行ったのが、速攻でバレました。

なぜか？ 後始末を全て放り出して帰ったからです。

昨日の一件。ひとまず誘拐グループをボコボコにした後、俺は舞の携帯からあの女に連絡を取り、現状を伝えた。予想通り直ぐにでも現場に急行できるよう、魔法警察に根回ししていたあの女は即座に了承。俺は舞と可憐を連れて転移魔法を発動させ、いち早く学園へと帰還した。

何となく、バレた原因は分かっただろうか。そう。可憐によって一角が氷漬けにされた工場を、そのまま放って帰ったのである。この目で確認していない為、あくまでも想像の話となるが。現場に到着した魔法警察官たちは、大層驚かれた事であろう。この話は、泰造氏の書齋にて依頼主ご本人様より直々にお教え頂いた。

嫌な予感はしてた。早朝、セットしてもいない時間から自己主張を始めた俺の携帯電話。泰三氏の呼び出しに応じて姫百合家に急行してみれば、その扉の前には全て終わったみたいな顔をした可憐がポツンと立っていたのだから。

しかし、予想に反して泰造氏からのお叱りは無く、逆に拍子抜けしてしまった。

「まあ、掛けたまえ」

泰造氏に促され、高級そうなソファーに腰掛ける。まず、ここに通されて席を勧められたこと自体が無かったため、余計に謎が増えた気分だ。

「可憐も」

「は、はい」

隣に座ってくる。その距離に泰造氏が若干目を細めた気がしたので、少し距離を空けて座り直した。

「まずは、ご苦労だったな。中条聖夜君。君のお蔭で、今回可憐を狙った輩は一網打尽だ」

「ありがとうございます」

取り敢えず、頭を下げておく。

「魔法警察の話によると、一連の魔法使い誘拐事件には何ら関与していない模倣犯だったらしいがね」

「……そうですか」

ま、そうだろうとは思った。戦闘は点で素人。技能どころか度胸すらない、口だけの集団だったからな。

「ただ、魔法警察の方は、相当の感謝をしていたよ。大事に至る前に、組織を1つ潰せたわけだからね。魔法使いのライセンスを持つ“君には”、お礼に伺いたいと言っていたが……」

「結構です。もし、それでも形式的に何かする必要があるのなら、リナリー・エヴァンス宛てにお願いします。もともと私がこの依頼を受けたのは、師匠による意志なので」

「伝えておこう」

泰造氏が頷く。しかし、俺の方は気が気ではなかった。『魔法使いのライセンスを持つ“君には”』という言い回し。つまり

「……可憐」

「……は、はい」

ライセンスを持たぬ者が同伴していた事は、既にバレているという事。

「ついて行ったらしいな？」

「……はい」

ちらりと、俺の横顔を窺った後。可憐は素直にその事実を肯定した。それでいい。断言された事から、確かな根拠の元にその発言が

為されたのは明白。ならば、下手な言い回しは逆効果だ。

「ふう」

泰造氏が向かい側のソファーに、深いため息と共に身を埋めた。沈黙が書斎を包み込む。

「……本来ならば、なぜそのような事をしたのかと小一時間問い詰めたところだったのだが……」

「それは、しないお約束でしたよね？ あなた」

「……分かっている」

「っ！？」

「……お母様」

その声に、息を呑んで振り返る。書斎の入り口。開け放たれた扉には、姫百合家現当主・姫百合美麗が立っていた。

流石は親子と言ったところか。可憐に良く似た美しい顔立ち。おそらく、可憐がもう10年もすればこのような女性になるのだろうと容易に覗わせる容姿だった。姫百合家の膨大な魔力は、髪質に変化を及ぼさないのだろうか。可憐と同じく、この女性の髪も真っ黒だ。もしかすると、変化を及ぼしたうえでこの黒さなのかもしれないが。

姫百合美麗は、にこりと微笑むと書斎に足を踏み入れた。ぐるりと俺と可憐が座るソファーを回り込み、俺たちの対面・泰造氏の隣に腰掛けた。

「リナリーの弟子・中条聖夜君ね。彼女から貴方の事はよく聞かせて貰っているわ。話に聞いた通り、素敵な目をしてる」

「……いえ、俺の目について褒めて下さったのは貴方が初めてです。私の名前は姫百合美麗。姫百合家の現当主を務めているわ」

「初めまして、中条聖夜です。……貴方の事は、存じております。お噂はかねがね」

「あらあら、恥ずかしいわね」

口元を手で覆いながら、優雅に笑う。一目で育ちの良さが分かる仕草だった。これで戦闘になれば“氷の女王”と畏怖されるほどの実力を発揮するのだから、そのギャップに驚いてしまう。

こちらの反応に満足したのか、姫百合美麗は1つ頷くと、その視線をゆっくりと可憐に向けた。可憐がびくりと肩を震わせる。

「可憐」

「は、はい」

「こちらを向きなさい？」

「……」

目を逸らすように自分の呼びかけに答えた可憐を諫め、姫百合美麗が可憐に正面を向かせる。

「……」

「……どうだった？」

「……え？」

「今回、初めての実戦に参加してみて。どうだった？」

その問いに、可憐は少し躊躇いながらも口を開いた。

「……最初は、とても怖かったです」

「何が怖かったの？」

「……魔法が、です。実戦というものが何なのか。それを全然考えていなかった事を知りました。中条さんがおっしゃっていた、『実践と実戦』は違うと言いう意味が、そこで初めて分かりました」

「『最初は』って、言ったわね？　じゃあ、その恐怖心が薄れたのはなぜ？」

「……」

一度、可憐がこちらを見る。思わず目が合ってしまったが、何の事かさっぱりだった俺は直ぐに視線を姫百合美麗へと戻した。

「……1人じゃ、無かったからです」

ぼつりと、可憐がその答えを口にした。

「多分、1人じゃ戦えなかったと思います。中条さんがいて……舞さんがいて。いてくれたから、戦えたのだと思います。中条さんは、

敵のリーダーの方を抑えて下さつて。舞さんは、私から離れず常に気遣うように戦つて下さいました。お二人がいて下さらなければ、私は震えたままずっと戦えなかつたと思います」

「……そう」

可憐の言葉に、姫百合美麗が頷く。それを見て、驚いた。笑つて
いる。

「 やつと ”、良い縁に巡り合えたみたいね。可憐」

「……え？」

目を見開く可憐に、姫百合美麗が優雅に微笑んだ。

「 ずっと心配だったの。もう高校に上がつて2年。それなのに、貴方には友人らしき方々が1人もいない。咲夜も一緒よ。姉妹で2人きり。ずっとこのままなのかと思つていたわ」

「……」

「 いい？ 可憐」

姫百合美麗はずいつと身を乗り出し、可憐の顔を覗き込む。

「 人はね、1人じゃ生きていけないの。だからこそ、今ある縁を大切になさい。決して離してはダメよ。何があつたとしても、絶対に裏切らない、裏切られない。そんな繋がりを貴方自身の手で作り上げ、大切にしなさい」

「……。あ……はいっ」

「 ふふっ。それが分かつただけでも、今回の件に参戦した価値は十分にあつたわね」

可憐の力強い返事に、姫百合美麗がそう言つて笑う。そして、改めて俺の方へと向き直つた。

「 不肖の娘ですが、これからも何卒よろしくお願いしますね」

「……いえ、こちらこそ。慣れない学園生活で、可憐さんにはお世話になつておりますので」

そう言いつつも、何やらヤバイモノを任されてしまったような気がした。横を見てみれば、可憐が頬を若干ながらも赤く染めてこちらの様子を窺っている。対面に座る泰造氏から発せられる無言の圧

力は、気のせいだと信じたい。

「あー、ごほん」

泰造氏から、ワザとらしい咳払いが漏れる。いいぞ。早く話題を切り替えてくれ。正直、居た堪れない気持ちでいっぱいだ。

「中条聖夜君。今回の可憐、咲夜の護衛任務については、良くやってくれた。これほどまでに早く決着が着くとは思わなかった。流石はリナリー君のお弟子さんと言ったところだろうか」

無言で頭を下げておく。いったいどんな魔術を使えば、ここまでの信頼を勝ち取る事ができるのだろうか。本当に、あの女は恐ろしい。

「……で、報酬金についてだが……」

そんな不謹慎な事を考えていたところだったが、報酬金という単語が耳に入り、俺の頭は一気に冷めた。言葉は、反射的に発せられた。

「受け取れません」

「……何だって？」

俺の言葉に、泰造氏だけではなく姫百合美麗も可憐も目を丸くした。

「私が可憐さんを巻き込んだ時点で……。護衛対象者に対し、護衛任務にあるまじき行為をした時点で、契約は不成立です。護衛とは、対象者に対して如何に安全な環境を提供できるか。私は、その役目を果たせませんでした」

「……」

「……中条さん」

泰造氏は無言で押し黙った。この反応を見て、確信する。姫百合美麗は良い経験だったとポジティブに捉えているようだが、やはり泰造氏は納得してはいないのだと。それはそうだ。そもそも今回の依頼とは、自身の娘を危険から守るためのものであったはず。いくらそれが良い実戦経験になったとはいえ。

「ですが、中条聖夜さん。今回の件に関しては、こちらの落ち度も

あります。何を隠そう可憐本人が、貴方について行きたいと言ったのですから」

「そ、そうですね、中条さん。それに今回の良い経験にも」

「それは、あくまで結果論でしょう」

申し訳ないが、可憐の言葉に被せるように口を開いた。

「今回の件に関して。確かに敵のレベルはお粗末極まりないものであり、実戦経験の無い可憐さんにとっては、初参戦にこの上ない良い条件であった事は間違いありません。現に。無事、かすり傷すらも負わずに帰ってきています。ですが、それはあくまで結果論なのです。もし、相手が私よりも強い魔法使いを有していた場合。どうなっていたのかは分かりません。敵の戦力の程度に確信を持ってぬま、可憐の同伴を許可した私の行動は、やはりどう見ても間違っています」

軽率でした、と頭を下げる。自分の行動が、このような結果をもたらすとは思っていなかったのか、可憐は俺の隣でおろおろしていた。だが、今の俺はそれを気にするなと言える立場ではない。

「姫百合美麗さん、そして可憐さん。私の行為に対し、こうして利点のみを掲げ正当化して下さっている事に関しては、感謝致します。実は私。今朝、こちらへの呼び出しを受けた際、今回の行動に対して何かしらのご意見を頂くものと思っておりました。だからこそ、そのようなお言葉を頂戴できるだけで、私としては十分ですし、救われました。ありがとうございます。そして、ご期待に添えず、申し訳ございません」

捲まくし立てるような言い方になってしまったが、仕方が無い。感情に任せて謝罪等、自分の恥を上乗りするようなものだと思っただが、口が、頭が、うまく動いてはくれなかった。流れるままに思った事をそのまま喋り、立ち上がって頭を下げる。ちよつとだけ、自分の不器用さに泣きたくなかった。

少しの間、沈黙が生まれる。俺は立ち上がり、頭を下げたまま。相手は責めてもいないのに、自分から勝手に謝罪しているのだ。

そりゃ、向こうだってリアクションに困るのだろう。こちらから、この場を締める言葉を掛けるべきかと考えていると、姫百合美麗から声が掛かった。

「美麗」

「……はい？」

「まずは私の事、美麗って呼んでもらいましょうか」

「……。……は？」

雇い主の関係者に対する返答では無いのは重々承知しているが、これは仕方が無い。……何だって？

「フルネームで呼ばれるのは、嫌なの。そちらも面倒でしょう？」

「……え、えつと」

ちらりと泰造氏の顔を覗いてみると、深くため息を付いたところだった。その表情には「始まったか」「みたいな色がありありと浮かんでいる。……取り敢えず、呼べという事なのだろうか。

「……美麗さん？」

「何でしたら、お義母様でも構いませんのよ？」

「……謹んで遠慮させて頂きます。

「お母様っ！！」

と、言う前に可憐が横で吠えた。

「ふふふ。冗談よ。美麗さんで結構です。でも、呼びたくなったらいつでも呼んで頂戴ね？ 私はいつでも構わないですから」

「……お母様」

今度は泣きそうな声で呟いていた。美麗さんは、思いの外お茶目な方だった。

「はいはい。さて、“聖夜君”」

いつの間にか下の名前と呼ばれているが、それも気にしてはいけない事なのだろう。

「貴方が、本当にリナリーの元で修業を積んだコなのか、不思議に思えるくらい誠実な性格をしている事は良く分かりました」

……泰造氏よりも、あの女の事をよっほど分かっていそうな発言

だ。

「貴方が今回の件に抱く反省点を覆す気は毛頭無いわ。貴方の言う事も事実。一般に言う護衛任務からは、確かに考えられない行動だったのかもしれないわね」

百戦錬磨。“そういった世界”を経験している者としての意見。ぐさりと胸元を抉られた気分だった。そんな俺の心情を知ってか知らずか。美麗さんは「けれども」と話を続ける。

「可憐の“友人”としては、この上ない行動をしてくれたわ。誘拐されそうになっていた現場に駆けつけ、相手を一掃。そしてその組織が可憐に害を為す前に沈黙化してくれた。それもまた、事実。そうでしょう?」

「……はい」

「貴方が護衛任務を全うできなかったからと言って、私たちはその事実まで消し去る気は無いわ。この報酬金は、感謝の気持ちよ。可憐の事を、可憐の意志を。“何よりも”優先してくれた、聖夜君。貴方に対するね」

「……」

そういう言い方は、ズルいと思う。これでは、それでも尚受け取れないと言い張る事は、只の自己満足でしかなくなる。分かっているのに。美麗さんは断られるつもりはさらさらなく、といった笑顔で俺の返答を待っている。

「……ありがとうございます」

そう言う他、俺には無かった。

結局。登校時間を大幅にオーバーした俺たちは、同じ時間に行く。と怪しまれるという理由から、少し時間をずらした上で登校した。

「お家の事情」の一言で片付けられる可憐に先を譲られ、先陣を切って教室に突入した俺に待っていたのは、恐ろしいまでのお説教。

それもある意味で当たり前で、今回の一件は内々に処理されたが故に、俺は一切の事情を説明する事ができない。口にできる言葉は「寝坊しました。すみません」のみであり、何も知らない教師からすれば俺は絵に描いたような問題児なわけだ。当然こうなる。

「高校生としての自覚を」「登校の風紀が」「時間はきちんと」「自身の体調管理」「生活リズムとスケジュール」等々。よくもまあ寝坊と言う理由に対して、そこまで小言が思い付くなと感心してしまうほどの長い長いお説教を頂戴した上で、その授業は廊下に立たされる羽目になった。その光景に笑い声を噛み殺しながら聞き入っていた将人は、後で殴る。

“予定通り”遅れてきた可憐は、廊下に立たされている俺を見て目を丸くしたが、俺が苦笑しながら入室を促すと目で謝りながら教室の扉を開けた。

閉じられた扉の奥、二言三言くぐもった声で会話が聞こえたのち、授業が再開した模様。ちくしょう。分かってはいたが、生まれが違うだけでここまで待遇が変わるのかと少し泣きたくなった。

授業中の廊下はとても静かだ。各教室から聞こえてくるのは、眠気を催すために発せられているのではないかと疑いたくなる教師の声のみであり、窓から聞こえるのは木々のざわめき、鳥のさえざり。そして遠くグラウンドから届く生徒の掛け声だけだった。

至って平穩。魔法同士のドンパチ騒ぎなど、ほど遠いと言える平和な日常。

……何となく。何となくだが。魔法をまだ知らなかった、あの頃。

日々の生活を無為に過ごすだけで良かった、温かいあの頃に戻った気がした。

「むー」

「……」

そう日付は経っていないはずだが、嫌に久しぶりに感じてしまう咲夜の顔は、最後に見たときよりも丸くなっていた。あ、この表現は女性に対して失礼か。端的に言えば頬を膨らまして唸ってらっしゃる。本人は遺憾の意を示しているつもりだろうが、正直こちらは全然怖くない。寧ろ、癒される。

「中条せんぱいっ」

「……おう」

「私、怒ってるんですよっ」

……そうでしょうね。可愛いですけど。

授業終了後、教室に入るなり絡んできた将人を殴り飛ばし、いつものメンバーでぎゃーぎゃーやっていると、2・Aの教室に突然の来訪者がやってきた。

「あ、あの……。中条せんぱい、いますか？」

「えっ？ 姫百合可憐さんじゃなくて？」

「は、はい」

「えーっと、取り敢えず分かりました。中条くーん。姫百合さんの妹さんがお呼びよー」
「ぶっ！？」

その呼び声に、飲みかけのペットボトルを取り落としそうになる。

「……これは、また珍しいお客様だね。それに、呼び出しの相手が……」

「聖夜あっ！！ てめえっ！！」

「いちいちうるせえんだよ！！ そんな期待される関係じゃねえっ……」

過剰に反応する将人をあしらい、咲夜の元へ。途中、「やっぱりな」と意味深に頷いていた修平の見解は、後で正しておく必要がある

りそうだった。

「咲夜、呼んだ相手は俺か？」

ちらりと可憐の様子を窺いながらも、咲夜へと声を掛ける。

「……そ、そうです」

可憐は、ジェスチャーで「よろしくお願いします」とやってきた。どうやら、用件は知っているらしい。表情が苦笑いという点が、何とも不安を誘うが。

「……取り敢えず、場所を移すか。ここだと人目が嫌だ」

「分かりました」

行先は、お決まりのように屋上にした。

そして、咲夜の膨れ顔に戻る。

「お姉さまばかり、ずるいです」

「いや、ずるいとかじゃなくてだな」

どうやら、今回の事の顛末は可憐から聞いていたらしい。屋上に、まずは護衛任務について黙っていて悪かったと謝罪したら、「それはもういいんです」と昨晚の話を持ち出された。まあ、普段から登下校も一緒にしているのだから、秘密にしておくには無理がある。それに、咲夜の話聞いてみると、戦いに参戦したかったというよりは、除け者にされた事に傷付いたようだった。

……とは言ってもね。個人的には、是非今後とも争いの無い世界で穢れなく生きて行って欲しいと思う。切に願う。

「……今回の件については、お前に話さなかったのは悪かったよ」
今後も連れて行く気は毛頭ないが（そもそもあんな事件が頻繁に起こってもらっては困る）、次回からはそれなりには対応してやらないと、後で痛い目を見そうだ。

「ちゃんと反省してますか？」

「……おう」

「なら、いいですー!」

結論は、驚くほどに即決された。咲夜の話は済んだとばかりに、

拍子抜けしている俺の横を通り過ぎ、屋上の扉の元へと駆け出した。その手でノブを捻りながら、一言。

「……中条せんぱい。中条せんぱいは、中条せんぱいですよね？」

第三者が聞けば、首を傾げるような疑問。だが、俺はその質問の意図を正確に掴んでいた。

「お前が、“それ”を望んでくれるのならな。咲夜『後輩』」
「えへへ、もちろんですっ！」

咲夜は満面の笑みを浮かべながら、屋上から姿を消した。

「……ふう」

思わず、ため息を付く。情けない話だ。あれだけ酷い対応をしてみました、可憐と咲夜。その2人から許してもらえただけで、これほど心が落ち着くとは。……思春期かよ。……今、思春期か？

現実離れた生活を送っていたせいで、自分の年代の基準がよく分からん。まあ、俺からしてみれば。そのせいでこの学園生活の方が、現実離れた感じが強いんだけどな。

「ま、いつか」
考えるのも、馬鹿らしい。そう考えて、教室に戻ろうと足を向ける。

屋上の扉を跨ぐ前に、それは鳴った。

ブブブブブブ……

マナーモードに設定されていた携帯電話が唸りを上げる。画面を開けば、そこには“登録されていない電話番号”の表示。つまり、掛けてきた人物は、“1人しか思い浮かばない”。

「どうして急に番号を教える気になったんですか、師匠」

『あら、よく私だって分かったわね』

驚いた声が電話越しに伝わる。その“演技めいた”言葉に、うんざりするように口を開いた。

「俺の電話番号を一方通行で知っているのは、貴方だけでしょう」

『まーね』

自分で言ったくせに、事も何気にそう答えてくる。くっ。いちいち癩に障る。

『お疲れ様。任務は無事完遂したようね。正直、ここまで早く片付くとは思ってなかったのだけど』

「でしょうね。で？ こちらの質問に答えて下さいよ」

『そんな悩む事でもないでしょ？ 私のこなして欲しかった依頼は片付けてくれたんだし。“今後は”私への連絡先も持っていたほうがいいんじゃないかって思ったから』

「……今後は？」

その妙な言い回しに、引っ掛かりを覚える。だが、あちらはこちらの疑問など気にする様子も無く、事も何気に次の質問を放ってきた。

『それで？ 聖夜、貴方これからどうするの？』

「……は？」

これから？ 何の話だ？

疑問が更に上乘せされた気分だ。どういう意味かと問う前に、向こうから答えを提示してきた。

「言っただでしょ？ しばらく休暇をあげるってね」

「貴方本当に分かってないの？」とでも言いたげな口調で、女は話す。

「その休暇分を使って、このまま青藍魔法学園に残るか。それとも退学して思い思いに過ごすか。貴方の好きになさいって言ってるのよ」

第16話 報酬（後書き）

ツイッター、始めてみました。

teleporter | soiaで出てくると思います。

もしよろしければ、ご贖い。

8割がたは日々の愚痴になるかもですけど（笑）。

第17話 日常へ

「 というわけでして、属性変化による強弱は、必ずしも結果に直結するとは言い難いわけです。ですが、『魔法使いの鉄則』の1つに『魔法使いたるもの、相手の弱点属性をつけ』という格言があるように」

「 頬杖を付きながら、教師の言葉を右から左に聞き流す。この程度の知識なら、あの女に拾われた初日に叩き込まれた。そう、初日に病み上がりだったにも関わらずね。『数日は安静にしときなさい』とかいいつつ、枕元で呪詛のように魔法使いについて講義しまくってたからな。」

「 今から思えば、それは1日でも早く魔力の扱い方を覚えさせて、俺の調子を安定させる為だったんだろうけど。……あれ。でも、それなら『魔法使いの鉄則』なんて心得的なものじゃなくて、魔力の循環方法とか発散方法とかだけでも良かったんじゃないか。……。……。……。やめるか、考えるの。思い出は、美化できるのならそれに越したことは無いな、うん。」

「 ……。それにしても。」

「 ちらりと横に視線を動かす。」

「 つ」

「 ……」

「 俺の視線に気付いて、隣に座る可憐が慌てて目を逸らす。」

「 ……はあ」

「 今日は何故かやたらと視線が合う日だ。という表現は回りくどいか。何故かは知らんが、今日は可憐が俺を意識しているような気がする。……別に自意識過剰とかじゃなくてね。今も、こちらが視線を外すなりまたこちららと此方を窺って来る始末。」

「 ……何かしたかなあ？」

「 そう考えつつ前に視線を向けると。丁度詠唱理論の講師が、最前

列の席にて堂々といびきをかく将人の頭を、教科書で叩いているところだった。

きーんこーんかーんこーん

「聖夜、お昼行くわよ」

「おう」

何ともむず痒い視線を受けながら午前の部が終了し、昼休み。例によつて、真つ先に舞が俺の元へと寄つてくる。

「聖夜ーつて、そっか」

後ろから将人の声も掛かるが、こちらが何かを言う前に向こうが勝手に納得したようだ。……何をどう理解されたのかは恐ろしくて聞けなかった俺だが、一先ず手で謝つておいた。

「可憐も行くでしょ？」

「はい、ご一緒させて頂きます」

かたりと音を立てながら、可憐が立ち上がる。……少し前までは考えられなかった光景だな。舞が自分から進んで可憐を誘う。たった数日しか見ていなかったのにも関わらず、その光景はやはりに違和感を纏っていた。ま、仲が良いのは良い事んだけどさ。

しかし、その違和感はやはり学園内共通のものだったようで、教室を出る時も、廊下を歩く時も。物もの凄い注目を浴びた。当の本人たちは我関せずといった風情で、堂々と世間話しているのだから凄い。

「あ、お姉さま！ 中条せんぱい！ 花園せんぱい！」

可憐と咲夜がいつも合流場所として決めている下駄箱付近に差し掛かったところで、正面から元気な声が聞こえる。下駄箱に寄りかかり、片足をふらふらさせていた咲夜は、俺たち3人が視界に入るなり真つ先に駆け寄ってきた。

「よし」

「こんにちは、咲夜ちゃん」

「お待たせ、咲夜」

「こんにちは、よろしくお願いしますっ」

三者三様の返事をして、学食へ。

周りから向けられる視線の温度が、1ランク上がった気がした。

綺麗どころが3人歩いているんだから当たり前か。早速女の子トークを始める3人の背中を眺めながら、少し遅れて歩く。つか、俺気まずいだけじゃん。舞も舞だ。もう他に昼食食べる友達見つけたなら、俺呼ばなくてもいいだろ。俺が女の子トークについていけるようになったら、それは只の変態だ。

俺に向けられる視線のみがますます冷たくなっていくのを感じながら、ひっそりとため息を付いた。……そのうち、闇討ちとかされるんじゃないだろうか。

「あら、咲夜。今日は多いのね？」

「えへへ。3、4時間目の授業が魔法実習だったので、お腹空いやいました」

恥ずかしそうに頬を染めながら、可憐の問いに咲夜がそう答える。

……多い？ きつねうどんにちょこっとトッピング増やしただけなのに？

「どうかされましたか？ 中条せんぱい」

「え？ いや、別に」

こちらの視線が気になったのか、ちゅるちゅると麺を嚼る作業を止めて、咲夜が小首を傾げてくる。

「……聖夜、真昼間から犯罪行為に走る事だけは止めて頂戴ね」

「その発言に異議を唱えるっ！！」

後、そんな憐れんだ目で見えてくるんじゃない。

俺の切実な抗議は、舞の「はいはい」というおざなりな返事で脆くも崩れ去った。

「んんー。それにしても、良い運動したわ。やっぱり気に食わない奴はぶっ飛ばすのが一番ね」

「……お前にお嬢様っぽい発言を求めるのはもう諦めたからさ。せめてもう少し穏便な言い回しに変えない？」

戦闘狂か、お前は。

「凄いです。敵の魔法使いさんを、お姉さまたち3人だけで倒しちゃうなんて」

「……お行儀が悪いですよ、咲夜」

「あ、すみません」

何か羨ましそうな視線で舞を見つめる咲夜を、可憐が諫める。自分が箸の先っぽを啜えながら話していたのに気付き、咲夜は慌てて箸を置いた。

「ふふん。ま、あの程度なら余裕だったわね」

咲夜の羨望を受けて、舞が胸を張る。

「自慢すんな」

俺はうんざりする様な声色で、舞を小突いた。

「痛っ、何よ」

「口外はするんじゃないぞ。あの一件は、この学園では無かった事になってるんだから」

「分かってるわよ、そのくらい」

舞はふんと鼻を鳴らしながらそう答える。まあ、舞はそういうところはしっかりとってるから平気か。それにこいつ他に友達居ないからな。うっかり口を滑らせるって事も無いだろう。……そういう納得の仕方は失礼か。

「……」

「……」

「……」

「……ん？　どうかしたか？」

思考を切り替え、ふと意識をテーブルへと向けて見れば。いつの間にか会話は止まっており、3人は無言で俺の様子を窺っているようだった。

「えー!? いや、別に何にも って。アンタ、殴られたところは平気だったの?」

「あん? ああ、あんなの何ともねえよ。寧ろ痛かったのは、雷の身体強化の方だったからな」

取り繕うように怪我の心配をしてきた舞に、そう答える。

「魔法で防ぐ事はできなかったのですか?」

「不覚にもその前に放電を喰らったからな。頭がクラクラしてる状態じゃ、魔法を組み上げる事ができなかった。俺に詠唱ができりゃ、もう少し選択肢はあったんだけどな」

無詠唱で魔法を行使する場合、音に頼った魔法構成が出来ない以上、頭の中で魔法を組み上げるにも相応の精密さが必要になる。あの場面では、転移魔法による移動術も満足に使えなかっただろう。

“神の書き換え作業術”^{リライト}がそこで使えたのは、相手の動きに合わせてカウンターのように発動したからに過ぎない。同じ場所・座標に跳んだだけなので、あまり頭を使わずに済んだだけの事だ。

「あ、すみません。無神経な事を言ってしまいました」

「いや、可憐の気にする事じゃねえよ」

もともとは俺の油断から始まったものだ。

「……」

「……」

「……」

「……え? ここで会話切れるの?」

「あ、あのっ。えーっと。あー。うー」

咲夜がはつとして何かを喋ろうと口を開く。が。結局それは人の言葉としては成立せず、徐々に下がっていくボリュームと共に消えて失せた。

「……」

「……」
「……」
「……」
ち、沈黙が痛い。……それに、やっぱり何か皆の様子が変だ。

結局。二言三言話しては沈黙が生まれ、誰かが取り繕うように話題を運び、二言三言話してはまたもや沈黙が生まれるという、学食で初めて顔を合わせたメンバーの空気並みに気まずさが漂う昼食会は、とある教師の声掛けによって終わりを迎えた。

「あ、いたいた。中条君」

「……はい？」

その掛け声に振り返ってみる。そこに立っていたのは。

「白石先生？」

我らが担任。THE・ぼわぼわの白石はるか先生だった。

「中条君。今日の放課後、少し時間取れないかな？」

「はあ……」

「じゃあ、放課後は魔法実験室に来てちょうだい。忘れちゃダメよー？」

年上とは思えぬ可愛げな釘刺しをしてから、可憐・舞・咲夜の方へも軽く会釈をして、白石先生は自身の食器を下げに回収場へと歩いて行った。

「……まさか、アンタ」

「あん？」

舞が、驚いたような顔で、ぼつりと呟く。

「まさかって、何がまさかなんだ？」

「……別に、何でもないわよ」

そう言うなり、舞は自身のトレーを持って立ち上がった。

「可憐、咲夜ちゃん。ちょっと時間取れるかしら」

「ええ、構いませんよ」

「え？ わ、分かりました」

舞の問いかけに、可憐と咲夜も応じて立ち上がる。

「何だよ、もう行くのか？ だったら俺も」

「アンタはまだここにいなさい」

「は？」

「失礼致しますね」

「中条せんぱい、また」

呆気にとられる俺に可憐と咲夜は頭を下げ、既に背を向けて歩き出している舞の後ろへとついて行く。

「……………ここにいろつて言われてもな」

俺も既に食べ終わってるんだけど。……………どうすりゃいいわけ？

きーンきーンかーんきーン

終業のチャイムが鳴り響く。同時に各々の席ががたがたと不規則な音を立て始める。

「ふぁ……………」

欠伸を噛み殺しながら、隣に視線を向ける。バツという音が聞こえそうな程の速度で、可憐が顔を逸らした。

……………何だかなあ。

今日は一日中視線を感じる日だった。

睨まれてるわけでも、その逆色目を使われているわけでも勿論無い。敢えて言うなら、此方の様子を窺うと言うか、タイミングを見計らっているというか。そんな感じの視線だ。そのせいで無駄に神経を擦り減らし、いつもよりも余計に疲れた気がした。

「可憐」

「は、はい。何でしょう？」

……………なぜ声掛けただけでどもる。

「今日はこの後どうすんだ？」

「え？ えーと」

視線が泳いでいる。が、うろろろしていた焦点が、俺の直ぐ後ろの辺りでピタリと止まった。そちらに振り返る前に、そこから声が聞こえる。

「可憐は、今日私と一緒に帰るわ」

そこには既に帰宅の準備を整え、鞆を片手に立つ舞の姿があった。

「そっか」

「何？ アンタ、可憐に用事でもあったわけ？」

「いや？ つーか、お前も昼休みに聞いてたろ？ 俺は呼び出し受

けてんだよ」

「……そうね」

俺の発言に、舞の目が僅かに細められる。

「？ どうした？」

「べつにつに？ 行きましょう、可憐」

「はい。それでは、中条さん。また明日」

「あ、ああ」

俺の問いを払うようにそう答え、舞は踵を返した。ぺこりと頭を下げて帰りの挨拶を済ませた可憐が、それに続く。

「……」

その何とも表現しがたい微妙な態度に首を傾げながら、2人が教室から出ていく後姿を見送った。

「……失礼しました」

ガララと言う音を立てて、魔法実験室の引き戸を閉める。

何のことは無い。白石先生からの呼び出し内容は、ずばりお説教だった。

この間の仮病を使った欠席に加え、昨日の寝坊名目の遅刻。それ

に関するお話。仮病を使って休んだ日の事だが、俺の事を心配してくれた白石先生は、どうやら昼休みの時間を使って一度俺の部屋を訪れていたらしい。誘拐グループのアジトを聞き出す為に、尋問をしていた時間だ。当然、俺は部屋にはいない。

白石先生曰く、俺の部屋に無断で入り込む様な事はせず（教師陣は、寮監から各生徒のスペアキーを借り受ける事が可能）、ドア越しにノックと声掛けをしていただけとの事だったので、やろうと思えば高熱でそれどころじゃありませんでしたと嘯く事も出来たが、しなかった。本気で心配してきそうだったからだ。

嘘を付いておいた方が楽だったのは間違いないが、教師としての職務を全うする為という理由ではなく、白石はるか一人としてここまで真摯に接してこられては、こちらもおざなりな対応はできなかった。この人の天職が教師で間違いなかったという事を、俺はこの日無駄に確信した。

昨日の寝坊による遅刻含め、ある程度予想は付いていたのだろうが、俺の口から「すみません、サボりました」という言葉を聞いた瞬間、白石先生は一瞬悲しそうな顔をした後、直ぐにその理由について問うてきた。どうやら、俺が転校早々いじめにあっているのではないかと疑ったらしい。だが、残念な事にそんな事実は一切ない。完全に俺の意思による、外的要因は一切ない純度100%のサボりですと告げたら、教科書を丸めて叩かれた。……全然痛くない。

それからは、ひたすらにお説教。と、言ったものの。白石先生はサボる事、遅刻する事がどれだけ悪い事を力説するというよりも、「そんな事したら、中条君絶対に後悔する事になるよ」という内容で、お叱りというよりもアドバイスや、お願いに近い話し方だった。「遅刻なんかして、途中から教室に入るの恥ずかしいでしょ？」

「……はい」

「そんなつまらない事で怒られてたら、学園つまらなくなっちゃっよっ」

「……はい」

「中条君は転入して、まだ日が浅いんだから。今がお友達を作る一番大切な時なんだよ?」

「……そうですね」

終始、こんな感じ。完全なるワンサイドゲーム。クラスメイトの前、教卓でぐちぐち説教されて、廊下に立たされたその時より、余程心が持つて行かれた。すみません、もうしません。ごめんなさい。

「……反則だ」

差し込む夕日に目を細めながら、そう呟いた。

くそう。これじゃ本当にもう遅刻も欠席もできそうにない。まさかこの年で『ゆびきり』までさせられるとは。それも素でやっているのだから凄い。白石女史、恐るべし。

……次、遅刻なり欠席なりしたなら、あの人泣くかもな。

ぶるるるるるるるるるる

そんな事を考えていると、ポケットの中で振動。震源である携帯電話を取り出し、開く。

『19時に、教会にて』

本文は、それだけ。用件のみ伝えられた、簡潔すぎる文面だった。「何考えてんだ? アイツ」

また教会か。教会を使い勝手のいい談話室と勘違いしてるんじゃないのか?

ため息を付きながら、携帯電話を仕舞う。わざわざ人気の無い時間を選んでまで、教会を指定してくるくらいだ。それなりに機密性は高い用件なんだろう。前回呼び出された時は、誘拐グループ殲滅に同行させるという無茶なお願いだったが……。

「今回は、いったい何を言われる事やら」

間違いなく、軽い冗談で済ませられる話ではない。

まだ指定された時間まで3時間以上あるにも関わらず、既に重く

なりつつある足を引き摺りながら、俺は再度ため息を付いた。

現在時刻、18時56分。

俺は教会の扉の前で一度立ち止まり、ゆっくり空を見上げた。星が綺麗な夜空だった。もつとも、それを綺麗だなんて口にできるほど、今の俺に精神的余裕があるわけでも無いが。

「ま、面倒臭い事は早めに終わらすに限るな」

そう無理矢理ポジティブな意見を捻りだし、扉に手を掛けた。
ぎいぎいぎい

特有の重苦しい音を響かせながら、扉を押し込む。ひんやりとした空気が、中から抜け出してきた。構わず足を中へと踏み入れる。

「あら、今日は時間通り。感心ね」

呼び出した張本人である舞は既に到着していて。その両サイドには、可憐と咲夜の姿もあった。

……おいおい、今度は咲夜もかよ。

後ろ手に教会の扉を閉めながら、改めて3人と向き直る。そこで、ふと気付いた。

「先に1つ聞いていいか？」

「あら、何かしら？」

舞が先を促してくる。お言葉に甘えて、心の底から湧き上がる疑問を口にした。

「何で、お前ら3人も魔法服を着てるんだ？」

そう。3人が着ているのは、制服でも私服でも無く、魔法服。腕には起動はしていないのだろうが、MCまで装着されている。……起動してないだろうな？

「ふっ。愚問ね」

舞が、真つ赤な髪を掻き揚げながらそう告げる。俺はうんざりしてため息を付いた。

「……舞、悪い事は言わねえからやめとけ。いくら相手が悪人でも、既に収容されている誘拐犯に追い打ちを掛けるような真似、許されるはずねえだろ」

「んな事するかっ!!」

良い切り返しだ。

「んじゃ、何なんだ？ 俺は信者じゃねえけどさ。仮にも神の御前でそんな戦闘服を着込んでいていいのかよ」

「魔法服は、私たち魔法使いにとっての正装ですから。失礼には当たりませんよ。挙式等に参列する際にも、着ていかれる方がいらっしやるくらいです」

可憐がしずしずとそう答える。

「……そんな正式な場でも、MCは装着してんのか？」

「……」

「……」

「……」

俺の問いに、3人共さつと目を逸らした。

「目、逸らしてんじゃねえよ!!」

「ほら、あれよ。ボディーガードとかは年中つけてるじゃない？」

「そのボディーガードは俺だったんだろうが!!」

「ち」

「舌打ちを止める!!」

俺と舞の言い争いに、いい加減埒が明かないとでも思ったのか、これまで黙っていた咲夜が一步踏み出した。

「あ、あの。中条せんぱいをお呼びさせて頂いたのは、その……」

お話があるからでして」

「だろうな」

そうでなけりゃ、この時間にこの場所には呼び出されまい。

「で？ 用件を聞こうか。まさか、ここで俺を殺す気じゃないだろ

っ？」

「場合によるわね」

バッドエンドありかよ!!

「聖夜」

「ん？」

舞の声色が変わる。同時に、3人を纏う空気も一変した気がした。頷く事で、先を促す。

「アンタ、これからどうするの？」

「あ？」

見当違いの問いかけに、一瞬思考が停止する。

「これから、アンタはどうするの？」

舞が、もう一度問いかけてきた。

「どうするって……。誘拐犯グループの件は、魔法警察とあの女に任せただから、もう俺の出る幕はねえよ」

「違うわよ」

俺の答えに被せるかのように、舞は否定してこう言った。

「護衛任務を終えたアンタは、これからどうするの？」

その言葉を聞いて、分かった。

今日の可憐の視線。舞の不審な言動。そして、舞・可憐・咲夜の結託。その意味が。

「はあー」

思わずため息が漏れ出る。今度はどんな無茶振りが来るのかと肝を冷やしていたが、どうやら杞憂だったようだ。

「はっ。ははは」

不安が拭えるのと同時に、笑いが込み上げてきた。3人の不安そうな視線が、突如笑い出した事により訝しげなものへと変わりつつあったが、それすら気にならない。

じゃあ、魔法服を着ている意味というのは……。

「はははははっ」

「な、何が可笑しいのよ!!」

舞が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「いや、別に。何を先走ってんのかなぁと思ってさ」

「え？」

俺の言葉に、可憐が首を傾げる。俺は頬を掻きながら言った。

「あの女からはしばらく休暇貰ってるんだ。だから、んな身構えなくても平気。もうしばらくは、俺もこの学園の生徒だよ」

久しぶりに舞にも会えたとし、折角可憐と咲夜とも友達になれたしな、と付け加える。

「……」

「……」

「……」

一瞬の静寂。その後、3人は三者三様の態度を示した。

舞は「なら最初っからそう言っときなさいよ！！」と怒り。

可憐は「これからもよろしくお願いしますね」と頭を下げ。

咲夜は「やったー！！」と手を上げてはしゃいで。

どれだけの時間を自由にして良いのかは分からなかったが。それでも、学園に残る事を決めて良かったと思う。自分が、こうして必要とされている事が、嬉しかった。わざわざ魔法服まで着て待ち構えて。力づくでも止めてみせると、言外にも言ってくれた事が、この上なく嬉しかった。恥ずかしさを誤魔化すように、軽く咳払いをする。

3人の視線がこちらに注目した。別に何か言おうと思ってした訳では無かったので、うまく口が開かない。「ありがとう」とか「これからもよろしくな」とか。そんな簡単な一言ですら、今は気恥ずかしくて言えなかった。

辺りが暗くて良かった。今の表情は、あまり見られなくなかった。

第17話 日常へ（後書き）

第1章 中条聖夜の帰国編・完

あとがき + 『転移魔法』あれこれ

初めまして、S o L aと申します。

この度は、私の初のオリジナル小説『テレポーター』をお読み頂きました。ありがとうございます。

本来でしたらこういった内容のものは、各章最終話のあとがきの部分か若しくは活動報告等であるべきなのでしょうが、前者では文量的に長すぎる為、後者ではそちらに目を通されない方も多分いらっしゃるであろうと推測させて頂いた為、敢えてこのような場面にこのような形で公開しました。

第0話含め計18話にて、『テレポーター』第1章「中条聖夜の帰国編」は終了です。この章では、主人公・聖夜が日本へと帰国する要因となった誘拐事件を中心に話が進むため、学園での生活についてはあまりピックアップする事ができませんでした。“学園”フアンタジーとして期待されていた方、すみません。

聖夜の帰国から物語はスタートし、青藍魔法学園に転入。新たな仲間、かつての幼馴染、そして護衛対象と関わりを持ちながら、今回の敵となる誘拐犯との戦いに突入していく……。

聖夜を始め、舞や可憐そして咲夜等、「何でここでそんな決断しちゃうの?」「自分の立場分かってなくない?」といった場面がいくつもあつたかと思えます。ただ、ここでご理解頂きたいのは、彼らはまだ高校生であり理性的でしっかりとした決断を出し切れない微妙なお年頃だという事です。もちろん、聖夜に関して言えば、彼は魔法使いのライセンスを習得している言わば“プロ”であり、そういう言い訳が通用しない立場にいるわけですが。その点に関しては、姫百合泰造や美麗、白石はるかがいたのは個人的に助かりました。大人の立場として、間違つた行動を諫める人間がいなければ、

成長というものも皆無ですからね。この年代は、自分で間違いに気付くころにも限度があります。

こうした未熟な彼らが、少しずつ魔法使いとしても人間としても成長していく様も、楽しみにして頂けたらな、と思っております。それに合わせて私の文章能力も成長してくれればいいなあ、と独り言を言ってみたり。

ともあれ。第2章は、一変して学園色が強くなる予定ですので、学園ファンタジーを楽しみにして下さいた皆様。お待たせしました（笑）。もちろん、バトルもありますのでご心配なく。

第2章は、H23年12月1日より公開予定です。

それまでの間に、登場人物等多少の更新はあるかもしれませんが、本編を公開するのはこの日付からとなります。ですからそれまでは、お時間ある時にちらりと覗いてみる、という程度でよろしいかと。

それでは、今後とも私の作品をよろしくお願い致します。

S o l a

ここからは、聖夜の『転移魔法』に関するいくつかの情報を公開します。

感想等で『転移魔法』の定義についての質問がいくつかございましたので、それも含めましてこちらにて改めてお答えいたします。物語の中枢に関わるものについては公開しませんが、若干のネタバレは含みます。ですから、「ネタバレいらんよ」という方は、このままページを閉じて下さいませ。

Q1・そもそも転移魔法って何？

転移魔法とは、ある地点からある地点に向かって瞬間的に移動する能力です。瞬間移動と違う点を挙げるならば、瞬間移動が点から点へ線を描くように移動するのに対して、転移魔法は点から点にピンポイントで移動できます。

Q2・本編で出てくる「事象の書き換え」とは？

聖夜が転移魔法を利用する際に行うプロセスを指します。

Aという地点にある物を、Bという地点へと転移させたい場合。まず最初の段階では、物はAに存在し、Bには存在しません。その状態で、Aにある物の座標をBに移し変えます。そうすると、座標を失ったAからは物が消え、座標が加えられたBに物が移ります。この一連の動作を「事象の書き換え」と表現しています。

Q3・転移魔法は、どの属性に分類されるの？

どの属性にも属しません。よって、非属性“無系統”魔法と呼ばれています。

Q4・転移魔法の有効範囲は？

分かりません。その能力を扱える聖夜自身が、その限界を知らないからです。

Q5・本編にて「国と国は転移できない」とあるけど、それは距離の問題で？

厳密に言えば、違います。国と国への転移は可能です。

但し、世界的にそのような行為は禁止されている為、「できるかできないか」と問われれば「できる」となりますが、更に言うならば「してはいけない」という形になります。

Q6・転移魔法は、自身の他に人間や物も転移できるの？

できます。

Q7・ならば、その条件は？

自身の見えている範囲のものでなければできません。理由としては、見えていないところに居る（或いはある）人間や物の座標が、イメージできないからです。

逆に言えば、見えているものであれば“どんなものであっても問いません”。但し、質量に応じて改変すべき事象が大きくなるため、比例して魔力使用量も増加します。

Q8・転移した先に障害物（建物や岩等）があり、座標が重なってしまった場合、死ぬの？

死にません。転移魔法は、あくまで「事象の書き換え」によって成り立つ現象であり、転移魔法が発動された時点で全ての情報が書き換えられます。よって、転移先にて障害物と重なった場合、書き換えられた座標が勝つ為、死にません。寧ろ、もともとその場にあった物が破壊されます。

この現象を、聖夜は“リリィ神の書き換え作業術”と呼んでいます。

Q9・パーツに分けて転移魔法は使用可能？ 腕だけ飛ばす、みたいに。

できません。

但し、転移対象物に“空間”を指定すれば、腕だけ転移する事は理論上可能です。その場合、あくまで“腕を含めた空間を”転移させるというだけで、胴体から腕が切断される形になります。

ちなみに、そうしてしまつと元には戻せません。元々あつた位置に再び転移させる事はできても、切断面を修復する力は無いからです。

Q10・転移魔法発動により、対象物は一度世界から消えるの？

消えません。

「事象の書き換え」により、“もともとその場所（転移先の事）にあつた”という現象を作り出す魔法であるため、一度異世界やら別次元やらに潜つて再度出現といったものではないからです。

Q11・転移魔法は、中条聖夜オンリーワンの魔法なの？

肯定も否定もできません。

非属性無系統の使い手は、基本的にその能力を隠したがりです。よつて聖夜の知る限りではないと言えても、世界中に1人もいないのかと問われると、断言できません。

Q12・聖夜は呪文詠唱ができないけど、転移魔法はどのような理屈で発動してるの？

「事象の書き換え」に伴つ、座標のイメージの具現化によつて発動しています。

敢えて分類するのならば、無詠唱という処理によると表現できません。

これまでの主な登場人物（前書き）

これまでの主な登場人物の紹介です。

これまでの主な登場人物

○中条 聖夜なかじょう せいや

本作の主人公。青藍魔法学園2年。

自身の魔力に負け、色素が抜け落ちた白い髪が特徴的。生まれつき呪文詠唱ができない。

無属性無系統魔法に属する『転移魔法』を操る。

○花園 舞はなその まい

聖夜の幼馴染。青藍魔法学園2年。

日本五指に入る花園家のご令嬢。聖夜曰く「お嬢様らしからぬ言動が多い」。

その一族特有の魔力から、髪は目を見張るような赤色。無属性非系統魔法に属する『操作魔法』を操る。

○姫百合 可憐ひめゆり かれん

聖夜の元護衛対象。青藍魔法学園2年。

日本五指に入る姫百合家のご令嬢、その長女。

絵に描いたような黒髪のお嬢様で、物静か、丁寧な口調。

現代の魔法メカニズムでは解明できぬ『氷属性』を発現できる。

○姫百合 咲夜ひめゆり さくや

聖夜の元護衛対象。青藍魔法学園1年。

日本五指に入る姫百合家のご令嬢、その次女。

聖也の事を「中条せんばい」と呼び慕う。

○リナリー・エヴァンス

聖夜の魔法の師匠。命の恩人。

聖夜が日本へと帰国する要因を作った張本人。

魔法界では、相当の発言力を持っている……らしい。

聖也はよく「あの女」と口にするが、本当はとても尊敬をしている……かもしれない。

第0話 1ヶ月前！！

「そろそろ皆さんも意識し始めているかもしれませんが、1ヶ月後には魔法選抜試験が行われます」

朝。うらかな日差しの中、担任・白石しらいしはるか先生の挨拶は、いつもとは違う言葉から始まった。

「1ヶ月は長いように見えて実はとても短いもので」
「……魔法選抜試験？」

ぼーっと窓の外を眺めていた俺の思考が、突如現実を引き戻される。あまり平和的では無い単語が聞こえた気がしたからだ。

「そう言えば、中条なかじょうさんはご存じ無いんですよね？」

「ああ。どっかで聞いたような気もするが……、気のせいかな。定期試験のようなものか？」

「うーん、定期的な試験と言うとそうなのですが……」

俺の問いに首を捻っているのは、日本で五指に入る名家の出・姫ひめ百合めゆり可憐かれん。黒を黒で染めたのではと思える真っ黒な髪を腰辺りまで伸ばしている。同年代の女の子よりも、少しだけ成長が早いと思われる大きめの胸。きゅっと引き締まった腰。程よく膨らんだお尻。容姿端麗、文武両道。非の打ちどころの無いお嬢様だ。

「……ので、チームとしての適性も」

「そもそも、魔法選抜試験とは1年の時には無かったものでして。中条さんには言うまでも無い事かもしれませんが、魔法とはその扱えるレベルや成長速度等、どれも個人差の激しいものですから。同年代とは言っても、全員が同じレベルの授業を受けるのは限度があるのです」

「だろうな」

可憐の説明に頷く。魔法は、個人差が激しい。俺のように先天的な特殊魔法を授かっている者がいれば、可憐のように一族特有の属性魔法を持つ者もいる。中学生の頃から爆発的に能力が開花する者

がいれば、年老いてゆつくりと開花する者もいる。もちろんここで言う開花とは、1から使えるようになるという意味では無く、ポテンシャルが飛躍的に上がるという意味だ。通常、魔法が使えずに生まれてきた者は、生涯に渡って使えない。

「には！ 言えません！ ですから！ ただ仲が良いから！ 強いから！ という理由で！ 選ぶのではなく！」

「……んじゃ、選ばってというのは？」

「お察しの通りかと。青藍魔法学園では、2年の2学期後半から、魔法使いとしてのランクによってクラスの編成が変わるのです。ここで言うランクというのは、青藍魔法学園独自の採点方式によって振り分けられるのですが……」

「……成程、それで“選抜”ってわけか」

納得した。ようはお互いの蹴落とし合いってわけだ。日本有数のエリート校と言われる青藍魔法学園にも、存外実力主義の要素はあったらしい。ま、平和ボケしている学園では、エリートは名乗れないか。

「したバランスを！！ 考えて！！ その上で！！ 息の合った！！ メンバー編成で！！」

「今現在のクラスはAからDまでの4クラス。1クラス30名前後。これは実力に関係無く、ランダムで割り振られています。総勢120人……いえ、中条さんが編入されて来ましたので、正確には121人ですか。ここから、2年の2学期後半にて6クラスに配分されます」

「1クラス20人の計算か」

随分と少数精鋭のクラスになるもんだ。

「いいえ、違いますよ中条さん。言っただけです。“魔法使いとしてのランクによって”クラスの編成が変わると」

……は？

「おいおい。じゃあ、クラスに1人しかいないって展開もあり得るわけか？」

「その通りです。流石に1人とまでは行きませんでした。現3年のトップクラス・クラス^{クラスター} Aの在籍者数はたったの3人です」

「……マジかよ」

3人で教室1つ？ 机は横に並べんのか？

「そのクラス選抜を行う試験を総称して、魔法選抜試験と呼ぶわけです。これが行われるのが今から丁度」

「1ヶ月後つてわけなのですよっ！！！！」

「うおわっ！？」

「きゃっ！？」

凄まじい音を立てて、何かが俺と可憐の間を横切る。直ぐ後ろの壁で、その何かが砕け散った。パラパラと、白い粉末が上がっている。

「……チヨ、チヨーク？」

今、ジャイロ回転してなかったか？

恐る恐る前を振り返る。

そこには俺の机の前まで迫り教科書を丸めて仁王立ちする、白石先生の姿があった。

「……えーと」

「分かってますよー。分かってますともー。中条君はまだ転校してきて間もないのです。青藍魔法学園の仕組みだって、分からない事が多いでしょー？」

「は、はい」

「……なら」

ゆらり、と。THE・ぼわぼわの異名を持つ白石先生の腕が“ぶれた”。

「姫百合さんじゃなくて、私の説明を聞きなさいっ！！！！」

「すんませっ！？」

すばこーんっ！！！！！！

丸めた教科書^{えもの}で思いつきり引っ叩かれる。威力は大した事ないのだが、そのビジュアルと何より音が凄い。

教室が笑いに包まれる。

「……ばーか」

赤毛の幼馴染が呟いたその一言が、嫌に耳に残った。

第1話 魔法選抜試験とは（前書き）

ちよつと説明文が長いですが、お許し下さい。

初めから誤字発見です。

『選抜により、現5クラス計121人の生徒は、
正しくは現4クラスです。失礼致しました。』

第1話 魔法選抜試験とは

魔法選抜試験。

それは青藍魔法学園の生徒が、魔法の授業を受ける上で、“自身の身の丈に合った”カリキュラムを組むために行われる実力試験の事を指す。

選抜により、現4クラス計121人の生徒は6クラスへと振り分けられる。優秀な順に「A」「B」「C」「D」「E」そして「F」。今までは単なるクラス分けに伴う記号でしかなかったアルファベットが、ここからは自身の魔法使いとしての実力を示す資格となるわけだ。

各クラスには、均等に人数が割り振られるわけではない。2年2学期後半より徹底した実力主義を敷く青藍魔法学園では、クラスによる人数の差異は当たり前となる。過去にはクラスクラスエー「A」に1人も在籍者がいなかった事もあるし、学年平均が高かった時にはクラスクラスエー「F」が欠番だった事もある。あるいはクラスクラスシー「C」に学年の70パーセントが集中した事も無かったわけではない。

選抜には、青藍魔法学園独自の試験内容・採点基準が設けられている。その為本来ならば学園外ではまったく役に立たない資料となるのだが、実際には魔法大学の推薦や一般企業がアプローチを掛ける上でも重要視されている。そこはやはり、名門校としての信頼度の高さが窺えるところであろう。

採点は10項目を6段階の採点で行い、満点が「5」、良が「4」、平均が「3」、やや不満が「2」、不満が「1」、能力無し若しくは判断不能が「0」として採点される。「5」と「0」は滅多にない。前者の成績が付こうものなら、大学や企業はノズ挙ってアピールしてくる近代稀にみる優秀者の烙印が押されるし、逆に後者が付こうものなら“出来損ないの魔法使い”なる烙印が押される（最も“出

来損ないの魔法使い”という単語は既に禁止ワードとして周知されており、差別用語となる）。

採点の際に用いられる10項目とは、「魔力容量」「はっげんりょう発現量」「発現濃度」「攻撃魔法」「防御魔法」「補佐魔法」「詠唱効率」「判断能力」「独創性」「属性保持」となっているが、一言で10項目と表現してもそれぞれの項目の内部で事細かに吟味される。

ここで順に説明させて頂きたい。

1. 「魔力容量」について。

これは、10項目の中でも一番採点のし易い項目だろう。その名の通り、自身の身体に宿す魔力の絶対容量について、だ。つまり自分が持ちうる魔力の量、その器の大きさと置き換えてもいい。

魔力容量は鍛錬によって増やす事は可能だが、それには限度がある。魔力容量に恵まれなかった人間は、いくら努力しようが生まれつき膨大な魔力を持って生まれた人間には決して敵わないだろう。

だからこそこの項目は、その人物の魔法使いとしての資質の高さを端的に表すものとして重宝されている。

2. 「発現量」について。

おそらく聞きなれない言葉であると思う。基本的に魔法を発動する為には、自身の体内に眠る魔力を詠唱という「音」の刺激によって活性化させ、練り、体外へと放出させる必要があるが、この放出量の事を発現量と表現する。つまり魔法を使用するに当たり、一度にどれだけの魔力を放出できるかという事だ。

これも鍛錬によって増やす事は可能だが、発現量は自身の魔力容量にも関わってくる為、その増減については個人差が激しい（魔力容量が極端に少ない者が極端に多い発現量を持っていると、魔法発動と同時に死に至る可能性もある為、無意識の内に体内でリミッターが掛かってしまうのだ）。

とは言っても膨大な魔力容量を持つ者が発現量に恵まれず、その

魔力を持って余すといった事例も見受けられる為、一概に比例の関係にあるとは言いきれない。

3. 「発現濃度」について。

魔法を使用するに当たり一度に放出できる魔力量の事は発現量と言いが、発現濃度とはその発現された魔法に宿る魔力の密度の事を指す。

発現量と発現濃度は比例しない。いくら巨大な魔法球を作り出そうが、幾重にも圧縮された濃い魔力を込めたピンポン玉サイズの魔法球に負ける事もある。作り出した魔法の濃度が高いという事は、それだけ大きな力を持っているという事であり、発現濃度が高い魔法を使える魔法使いほどレベルが高いと言える。

先天的な能力に左右されやすい魔法というカテゴリーの中で、努力次第でいくらでも鍛える事ができる数少ない項目の1つである(最も、センスが高い方が良いのは言うまでもない)。

4. 「攻撃魔法」について。

その名の通り対象を攻撃する魔法である。物理的な効果を与えるものならば手法は問わない。魔法球でもいいし、矢の形状にして貫通力を高めてもいい。火属性で火炎を吐いても、土属性を用いて地盤沈下を狙っても、攻撃魔法に分類される。

精密性、スピード等、ただ単に攻撃力のみを評価するのではなく、運用性という大きな視線から総合的に評価される項目である。

5. 「防御魔法」について。

これもその名の通り、対象からの攻撃等から身を守る為の魔法である。最もポピュラーなのは、やはり魔力を板状にして展開する、いわゆる障壁やシールドと呼ばれるものだが、防護する為に用いられる魔法は他にも数多く存在する。

こちらにも効果範囲や持続性等、評価するべきポイントは多岐に亘^{わた}

る項目である。

6. 「補佐魔法」について。

攻撃にも防御にも当てはまらない魔法、主に術者のアシストの役割を果たすものを指す。但し、この項目の境目は思いの外曖昧である。

例えば、身体強化魔法。纏う事で自身の運動能力を飛躍的に向上させる力を持つ魔法であり補佐魔法に分類されるものの1つだが、実際にはその破壊力故に攻撃魔法として評価される事もあれば、反面その纏う魔力の耐久値によっては防御魔法として評価される事もある。

7. 「詠唱効率」について。

魔法を使う為には、基本的に呪文詠唱という工程が必要となる。これは体内に宿る魔力を“音”の力で活性化させ、練る為だ。詠唱効率とは、その言葉の通り詠唱による魔力伝達の効率を見る項目である。

詠唱と一口に言ってもその難易度は高い。上手い魔法使いなら1音（1音とは、1単語という事）で発現できてしまう魔法でも、下手な人間が使おうとすると5音も10音も必要となる場合がある。強力な魔法であればある程詠唱の難易度は上がるが、詠唱効率が良ければ良いほど音も詠唱時間も短縮できる（この技術を詠唱破棄と呼ぶ）。

但し、「無詠唱」は詠唱効率には含まれないので注意が必要（その名の通り、詠唱をしていない為）。

8. 「判断能力」について。

魔法使いとしての資質を問われる項目の1つ。どの場面での魔法を使うのが最も効率的かを瞬時に判断し、それを実行する為に必要な力だ。危機的状況に陥った時にパニックにならず冷静に分析

できる力もあれば、この項目にて十分に加算される。

自分の実力を把握した上で、現状取り得る最善の策を選び抜く能力。これは座学よりも実践でこそ身に付けられる能力である。

9. 「独創性」について。

独創性と言われて初めに思い浮かぶのは、やはりオリジナリティであろう。だが、青藍魔法学園とてオリジナル魔法を開発する事がどれだけ大変な事かは重々承知している（もちろん、オリジナルを開発し、それを発揮できるのなら言うことは無いわけだが）。

ここで言う独創性とは単に新魔法を開発してみる、というわけではない。魔法と魔法の組み合わせや使い時等、言い換えるならば意外性のようなもので評価される。

10. 「属性保持」について。

魔法には属性を付加する事ができる。魔法の属性とは「火」「水」「雷」「土」「風」「光」「闇」、他特殊な属性がいくつかあるわけだが、その属性を魔法に付加する事を属性付加と呼んでいる。

属性保持はその属性付加を見るもので、如何なる魔法に属性が付加され且つ如何なる効力を及ぼすかを見極める項目である。

複数の属性を有する魔法使いには、高得点が与えられる。

魔法選別試験は各学期の中間付近で行われる。これは学期末にしてしまうと本来の定期試験（国語や数学等の一般科目、もちろん魔法関連の試験も別にある）に支障を来してしまう為だ。文武両道を謳う青藍魔法学園にとって、それは好ましくない。よって各学期の中間付近で選抜が行われ、学期の最中にクラス替え（青藍では、シヤッフルと呼ばれる）が行われるという傍から見れば奇抜な学校運営がされているというわけだ。

落ち着きを取り戻した教室に、白石先生の説明が続いていた。

「試験には、様々な課題がありますから。何か一つさえ秀でていればいいというわけではありませんよ？ 苦手な分野だからという理由で放置せず、きちんと向き合って自己研鑽に努めて下さい」

女史は云う。

「そして、先ほども説明しましたけれど。誰かさんが女の子と会話するのに夢中でぜんっっぜん！！ 聞いていなかったようですよ、改めてもう一度説明しておきますー」

ジト目で睨まれるより先に、無言で頭を下げておいた。

クスクスと笑い声が聞こえる。隣の可憐からは、聞こえるギリギリの音量で「……すみません」という謝罪があった。白石先生の視線が怖すぎてそちらの様子は窺えないが、おそらく耳まで真っ赤になっっている事だろう。

「魔法選抜試験には、3人1組でチームを組んだグループ試験もあります。試験までは1ヶ月ありますが、そのグループの登録期限は3週間前まで。即ち、この登録期間は1週間しかないわけです。それまでに各自グループを作って欲しいわけですが……」

白石先生は、教卓をぺちぺち叩きながら。

「ここで皆さんに忠告です。“自分のレベルに沿った友達と組む事”。こういう言い方はあまり好きではないのですが。試験を楽にクリアする為に自分より明らかに魔力の強い子と組んでしまうと、グループ試験では肝心の自分が目立たなくなってしまう。そうすると本末転倒ですからねー」

そりゃそうだろうな。

「逆に、自分の魔法と相性のいい子と組んで、それが試験で発揮されれば点数は当然上がります。もうこの瞬間から、ある意味で“試験は始まっている”のです。この1週間が、皆さんにとって実りあるものになる事を期待しますー」

「いつでも相談には乗りますよー。気軽に声を掛けて下さいね」というお言葉を残して、白石先生は教室から出て行った。ホームルームの終わりである。束の間の休息の後、1時限目の授業に突入する。

休み時間は10分しか無い為、この時間は本来ならば生徒はあまり動かない。が、“あの”説明があったせいか、今日のクラスメイトは忙しなく教室を行ったり来たりしていた。それは他のクラスも同じようで、さっきから引っこり無しに知らぬ顔が出たり入ったりしている。

「白石先生が言っていたように、誰と組めるかで試験結果も変わってきますからね。この1週間は多分ずっとこんな感じかと」

「……そつか。って、お前はいいのか？」

言葉と行動が一致せずいつも通りの可憐に向かって、思わず問いかける。

「いいのか、とは？」

「メンバー探しだよ、メンバー探し。早くしないと有力株は捕られちまうんじゃないのか？」

「ああ、その事ですね。それなら」

「まったく問題ないわよ」

俺の後ろから声が聞こえた。聞き間違いのない、その声色は。

「舞か」

はなそのまい
花園舞。

可憐と同じく日本五指に入る名家のお嬢様。特徴的な

は、何と言ってもその髪。染めたわけでも無いのに、目を瞞る程の真つ赤な色をした髪だ。一族特有の濃い魔力に反応し、このような色になっているらしい。スレンダーな体型で容姿端麗、文武両道。性格に難アリだが、黙っていればこの上なく完璧なお嬢様だ。ちなみに、俺の幼馴染だったりもする。

「可憐と組むのは、この私よ」

「ああ、いいんじゃないか？」

実力的に問題ないだろう。唯一問題だった仲の悪さも（舞が一方的に毛嫌いしていただけのようだったが）、既に解決済みのようだしな。

「何で他人事のように言ってるの？」

「あ？」

「アンタも組むのよ。私、可憐、アンタ。ほら3人」

「……」

「……」

「……」

「は？」

「……」

「……は？」

思わず心の中の声を復唱してしまった。

「……ほら、3人」

「呆れた顔で言い直してんじゃねえよ！！」

俺の反応に満足できなかったのである。舞が、ジト目で睨んでくる。

「何よ。問題有るわけ？」

「……あるに決まってるだろう」

面白くなさそうな声色で問ってくる舞に、うんざりしながら返した。その返答の仕方に疑問を抱いたのか、可憐が俺の事を窺うように口を開く。

「もう何方かと組まれるご予定が？」

「えっ！？ 何、そうなの！？ 聖夜あ！！」

「ぐえっ！？ ちよっ……、く、首絞めんな。朝の教室を殺人現場

にする気か!!」

いきなり掴み掛ってきた舞を引っぺがす。

「魔法選抜試験の存在すらついさっき知ったような人間が、事前にグループなんか組めるか!!」

「あ、確かに」

可憐が納得したとばかりに、ぽんと手を叩く。

「じゃあ何でダメなのよ!!」

「俺がお前らと釣り合うわけねえだろうがよ……」

「あのねえ、そりゃあこの間のもぐがっ!？」

「それは口外するなっつってんだろ!!」

危うく口走りそうになった舞の口を慌てて塞ぐ。一瞬掌にぬるりとした感触があった気がしたが、気合で頭の外に追いやった。

“あの事件”は俺が日本に戻ってくるきっかけとなったものだが、公言していいものではない。

姫百合可憐誘拐騒動。騒動とは言っても実際に騒いだのは一部分の人間だけだし、学校側はその事件を無かった事にした為に一般生徒には知られていない。そしてその中心人物だった姫百合可憐は

「そう、ですよ。中条さんと私なんかじゃ、釣り合わないですよ。……勝手に舞い上がっちゃって、ごめんなさい」

素敵な勘違いをしていた。

俺に向かって頭を下げる可憐を見て、周囲からざわめきの声がかかる。

「えっ!?! ひ、姫百合さんからお誘いを受けて、断っちゃうの!？」

「マジかよ!! どこまで身の程知らずなんだ、中条!!」

「仮に自分が目立たなくなったとしても、それは男の本望だろう!!」

「てめーらはややこしくなるから黙ってる!! ちよっと、お前ら2人こっち来い!!」

「え！？ ちょ、聖夜！？」

「きゃっ！？ 中条さん！？」

「聖夜あー！！ てめえ、ウチの誇る二大プリンスを何処へ連れでぶばっ！？」

「邪魔だクソ野郎！！」

「ま、将人まことーっ！？」

2人の手を引いて、教室から飛び出す。途中、鬱陶うっとうしいクラスメイトが視界に入った為、思わず蹴り飛ばしてしまったが……。まあ、無かった事にしておこう。

「ここまで来ればいいか」

人通りの少ない廊下まで走り、手を離す。

「……はあ……はあ。きゅ、急に、何なのよ……」

「はあ……な、中条さん。……足、速過ぎです」

「あ、悪い」

振り返ってみれば、手を膝に当ててはーはー言っているお嬢様2人。結構形振り構わず走ってしまったな。悪い事をした。

「……で？ どういう理由か説明して貰えるんでしょうね」

「もちろん。あそこじゃあまり話せない内容も含むんでな」

俺の言葉を聞いて、2人とも背筋を伸ばす。可憐のみまだ若干呼吸が荒いが。

ともかく。あまり結論までを長引かせるべき話でもない。端的に伝える事にした。

「魔法選抜試験の内容を聞いて、はつきりした。お前らは、俺以外のパートナーを探せ」

「……は？」

「……え？」

俺のあまりに迷いの無い断言っぷりに、舞も可憐も呆けた声を漏らして固まる。

「ちよっ、どういう意味よ!？」

予想通り、先に回復したのは舞の方だった。その問いは予想できなかったが。

「おいおい、舞。俺が何でわざわざアメリカでライセンスを取ったと思っただ？」

「っ」

俺の言葉に、舞が返答に詰まる。

ライセンス。即ち、魔法使いたる正当な証。

本来ならば俺たち高校生が取れるような代物ではもちろん無い。それを先日、俺は海外で取得していた。

「呪文詠唱ができない”からだよ”」

そもそも、向こうからの解答など期待していない。言うまでも無く、2人にとっては分かりきっている質問だからだ。

「青藍魔法学園独自の採点基準と言うから、少し期待したんだが……。やはり、“日本の教育機関”では“日本が考える基準”でしか採点しないんだな」

偽りでは無く、本音。期待してしまっただからこそ、苦々しい声色としてその言葉は漏れ出た。

「……おっしゃる意味が分かりません。日本が考える基準とは……」
「おいおい、これ以上俺に言わせるのか？」

俺の言う所の意味には辿り着いているのだろうが、それでは納得できないという表情で可憐が問うてくる。

「採点10項目のうちの1つ、詠唱効率。これは俺にとっては天敵……と言うより、絶対に乗り越えられない壁だな。詠唱そのものが出来ない俺に、効率を求められても困る。無詠唱は詠唱ではないから点数に加算されない」

俺の話す内容に舞も可憐も口を挟まない。俺の淡々とした話し方

に、圧倒されているのかもしれない。

「魔法選抜試験。どこかで聞いた事があったと思ったよ。この学校の試験結果つてのは、大学や一流企業も注目しているらしいな？ 転入前の俺の耳にすらその事実が入ってくるくらいだ。知名度は相当高い。そして」

「これが、本当のネックとなる部分。」

「5段階の採点基準の内、最低点が付けられた者に貼られる蔑称も、俺は知ってる」

「聖夜っ！！」

俺のその先に紡ぐ言葉を先読みしたであろう舞が、叫ぶ。
構わず、続けた。

「出来損ないの魔法使い」。俺は、まさにそのものだな」

グループ試験がある以上、その烙印は2人の価値を確実に落とす。巻き込むわけには、いかなかった。

第2話 グループ登録期間の始まり

「んー？ 余った生徒の処遇、ですか？」

ギシツという音を鳴らしながら、白石先生は椅子ごと俺の方へと振り返った。

昼休み。俺は相談いつでもオーケーと豪語していた白石先生を訪ねるべく、教員室へと訪れていた。

「質問の意図が分かりかねますけれどー」

「そのままの意味ですよ。3人1組のグループ編成にて、選抜試験が行われると聞きました。現行、生徒の数は121名。この半端な数は私が転入してきたからでしょうか？ 本来ならば120人で、“余り”など出るはず無かったです。その余った生徒はどう試験を受けるのですか、という質問なのですが」

「私はそんな事を聞いているわけではないのです」

白石先生が、椅子から少し身を乗り出す。

「中条君。私が聞いているのは、質問に対する“意味”では無く“意図”ですよ。何故、君がそのような事を気にするのですか？」

「……先生ならば、分かっていると思うのですが」

「はて？ 何の事を言っているのでしょうか？」
ぼわぼわとした声色ですっ呆けて下さる。思わずため息が漏れ出た。

「私と組む人間など、皆外れくじなんですよ？ 私がグループに加われるとお思いですか？」

「どうして外れくじだと言い切れるのです？ 結果どころかまだ試験すらも受けてない状態ですのに」

「受けなくても分かりますよ。私は“出来損ないの魔法使い”なんですから」

その単語に。白石先生はすっと目を細めた。

「中条君。今のセリフは、“聞かなかつた事”にしてあげます」

「結構ですよ。今は他人に対する侮蔑を込めた発言ではありません。私自信に対する、客観的な事実を述べただけです」

「その単語を出す事自体が問題だと言っているのですよっ!!」
ざわっ

教員室がざわめいた。当然だろう。教師の1人が生徒に対して、いきなり声を荒げて叫んだのだから。周囲からの視線で、ようやく自身の現状に気付いた白石先生は、「場所を変えましょう」と小さくつぶやいて、俺の手を引きながら教員室の扉に手を掛けた。

「何か飲みますか？」

「いえ、遠慮しておきます」

俺の返答に頷いた白石先生は、目の前の自動販売機から離れ、屋上の扉に寄って鍵を掛けた。

「……職権乱用なのでは？」

「あまり人には聞かれたくないでしょう？」

そう言っ指でベンチを指す。俺が座った事を確認してから白石先生もその隣に腰掛けた。

「さてー、何かからお話しましょうか」

「正直、回りくどい話はあまり好きではありません。手っ取り早く結論が欲しいです」

少し失礼な物言いかとも思ったが、白石先生は特に気にした様子も無く笑った。

「あまり事を急ぎ過ぎると、周りが見えなくなっちゃわよ？」

「そうですね。善処します」

「少しも改善の意思が見られない顔で言われてもねえ……」

笑いが失笑に変わる。

「まあ、いいわ。まず、貴方の見解にある間違いを正しておく必要があるわねー」

「間違い？」

「貴方が転入して、現2年生は121人になった。貴方が来なければ120人のままでちょうど3人1組のグループに割り当てられたって考えは、間違っているのです」

「？ どういう意味です？」

「中条君。この学園には、生徒によって組織される一定の権力を持ったグループが存在します」

「……生徒会ですか？」

「そうです」

話には何度か聞いている。舞の話では、相当なやり手らしいが。

「彼らは魔法選抜試験が免除されます。彼らは自動的に、クラスエクラスAに配属される事が決定しているのです」

「……は？」

一瞬、何を言われているのかわからなかった。

おいおい。どれだけVIP待遇なんだ、生徒会の連中は。

「生徒会に入る事が、そこまで破格の待遇を受ける事に繋がるのですか？ 入る為に選抜試験より厳しい選定基準があるとか？」

「いいえ」

白石先生はふるふると首を振る。

「選定試験が行われるかどうかは、生徒会長次第ですね！。何しろ、生徒会長の推薦さえあれば“誰でも”生徒会には入れますから」

「……」

嘘だろ。無茶苦茶じゃねえか。

「けれども、そういった扱いだからこそ、必然的に生徒会の面々はそれなりの使い手の集まりとなるのです。なぜなら、ここは魔法学園。半端な実力では、廊下で起こった小さな喧嘩ですら止められませんかからね」

……言っている意味は理解できるが。

「だから、中条君の見解は間違っているわけです。現生徒会の2年生は3人います。その3人は選抜試験免除になりますから、中条君

が転入してきた事が余りの生徒を生み出す原因にはならないのです
ー

「……なるほど……って。3人ならそれを除いて117人でしよう。それなら結局私の転入のせいで118人になるのだから、余りは出るじゃないですか」

「……あ、ホントですね。中条君、計算早いです」

思わず、がっくりきた。これは、別に計算が早い遅いの問題ではないと思う。

ちよつと真面目な感じで違和感があったが、やっぱりTHE・ほわぼわの名は健在だった。

「でもでも、余りが出るからと言って、余りの生徒が試験不合格になる事はないですよ？ 寧ろその為の生徒会と言ってもいいです。

余ってしまった生徒は、生徒会の面々と組む事ができますから」

「穴埋め要員ですか」

「そんな感じですねえ。後は試験中はその他雑用なんかも引き受けてくれていますか……」

「所謂便利屋ですね」
いわゆる

確かにそうかもしれませんが、白石先生が苦笑する。

「なので、もし“仮に”。中条君がメンバーから溢れちゃった場合は、生徒会の人と組む事になりますね」

「……なるほど」

それが、俺の欲していた答えとなった。仮にと言うが、間違いなくそうなるだろう。俺は自分からメンバー探しをするつもりは無いし、そもそも転校生である俺に広い友人的ネットワークがあるはずもない（舞と可憐を除けば、同学年で友人と呼べる奴は後3人ほどいるが、丁度数が合っている為、そっちはそっちでチームを組んでいるだろう）。こちらからアクションを起こさなければ、自動的に残る1人は俺になるってわけだ。

白石先生の話じゃ、生徒会の面々は試験免除の上にクラスクラス「A」への配属が確定している。ならば、“出来損ないの魔法使い”たる俺

と組んでも、何ら彼らの進路に支障は出ないだろう。

協力して貰う他ない。未だ顔すら知らぬ面々ではあるが、こうした事に手を貸してくれる役割のはずだ。

そんな俺の心情を読んだのか、白石先生は訝しげな視線を俺に向けながら一言。

「中条君。もしかして、花園さんと姫百合からお誘いでも受けました？」

「……」

予想外の鋭い一撃が飛び出した。

俺の沈黙を肯定と受け取ったのだろう。これ見よがしにため息を付かれた。

「まあ、大方そういう事だろうとは思ってましたよ。中条君と花園さんは幼馴染だと聞いていますし、姫百合さんも中条君となら、お話している姿をよく見かけますからね」

「……」

「で、反応を見る限り断ってしまったと。どうしてです？ 魔法実技の先生のお話では、中条君はかなりの使い手だと伺っていますよ。寧ろ詠唱を用いぬスタイルであるの實力というのは、舌を巻くほどだとお褒めの言葉すら頂いてますが」

それは高校基準での評価だろう。俺は既に魔法使いのライセンスを取得している。つまり、俺の今の實力が高校基準を上回っているのは当たり前なのだ。しかし、裏を返せば俺はその基準を先に通過しているというだけであり、俺がエリートであると言う証明にはならない。年が経過するにつれて、判定基準は大学のものとなり、社会一般のものとなる。そうなった時、俺の今の實力がそのまま評価されるとは考えられない。

それに。俺がアイツらの誘いを断った理由は、そこではない。

「“出来損ないの魔法使い”というフレーズは、白石先生がおっし

やるように、今は差別用語として禁止されています。ですが、それはあくまでそうして蔑む事を禁止しているだけであり、思想の上では自由なんです。これは大学の推薦や会社の採用基準に当てはめれば自ずと答えが出てきます。まあこんな事、生徒から改めて言われるまでもないとは思いますが」

俺の冷めた口調に、白石先生の口が閉じる。

別に白石先生が悪い訳ではない。話をする限りでは、この人はそういう差別世界を否定する人間である事は明白だ。だから、俺に劣等感を抱かせないように配慮した会話を心掛けてくれたのだろう。だが、白石先生が差別しないからと言って、この問題は解決にはならない。舞や可憐が今後どのような人生を送るかは分からないが、“出来損ないの魔法使い”と組んだ事のある過去は、間違いなくプラスにならない。

学校でツルむだけならまだしも、非公式とはいえ書類として残るのだ。そして、大学や企業はそれを重要視している。グループを組むという事は、それなりの友好関係を築いているという事。

生まれの良い名家のお嬢様が、欠陥品と仲が良いという事。

魔法社会は、汚い。昔、魔法使いの存在がフィクションの中だった頃。その想像の世界では、決して考えられなかったであろう差別問題。

“出来損ないの魔法使い”は、世界中を見渡してもそれほど数はいない。もちろん、俺のような欠陥を持って生まれてくる子どもの絶対数は少ない。が、俺が言いたいのはそういう意味じゃない。いないという表現は、正しくないか。“いられない”と言った方が正しいのかもしれない。魔法社会の性質上、自分の限界を早々に見切った者たちがドロップアウトしていくからだ。魔力を持った人間が、魔法社会で生きなければならぬという義務はない。誰だって、劣等感を抱きながらも生きていくのは辛い。だから、魔法を捨

て、魔法を隠し、魔法の無い一般校に通い、魔法の無い一般企業に勤め、魔法の無い生活を送る。

間違つてはいない。その生き方を否定するつもりも無い。俺も、師匠・リナリー・エヴァンスの教えが無ければ魔法使いという道を歩き続けていたか、自信は無い。

……ともかく。

“出来損ないの魔法使い”という蔑称は、古くから存在していた。差別用語として禁止された今も、根強く風習として残っている。厄介なのは、この蔑称が与える悪影響はその個人に限定されないという事だ。

舞や可憐の属する名家ならば、一層の事これが問題となる。

日本五指に名を連ねる名家のお嬢様が、欠陥品と仲が良い。それは、2人の家の価値をそのまま墮落させる事になりかねない。今持つ地位から引き摺り下ろされる可能性すらある。これが大袈裟な話では無く、本当にそうなりかねないから洒落にならない。

「軽率でした。ごめんなさい」

しばらく無言を保っていた白石先生が、頭を下げてくる。

おそらく、俺が考えている内容に見当が付いたのだろう。だからこそ、「彼女たちなら、そんな事気にしないとしますけど」といった言葉は出てこなかった。俺が言いたいのはそのう浅い話じゃない。そこまで言葉にせずとも、目の前の先生がすっかり理解してくれたのは嬉しかった。

「そういう事でしたら、私の方からも生徒会の方には声を掛けておきましょう。多分、中条君は面識ないと思いますし」

「助かります。……では、そろそろ昼休みも終わりますので」

返答を聞く前に、立ち上がる。歩き出そうとしたところで、後ろから声が掛かった。

「中条君。相談くらいなら、いくらでものねますからね。貴方はその特異体質を改善する為に、ここへ来たのでしょうか？」

「……ありがとうございます」

その最後のセリフに、心が痛んだ。

俺は青藍魔法学園へ転入するに当たり、自身の特異体質を改善する為と嘘の情報を通していた。呪文詠唱が出来ないという体質を、改善する。その出来るはずも無い情報を。

だから白石先生はここまで踏み込んだ会話が出来たのか、と納得した。何をやるうが無駄という状態と、努力すれば治るかもしれないという状態。比べるまでも無い。手を伸ばせば、手に入れられるかもしれない光。そこに俺が立っていると思えば、手に入れているからこそ、頑張れという声援エールを込めた話だったのだろう。

しかし、現実には。。。

それ以上を考えるのは、止めた。

「聖夜!!! 逃げる!!!」

「は?」

柄にもなく感慨に耽りながら階段を下りていたところで、下から聞きなれた声が掛かった。

「……………修平?」

すずむらしむらうへい

杉村修平。この学園に転入した初日に意気投合した友人の1人だ。

その友人から、慌てた様子でしかも穏やかじゃないセリフを放たれて、思わず顔をしかめた。

「今までうまく身を隠していたのは褒めてやる!!! だが、まだ早い!!! 授業開始ギリギリまでは出てくるな!!!」

「いや、言ってる意味が分からんんだけど……………」

まったく意図の掴めぬ俺に、修平は「あんなあ」とため息を零した直後。

「屋上の鍵が掛かってたつてのは本当か!?!」

「ああ!!! さっき確認に行ったら開いてなかった!!!」

「なら、あの野郎はそこに籠城している可能性が高い!!」

「引き摺りだせ!!」

どどどどどどどど!!!!!!

何やら物騒な会話と物音が響いてくる。……しかも、段々と近づいてきているようだ。

「……何これ。どういう事？」

「……本当にその疑問が心の底から湧いて来ているようなら、お前の選抜試験の『判断能力』は悲惨な点数になるだろうな」

「おい」

あんまりな発言に抗議してやろうと思ひ、口を開こうとしたが。

「鍵は!？」

「ねえよ!!!!」

「蹴破れ!!!!」

数々の怒声が、それを掻き消した。

ますます近くなる轟音を耳にしながら、修平は頭を掻きむしる。

「ああ!! この野郎、取り敢えずこっちに来い!!」

「お、おいっ!？」

修平は無言で俺の腕を掴むと、そのまま全速力で走り出した。今まで居た廊下の踊り場から階段を駆け下り、そのまま廊下を走り抜ける。ここは生徒の教室では無く専門の研究室や倉庫として使われている空き部屋が中心の階だった為、人通りは無い。

けれども。

「男と手を繋ぐ趣味は無いんだけど!!」

「俺だつてねえよ!! アホ!!」

後方からバタバタと足音が響く。どうやらギリギリの所で俺たちには気付かず、そのまま階段を駆け上がったっていったらしい。直後、「きゃーっ!？」皆さんいったいどうしたのです!？」というぼわぼわした悲鳴が上がったが、その結末を聞き遂げる事は出来ずに、「ここだ!! とつとと入れ!!」

修平に首根っこを掴まれ、とある一室へと放り込まれた。

「はあ……はあ」

「……はあ、どうやら、うまくバレずに済んだらしいな」
軽く息切れしながらも、修平はそう呟いた。

「……バレずについて。いったいどういう事だ？」

「本当に何も知らないのか？ 今学園じゃ、ちよつとした騒ぎだぞ」
真つ当であるはずの俺の問いに、修平が心外そうな顔色で見つめてくる。が、俺の表情に嘘偽りが無い事を直ぐに見抜いたのだろう。思いつ切りため息を付いてから、口を開いた。

「お前、今朝2大お嬢様からのアピールを蹴つたる」

「……アピール？」

「そこから説明がいるのか」

修平はうんざりした表情を隠そうともせず、続けた。

「選抜試験グループへの、『勧誘』。通称『アピール』。これだけ言えば分かるだろ？ 今朝の姫百合の御嬢さんと花園の御嬢さんからのアピールを蹴つただろ、って話だ」

「そうだな。……アピール？ 勧誘ならスカウトじゃねえのか？」

「……それが問題なんだよ」

「あ？」

要領がいまいち掴めない。

「選抜試験は、各学期の中間に行われるわけだが。グループってのはずつと同じメンバーでいる必要は無え。毎度試験3週間前に、グループ登録つてもんが存在する」

「らしいな」

そこは知ってる。

「で。このグループ登録つてのには、その存在意義に少々尾ひれが付いてるってわけだ」

「尾ひれ？」

「白石先生が言ってた事は覚えてるな？ なるべく自身と同レベルの魔法使いと組め、と」

「ああ、言つてたな。自分の実力出す前に試験が終わつちや元も子もないからだろ？」

「ああ、その通りだ」

修平は俺の答えに頷きながら、

「その価値観でグループ編成するのは、“同性同士”の場合だけだな」

「……は？」

言っている意味を理解するのに、時間を要した。

「……つまり」

それを見た修平の、投げやりな説明は続く。

「一口に勧誘と言つても2通りあるわけだ。同性を誘う『スカウト』。異性を誘う『アピール』ってな」

「……。……はあ」

「まだ分かんねえのかよ。異性の『アピール』ってのはな、別の意でも取れるわけだ。気がある、少なくとも、この人には心を許します。そついつた間柄じゃねえと、普通は勧誘なんざしないだろ？ つまりだな……」

修平は一度大きく息を吸う。そして、

「今俺の前で呆けた顔で説明を聞いている中条聖夜君はこの学園が誇るお嬢様2人からの『アピール』を他に組む予定の人間がいるとつうわけでも無いにも関わらず事も何気にあしらい澄ました顔で午前中の授業を受けていましたよつて噂が立ってるわけだ」

「……え？」

一気に捲し立てられた。思わず目が点になる。

「しかも断られた側のお嬢様ときたら。他のクラスの、実力的にかなり上位の男子生徒が『アピール』に来ても「もうメンバーは決まっている」の1点張りときた。さて、皆の怒りの矛先はいつたいどこへ向かうのだろうかねえ」

「……」

「……」

「……嘘だろ？」

「嘘に聞こえたか？」

修平が顎で閉じられた扉を指す。外からは先ほどの怒声が復活していた。「屋上にいなかった」「じゃあどこだ」「昼休みが終わったちまう」「授業中の襲撃は避けた方が良さ」といった、いかにもな会話が飛び交っている。

「……さて」

やっと事態を理解したと踏んだのだろう。修平が場を切り替えるが如く、口にした。

「何か質問はあるか？」

深い一言だった。

扉一枚の先には、地獄しかないであろう事が容易に窺える。正反對に沈黙を守りきっているこの一室へ、逆に違和感を覚える程だった。目まぐるしく動く自身の思考を制御し、この場でもっとも必要と思える一文を構築する。

言葉は、自然に紡がれた。

「どうすればいいでしょう？」

青藍魔法学園名物。

魔法選抜試験4週間前から3週間前までの、1週間に渡って行われるグループ登録期間。

通称、『勧誘期間』（一部では、『告白期間』とも呼ばれる）。

普段魔法使用について厳しく制限している学園の中で、その制限

が“比較的”緩やかになる数少ない期間だ。学園が自発的に規制を緩めたのではない。単純に、收拾が付かなくなるのだ。この時期になると、魔法教師は反省文の用紙のストックを大量に手元に置くようになる。理由は言うまでもないだろう。

場合によっては、生徒会が実力行使で介入する事もあるという“賑やか”な1週間が、スタートを切った。

魔法選抜試験グループ登録期限まで。後、7日。

第2話 グループ登録期間の始まり（後書き）

聖夜の持つ“ハンデ”が、魔法世界ではどう捉えられているのか。それが浮き彫りになるお話でした。第2章は、内容が内容だけに少し暗めの話も入ってます。その分盛り上げるところは盛り上げていくつもりです。

今年中にもう1話更新したいと思ってます。

第3話 上位独占(前書き)

1 / 10 誤字修正。物語に影響はありません。

第3話 上位独占

振るわれる拳を払う。炎を纏いしそれは一般人を一撃で沈める程の威力を秘めていたが、同じく身体強化を纏った俺には効かない。

空いたボディーに左で一発入れてやろうと、突きを繰り出したが本城将人はほんじょうまへそれを読んでいたらしい。体を反転させる事でそれを躲し、その反動を利用した膝が俺の背後から襲ってくる。

まあ、そっちに回ればそれしかないよな。視線を向ける事無く、上半身を屈ませる事で躲す。

「おっ!?!」

避けられるとは思っていなかったのだろう。将人が驚いた表情を作る。

「甘いな」

回し蹴りを繰り出しているという事は、自身を支える軸は片足のみ。その状態で相手の動きに固まっているようじゃ、まだまだだ。

俺はその軸足を片足で払い、将人を転倒させる。何が起こったのか分からないという表情のまま崩れ落ちる将人に馬乗りになり、拳を将人の目前まで振り下ろした。

「そこまでっ!!!」

審判役の魔法教師が、決着を告げる。わっと緩衝魔法を展開する魔法陣の周りで観戦をしていたクラスメイトから、歓声が上がった。俺はゆっくりと立ち上がり、将人へと手を差し伸べる。

「さんきゅー、ははっ」

「? 何だよ、急に笑い出しやがって」

「いや、やっぱお前強えーな、と思ってよ」

俺の手を借りて立ち上がりながら、将人がそう呟く。

「阿呆か」

「あん?」

「俺の実力を試しながら、徐々にギア上げてったお前が言うセリフ

「じゃねえよ」

「……」

俺の指摘に、将人が目を丸くする。……気付かないとも思ったのか。

相手のレベルを考えながら自身の魔力を調節しようとする姿勢から、将人はやはりこのクラスの中では相当の実力を有しているという事が分かる。

俺のジト目を受けて、将人はバツが悪そうに笑った。鼻を鳴らして、戦闘用の魔法陣から抜けようと踵を返す。

「やっぱ、お前すげーわ」

「あ？」

将人の声に振り返る。

「俺が本気出してねえって気付けるって事は、お前もまだ“やれる”って事だろ？」

「……さあてね」

将人の不敵な笑みは、手で払った。

「絶対調じゃない」

「あん？」

身体強化を用いた接近戦に大はしゃぎをするクラスメイトの輪からようやく抜け出し（生贄として将人をその場に置いてきた）、一休みしようと実習ドームの隅に避難したところで、横から声が掛かった。

「舞か」

壁に寄りかかり、退屈そうにしている。どうやら随分前からここにいるようだ。

「何だ、参加しないのか？」

「しても迷惑なだけよ。私や可憐は、先生もどう扱っていいか悩んでるみたいだしね」

目も合わせずにそう言う。

力があり過ぎるといいうのも困るといふ事だ。確かに驕りではなく、舞や可憐がクラスメイトと魔法実践を行っても練習にはならないだろう。

「でー？ 気は変わったー？」

「何の話だ？」

「……それ、本気で言ってるわけじゃないわよね？」

ずるずると壁で背中を滑らせながら、舞がその場に座り込む。視線だけをこちらに向けて。

「私たちは、許さないわよ」

「そこは『諦めないわよ』の間違いじゃないのか？」

「……私は、許さないわよ」

「私怨じゃねえか！！」

呪い殺せそうな声色で呟いてんじゃねえよ！！

「はるかちゃんも言ってたでしょ、身の丈に合ったメンバーを選べって」

「先生に対する呼び名じゃなくない？」

「言ってたでしょ？ 身の丈に合ったメンバーを選べって」

「言ってた言ってた！！ 聞いてたから俺のズボンを下から引つ張るのはやめろ！！」

ぐいぐい引つ張ってくる舞の手を払いのけた。舞はさして気にする事無くその手をひらひらさせながら口を開く。

「魔法選抜試験は1年は行わない。そもそも2年の2学期からの制度だから。つまり今回が私たちも初めてなわけよ」

「……みたいだな」

適当に相槌を打っておく。

「皆、まだ動きかねている部分が多い。現に、同時に行われるはずの3年生は、既に廊下での魔法戦なんて日常茶飯事らしいわよ」

「え？ そうなの？」

初耳だった。

「選抜の後、クラスが割り振られるって話は聞いているわよね？」

新クラスになってからは別棟がホームになるの。だから騒ぎは聞こえづらいかもしれないわね」

……なるほど。確かにこの校舎で上級生とすれ違った事がない。違う校舎にいたって事か。

「クラスクラスエー」Aの人間と組もうと、皆必至らしいわよ」

「身の丈に合った人間と組むべきじゃないか？」

「そこに現生徒会長がいるのよ。この学園で絶大な人気を誇る、生徒会長様がね」

「……そついや、生徒会は全員クラスクラスエー」Aにいけるんだっけか。なら実力関係無いからな」

「はあ？ 何言ってるの、アンタ」

馬鹿じゃないのという視線で、舞が睨んでくる。

「この学園の最強は、間違いなくあの入部員よ。ま、アンタが入ってきたからどうだか分からなくなったけど」

「おい」

「で、話を戻すけど」

俺の反論は聞くまでもないとばかりに、舞が強引に話を引き戻す。

「2年の皆は、まだ様子見の状態なわけよ。昼休み、多少の騒ぎはあったけど、まだ“それだけ”って事」

「……それだけって」

「だって、生徒会の連中は誰一人介入して来なかったでしょ」

「……」

……確かに。あれだけの騒ぎがあったはずなのに、誰一人として止めようとするものはいなかった。

「そついう事よ」

舞がやつと分かったか、とばかりに呟く。

「まだ魔法が使われていない間は、騒ぎの内にも入らないって事。

これからは、魔法が飛び交う大混戦になるわ。去年の1年の時、今

の3年の騒ぎを見てたけど凄まじかったもの。よくあれだけの魔法が飛び交って、死人が出なかったもんだわ。流石は生徒会ね。“止め所”を知ってる」

「……」

「で？ 気は変わった？ 今の内よ。丸く収められるのは」

「……あのなあ」

ガシャアアアアアアアンツ！！！！

「っ！？」

「何だ！？」

突然の轟音。実習ドームにいたクラスメイトの視線が皆、一点に集中する。

ドームの入口。そこに立っていたのは。

「可憐！！」

舞が叫んだ。駆け出す。俺も後に続いた。

可憐は俺たちに背を向け、入口の方から目を離さない。

よく見ると、可憐と相對している1人の男子生徒がいた。尻餅を付いていたせいで、気づかなかった。その男子生徒の周りには、複数の氷柱が覆うように突き刺さっている。

「撤回して下さい。中条さんに対する侮辱は、許しません」

「あ、……わ……」

可憐のセリフに、男子生徒はバクバクと口を動かすだけ。

「ちよっと可憐、どうし」

「どうしたのですか、いったい」

「っ」

駆け寄った舞が放つ疑問を上書きするように、後ろから魔法講師がやってくる。

現場を見て、一瞬固まった後。

「はあ。今年の第1号者が、まさか姫百合君だとはねえ。『グループ登録期間』では、確かに日常生活において魔法を使用する生徒が増えるが……。我々学園側はそれを許可しているわけじゃない。

私が見た以上、処罰の対象だ。反省文を書いてもらうからね」

「……構いません。この方が謝ってくれさえすれば」

「可憐、やめておけ」

集まった人垣をどけて、可憐の横に立つ。

「これ以上、自分の顔に泥を塗るのは得策じゃない」

「中条さん……」

「な……何で、お前なんだ……」

「あん？」

足元から、声が聞こえる。

「何で、パートナーがお前なんだ……」

「……はあ？」

何の話をしてんだ、コイツ。

尻餅を付いた男子生徒は、俺からの怪訝な視線には気付いた様子も無く、蔑んだような笑い声を漏らした。

「俺は、知ってるぞ……。お前、呪文詠唱出来ないんだってな」

ピクリ、と可憐が反応する。なるほど、可憐が怒っていたのはそういう理由か。コイツが何を言いたいのかは、聞かずとも分かった。

「はは……。じゃあ、お前は」

「それ以上、口開くんじゃないわよっ！……」

ドオオオオオオオンッ！……！！

爆音に、皆が耳を塞いだ。

横から突如乱入してきた舞が、身体強化を纏った拳で男子生徒を吹き飛ばそうとしたのだ。

が。

「っ……！ 何で止めるのよ、聖夜……」

「気持ちは嬉しいが、事実だからだ。お前が手を下してくれる必要は無い」

舞の拳を、俺の掌が受け止める。

「あ、う、……あ」

男子生徒は尻餅を付いたまま震えていた。

「もう結構ですっ!!」

魔法講師が手を叩きながら叫ぶ。

「君たち皆反省文ですっ!!! 一緒に付いて来なさい!! 他の皆さんは自習っ!!」

「はあ!? 皆って聖夜も!? 嘘でしょ、魔法を使ったのは私と可憐だけ」

「いいから!!」

魔法講師に喰い付こうとした舞を、慌てて押し留める。

「事の発端は俺に原因があるみたいだし、妥当な評価だ。とにかく、これ以上問題を増やすな」

「だって、元はこの男がっ!!」

キツと舞が尻餅を付いている男子生徒を睨み付ける。

「へ……へへ」

対して。男子生徒は俺が巻き込まれた事が嬉しかったのか、乾いた笑いを漏らした。そこに魔法講師が怪訝な顔で。

「何を笑っているのです? 笑ってないで早く立ちなさい。君も反省文ですからね」

「は!?!」

「当然でしょう」

魔法講師はジロリと睨み付けてから。

「このクラスの生徒じゃないのに、君はなぜここにいるんです? 授業を抜け出して来ているのですから、当然処罰の対象です」

きっぱりと言い切った。

「あーん、もうっ!! 何でこーなるのよーっ!!」

夕暮れの日差しが差し込む教室にて、舞が突然咆哮した。

「叫んでないで手を動かせ。ただでさえお前の文量は俺や可憐の2倍なんだから、このままじゃ日が暮れても終わらないぞ」

「分かってるわよっ!!」

舞は少々乱暴に自身の髪を払うと、再度ペンを握り直した。それを横目で捉えつつ、軽いため息を付く。

舞の反省文のノルマが俺や可憐よりも多いのには理由がある。単純に、魔法の騒動を二度起こしたからだ。実習ドームでの騒ぎで1回。そして、この教室でもう1回。

反省文を書き上げるまで帰ってはならないというお達しを受けた俺たちは、一先ずこの教室に通された。俺・舞・可憐・名も知らぬ男子生徒（知りたいとも思わなかったが）。教室に入った直後、男子生徒が俺に話しかけようとした瞬間、舞がキレたのだ。

『その口を開くなっって言ってるんでしようがあっ!!!!』

で、ボカン。

比喩じゃない。火属性が付与された拳で殴り飛ばそうとした舞を抑え込む為に、また一悶着。

よく見ると、教室の所々が黒く煤けている。危うく教室を火の海に代えるところだった舞に追加の説教が加わり、今に至るといわけだ。そして、その舞の反感を買いまくった男子生徒は魔法講師から『混ぜると危険』と判断されたのか、別室にて反省文に取り掛かる事になった。

「うー……」

「レデイが唸るな」

「ま、まあまあ中条さん。舞さんは中条さんの為に怒ってくれたわけですから」

「……」

そこを突かれると弱いわけだが。

「それを言うなら、可憐。お前もだろ。何か、悪かったな。俺のせいでこんな事に巻き込まれて」

「い、いえいえ。そんな……」

「ちょっと!! 何で可憐には謝罪しといて私には無いワケ!？」
「うおっ!?! 近えよ馬鹿野郎!!」

グンツと身を乗り出したせいで、一瞬で俺と舞の距離が縮まる。
思わず手で押し返した。

「何よ何よ!! 可憐ばかり!!」

「そんなつもりは無いっ!?!」

「嘘よっ!! じゃあ何で私には何も言ってくれないのよ!!」

「うぐっ!?! お、お前なら!! 言わなくても分かってくれると
思ってるからだよ!!」

「っ!?! ……え?」

言葉に詰まったように、舞の口の動きが止まる。驚いたような顔
のまま固まっていた。

どうしたと声を掛けようとして。

「あ」

……。

……あれ?

……ちよつと待て。

待て待て待て待て待て待て。

……落ち着け。一度冷静になった方が良い。

俺は今何を。

『うぐっ!?! お、お前なら!! 言わなくても分かってくれると

お うぎゃああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ

俺の思考は、その言葉を思い出す事すら拒絶した。

「……聖夜、アンタ……」

「お願い、頬を染めないで!!」

悶死するから!! 何トチ狂った事口走ってんだよ!! 俺!!

「……こ、これが……幼馴染」

口元を手で隠しながら余った片手でそわそわと髪を弄り出す舞と、あまりの失言に身悶えする俺。その横から、可憐が驚愕したかのような口ぶりでそう呟いた。

そして。

「……ず、ずるいです」

「か、可憐……さん？」

ぼつり、と漏れ出たその言葉からは、聞き違える事無く負のオーラが滲み出ていた。

「ずるいですっ!!」

可憐にしては珍しい音量で吠えた。

「こ、これからは私も謝罪やお礼は結構です!! 私だって言われなくても分かります!! 分かりますとも!! ですから、私も中条さんの幼馴染にしてください!!」

「幼馴染は友人の上位種じゃないんですけどっ!!?」

顔を真っ赤にして捲し立ててくる可憐に、思わずつつこむ。

多分、自分でも何を言っているのか分からなくなっているはずだ。何だ、『分かります』って。普通使わないだろ。

「……ぼー」

「聞いているのですかっ!?! 中条さん!!」

「聞いている聞いている!! 聞いてますよ!!」

大人しい舞と、叫ぶ可憐。普段とは対照的なこの状況にどうしようかと攻めあぐねていたが。

思いもよらぬ急展開にて、この状況は打破される事となる。

「とつとと反省文書きなさあああああいつ!!!!」

「はぶしっ!?!」

突如飛来した白い弾丸が、俺のこめかみ付近で爆せる。

「きゃっ!?!」

「っ!?! 聖夜っ!?!」

「ぐおおおおおっ!?!」

激痛に椅子からひっくり返った俺は、教室の床で転げ回った。滲む目で攻撃の発射源に視線をやると、そこには案の定仁王立ちした白石はるか女史の姿があった。

「何で放課後の居残り罰則の最中にラブコメなんて送ってるんですかー? 反省文の用紙、これくらいじゃあ足りませんかねえ」

「足りてますよ!?! 十分お腹いっぱいですから!?!」

「なら、さっさと席に着きなさい!?!」

「は、はい!?!」

一喝され、慌てて席に着く。……こめかみを擦りながら。かなり痛かった。普段のぼわぼわした感じは何処へ行ったんだ。

「……まったく。『グループ登録期間』での多少のいざござは許容範囲と割り切るつもりでしたが、よりによって反省文対象者の第1・2・3号者が何で全員私のクラスなんですか!?!」

「み、見事に上位独占ですね」

「お黙りっ!?!」

「へぶしっ!?!」

思わず口にしたのがまずかった。何処からともなく取り出されたチヨークは白石先生の掌から目にもとまらぬスピードで射出され、俺の額にぶち当たった。

「うぐああああああ……」
机に蹲る。

「中条さん、大丈夫ですか!?!」

「凄い悲痛な声ね。綺麗なヴィブラード刻んでるわよ」

「うう……。ほっといてくれ」

視界が本格的に潤んでいる。制服の袖で拭っていると、白石先生のため息が聞こえた。

「……事情は聞きましたよ」

その一言で、緩んでいた空気が一気に緊張する。俺よりも可憐や

舞の方がよっぽど敏感に反応していた。

「担任として、多分これは言っただけにはいけない事でしょうけど……」

白石先生はそう前置きしてから、

「可憐さん、舞さん。よくやってくれましたね」

「ええ？」

2人の声が、見事に重なった。

「物理的な手段に頼った事は、お世辞にも良かったとは言えません。それでも、友達の為に怒れる。その行動はとても立派な事です。それが私の教え子であった事を、私は誇りに思います」

「……白石先生」

「はるかちゃん……」

「花園さん？ 何度も言ってますけど、はるかちゃんは止めて下さいね？」

本人の前でもそう呼んでたのかよ。雰囲気ぶち壊しだ。

白石先生は、苦笑しながら俺の方へと目を向けた。

「中条君、平気ですか？」

「もちろん」

即答しておく。その答えに、少しだけ複雑な表情をした白石先生は、こほんと1つ咳払い。

「ふう……。なら、この件のお話はやめておきましょう。それで、

中条君。生徒会の件でご報告です。これから少しお時間取れますか？」

「え？ これからですか？ まだ俺も書き終わってないんですが」

机に広げられている反省文を指差す。

「特例です。中条君は明日まででいいですよ。寮に戻ってから書いて下さい」

「ええ！？ 何で聖夜だけ……。それにアンタ、生徒会の件って何なの？」

その特例に舞が不満げな声を上げ、同時に訝しそうな目つきで問うてきた。舞の発言に、白石先生が目を丸くする。

「……まさかとは思いますが。中条君、何も話していないのですか

「？」

「……」

「中条君？」

「……はい」

その返答に、白石先生は怪訝な顔を隠そうともせず口を開いた。「はあー。中条君、私は君がいつたいどうしたいのかわからなくなってきましたよ」

すみません。正直、俺自身どうしたいのかわかりません。

「あー。つまりどういう事なんですか？」

恐る恐る可憐が質問する。白石先生はちらりと俺の顔を窺ってから口を開いた。

「今日の昼休み、中条君から相談を受けてですね。中条君は魔法選抜試験におけるグループ試験で、生徒会の人たちと組みたいようではないか、何ですってーっ!？」

大きな音を立てて、舞が席から立ち上がる。

「どういう事よ、聖夜!! アンタ、何考えてんのよ!!」

「……何って、そりゃあグループ登録の事だけだ」

「私たちと組もって言うてるじゃない!! 何でわざわざ余りに回ろつとしてんのよ!!」

「……」

出来損ないの魔法使いだからだよという言葉は、出す事ができなかった。たった今まで、その事で俺の為に怒ってくれていた舞や可憐に出していいとは思えなかったからだ。

僅かに視線を逸らした事が、舞の反感をより買ってしまったらしい。

「何でだんまりなのよっ!!」

「ま、まあまあ舞さん! 落ち着いて!」

「花園さん、暴力は駄目ですよ!!」

俺の胸倉を掴んで叫ぶ舞を、可憐と白石先生が抑え込む。

「何よ!! 可憐、アンタはそれで良いってわけ!？」

「わ、私はっ……。な、中条さんがそれがいいとおっしゃるのなら……」

「聖夜がいいって言うなら!? 自分の気持ちの言い訳を、人に押し付けてんじゃないわよ!!」

「っ!? そ、そんなつもりじゃあ……」

「中条君っ!! 生徒会の人、教会で待ってます!! 一先ず貴方はそこに行ってください!!」

「……え?」

その光景に呆然としていたところ、白石先生からの指示で我に返る。

「け、けど……」

「貴方がいたら、ややこしくなるだけですからっ!! 早く行ってください!!」

「……っ」

歯噛みをして、踵を返した。急ぎ足で教室の扉に手を掛ける。

「逃んじやないわよ、聖夜あ!!」

舞の怒声に見送られ、教室の扉を閉めた。

中の喧騒が、一瞬にしてくぐもったものに変わる。急に別の世界にきたような錯覚に陥った。先ほどまでいた教室と違い、廊下は静寂を保っている。部活動をしている生徒以外はとうに帰っている時間だ。

「くそっ」

思わず廊下の壁を殴りつける。直後に後悔した。拳が割れるような痛みを襲われる。身体強化も纏わずに殴り付けたのだから当然なのだが。

しかし、その痛み以上に。自分のその幼稚な行動それ自体の後悔が大きかった。

「だせえ……」

呟く。

「何してんだろうな、俺は」

グループ登録。

本当に舞や可憐の行く末を案じているのなら、きっぱりと断るべきなのだ。俺と組むメリットなど、親しいからという理由以外には見当たらないのだから。

それでも、その一言が言えないのは。

「……………」

分かってる。本当は分かっているんだ。

舞や可憐と組んで、魔法選抜試験に臨みたいと思っている自分がいる事にも。

『自分の気持ちの言い訳を、人に押し付けてんじゃないわよ!!』

可憐に放たれたそれは。

まるで、うじうじ悩んでいる俺に向けられて放たれた言葉のようだった。

第4話 教会と謎のシスター（前書き）

明けましておめでとございます。

今年もテレポーターをよろしくお願い致します。

新年早々（物語内ではまだ秋ですが）うじうじしている聖夜を笑ってあげて下さい。

多分“神の書き換え作業術”で消し飛ばされると思いますが（笑）

第4話 教会と謎のシスター

既に秋へと足を掛けている季節。少し冷えてきた空気を肌を感じながら、教会へと続く階段を上る。

「……教会か」

そついや、舞のやつから呼び出されるのも決まって教会だったな。ここの教会はそついった意図で使われる場所なんだろうか。何度か来た事がある場所である為、迷う事も無い。厳格な雰囲気の漂う教会に辿り着くまでは、さほど時間は掛からなかった。

木製の扉を前にして、深呼吸。

「……いくか」

ただ目の前の扉を開けるだけという作業であるにも関わらず、やたらと弱腰になっている自分に気付く。それは、別に今から会おうとしている人物が初対面だから緊張している、という理由ではない。自分の選択に、迷いが生じている事を自覚したからだ。

呪文詠唱が出来ないという体質を持つ俺は、間違いなく魔法選抜試験にて“出来損ないの魔法使い”の烙印が押されるだろう。差別用語として禁止されている今でも、その蔑称はなお魔法社会の根底に根付いている。そしてそれが及ぼす被害は、自分だけには留まらない。

魔法選抜試験には、グループ試験があるという。加えて青蘭魔法学園で採点された試験結果は、大学や企業も興味を示している。学園で使われた書類は、様々な人間が目を通すという事だ。

欠陥を持った魔法使いと親しいという事を証明する書類が、だ。

「……間違つてなんか、ねえ」

そう。間違つてなんか、いない。

俺と組めば、舞や可憐は他の人間から蔑みの目で見られるようになるだろう。名家のお嬢様、それも長女である彼女たちにそついったスキャンダルがあるのはまずい。

だから、グループは組まない。それは、正しい選択のはずだ。

『自分の気持ちの言い訳を、人に押し付けてんじゃないわよ!!』

「っ」

先ほどの舞の言葉が頭を過ぎる。

自分が“出来損ないの魔法使い”と蔑まれるから、組まない。

“出来損ないの魔法使い”と一緒にいると舞や可憐に被害が及ぶから、組まない。

それは、自分の弱さを人に押し付けて逃げているだけじゃないのか。

そこまで思考が辿り着いた時、扉に伸ばしかけていた手の動きが止まった。

「……この期に及んで」

舞や可憐にあればと言っておいて。

舞の激情から背を向けて逃げ出しておいて。

まだ、未練があるというのか。

そう考えている自分に気づき、苦笑した。

「ばーか」

その言葉は、自然と漏れ出た。

自分に対する蔑みの言葉が口から発せられた瞬間、手に力が戻った。

「もう、遅えんだよ」

力を込めて、扉を押す。

重苦しい音と共に、ゆっくりとその扉は開いた。

夕日が差し込む教会は、少し違った場所に見えた。内部の全てに赤みが掛かり、少し寂しさを感じる風景でもある。足を踏み入れる。

心なしか、外よりも風がひんやりしている気がした。

後ろ手に、扉を閉める。見渡してみるが、人影は見当たらなかった。

「……教会って、言っただよな？」

白石先生は、生徒会の人間は教会で待っていると云ったはずだ。

まだ来ていないとも、すれ違いになったとも思えない。

日付を間違えたんじゃないかなろうか。あの人、ぼわぼわしてるからな。

出直すべきかと考えていると、教会の奥まったところから物音がした。

「ん？」

そちらに目を向けてみる。教壇の横。壁沿いにある扉が、ゆっくりと開かれたところだった。誰かが出てくる。

「ご用ですか？」

影で暗くなっている場所から夕日の差し込む場所へ、すつと歩み出てくる1人の女性がいた。

シスターだった。思わずぎよつと仕掛けるが、思い直す。ここは教会だ。別に不自然な光景ではない。

「あ、えーと」

ここで人と待ち合わせをしているんです、と言いかけて踏み留まる。神聖な教会を待ち合わせ場所に行っているなんて、この人に話すわけにはいかないと思ったからだ。

ただ、特に言い訳も思いつかない。どう説明しようか考えていると、向こうから道を示してくれた。

「ああ、もしかして……中条聖夜さん？」

「え、ええ。そうですけど」

何で俺の名を知っているのか。その疑問が表情に出ていたのだから。シスターは微笑みながら理由を教えてくださいました。

「貴方がここへ来る事を教えて貰っていましたから。ここで片桐さんと待ち合わせをされていたのでしょうか？」

「……片桐？」

「あら？ ご存じ無い？ おかしいわね。確かにここへ呼び出したと聞いていたのだけれど」

シスターが首を捻る。そこで、ふと気付いた。

「もしかして、片桐さんとは生徒会の方ですか？」

「ええ、そうですよ」

「だとしたら間違いありません。すみません。私が相手の名前を知らなかったものですから」

「あら、そうでしたか」

シスターが1つ頷く。そうか、生徒会の人間は片桐というのか。

「それで、その片桐さんはどちらに？」

「ごめんなさいねえ。それで伝言を頼まれていたのよ」

「伝言？」

オウム返しのように尋ねる俺に、シスターはまた頷く。

「『申し訳ございませんが、また明日。同じ時間に』との事です。どうやら3年生の間でちょっといざこざがあったらしく、收拾を付けるために呼び出されたようです」

「そうですか……」

その言葉を聞いて、ほっとした自分がいた。

それが無性にむしゃくしゃした。

「貴方……」

「はい？」

「何か悩んでいらつしやる？」

「……なぜ、そのような事を？」

「あああら。この場所、そして私のこの恰好を見てその質問はおかしいんじゃないかしら？」

そりゃそうだ。

「特に悩んではいませんが」

「嘘」

即答!?

「うふふふ。私には人の心が読める力があるのよ」

「聖職者が嘘を付くのはアリなんですか？」

「ふむ。中条聖夜君は冗談が通じない人間とみました」

……俺は貴方が中々に愉快な思考の持ち主だとみましたけど。

「まあ、自分の悩みなんてそうそう誰かに打ち明けられるものでもないですね。さあ、そこをうまく掘り返すのが私の役目です」

「何シスター服で腕まくりしてんですか！？ あと、言い回しが悪すぎる！！」

何やらヤバそうな雰囲気を感じる。これは早々に退散した方がよさそうだ。

手をワキワキさせて歩み寄ってくる謎のシスターに背を向けて、全力で走り出した。

「じゃあ、また明日出直してくるんで！！」

「ちよつと、君！？」

何か言い掛けていたようだが、気にしない。そのままの勢いで教会の扉を開けて外へと飛び出した。

「あーらら、行っちゃった。ここからが面白いところだったんだけどなあ」

聖夜に謎のシスター認定された女性が呟く。口調ががらりと変わったが、特に違和感を感じない。おそらく、こちらが女性の素なのだろう。1人きりになった教会で腰に手を当てたため息を付いていると、先ほど女性が出て来た扉が、再び音を立てて開いた。

「……引き留める気があったようには見えなかったのだけれどね」
中から出て来た女性がそう口にする。赤い日差しに当たって尚その黒さを顕示する髪を持つその女性は。

「美麗^{みれい}。貴方が言っていた通り逸材ね、あのコ。見ただけでときめいちゃうところだったわ」

姫百合ひめゆりみれい美麗。姫百合可憐の実母にして、“氷の女王”と称される

大魔法使い。日本で五指に入る名家・姫百合家の現当主だ。

「ときめくって……。貴方、自分の歳を考えた上で発言なさい」

「あー!? それ言う!? ここで言っちゃう!? 神に生涯を捧げると誓ったこの私に!!!」

「自分が結婚できない理由を神に押し付ける事は、不敬罪に当たらないのかしら」

「……美麗さん? 頬に手を当てながら恐ろしい事言うの止めにしません?」

うふふと笑う美麗を見やり、がつくりと肩を落とす謎のシスター。「それにしても……。やっぱりこうなってしまうか」

「気持ちは分からなくもないけどね。友達想いのいいコじゃない。若干の自虐感情は褒められたものじゃないけどさ」

聖夜が出て行った扉を見ながら、謎のシスターが口を開く。

「どうするわけ?」

「どうにかしましょう。聖夜さんには可憐と咲夜さくやを救って頂いた恩がありますし。それにあの身勝手な女からやっと得られた束の間の休息というではないですか。折角の学園生活、楽しんで頂きたいものです。ひと肌脱いで差し上げるには、十分すぎる理由だと思えますけど」

「そうかもねー。それにしても、リナリーのお弟子さんかー。には見えないわねー」

「でしょう? 私も目を疑いましたからね」

「どれほどの心労を経てそのようなコに育ったのか。これは今後のカウンセリングで、徐々に聞き出していく事にしましょうかね」

「……手をワキワキさせながら不穏な発言をするのはお止しなさい、メリッサ」

「……何だったんだ、あのシスターは」

呻くようにそう呟く。階段を全速力で駆け下りた為、肩で息をしながら一度だけ振り返った。当然のように階段に阻まれ、教会の姿はもう見えない。いくら言いようの無い不安に駆られたとはいえ、流石に退きすぎたか。

けど、何だろう。あのシスターには、あの女と通じる何かがあるような気がする。何というか……唯我独尊・傍若無人を具現化したような……。……止めるか。初対面の人間に対してこの評価は失礼過ぎるだろ。まあ、あれだ。結論から言わせてもらえれば。

二度と会いたくない。

以上。終わり。

明日の待ち合わせ場所は変えて貰おう。わざわざ進んであのシスターの生息地へ踏み込む必要は無いはずだ。

片桐、だったか。同じ2年ならば、順番に教室覗いていけばいつかは見つかるはずだ。何ならそこで話を付けてもいい。とにかく、あの教会には二度と立ち寄らない。そうだ。それでいい。

「……」

……さ、帰るか。

何か、色々とやる気が失せてしまった。

青藍魔法学園名物『勧誘期間』。

魔法選抜試験、グループ登録期限まで。後、6日。

~~~~~

「んう……」

盛んに自己主張を繰り返す携帯電話を掴み、アラーム機能を止める。

頭を掻きながら起き上がる。とてつもないダルさを感じた。一瞬風邪かと思ったが、そういうダルさとは違つと直ぐに気付く。同時に原因もぼやけた思考の中で一気に浮上した。

「『勧誘期間』ね……」

言葉にして出すと、余計にうんざりした。

魔法選抜試験。その試験よりも、そこに辿り着くまでに迎えるであろう障害の方が怖い。修平の話じゃ、俺が舞や可憐の申し出を断つた事が周りからはかなり反感を買っているようだからな。クラスメイトはそこまで過敏な反応は見せなかつたんだが……。それもこれからどうなっていくかは分からない。

……これから、どうなるんだろうな。

そこまで考えて、更に憂鬱になった。

「おつす」

「おはよう」

「よお」

寮を出たところで、いつもの3人組に出くわした。本城将人、楠木とおる、そして杉村修平。不意に声を掛けられ思わず身構えたところをばっちり目撃され、修平が笑う。

「ははは。いい感じに敏感になつてるじゃないか」

「ほっとけ」

手で払う。それを見ていたとおるがクスクスと笑いながら口を開いた。

「昨日は相当凄かつたからね。そうなるのも無理はないよ」

「流石にあそこまで盛り上がると思わなかつたからねあ」

将人が能天気な声で同調した。

「『勧誘期間』が慌ただしくなるのは知ってたが、初日からアレとは。いやいや、その騒乱の中心にいる聖夜くん、お疲れ様です。…ご愁傷様ですの方がいいか?」

「どつちを取っても構わないぞ。お前を殴らせてくれるならな」

「真顔で拳握るなよ!? こえーから!」

将人の軽口を凄んで黙らせる。

「どちらを取るにせよ、一番最初にヒートアップした将人には言う権利ないと思うけどな」

「とおるの言うとおりでな。お前、あの時1人で盛り上がったからな」

「とおるも修平も酷い!」

2人の容赦無い言葉責めに、将人が呻き声を上げた。そのいつも通りの平和な光景を見て、幾分か落ち着いた。

「はあ……。で? 結局お前らは3人で組むのか?」

「朝からやたらと重いため息だな。ま、そうだよ」

「ごめんね、聖夜。何か仲間外れのような感じになってしまった」

「つーか、お前はお嬢様2人と組むもんだと思ってたんだよこの野郎!」

「うるせえ、近えよ馬鹿野郎!」

とおるの申し訳なさそうな声色とは正反対の怒声で掴み掛つてくる将人を押しつける。

「結局、あの2人とは組まないのかい?」

「あん? まーな、無理だろ」

とおるからの質問に即答する。が、俺の返答を聞いて、修平が目を細めた。

「聖夜、それじゃ答えになってないぜ」

「あ?」

「とおるが聞いたのは、『組まないのか』だ。『組めないのか』じ

やねえ。知りたいのはお前の気持ちって事さ」

その問いには、即答できなかった。

魔法選抜試験4週間まえから3週間前までに渡って行われる、グループ登録期間。

本来、試験を行う上でグループを組む必要があるならば、教師陣が各々の特性を把握したうえで勝手にグループを結成させてしまう方が好ましい。なぜなら、その方が生徒間の私情を挟む事無く割り振れる為、各グループの力加減にも優劣が付きづらいからだ。バランスを考慮する必要が無いと考えるのなら、適当に割り振ってしまえばいい。

生徒に任せる必要など、無い。それもわざわざ1週間の登録期間を設けて、だ。

ただ、それにはちゃんとした理由がある。

魔法選抜試験は2年の2学期より、各学期ごとに毎度行われる。そして、当然ながらグループ登録期間も毎度組み込まれる。が、その度にグループを解散し、新しい人間と組み直さなければならぬわけではない。

相性が良いメンバーに巡り合った生徒は、その時点で学園でのグループを確定する。グループ登録期間は毎学期迎えるわけだが、その度に同じメンバーと組むのだ。そして、これは学園卒業後にこそ、最も効力を発揮する事になる。と、言うのは身分差・実力差の激しい魔法世界では、人との繋がりというカテゴリーも重要視される。それは所謂コネとも言えるもの。強い魔法使いと仲の良い人間も、またそのパイプから貴重な人材と認識される可能性も多々あると言

うわけだ。

……その逆の効力が、“出来損ないの魔法使い”たる俺の問題と  
なっているわけだが。

とにかく。

だからこそ、舞や可憐と組む人間は特に周りから注目を集めている。  
単に容姿端麗で注目の的というわけではない（もちろん、男子  
生徒の大半はそれが含まれているのも事実）。そこで注目を集めて  
いた舞と可憐が、まさかの“出来損ないの魔法使い”に『アピール』  
を掛けたものだからもう大変。学園中がお騒ぎになるのも分からな  
いわけではない。

かといって、それが俺を黙らせる理由にはならない。

「はつきり言うと、君よりも相応しい人間は沢山いるんだよ」

登校中。将人やとおる、修平まで一緒にいるにも関わらず、目の  
前に立ちはだかった5人の男子生徒の1人がそう切り出してきた。

「はあ」

思わず気の抜けた返事が漏れる。だって、第一声があればぞ。他  
に何て返せばいいんだ。

将人に至っては、あまりにも唐突な発言に口は半開き、目は点に  
している。

「何だよ、その返事は。こっちはお前の為にも言ってるんだぞ」

声に少し苛立った色が混ざる。

「そうだ、お前じゃ姫百合さんは釣り合わない」

「姫百合さんはもっと別の人と組むべきだ」

「姫百合さんの為にも、君の為にも。直ぐに辞退して欲しい」

こちらが黙っているのを良い事に、後ろに控えていた3人からも  
好き放題言われた。残る1人は、腕を組んで遠目からこちらの様子を  
窺っているだけだ。それはそれで気持ち悪いものがあるが。

……あれ？　そういえば、舞の名前出てないんすけど。アイツも

お嬢様なのに。

「はあ」

一先ず、そう返す。

「『はあ』じゃなくて、お前は」

「じゃあ、アンタなら可憐に釣り合ってるって事か？」

「っ」

おざなりな対応ではいつまで経っても終わらないと判断し、向こうの話をぶった切ってそう聞いてみる。が、向こうは急に言葉に詰まり押し黙ってしまった。

「……え？ アンタが可憐と組みたいから言ってきたるんじゃないの？」

「い、いや……。だから、そういう事は言っていない。ようはお前が辞退するかしないかの話だ」

イラッとした。特に今俺が悩んでいた内容が絡んでいるだけに、余計に。

「ちげーだろ。お前に組むつもりが無いのなら言われる筋合いはねえな」

「なっ！？ 何を言ってるんだ！！ 君は自分がどんな存在なのか分かってるのか！！」

「どんな存在なんだ？ 転校生か？」

俺の茶化したセリフが、目の前の男子生徒を激昂させた。

「ふざけるなよ、“出来そ”」

「やめるんだ！！ 将人っ！！」

「！？」

とおるの普段では考えられないような叫び声に、思わず横を向く。そこには修平に羽交い絞めにされた将人が血走った目で唸っていた。「てめえ、今何言おうとしやがった！！」

「落ち着け、将人！！」

「そ、そうだよ、ここはまずい。皆から注目集めちゃうよー！！」

今にも殴りかかりそうな将人を、修平とおるがおるが宥める。数秒遅

れて、俺の為に怒ってくれているのだと理解した。

「じ、事実だろ。だって、ソイツは」

「それだけで、人の価値が決まるとでも思ってるのかよ!!!」

「……」

将人にとっては、何気の無い一言だったのかもしれない。いや、実際はそうだったのだろう。けれど、俺にとってはそうではなかった。将人を宥めに掛かろうとした手が、思わず止まる。心臓が止まりそうになる程の衝撃を受けた。多分、俺が何を感じたのか悟られた。それを見ていた修平が、にやりと笑ったからだ。

「いい加減に落ち着け、将人。お前はこれ以上口を開かない方がいい。後で思い返すと、恥ずかし過ぎて地球の裏側まで穴掘り返して猛省したくなるだろうからな」

「……なら、手え離せよ。後は拳で語る」

「ああいう奴らの発言に、いちいち反応するな。格好いい事抜かしてあのバカ4人殴ってどうするんだよ……」

「バ、バカとは何だ!？」

抑えに掛かっていた修平から予想外の暴言を吐かれ、固まっていた男子生徒が再び激昂する。

「はっ」

将人を校舎の方へと押しながら、修平は4人を見る事も無く。

「自分の気持ちすら伝えられない臆病者に、どう対応しろってんだ?」

そう、言った。修平の冷徹な一言に、4人は固まったかのように押し黙る。その光景を見て、将人から鼻で嗤う音が聞こえた。

「行くつぜ、もう始業時間だ」

「うん」

「ちっ、しゃーねえなあ。聖夜、ほら行くつぜ」

「……あ、ああ」

話は済んだとばかりに歩き出す3人。立ちふさがっていた4人の男子生徒は、無言で道を譲った。

「修平」

その4人に一瞥もくれず立ち去ろうとしていたところ、これまで一度も口を開かなかつた最後の1人、5人目の男子生徒が、初めて口を開いた。

「……………何だ？」

修平が振り返る。それに倣い、将人とおるも足を止めて振り返った。

「お前は、“そっち側”につくのか？」

「……………」

修平が、一瞬悲しそうな顔をした。“そっち側”。説明は受けていないが、話の流れで分かる。おそらく、“出来損ないの魔法使い”たる俺の方へ味方するのか、という意味だろう。

「お前とは、昔のまままでいたかつたよ」

「そのセリフは聞き飽きたな」

「……………そうか」

話は済んだとばかりに、修平が踵を返す。振り返らずに歩き出した。将人とおるもそれに続く。

「……………これで、終わったとは思わない方が良い」

その3人を追うように歩き出した俺へ。俺だけに聞こえるように、その男子生徒がポツリと呟いた。

「『ご忠告どーも』」

振り返りはせず、それだけ告げてその場を去った。

「なあ」

下駄箱で靴を履き替え、教室へと向かう道すがら3人へと声を掛ける。皆が振り返ったところで再度口を開いた。

「庇ってもらっておいて言うのもあれなんだが……。あまり、大っぱらに俺を擁護するような事は止めておいた方が良くないか？」

あれから一切の会話が無くなってしまった為、聞くに聞けなかったが。少なくとも最後に言葉を交わした男子生徒と修平は、知り合いであったように感じられた。俺を擁護してくれるのは嬉しいが、だからと言って自身の友人との軋轢あつれきは生んで欲しくはない。

「……何を言い出すかと思えば」

修平がため息交じりにそう呟く。しかし、修平が言葉を紡ぐよりも先に、将人が割り込んだ。

「周りからの視線を気にするようなタマに見えるのかよ、この俺が」「いや、お前は見えない」

「だろ？ って、お前“は”って何!？」

つい漏れ出た軽口に、将人が全力で抗議の声を上げる。とおるは笑いながら将人の言葉を引き継いだ。

「まあ、実際のところそんなに気にする事ないよ。少なくとも僕たちに対してはね。多分になるけど、クラスメイトの皆も同じ事言うんじゃないかなあ。僕たちは他のクラスよりも君の事情は知っているつもりだし、君の人となりも多少は理解できているつもりだしね。君が改善を試みている特異体質に対して、何か言ってくることは無いと思うよ」

確かにそうかもしれない。なにせ転入初日は同情や協力するといった意思表示ばかりで驚いたくらいだ。そう考えていた事を察したのか、修平は口の端を吊り上げてこう言った。

「俺らの事は気にすんな。ま、お前さんが心配する事は別にあるって事だよ」

「……？ 何の話だ？」

その言葉に首を捻る。

「おいおい。お前、グループはどうするつもりだ？ 御嬢さん方は組まないんだろ？」

「ああ、その事か」

話してもいいものか一瞬悩んだが、別にいいやと直ぐに結論付けた。

「実は生徒会に頼もうかと思ってる」

「生徒会に？」

将人が訝しげな声を上げる。

「ああ、なるほど。『余り狙い』ってわけね」

「何だ、そういう言い方をするのか？」

とおるから出た知らない単語に、思わず口出しする。

「うん。生徒会の面々は試験結果は関係ないからね。だから彼らがグループ試験に参加するのは人数合わせ以外にない。けど、だからこそそれが人気となる。なにせ彼らは余った生徒をサポートする為だけに試験を受けるからね。それでもって、生徒会の面々は皆が凄腕の魔法使いときた。意外と人気あるんだよ、『余り』っていうのはね」

「げ、そうなのか？」

新情報に、思わず愕然とする。自動的に『余り』に入れるわけじゃないのかよ。

「もし、本気で『余り狙い』でいくつもりなら早いトコ話付けといの方が良いんじゃないか？ ただでさえ悪目立ちしかかっているのに、更なる混乱を招くぞ」

修平からの助言に、思わず苦笑する。

「そうなんだけどな……。実は昨日、白石先生経由で生徒会にアポとって貰って、放課後会う予定だったんだ」

「手が早えな！！ で、結果は？」

「落ち着きなよ、将人。聖夜の話聞いたでしょ。会う『予定だった』んだよ」

「まあ、そういう事だ」

俺より先に将人を止めたとおるに視線を合わせながら続ける。

「昨日、3年の方で何やらハプニングがあったらしくてな。まだ話

せてないんだ。今日の放課後、もう一度会いに行つて来る」

「……3年？」

将人が首を捻る。反対にとおるは納得したという顔で、

「ああ、そういえば凄かつたらしいよ、昨日の別棟は。聞いた話じや青藍の1番手と2セカば」

そこまで口にして、固まった。同時に将人から「ひっ」という声  
が上がる。修平はいつものイケメン顔に若干の同情の色が混ざって  
いた。

「どうし」

どうした、という言葉を口にするよりも先に、背後からの禍々し  
いオーラを感じ取った。

正直、嫌な予感しかしない。

「『まだ話せてない』んだあゝ。イイコト聞いたわ」

声が聞こえた。振り向かずとも、背後にいる人物とこれから俺が  
迎えるであろう未来を容易に想像できる声色だった。

「なら、今日の放課後を迎える前に。私とじっくりお話ししましょ  
うかねえ」

赤毛の悪魔は、そう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945w/>

---

テレポーター

2012年1月10日00時12分発行